

どうにもならない、そ  
んな時…なんだけど  
さあ！

#任意の文字列

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『オーバーロード』のアルシエに転生した人がチートパワーを手に入れて困難に立ち向かう物語です。たぶん救済モノになるんじゃないかなと思います。

2018年9月5日は『ウルトラマンガイア』放送開始20年！

YouTube「ウルトラチャンネル」で当時と同じく18時から配信開始！

君も配信を視聴して、高山我夢とウルトラマンガイアの世界を救おう！

小説『テイガ・ダイナ&ウルトラマンガイア 超時空のアドベンチャー』、そして『T

DGプロジェクト』もよろしく！

# 目次

## 回想

大変！ゼットンが来た！ 前編

1

大変！ゼットンが来た！ 後編

14

必殺の激突！

アルシエに会いたい！

## 邂逅

新たなる巨人・序 前編

新たなる巨人・序 後編

新たなる巨人・破 前編

新たなる巨人・破 後編

137

106

87

71

54

41

新たなる巨人・急 前編

新たなる巨人・急 後編

新たなる巨人・E P i l o g u e

230

## 休暇

初めての温泉

ウルトラ大捜査線第一号

魔神、夕焼けに吠える 前編

魔神、夕焼けに吠える 後編

さらばベムラー…？

## 明暗

黒い仔山羊を撃て！

暗躍 — ルイン・デモン —

372

349

325

300

284

264

251

194

174

ダークメフィスト対ガイア

まとうは超絶

416 395

## 回想

## 大変！ゼットンが来た！ 前編

—端的に言おう。生まれながらに、自分は絶望していた。

「…はあ」

今生何度目になるかわからない溜息が、自分の口から漏れ出す。今の自分の年齢は一桁代だが、ここまで溜息ばかりつく暗い幼女というのも珍しいだろう。親からもとつても心配されているし、自分でも直したいと思つてはいるのだ。

しかし、齡3つの時すでに自分の未来が絶望で覆われているのだと知つてしまえば、こうもなるのではなからうか？今の自分こそ、正しくスタンダードな人間だといえるのではなからうか？

「…あほくさい」

ばかばかしい方向に進みそうな考えを中断し、広めの自室に備え付けられたふかふかのベッドに身を投げ出す。貴族の両親があまり笑わない自分を心配したのか、自室はそれ自体も調度品も本当に良いものが使われている。こんな使い方もできたのかと、未来を知る自分は感心したものである。金の使い方がずっとこれなら、原作での自分も、苦

勞せず済んだだろうに。

「…アルシエ・イーブ・リイル・フルト、かあ」

天蓋を見上げつつ、その名を呟く。今生での自分の名、そして、将来絶望の未来に立たされる人物の名を。

—アルシエ・イーブ・リイル・フルト。彼女はアニメ化もされたライトノベル、『オーバードロード』の登場人物である。

彼女の人生はなかなか波乱万丈である。バハルス帝国の貴族の家に生まれ帝国魔法学院では天才として名を馳せる。若くして第三位階魔法を使いこなし、代々のバハルス帝国皇帝に仕えて彼女の師にもなったフルルダ・パラダインと同じ相手の魔力をオラのように見ることによって、使う位階を知ることが出来る生まれながらの異能を持つてるなど恵まれてはいたのだ。

しかし彼女の人生は実家が取り潰されてから一変する。将来鮮血帝と呼ばれることになるジルクニフ・ルーン・ファードロード・エルニクスの行った大改革により多くの貴族家を取り潰されることとなったが、そこに彼女の家も巻き込まれたのだ。かくして彼女は全ての夢を棄て冒険者のドロップアウト組とされる請負人となり、現実を直視できず貴族への返り咲きを夢見て放蕩生活を続ける両親に頭を抱えつつも、妹らのため稼

ぎ頭として奮闘することになったのだ。

その努力が実ったのか、彼女が所属するワーカーチーム『フォーサイト』はミスリル級冒険者に匹敵するという、この世界でもそれなりの強さを得ることに成功した。だが、その栄光も『オーバード』の主人公モモンガことアインズ・ウール・ゴウンに關わったことで終焉を迎えることになる。

表向きはフェメル伯爵のものだとされた依頼によりアルシエを含む『フォーサイト』は他のワーカーチームと共にナザリック地下大墳墓に侵入する事になるのだが、彼らを待っていたのはよりもよってアインズ様。アインズ様の戦闘実験に付き合わされアインズ様を怒らせた後、『フォーサイト』は全滅。仲間が生かされ実験材料にされてしまう。

アルシエはアインズ様の強さを直視して嘔吐したのち解き放たれるも逃げきったと思っただけまだ大墳墓の中、そこでアインズ様の配下の一人シャルティア・ブラッドフォールンに捕まり、絶望しつつ苦痛なき死を与えられ生涯に幕を下ろす…という事になっているのだ。ちなみにこの展開はアニメと書籍版での展開であり、小説投稿サイトに掲載されたいわゆるweb版と言われる方ではまた展開が違わらしいのだが、そちらを自分によく知らない。とにかく自分の未来には良からぬ展開が待っていると思われるということが、自分の悩みの種である。

「…どうすればいいんだろう」

自分の未来を考えると、どうしてもその言葉が漏れてしまう。しかしそんなことを口にしたところで、何も変わるわけではない。それは自分がよくわかっているのだ。

…自分は、いわゆる転生者、というものらしい。いつどこで死んだのか、それは覚えてはいないが、気がつけば自分は赤子になっており、この家で花よ蝶よといった風に育てられてきた。しかし3歳くらいの時、自分の名前をはつきりと認識し、そこで自分がアニメか小説にあつたキャラになつてることを理解し、その将来を思い出し、こうして絶望することになつたのである。おかげで幼児としての振り舞いをそれなりにエンジョイしていた2歳から3歳になつて態度が激変した事により両親から心配されるようになったのだが、未来を思うとそれさえ複雑なのだ。

ともかく、今の自分はアルシエ・イーブ・リイル・フルトなのである。しかし、それは自分が10代のうちに死ぬことを意味する。…いや、それ以前にナザリツクへたどり着けるかどうか。アルシエという少女は天才で優秀なタレントを持っていたが、自分にそれらの才があるのか。アルシエはワーカーとなり、かけがえのない仲間たちと共に強さを手に入れるが、自分はその出会いがあるのか、そもそもワーカーとして生き残ることが出来るのか。彼女の人生は相当にハードモードなのに、現代日本に生きてきた自分



にその道が歩めるのか。…将来早いうちに死ぬことがわかっていてもかつての自分のそれより苦しい人生を歩めるのか。それらが、自分を悩ませ絶望させるものの正体だった。

「…」

…そこまで頭を巡らせ、かぶりを振る。将来に悲觀的になったって、自分にできることは本当に少ない。実家の取り潰しなんて特にそうだ。もうそのことは受け入れるしかない。自分はオリ主的なものになれるような柄ではないし、チート技能なんて持つてはいないが、それでも死ぬのは嫌なんだし、生きていくしかないだろう。

それに、家族の事もある。自分は両親が将来どうなるかを知っているが、それでも今の自分をひどく心配し、今も夜遅くまでこちらの様子を伺っているであろう両親の事を嫌いになれない。それに近い未来、自分に双子の妹ができることはすでに確定している。自分がギリギリまで頑張つて、ギリギリまで踏ん張つていかなければ、彼女らも両親も皆死んでしまう。そんなのは、嫌だ。―なら、戦うしかないだろう。

「…やっぱ、そうだよね」

結局頭の中に出た結論は、いつも思いつくものと同じだった。…幸いまだ学院に入るまで時間はある。相変わらず絶望が心の大半を埋め尽くしてはいるし溜息は止めようがないが、それでもやれるだけの事はやろう。そう自分に言い聞かせ、毛布を頭まで被

る。

「…おやすみ」

今日はどういう時間だろうし、寝てしまおう。寝て、起きて、朝を迎えたら頑張ろう。今自分を心配してくれている家族と、まだ見ぬ家族のために。

—でも、ピンチの、ピンチの、ピンチの連続、そんな時に自分はどうするべきか。それはまだわからない。どうにも、こうにも、どうにもならない、そんな時—家族を救ってくれる力がほしい。そんなどうしようもない願いが、自分の中に存在していた。

—バハルス帝国、領内。とある山間部にそれはいた。それを見て、人はこう思うだろう—なんだあれは、と。

それは山のように大きな人のようで、明らかに人ではない。人よりも大きく触覚の生えたそれは、全体的に黒く、ずんぐりとしていた。胴に二つ、顔に亀裂のように入った一つの発光部は黄色に光、その明滅と共にピポポポ…という、この地に住む人はだれ一人聞いたことのないような音を発していた。

「Ze…TTON…」

鳴き声のような音を出しつつ、それはゆつくりと進んでいく。それは知ってか知らずか、帝国の中心部へとゆつくり向かっており、このままでは甚大な被害が出るだろう。

この世にこいつを止められる存在など、本来ならありはしないのだから。

—そう、本来ならの話である。

「…頼むよ、光エスプレンダーを開放するもの」

そのの進行を確認しつつ、側面に回り込んでいた自分は隠し持っていた三角つばいセメント塗る奴…もとい、エスプレンダーを取り出す。中の結晶体をのぞき込めば、そこに赤と青の光の交錯が確認できる。いつも通りの光を確認した後、自分はそれを、目の前の怪獣に向け—

「ガイアアアアアアアアアアア!!」

—封じられている光の名前を叫ぶ。その瞬間、自分は光に包まれ、飛び立った。

「…!」

そしてその光は、帝国中心へと進む怪獣の歩みを止める。本能的に何か感じるものがあったのか、怪獣は光が放たれた方が気を見て、その後進行方向へと向き直る。

—直後、怪獣の目の前に、空より地面が爆ぜる程の勢いで、赤い巨人が舞い降りた。

「…デユワツ!!」

雄たけびとともに、巨人は怪獣に立ち向かう。巨人は怪獣より少し小さいか同じくらいの大きさで、全体的な色は赤と銀、胸元には自身の状態が『V2』であることを示す黒いライン、そして青色に光り輝く『ライフゲージ』が存在を主張する。

それはかつて、根源的破滅招来体の襲来に対し、空と命があふれる星・地球が遣わした巨人。

彼の名は—ウルトラマンガイア!

—端的に言おう。今、自分は少しばかり絶望していた。

(ゼットン…か)

アルシエこと自分が変身したウルトラマンガイアの前に立っていたのは、ウルトラマンを知るものならだれもが知ってるであろう強豪怪獣—ゼットンだった。

ゼットン。正式名称宇宙恐竜ゼットンとは、かつてウルトラマン最終回到登場し、あの光の国から僕らのために来たヒーロー、ウルトラマンを倒すという偉業を成し遂げた強豪怪獣である。その後もゼットンは姿を変え能力を変え、様々な形で後続のウルトラマン達の前に立ちはだかった。そのどれもが強力無比であり、ゼットンの登場の都度ウルトラマン達は生と死のはざまに立たされてきたのだ。

…最近、こんな怪獣ばかりである。自分がガイアの力を手に入れたのはだいたい実家を取り潰されたぐらいの頃だったが、その時立ち向かった敵は宇宙戦闘獣コツヴだったし、その後しばらくはガイアの怪獣が続いた。

しかしある日地底から現れたのがギールでもミズノエノリユウでもゾンネルでも

テイギリスでもなく、嘗ては主役に抜擢されたこともあるあの有名な古代怪獣ゴモラであった辺りから何かがおかしくなっていた。その後出現する怪獣も宇宙ロボットキングジョー、火炎超獣ファイヤーモンス、大ガニ怪獣ガンザ、さそり怪獣アンタレス、再生怪獣サラマンドラ、円盤生物UF-0、毒ガス怪獣ケムラー（パワード）、吸金爆獣コッテンポツペ、おこりんぼう怪獣タブザゴン、幻聖魔獣ラフレシオン、進化怪獣ラゴラスエヴォオ…などなど、気がつけば何処から出てきた貴様ら、と言いたくなるようなラインナップと化していた。剣と魔法の世界でスーパー必殺怪獣デマゴークが出てきたときにはとうとう脳をやられたかと自分を疑ったし、スペースリセッターグローカールクが出現した時には遺書を書いてしまった程だ。最近正体バレしたとき戦った敵なんかシビルジャツジメンターギャラクトロンである。ギルバリスは死んだんだから出てくるなよ頼むから。

(…だめ。集中集中)

…頭の中で愚痴っている場合ではない。泣いても笑っても今自分の前にいるのはゼットン、集中しなければ。幸い訓練した高速思考の甲斐あつてかあまり時間は立つておらず、ゼットンはこつちを睨んだまま、動きはない。ならば、攻めるべきは今。そう思考を纏め、一息でゼットンに接近する。

「デュアッ！」

「…」

ゼットンに向かって駆け出し、その勢いのまま飛び蹴りをかます。蹴り自体は勢いも狙いも十分であり、ゼットンに依然動きはない。そのままキックがゼットンに命中する——かに思われたが、キックはなぜか宙を切る。キックが当たる直前、ゼットンが姿を消してしまったのだ。

(…落ち着け、集中しろ…)

ゼットンが消えたが、ネタはわかっている。こういう状況において、自分にできることは一つ。目を閉じ、されど意識を目に集中させる。自分の力を信じ、集中力を高めていく。

—その瞬間、背後に大きな力を感じた。

「デュアー!」

一気に反転し、手裏剣を放つように手を前方に突き出す。手から出た光の弾『ガイアスラッシュ』はその勢いのまま直進し—背後にいたゼットンが展開したバリアに激突、砕け散るように消滅した。

(…流石に固いな)

やはり、こいつはゼットンだ。こちらの攻撃は相手の不意をつけたと思っていたが、

実際は展開した筒状の光のバリアーで見事に防がれてしまった。のろいように見えるが、反射神経なども肉体同様常識を超えて強力なのだろう。強豪怪獣なのだから、当然と言えば当然なのだが。

…それにしても、自分のタレントが効いたのはラッキーである。原作アルシエ同様看破の魔眼と言うべき力を得ていた自分であったが、ウルトラマンの力を得てこれを戦闘に使えないかという試した結果、ウルトラマンの強化された感覚で看破の魔眼の力が発動できるようになった。つまりどういふことかというところ、視力に限らず聴覚、嗅覚、触覚などに看破の魔眼効果を乗せ、そこにウルトラマンの力でバフを掛けたのだ。さらにこの能力自体も進化しており、魔力のみならず生命力の大きさを見ることが出来るようになった。そのおかげで透明怪獣ゴルバゴスは労せず倒せし、生命力の流れをたどる事で蜚気楼怪獣ファルドンや宇宙有翼怪獣アリゲラにも追いついて何とか倒すことが出来た。結構自信のあった能力なので、通用してよかった。

…などと、余計な事を考えている暇はない！目の前に意識を集中させれば、ゼットンはずでに消えている。先ほどと同じように、生命力をたどる…

「…Z e T T O o N」

「デュオッ！」

…ゼットンは自分の背後にいた。また反転し、振り下ろされていた拳を受け止める…

が、直後、じりじりと体が押されていく。ガイアV2の力は、明らかにゼットンに押し負けていた。

(これが、ゼットンの力…!)

想像以上の力に戦慄する。これが、ウルトラマンたちを苦しめたゼットンの力。自分も様々な怪獣と戦ってきたが、この見た目を遥かに上回ってくる力は初めてだ。ガイアの体を通じて感じるゼットンは、これまでの怪獣より明らかに異質だった。

(…いや、まだだ!)

飲まれそうになった自分の心に喝を入れる。ここで負ければ、大勢の命が犠牲になる。そんなことは、あつてはならない。自分の戦いに、負けは許されないのだ。

押される自分の体を無理やり動かし、横にずれることでゼットンを自分からそらす。前に若干つんのめりそうになったゼットンの背中に、ガイアの後ろ回し蹴りが炸裂する。完全に前に投げ出されるようになったゼットンは、勢いのまま山に激突した。

(少しは効いた…?)

山中に頭から突っ込み、埋まってしまう動かないゼットンを見て、心の中でつぶやく。自分がガイアとして戦った真つ当な怪獣は、山に叩きつけられるようなことがあれば死ぬことはなくても少しふらついたりするものだが…

(…ダメ、か)



その考えは甘かったのだろう。直後、ひどく滑らかに頭を山から抜いたゼットンは少し頭を振って土を払い―直後、その場から消える。

「デュアツ―」

「ZeTTON…!」

生命力をたどり振り向けば、そこには何のダメージも見られないゼットンがいた。

…ゼットンと対面し、改めて理解する。ゼットンは、強敵だ。見た目よりはるかに強い怪力とタフさを持ち、瞬間移動やバリアー、そしてまだ見ぬ強力な特殊能力を持つ。遠近問わず戦う事のできるバランス型。これまで戦った怪獣の中でもトップクラスの化け物。異質さという点では、ナンバーワンと言っても過言ではないだろう。

…だが、それがどうした。今までも強敵と呼べる怪獣は何体もいたし、それを自分はウルトラマンガイアとして何体も屠ってきた。自分に敗北が許されないことも、相手が強大で勝つのは難しいこともいつもと変わらない。なら、やるべきことは一つ。

…決意した。やるべきことは見えた。なら次は―体を、動かす!

「デュアアアアア―!」

「…!」

自分の意思と一つになったウルトラマンガイアは、その全力をもってゼットンに接近し―そして、激突した。

# 大変!ゼットンが来た! 後編

―戦況は、明らかに嫌な方向に進んでいた。

「デュアッ!」

「…」

ピポポポポ、と不思議な音を鳴らすゼットンに、自分―アルシエ・イーブ・リイル・フルトが変身したウルトラマンガイアが迫る。地を鳴らし、土煙が噴き出ように見えるほどの勢いをもってゼットンに接近し、その勢いのまま腕を振り抜き、黄色と黒の顔面を殴り飛ばす―はずだったが、すでにガイアの目の前には誰も立っておらず、自分の拳はまたもや宙を切った。ゼットンの瞬間移動が、すんでのところ自分で自分を上回ったのだから。

(…またか!)

思わず心の中で呟く。自分の変身した姿はウルトラマンガイアであり、いわゆる近年の作品である新世代ヒーローズに属するウルトラマンではないのだが、もし自分にも新世代ヒーローズのようなインナースペースがあれば、はつきり舌打ちした自分が見えたであろう。それだけ、自分の中にははつきりとした苛立ちがあった。

…しばらくゼットンに接近戦を挑もうとしてはいるが、そのたびに瞬間移動で逃げられる、と言う状態が続いている。ゼットンが何を考えているのか、その不気味な顔からうかがい知ることとはできないが、とにかくこいつは自分と取っ組み合いになることを避けている気がする。少なくともこちらの攻撃が当たったことはほとんどない。これはどういうことなのか。単にこのゼットンが殴り合いを嫌う性格なのか、それとも何らかの意図が—

(—まずい！)

…苛立ちからか、それとも思索を巡らせたからか。自身のタレントを使つてはいたものの、そこから感じる生命力の動きに一瞬体が遅れた。慌ててゼットンの生命力が感じられる場所—自身の背後に体を向ける。

しかし、少し遅かったらしい。

「デュアア…ッ！」

「…ZeTTON…」

ゼットンの伸ばした手は、滑り込むように自分の首に到達し、その怪力をもつて締め上げ始めた。ぎちぎち、という不快な感触と共に首が締め上げられ、息が止まる。頭に酸素と血液が回らなくなっていく。実際に締め上げられているのはウルトラマンの体だが、似たような感覚を覚えた。

(「、これは…まずい…」)

現在の状況はかなり危険だ。締め上げる手をつかみ、さらに拳をたたきつけるなどの抵抗を試みる。だが、ゼットンの手が自分の首から動く気配はない。相手の怪力っぷりは流石のもので、ガイアV2の腕力ではどうしようもない。

やがて、ゼットンの力が次第に強くなっていき、体が押さえつけられていく。ただでさえ首が閉まり上手く力が入らない上にゼットンの怪力も合わさり、抵抗むなしく膝をついてしまう。…これはまずい。早急に打開しなくてはすぐにノックアウトだ。左手でゼットンの体を抑えつつ、自分の右手に意識を集中させる。

(「これならどうだい」)

意識した右手が光り輝き、そこから光の剣『アグルブレード』が出現する。ゼットンもそれに気がつき右手の方に顔を向けるが、もう遅い。こちらの首を絞める力が一瞬緩んだのを確認し、そのタイミングで体をひねり、ゼットンから離脱する。その勢いのまま右手をゼットンに向けてふるえば、飛び出した光の剣は見事、ゼットンに直撃した。

ゼットンの火花が散り、そのままゼットンはたまらずといった様子で後退する。…今しかない。ゼットンは今ひるんでおり、この機を逃せばまた瞬間移動で翻弄される恐れがある。そうなってしまえば先にこちらの体力が尽きるだろう。

自分の下した判断の元、駆けだす。まだ体勢の整っていないゼットンに接近し、展開

したままの剣を振りかざした。

「デエヤアアア！」

光の剣はゼットンの体をとらえ、二撃、三撃と着実にゼットンを切り刻んでいく。後ずさりしていくゼットンに、畳みかけるように何度も剣を振りかざし、攻撃を加えていく。いける。着実にダメージを与えていることを確信し、さらに攻撃の手を激しくせんと、剣の伸びる右手に力を込めた。

…だが、ここで終わるようならゼットンは強豪怪物とは言えないのだろう。始めは何度も剣を受けていたゼットンであったが、次第に自分の剣になれたのか、身をよじり少しずつ剣を受ける場所をずらしていく。そうやってダメージを軽減しているうちに、自分が剣をふるうタイミングはつかめたのだろう。自分がさらにスピードを上げようと剣をふるったその直後、ゼットンは大きく身をよじり、右腕を自分の右手に添えるような形でいなしたのだ。

たまらず前につんのめりそうになるが、何とかこらえる。まだ大きく相手が動いていないことを確認すると、自分はその背後にいてであろうゼットンに体を向け、その勢いで右手を動かした。

…だが、振るった剣は、無造作に突き出されたようなゼットンの左手に吸い込まれるように飛び込んでいき…ものの見事に、その左手に囚われた。

「デユツ……!」

「…Z e T T O o N」

そしてゼットンは、機械的な動きで搦んだ剣ごとこちらの右手をひねり上げる。たまたまらず声が上がリ、抵抗しようとするも…先ほど首を絞められた時同様、ゼットンの怪力の前には、ウルトラマンの全力をもってしてもなすすべがない。右腕をひねり上げられ、苦悶の声が漏れる。剣を解除しようとするも、上手くいかない。

少しの間、こちらの抵抗もかなわず直立不動でひねり上げてきたゼットンであったが、やがて手に持った剣を自分の正面に引つ張り込む。その動きのままにゼットンの正面に投げ出されるような形となった自分の体を、ゼットンの全力の蹴りが捕えた。

「デオアツ!?!」

たまたまらず声が漏れるも、勢いに逆らえず吹き飛ばされる。結構な距離を飛ばされ、着地後も勢いに体が回される。地面を数回転した自分の体は、うつぶせの状態で停止した。

(…う…う…う…!)

…目の前がちかちかする。体の中から、空気が全部出ていったような、そんな感覚がある。全身が、どこか折れたんじゃないかっていうくらい痛い。ゼットンの蹴りは、それだけ強烈だった。

まだふらつく体を何とか動かし、起き上がろうとする。それと同時に自身のタレントを使い、生命力を探る。果たしてゼットンは後ろに立っており、こちらを眺めて動いていない様子だった。…だが、生命力に妙な流れを感じる。これはなんだ。まさか、とどめを刺そうとしている？

…すぐ思い浮かぶのは、ゼットンの必殺技、一兆度の火球である。ゼットンの技の中で一番の火力を誇るこれが直撃すればひとたまりもないだろう。もしそうならまずい。早急に、奴の動きを封じなければ。

何とか体を起こすと同時に、左腕と右腕を交差させる。体を至急反転させゼットンの方に向けると同時に、左側でクロスした腕を、弧を描くようにして右側にずらしていき、ゼットンの方に立ち上がると同時に右腕を立て左手を添えし字を作り、それをゼットンに向けた。

「オアアア…デュアツ！」

雄たけびと共に腕に力を籠めると、右腕から光線『クアンタムストリーム』が放出される。ウルトラマンガイアが誇る必殺光線の一種であり、自身もこれで何体かの怪獣を撃破してきたこの光線は、狙いたがわずゼットンに向かつて飛んでいく。ゼットンに動く様子はなく、このままいけば直撃は間違いない―はずだった。

…この時、自分は大切な事を見落としていた。見落としの原因はよくわからないが、

先程のキックでダメージを負っていたからなのかもしれないし、生命力の動きに変化がみられていたから、先手を取ろうと気持ちかはやった結果なのかもしれない。あるいは、延々格闘戦を回避され続けたことにより、苛立ちが募っていたからかもしれない。ともかく自分が自身の失策に気がついたのは、すでに光線を撃った後だった。

…ゼットンは微動だにせず、光線に身をさらすような体勢を取っていた。自分が光線の構えを止めるも、一度打った光線はまっすぐゼットンに飛んでいく。そして光線はゼットンに直撃—とは、ならなかった。

ゼットンは胸元に両手を構え、光線を挟み込むように受け止めた。光線はゼットンの体に命中し一瞬強く輝くも、次の瞬間みるみるしぼんでいき、ゼットンが胸元で構えた両手の隙間の中に吸い込まれるように消えていった。

(…最悪…)

心の中で悪態をつくも、もう遅い。次に飛んでくるものを想定し、両手を正面にかざす。右腕を上にも、左腕を下にして、垂直に構え光を作ったのち両腕を左右に開く。そうすることで自分の正面に円形の光の壁『ウルトラバリアー』が生成される。

その完成と時を同じくして、ゼットンもまた両腕を前方に突き出す。両腕に挟み込んでいたような形となった光線のエネルギーが開放され、かつてウルトラマンにとどめを刺した波状光線『ゼットンファイナルビーム』が発射された。



波のような形の光線が、自分の方に一直線に飛んで来る。何とか間に合ったバリアを構え、向かってくる光線との接触到に備える。そして、その瞬間はすぐに訪れた。

「……デオワアアアアッ!!」

…光線はバリアと接触し、一瞬だけ拮抗する。だが、自分がバリアを遠くに打ち出すよりも早く、バリアは粉々に碎け自分の体に光線が直撃する。思わず声が出る。爆発音とともに正面で火花が散ると、衝撃で自分の体は浮き上がり、風に吹かれた木の葉のように吹き飛ばされていく。先ほどの蹴りとは比べ物にならない距離を山なりに飛んでいき、背後にあった山に激突する形となり停止した。

(……あ)

…痛い。熱い。とにかく、そんな短い単語しか思い浮かばない。光線からなるダメージは独特で、格闘戦からなるダメージはもちろん、人間の時に受けるこの世界の魔法のダメージとも異なる。それゆえいまだにこの感触にはなれない。だが、それを差し引いても、ゼツトンの光線によるダメージはけた外れだった。

…急に、胸の鼓動が早くなり、苦しさを増していく。それと同時に、先程まで煌々と青色に輝いていた『ライフゲージ』が、警告するような音と共に赤く点滅を始めた。ウルトラマンガイアは他のウルトラマンと違い、明確な時間切れというものが存在しないという特徴がある。しかし他のウルトラマン同様、ダメージやエネルギーの消耗で変身

が解除されることには変わりはない。『ライフゲージ』が攻撃され破損すれば変身が解除しばらく変身できなくなるが、幸いなことにウルトラマンのカラータイマーを破壊するほどの一撃は、自分の『ライフゲージ』を破壊することはなかった。こればかりは、幸運だったといえるだろう。逆に言えば、幸運なのはこの事だけなのだ。

(…あ、だめ…)

…目の前がかすんでいく。痛みや熱さが、どこか遠い世界の事のように感じる。山に背中から突っ込んだ自分の体が、ふわふわ浮いたような感触さえする。

…まずい、意識が、保てなくなる。ゼットンの一撃がこれほどまでとは思ってもみなかった。何をやっている自分、早く立て。今こいつを止められるのは自分だけ、こんなところにくたばっている場合なのか。

だが、いくら心の中で叱咤激励しようとも、自分の体は鉛のように重たい。意識も明滅しており、脛が重い。…ここまでか?ここで自分は終わってしまったのか?何も守れないまま、倒れてしまうのか?頭の中にそんな考えが浮かぶも、それも泡のように消えていき、代わりに何もない暗闇が、自分を包んで—

「…アルシエエエエエエツ!!!聞こえるかぁーっ!」

—声が、聞こえた。

「聞こえてるならこっちを向け!それとも、やられちゃったってのかぁ?!アルシエツ!」

必死な声が、自分の意識をつなぎとめる。自分に問いかける声に導かれるままに、声の主のいるであろう方向に首を動かす。声は自分の右側、少し離れた崩れて崖のような形になった場所から聞こえる。

―そこに、彼らはいた。声の主である、自分たちを率いるリーダーたる二刀の剣士。重そうな鎧を着こんだ、善良さがにじみ出る神官。鋭い目つきと少し長めの耳が特徴的な、少し口が悪いけど面倒見は悪くないハーフエルフのレンジャー。全員が倒れこむ自分を、いつもの冒険では見せることのない必死な表情で見つめていた。

ワーカーチーム『フォーサイト』。ここに全員がそろった形である。

「アルシエー！近隣にいた人々は遠くに逃げました！もう全力で戦っても大丈夫です！存分に戦ってください！」

神官、ロバーデイク・ゴルトロンが、いつもは優しい表情を浮かべる顔を厳ついものにして叫ぶ。…ありがたい。怪獣が現れると、『フォーサイト』はある理由でまず人々の避難を助けることにしている。それが済んだのは、純粹にありがたかった。

「いつまで寝てるのよ、アルシエー！あなたはこれまで何度か、私たちの前で怪獣を倒してきた！今回だって、あなたなら倒せる相手よ！…だから、立ち上がって!!」

レンジャー、ハーフエルフのイミーナが、いつもの彼女の印象とはまるで違う、こちらを心底心配するような表情で激励する。…ああ、確かにその通りだろう。これまで

戦って来た相手も、皆それぞれが違う力を持った強敵だった。今回も、同じと言えば同じだろう。なら相手がちよつと強いからって、あきらめる理由にはならない。

そして、最初に自分の名前を呼んだリーダー、ヘッケラン・ターマイトが、いつもの軽さをかなぐり捨てたような表情で一步前に踏み出し、再び声を荒げる。

「…アルシエー……ここでやられたら、お前を待つてる家族はどうなる! お前には、助けたい家族がいるんだろう!?! それに、俺たちだつていつもお前の事を待つてんだ! だから頼む! 立ち上がつてくれつ! —ウルトラマンガイア!!」

—その言葉を聞いた瞬間、自分を包む闇がほどけた。…そうだ、自分には、待つてくれている人がいる。貴族から転落し今は現実が見えなくなつてしまつたが、それでも幼い時から変わった子だつた自分に愛を注いでくれた両親。自分を慕い、ワーカーとなつた自分の手を好きだと言つてくれる妹たち。そして—今、怪獣がいる中駆けつけてきてくれた、かけがえない仲間たち。

思い出す。実家が貴族ではなくなり、その後立て続けに怪獣が出てウルトラマンガイアの力を得て途方に暮れていた自分とたまたま出会い、話しかけてくれた事。その後事情を全部話せなかつた自分をワーカーチームに入れてもらい、そこで一緒にお金を稼ぐことになつていろいろやりだした事。先日ギヤラクトロンの敗れ、ウルトラマンである事がバレてしまい、嘘をつき続けていた事でおびえていた自分を、皆でやさしく抱きし

めてくれた事。全て、自分が『フォーサイト』からもらった大切な思い出だ。彼らに出会えて、自分は本当に幸せだと思う。

だからこそ問いかける。果たして、ここでやられてしまったていいのか？と。

(…負けない)

—そんなわけはない。世界中とまではいかないが、少なくともここにいる皆が自分を待っている。自分を信じている。ならばそれに答えないでどうする。自分のやるべき事は、諦めず、前を見て、限界を超える事だ。

(自分は—)

仲間たちの笑顔は、自分の希望になる。仲間たちの勇気が、自分の未来となった。この宝物は、守らなきゃいけない。そんな仲間たちの声が、自分の内なる声とも重なりあう。なら、自分はきつと行けるだろう。どんな戦いも、乗り越えられる。そう、守るために立ち上がり、仲間の思いに応える者こそが—

(—ウルトラマンなんだ!!)

—決意とともに、立ち上がる。先ほどまで重たかった体が、嘘のように動く。意識もはつきりしている。エネルギーが少ないのは確かだが、それは他のもので補えばいい。今からそれを、この身で示す!

立ち上がると同時に、両腕を垂直に伸ばす。力を籠めれば、伸ばした両手の指の先に

紫の光が集まり、円となる。その光で全身を包み込むように腕を下ろせば、ガイアの体が真紅の光に包まれる。

「ガイアが…ガイアが変わる…!」

イミーナの声と同時に、第二の変身が完了する。全体的に赤色が増え、青色も出てどことなくガツシリとした体格になる。それに立つガイアはもう『V2』ではない。これぞ強力無比の形態、『スプリームヴァージョン』だ。

…変身が完了すると同時に、顔をもう一度『フォーサイト』の面々の方に向ける。自分と目があつた彼らは、一瞬きよんとした表情になるも—すぐに、さつきまでとは打って変わったような笑みを浮かべた。

「…よし、行けーアルシエ!!」

「…デユワツ!」

ヘツケランの声を受け、前方のゼットンに構えを向ける。ゼットンは意外にも、さつきまでたつていた場所から動かないでいた。油断していたのか、それともさつきまで戦っていたガイアの纏う空気が変わった事に気がついたのか。…この機は、逃せない。

意を決し、両手を力強く広げ、エネルギーを前方に集めた。流石にゼットンも気がついたのか、こちらの動きに警戒するような構えを取るも、それは気に留めないでそのまま光を集める。

「デュアツ!!」

そして両腕をいったん交差させ、前方に解き放てば、光の刃『シャイニングブレード』が飛び出し、ゼットンのいるところへと飛んでいく。光の刃は確実にゼットンをとらえ、ついに直撃——といったところで、ゼットンお得意のバリアが間に合い、光の刃が砕け散る形で防がれてしまった。

…だが、そんなことは想定内だ。そもそも自分は『シャイニングブレード』に期待はしていない。大技とはいえ、所詮囿なのだから。

ゼットンはバリアを張っており、その場に動けないでいる。『シャイニングブレード』発射と同時に飛びあがっていた自分は、ゼットンの上部——バリアが届かず、さらされている頭部に向け飛び蹴りの構えを取った。

…実はゼットンにはいくつ種類があり、基本的に持つてる能力は共通だが種類によつて違いが出てくる、という特徴がある。今回自分が戦っているゼットンは最初にウルトラマンと戦ったオーソドックスな種類で、バリア、テレポーテーション、怪力、火球、光線吸収といった基本の能力を全て使ってくるタイプだ。だが、そのタイプには一つ弱点がある。それは、バリアが全身を覆えない事。嘗てプロトマケット怪獣版のゼットンに対しウルトラマンメビウスが流星キックをもってそうしたように、自分もまたその弱点を突く！

ゼットンは一瞬こっちを見失ったのかきよろきよろした後、上空から迫る自分を確認した。だが、もう遅い!

「ディアアアア!!」

突き出してる右足が赤熱化し、光り輝く。その光る足をもつて相手を粉砕する飛び蹴り『スプリームキック』は、見事にバリアの内側に侵入し、ゼットンの頭部をとらえた。直撃と同時にバリアは解除され、炸裂音とともにゼットンは吹き飛んでいく。地面を数回転がって停止したゼットンは、立ち上がったもののダメージが大きいのかふらついたままだ。

チャンスだ。『スプリームヴァージョン』は変身が一分しかもたないと言われており、それを除外しても今の自分に余裕はない。それにまたテレポーテーションされても困る。速攻あるのみだ。

意を決し、突撃する。まだふらつくゼットンに一気に接近すると足を蹴り上げ、その勢いのまま空中で回転させるように投げとばす。『スプリームレッグホイップ』と呼ばれる投げ技により、軽々と空中を回転したゼットンは、そのまま地面にたたきつけられた。

まだ足りない。地面にのたうつゼットンの体を持ち上げ、今度は頭上に掲げて投げ飛ばす。いわゆる岩石投げとされる投げ技『スプリームリフティング』で、着実にダメー



ジを重ねていく。

さらに投げ飛ばしたゼットンに駆け寄り、その体を持ち上げ、投げ飛ばし、叩きつける。スプリームの強化された力を十全に発揮できる『スプリームホイップ』をもって、着実に体力を奪っていく。何度も何度も、自分の体力の許す限り、ゼットンを全身打撲させる勢いで投げ続ける。そして最後にもう一度ゼットンを全力で投げ飛ばし、距離を取った。苦しそうにもがくゼットン。何とか立ち上がるが、ふらつき加減から見てもグロッキー状態だろう。

…準備はできた。体力は一気に奪えただろう。後は、この一撃をもって、終わらせる……！

「デュアアツ!!オアアアアアアア……!!」

全身に力を籠め、右腕を頭上に掲げたのち、腕を大きく振りかぶり、体の前で両手を合わせる。ゼットンもこつちに気がついたようだが、中断はしない。合掌の形から右手を下にずらし、準備は完了した。

「デュオツ!!!」

そして光が両手の間から飛び出す。ウルトラマンガイアの誇る最強最大の必殺光線『フォトンストリーム』が、ゼットンに向かって発射された!

ゼットンに向かって放たれる光は、本来なら確実にその身を焼きつくしてしまうだろ

う。…恐るべきことに、ゼットンは『フォトンストリーム』に対し、両手を胸の前で合わせた構えを取った。あの構えは、間違いなく『ゼットンファイナルビーム』の構え。先ほど同様、光線を吸収し、こちらに発射するつもりなのだろう。恐るべき根性だ。

そして光線はゼットンの構えに直撃し、吸い込まれるように消えていく。このまま、先ほどのように撃ち返されてしまうのか？

(…皆の力をもらったんだ)

…そんなことはない。そんなことはさせない。光線に注ぎ込む力をもっと強くして、勢いを加速させる。こちらの変化はゼットンの方にも伝わり、ゼットンはのけぞった。

…ハイパーゼットンという怪獣がいる。ゼットンの発展形であるこの怪獣は、ウルトラマンゼロ、ダイナ、コスモスという3大ウルトラマンの同時光線を吸収・増幅し発射するハイパーゼットンアブソープという技を持つ。そんなトンデモ怪獣だが、ウルトラマンギンガSにてモンスライプという形で登場したハイパーゼットンはウルトラマンギンガストリウムの放つ宇宙最強の光線・コスモミラクル光線をハイパーゼットンアブソープで吸収しきれず、倒された。つまり、ハイパーゼットンの光線吸収には限界がある事が示唆されたのだ。これがゼットンにまで適用されるかは不明だが、ここはこれに掛けるしかない。幸いにも『フォトンストリーム』はウルトラマンの光線技でもかなり強い方だ。ここはこれで押し切って見せる。

それに、自分には仲間がいる。待つてくれている人がいる。その人たちが、自分を立たせてくれた。だから――

（このまま、終わるか!!）

そして、さらに光線の勢を増やす。これ以上上げればこちらの身が持たないまでに威力が上昇した光線は、吸収しようとするゼットンの身を焦がしていく。ゼットンの吸収とこちらの光線が拮抗したような感覚が続くが、それもつかの間の出来事。ついに、ゼットンの両腕が弾き飛ばされ、ゼットンの体を光線が貫いた。

一瞬、ゼットンの体が光り輝き――大爆発を起こした。

「――よっしゃあ!!」「よし!!」「やったあ!!」

仲間たちの歓声が聞こえる。とうとう、ゼットンは撃破された。他ならぬ、自分の手で。砕け散ったゼットンの残骸を見つめ、何か妙な事が起きないかを確認する。……大丈夫だ。

「……デユワツ!!」

そして、残った体力を総動員して、その場から飛び立った。

『一難去つたら空を飛べ』。自分の大好きな名言である。

――トントン、とドアがノックされる音がする。それと同時に、意識が浮上した。そし

ていつの間にか、ベッドの中で眠っていたことに気がついた。

「…『歌う林檎亭』?」

自分の記憶が確かなら、ここは『フォーサイト』が拠点として懇意にしている酒場兼宿屋『歌う林檎亭』の部屋のはずだ。いったい誰が、ここに自分を連れて来たんだろう?  
?

「…いや、そんなの決まってる」

自分をここまで運んでくれる人たちなんて、一つしか思いつかない。そしておそらく、それはノックの主と同じだ。なら、早めに応えてあげないと。

眠気と疲れが残る体を動かし、ベッドから体を起こした。

「アルシエー?起きてるか?」

「…起きてる、リーダー」

「…よし、入るぞ?」

ドアが開き、外から二人の男女―ヘッケランとイミーナが入ってくる。二人はこちらを一瞬心配そうな表情で見つめるも、多分いつも通りの自分を見て安堵の表情を浮かべた。…どうやら、だいぶ心配させてしまったらしい。

二人は部屋に備え付けの椅子を引っ張り、ベッドの近くに座る。せつかなので、少し聞いてみよう。

「……ここは、『歌う林檎亭』？」

「ああ、そうだ。俺たちの拠点で間違いないよ」

「あれから大変だったのよ？あなた、戻ってきたと思ったら、急に倒れちゃうんだもの」  
イミーナはそう言いつつ、これまでのいきさつを語ってくれた。なんでも、自分は飛び立つた後皆の前に戻っては来たのだが、到着早々いきなり倒れたらしい。仲間たちは自分がそんなことになったからさあ大変、慌ててここまで運んできて、看病してくれたらしい。となると自分は結構眠っていたのだろうか？飛んだあとの記憶が全然ないので、重症なものには間違いないだろう。……そういえば、こういう時一番心配してくれそうな人がいない。

「ありがとう、リーダー、イミーナ。……ロバーデイクは？」

「ああ、ロバーならヘツケランに言われて仕事に出たわよ」

「あいつがたぶん一番心配してたけどなあ……あいつに最初に働いてもらわないと俺たちの食い扶持がなくなるし、お前もタダ働きなんて嫌だろ？」

「……自分は、大切な人達が守れたらそれでいい。今日もみんながいてくれたから勝てた。自分にとっては『フォーサイト』の皆も家族も、守らなきゃいけない、だからものだから……皆がいてくれたら、自分はそれが一番幸せだよ」

「……お、おう」

…なぜか、ヘツケランとイミーナは顔を赤らめてそっぽを向いてしまった。「いやお金は大切だと思うぞうれしいけど…」「いや自分も大切にしなさいようれしいけど…」みたいなことを小声で言っているがどうしたのだろう。

さて、ロバーテイクがいけないのは、『フォーサイト』のビジネスに出ているからということが分かった。実は『フォーサイト』はワーカークリームとしての顔と共に怪獣の残骸を売るといふ類を見ないビジネスに着手している。自分がガイアに変身しだして間もないころ、金策に苦しんでいたヘツケランに自分が冗談で提案したのがきっかけとなり始めた商売だが、これが大ヒット。食材に建材に武器防具の材料となんにでも使えるらしい怪獣の残骸はニーズがあつたらしく、また商人の血が覚醒したらしくノリノリになったヘツケランの営業もあり飛ぶように売れてしまったのである。かくしてもともとお金が欲しい人が集まった『フォーサイト』はこの事業を第二の柱として活動に組み込んだのである。このビジネスを行う場合、ロバーテイクは怪獣の残骸回収及びヘツケランのコネで集めた労働者たちの陣頭指揮ことになっており、彼はそれでいなかつたという事である。

そんなことを思い出していると、ヘツケラン達も回復したのかこちらに向き直り、いつもの表情に戻っていた。

「…まあ、俺たちが大切だつてのはわかつたけどな…自分も大切にした方がいいぜ。お

前はある意味一番の稼ぎ頭なんだしよ」

「そうよ、あなたがいないとうちはワーカーとしても商人としても成り立たないんだし……もつと、自分をいたわったっていいのよ」

「……ありがとう、皆」

「そういうこと……てなわけでアルシエ、ここらで旅行に行かないか？」

「……旅行？」

思いがけないワードに思わず聞き返してしまう。ヘッケランはいつも浮かべる自信満々の笑みで、話をつづけた。

「そう、旅行だ。実は前から商売で知り合った連中に声かけられてな、なかなかよさげな場所に招待受けてるんだ……そこに今度皆で行って疲れを取ろう、って話だ」

「……自分は構わない、けど今度大きな冒険の話が着ていると聞いた」

「ああ、フェメール伯爵の依頼だな？ 未知の墳墓調査てのは面白そうだし、報酬も目を引くけどよ……このところ金に困ったことなんてないし、お前がそんなことになってんのわざわざ行くことないしな。もう断ったよ」

「……めんなさい」

「謝らなくてもいいわよ、アルシエ。貴方が今日頑張らなくても、旅行の話をするようだったし。それに私、ただでいいお酒が飲めそうだって聞いたから大歓迎なの」

「…イミーナの酒の話は置いて「何よヘツケラン、そこが一番重要でしょ?」分かったから踏むな痛え!…ロバーも賛成してくれたし、後はお前待ちだ。どうする、アルシエ?」

「私は…」

どう答えればいいのか、正直迷う。唐突だし、家族から離れるのは少し不安だ。もともと旅行の話を切り出す様子だったとはいえ、自分の事でヘツケラン達を冒険から遠ざけてしまった以上、気が引ける。

少し悩んでいると、ヘツケランが自分の顔を覗き込むように近づいてきた。

「…リーダー?」

「…アルシエ、家族の事が心配なのはわかるが、お前の親はダメ親でも、お前の妹を無闇に傷つけるわけでもないんだろう? なんなら俺の知り合いで信用できるやつをつけてやったっていいし、お前がここで一休みしたって文句は出ないと思うぜ」

「…そう、かな」

「そうよアルシエ…それに、今回の旅行先には、あなたの尋ね人がいるようだしね」

「…! それ、本当!?!」

その一言に、思わず身を乗り出しそうになる。自分が驚愕の表情を浮かべるのがわかっていただけなのか、ヘツケラン達は悪戯が成功したような笑みで、続きを話した。



「ああ、ごく最近、そのあたりで出たらしいぜ？青い巨人が」

「確かウルトラマンアグル、だったかしら？その巨人がアグルなのかは、あなたが見ないとわからないでしょうけど……ついでに、青い巨人の行く先々で聞いた名前も出て来たのよね」

「王国のアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』だったか……今回も青い巨人の近くで活動してみたんだし、こりや当たりなのかも……で、どうするアルシエ、来るか？」

「……行く。行って、巨人を見つucker！」

「……よし……なら決まりだな！」

自分が了承すると、ヘッケランは待つてましたとばかりに手をたたいた。これはいい、自分の悩みが解決しそうである。

自分の目下最大の悩み、それはウルトラマンアグルの存在である。自分はガイアになつた時、最初から『V2』と恵まれた内容でのスタートだったが、それゆえアグルの存在がどうなつていいのか、いつも気にかかつていた。自分がガイアが地球で戦つてきた怪獣以外と戦うようになってからあまり希望を捨てなくなつていたのだが……ある日仲間にアグルの存在をそれとなく話してみると、何とうわさ話を拾つてきてくれたのだ。何でも王国領内で、自分とは違う青っぽい巨人が存在している、と。もし本当なら、会つて情報共有したいと思つていた。それでもウルトラマンらしく頑張つているつも

りの自分とはいろいろ様子が違うみたいだし、そのあたりを見て知っておきたい。なら、これは渡りに船だ。ここで会って、悩みを減らしておこう。…幼少期はもつと悩みを持っていた気がするが、ウルトラマンになってからというものウルトラマンと怪獣の事ばかり考えるようになったため、転生前の記憶はウルトラ関連以外かなりあやふやになってしまった。まあ、思い出せないならその程度だろう。今はアグルの事を考えなければ。

そんなことを考えていると、「…きて、と」といって、ヘツケラン達が立ち上がった。「ぼちぼちロバーが帰ってくるし、迎えてやんないとな…そういうわけで、詳しい話は後でな」

「ええ、続きは4人で話しましょう。…今日はありがとうアルシエ。貴女が頑張ってくれたから、皆生きてる。あなたも、私たちのたからものなのよ」

「そういうことだ。だから今日の所は体を休めておけよ?休めるときに休まなきゃ、お前みたいなのは大変だからな。…お前にはいつも感謝してるぜ、アルシエ。お前がいなきゃ、俺たち生きてないだろうからな」

「…そっか、ありがとう、皆」

「ああ、どういたしました…そうだ、それロバーにも言つといてやれよ?お前ここまで運んだの、わかってるだろうけどあいっだからな…じゃあな」

そういつて二人は部屋を出る。部屋に残された自分を、静寂が包み込む。：丁度いい。休めと言われたし、寝てしまおう事にしよう。とりあえず、毛布をかぶる。

：自分は、何とも変わった運命の星に生まれたいらしい。幼少期には想像もつかなかったであろう怪獣との闘いにあけてくれ、それを支える仲間たちと共に暮らす。自分が置かれていた状況は、幼少期想像していたそれよりもっと重いものになってしまったけど。でも、自分は頑張つて、戦うことが出来ている。でもそれは、ウルトラマンになれるかなのだろうか？

：いや、絶対に違う。そう断言できる。ウルトラマンの力を持つから、ウルトラマンになれるんじゃない。守りたいものをもって、そのために戦う。その行動こそが、ウルトラマンであることの証のはずだ。

自分にも、愛する者がたくさんできた。家族は相変わらず愛おしいし、ヘッケランもロバーテイクもイミーナも皆、かけがえない人たちだ。それだけではない。自分がこれまでかかわってきた人々、その人たちへの思いも生きてきて変わった。テレビの向このキャラのように思っていたのが、今を生きる人だと感じ取れるようになった。ならその人たちがいる限り、自分は戦うだろう。自分が自分らしくいるために、誰の笑顔も曇らせない。皆のために、自分は覚悟を決めるのだ。

：まあ、でも今は休もう。皆、自分のために頑張つてくれているようだし。それを無

碍にするのはダメだろう。そう言い聞かせ、自分は瞳を閉じた。

「…ありがとう、皆。自分は、一人なんかじゃない、よ…」

口から出たのは、そんな言葉だった。そして、その時自分は、きつと笑っていたのだ、と思う。

—端的に言おう。自分は希望に満ちている。そして、とつても、幸せだ。そんな思いと共に、自分の意識は安らぎの中に沈んでいった。

—後日。旅行先で癒されつつ、件の冒険者チーム『蒼の薔薇』と遭遇し、そしてついに蒼の巨人ウルトラマンアグルと対面することになるのは、別の話。

## 必殺の激突！

本来であれば、そこは完全に緑あふれる豊かな土地だった。草木は生い茂り、生命であふれる場所。この世界ではありふれた光景——だが、ある一角だけはまるで異なる場所となっていた。

森の中心部、生命で満ちているはずの場所は、砂漠と化していた。そこには生命の気配はない。土地も、空気も、完全に死んでしまった場所。森林地帯に突如現れた砂漠には誰も近寄らない。森に住まう生命は寄り付かず、植物も砂漠を飲み込もうとはしない。いずれは森にもまれてしまう運命にあるだろうが、しばらくは死の土地として残る事だろう。

そんな土地故に、今は誰もいない——はずだったのだが、その怪獣だけはそこに立っていた。

「……」

怪獣は無言で、何かを待っているかのようにたたずんでいる。全体的には茶色で、頭部からは放射状に複数の角が広がっており、表皮は五角形の固い鱗が覆っている。尻尾は先端が熊手のような形をしており、しっかりと二本の足で立っていた。

怪獣の名は、再生怪獣サラマンドラ。とある宇宙では地球侵略を目論んだゴルゴン星人により複数体が送り込まれ、地球で暴れまわった宇宙怪獣である。

—サラマンドラからすれば、今の状況は全く持つて意味不明であった。サラマンドラが覚えているのは、自分が主人の手でこの地の送り込まれたこと、いずれは主人の指示を受け取りその通りに大暴れして彼らを助ける命令を受けたことだった。しかし、今の状況はどうか。土の中で眠っていたら何かの騒音と衝撃で起き、周囲が砂になったと思つたら意識が遠くなる。その後再生し目が覚め、とりあえず地面から出てみれば周囲は砂漠になつていたので。まるでわけがわからない、というのがサラマンドラの抱いた思いである。

それでもサラマンドラがここを動いていないのは、彼が主人の命令を待つていたから。地中から出てきたとき—夜中だった—からそこに立ち続け、自分の主人の命令を待つた。日が昇り、日が沈みを何度も繰り返して見届けつつも指示を待つた。しかし、一向に何も起きやしない。：彼は知らないが、実は主人であるゴルゴン星人はとつくの昔に現地の英雄に討伐されてしまつてゐる。彼に指示を出す主人は、もう誰一人としていないのだ。

そんなことを知る由もないサラマンドラは今日も待ち続ける。いずれ自分に指示が下ると信じて。

…だが、この日は様子が違った。

「…う」

ふと、空を見上げる。サラマンドラの耳に、聞きなれない音が入ってきた。風を切るような音のありかを空に探してみれば、そこに一つの点が浮かんでいるのが見えた。それははるか遠くから、鳥よりも速く空を飛ぶ。そしてサラマンドラがその形を確認できる場所まで近づいた後、いったん空中に静止する。飛んできたそれは、大きな人の形をしていた。赤いラインの目立つ巨人は、サラマンドラを、そしてその周辺の砂漠を一瞥すると、サラマンドラ目掛けて一直線に突撃した。

「アエヤアアアアア！」

巨人―ウルトラマンガイアV2は雄たけびと共に飛び蹴りの姿勢を取る。思わぬ襲撃にサラマンドラは一瞬だが硬直する。気がついた時には、ガイアの足が自身の頭部をとらえていて。

その勢いのまま、サラマンドラは吹き飛ばされることになった。

(…なに、これ)

サラマンドラの周囲を見渡して、最初に抱いた感想はこれだった。

地上にて静止していたサラマンドラに対し上空からの奇襲を仕掛け、うまく蹴り飛ば

し着地した後、改めて周囲を見渡す。砂埃が消えた後、廻りに広がっていたのは、森林地帯と、そこに転がっていったサラマンドラ。そして、森林地帯にぼつかりと穴をあけるようにひろがる砂漠だった。

…なんだろう、これは。波動生命体メザードでもいたのか。いや、確かにあの怪獣はお台場を砂漠化させたが、こんな局地的かつ綺麗に砂漠化させる怪獣ではなかったはず。砂漠は上から見た感じでは直径200メートルくらいだったし、例えばメザードの力によるものなら周囲はめちゃくちゃに破壊されているはずだ。サラマンドラが突っ立っているのもおかしい。そして、この砂漠にはそれら以上に不可解な点があった。

(…やはり、生命を感じない)

自分のタレントから、一度意識を離す。生命力を探知する自身のタレントは、この砂漠にまったく生命がないことを教えてくれた。

そう、この砂漠に生命はいない。周囲の森林、目の前のサラマンドラなど生命を感じさせるものももちろんある。だが、足元の砂漠に関しては何もない。タレントに目一杯意識を集中させても、この砂漠は生命など存在しえない不気味な場所という事だとしかわからない。これは、単純な破壊をもたらすだけであり得る光景なのか？自分の理解を超えた現象が、ここで起こったのではないか？一体、何が―

(―いや、それは後回し)



この砂漠の事は気になるが、それは後で調べるべき事。今は、自分のやるべき事をやらなくては。

意識を目の前のサラマンドラの方に向ける。サラマンドラはというと、すでに立ち上がっており、こちらに敵意を向けているように見える。350度数の固さを誇りウルトラマンの必殺光線すら防ぐ皮膚は伊達ではないようで、殆どダメージは見受けられない。強敵だろうが、こいつはゴルゴン星人が送り込んできた尖兵。どこにゴルゴン星人がいるかわからないし、彼らがいなくてもこいつは勝手に暴れる怪獣だ。ここで食い止める。

気合を入れなおし、サラマンドラが動くよりも早く、一気に駆けだした。それを察知したサラマンドラが、口からミサイル弾を吐き出し迎撃する。そのミサイルに対し、邪魔になるものは叩き落とし、そうでないなら無視して進撃する。…森にミサイルが直撃し、燃え出した。後で消しておこう。こういう時、『ガイアブリザード』みたいな技が使えるウルトラマンは便利である。

「デュオッ!!」

気合を込める意味合いを持たせた雄たけびと共に、助走をつけたストレートをサラマンドラに叩き込む。パンチ自体はサラマンドラにいなされることなく、胸元にクリーンヒット。その勢いで後ろに下がらせた。…だが、固い。

続いて接近し数発連続でパンチを叩き込む。高速ラッシュが腹に吸い込まれていき、サラマンドラからくぐもったような声が聞こえる。その腹部にさらに前蹴りを叩き込み、相手を後退させるが、足から伝わる感触は先ほどと同じ。そして、肝心のサラマンドラはというと、まるで効いてはいないかのようにケロッとしていた。

(…効いてない、かな)

やはり、サラマンドラは固い。必殺光線すら跳ね返す皮膚を持つのだ、肉弾戦を仕掛けても大して意味はないのかもしれない。奴の体力をできる限り減らしておきたいのだが、そう上手くはいかないらしい。

…では、一気に弱点を突いてみる。

「デューアー！」

再び最接近し、もう一度腹部にパンチを打ち込む。またか、とサラマンドラじやなくとも思えるかもしれないが、これは気を引くための技。肘での一撃を打ち込み、相手を押し込む。その体勢から、今度はハイキックをお見舞いする。狙うのは、もちろんサラマンドラの弱点―喉元である。

だが、弱点目掛けて放たれたキックは、サラマンドラが出した手によって防がれる。反転し、もう一度キックを叩き込むも、サラマンドラは機敏に反応し、腕でいなす。…この怪獣は自分の特性、弱点はきっちり把握済みのようだ。ゴルゴン星人の教育の賜物

か、自分でわかっていたのか。自分はちよつとだけ興味が沸いた。

そんな余計な事を考えていたからなのか、サラマンドラが突如回転しだしたことに、反応が遅れてしまった。そして、衝撃が自分を襲う。

「デユオツ?!」

たまらず、横に吹き飛ばされてしまう。腹部に何か重い棒のようなもので思いつきり殴られたような、そんな痛みを感じる。飛ばされた勢いのまま、木々を薙ぎ倒しつつ、地面を数回転がった。

(…うっ…うっ…)

腹部への衝撃で何か吐きだしそうになるが、こらえる。それでもウルトラマンだし、そんな無様な姿はさらせない。もちろんウルトラマンの力で強化されているので、そう吐くことはないのだが、なんか自分が嘔吐すると嫌な未来につながってしまいそうな予感がするので、そこは強く意識する。

痛みと吐き気を抑え込み、立ち上がる。サラマンドラは得意げにこちらを見つめ、特徴的な尻尾で強く地面をた叩いた。…何と無くだが、自分はその尻尾にやられたのだろう。尻尾そのものが持つ力に加え、自分の回る勢いを加えた一撃。なかなか痛い。

そしてそんな一撃では気が済まないのか、サラマンドラは鼻息荒くこちらを睨みつけ、見ようによっては豚のようにも見える鼻を突きだした。…鼻？

(…まずい!)

サラマンドラの鼻。そのキーワードから自分が答えを導き出すのとはほぼ同時に、サラマンドラは行動に移る。鼻の穴から勢いよく吹き出した摂氏1300度の火炎が、自分を狙って襲い掛かった。

「デュアツ!」

間一髪、炎をブリッジ回避。そのまま後方転回でサラマンドラから距離を取る。しかしサラマンドラも、こちらに炎を当てんとしてそれを吹き出し出しつつ進撃してくるため、落ち着く暇がない。焼かれるわけにはいかないのです、こちらも後方転回で炎を回避しつつ、距離を取ろうとする。だが、サラマンドラの炎は思ったよりも長く、数回の後方転回では距離を開くことはできないことが分かった。

…このまま、炎を景気よくばらまかれるわけにはいかない。すでに森のあちこちに火が回っており、このままだとこの森で暮らす命に危機が迫るだろう。戦いが長引けば、先の砂漠のように、何も残らない事になりかねない。だが、早期決着を図るには、この炎が厄介だ。この炎を防ぎつつ、接近し、再生の要たる喉元を潰す。分かったなら考える自分。過去のウルトラマン達が、炎をどう防いできたか。こういう状況で接近戦を挑むにはどうしたらいいか。弱点を突くのに、似合った戦法は—

(—あつた!これだ!!)

この状況を打破する、最も都合のいい方法。それは―ウルトラマンガイアにある！

それがわかったのなら、行動に移す！炎に当たらないよう、後方転回をするタイムニングで脚部に力を籠め、一気に跳躍。後方宙返りで、一気に距離を取った。しかし、サラマンドラの炎から逃げるには、ぎりぎり足りない。…これでいい。準備は整った。

サラマンドラを正面に見据え、迫りくる炎に悠然と立ち向かう。右手に力を籠め、光が集ったのを感じたのち、炎の正面に右腕を突っ込んだ。

「…!？」

炎にさえぎられて視界が悪いが、奥の方でサラマンドラの驚いたような動きが見えた。それはそうだろう。サラマンドラの炎は高速で回転する剣の壁にぶつかると自分の目の前で大きく広がり、自分には火の粉一つ掛かっていないのだから。

自分がやったことは一つ。炎に向かい光の剣『アグルブレード』を突き出し、それを手首を軸に回転させる。高速回転する光の剣は壁のようになり、質量の少ない炎を切り払い、完全に防いだのだ。

嘗て高山我夢の変身するウルトラマンガイアは、サイボーグ獣人ウルフファイヤーという怪獣と戦ったことがある。謎の円盤により巨大化したこいつは、サラマンドラと同じく火炎放射の能力を有していたのだが、その際ガイアがとった戦法が『アグルブレード』の高速回転。ガイアはこの戦法をもって炎を無力化し、ウルフファイヤーに接近し

切り裂いた。自分の戦法は、その焼き直しである。

そして、この先自分がやる事も高山我夢と同じ。意を決し、剣を高速回転させつつサラマンドラに接近する。サラマンドラは炎が効かない自分に対し無理やり炎を浴びせんとさらに炎の勢いを上げるが、剣の壁は完全にそれを防ぐ。そのまま進撃し、距離を詰める。やがて自分とサラマンドラの距離は、先程の殴り合いの時と同じ、接近戦の間合いとなった。これならば、『アグルブレード』は届く！

(…今…)

右手の剣で炎を振り払いつつ、鼻先から顔面を切り上げる。もちろんこんなものはサラマンドラの皮膚に防がれるが、そこは重要ではない。自分の剣はハナから出る炎を止め、目にかすらせることでサラマンドラの視界を封じる。これにより、邪魔になる動きは一瞬だが封じ込めた。

それを確認し、剣を勢い良く突き出す。振った剣は、動けなくなり完全に無防備となったサラマンドラの弱点―喉の再生器官へと吸い込まれるように動き、そこを刺し貫

けた！  
「?!?!」

弱点を刺し貫かれたからか、声にならない悲鳴を上げるサラマンドラ。しかし、この瞬間こそ好機。一気に畳みかける！

剣を解き、いったんファイティングポーズを取り、一呼吸置く。そしてサラマンドラが動くより早く、苦しそうに呻くサラマンドラの顔面目掛け、ハイキックを喰らわせる。「デュワッ！」

雄たけびと共に、二回、三回と同じ個所へのハイキックを繰り返す。するとサラマンドラは次第に、そのキックの勢いに乗せられその場で回転を始めた。

だが自分がキックを止める事はない。さらにキックを重ね、回転の勢いを増していく。サラマンドラが結構な速さで回転しだしたのを確認し、さらに力を込めた全力のキックを、サラマンドラにお見舞いした！そして、その勢いでサラマンドラは回転しつつ滑るようにな後退していく。

(コンーン！)

タイミングを見計らい、サラマンドラに最接近を仕掛ける。高速回転で妨害できないサラマンドラを尻目に、自分は回転を見極め―伸びてきた尻尾をつかみ、力技で押さえつける。

「デュアアアアア……！」

高速回転を無理やり停止させ、さらにそのまま怪獣の尻尾を持ち上げ、ハンマー投げの要領で回転させる。何回も振り回し、勢いをつけていく。怪獣が二度と立ち上がれないようにと、念を入れ振り回していく。





け、光を解き放つ。

「デュアアアアツ!!」

ガイアの頭部から伸びる光の刃、『フォトンエッジ』がサラマンドラ目掛けて飛び出した！光の刃はまっすぐ、動けない様子のサラマンドラの喉に吸い込まれるように飛び込んでいき、直撃する。サラマンドラの体は、光によって切り裂かれていき―次の瞬間、大爆発を起こし完全に吹き飛ばされたのだった。

これが、あの不気味な砂漠の中で起こった戦いの顛末である。

―アルシエさん？」

## アルシエに会いたい!

「—アルシエさん?」

「…あ、はい!」

自分に語り掛けてくる声で、思い出から現実に戻される。いけない、今は来客中だ。印象に残る戦いだったからとはいえ、思い出にふけっている場合ではない。

意識を、目の前で待つ漆黒の鎧の英雄に向け直す。英雄の表情は鎧で伺い知れないが、幸い雰囲気は穏やかなままだった。

「す、すみません…:当時の事を、思い出してしまつて…:」

「ああ…:ひよつとして、アルシエさんもあの砂漠の事をご存じで?」

「はい、一度だけ、この目で見ました…:」

「…なるほど。確かに、あの砂漠は印象に残りますからね。かく言う私もこの目で確認した時には、少々背筋が凍つたものです。砂漠から怪獣が出てきたときはもつと驚きましたけどね」

どうやら、目の前の英雄もあの砂漠には圧倒されたらしい。それはそうだろう。生命を何も感じない砂漠が、森林地帯にぽつんと現れていたのだから、驚くのも当たり前だ

ろう。

余談だが、あの砂漠の事について、『フォーサイト』の中で直接見たことがあるのは自分だけで、他の仲間達は実は見ていない。細胞片から復活することが出来るサラマンドラの残骸回収は、再生器官がすでに破壊されていたとしても危険だと自分が説得したため彼らは踏みとどまったのだが、そんな説得をしたのも自分にとつてあの砂漠が異質に過ぎたため。自分は当時自らがガイアである事を知られていなかったため説得が難しかったが、それでもあの死の砂漠に皆を向かわせなかったのはよい判断だったと思っている。

…しかし、さつきから落ち着かない。これは、この人が原因だろう。目の前に座る英雄が。

「…それはそれと、モモンさん。敬語はやめていただけませんか？自分のような者相手に、貴方のようなアダマンタイト級の冒険者が敬語なんて使う必要ありませんから…」  
「…しかし、今の私は貴方に教えてもらっている立場ですから。礼節はわきまえるつもりですよ」

「い、いえ！そんな、大したことは何も…それに、こんなことを言うのもおかしいんですけど、モモンさんにその様に話しかけると、緊張してしまうというか…」

「…そうですか。では仕方ない」

溜息をつくような仕草とともに、英雄モモンは口調を変えてくれることに了承してくれた。ありがたい。そもそも自分のようなワーカーにアダマンタイト級冒険者が敬語を使って話しかけてくること自体おかしな事だ。「教えてもらいに来たのですから」とか言われてもそれはそれ。英雄らしく器が広いという事はわかったが、自分にはつらい。これで少しは落ち着ける。

：そう、自分の目の前にいるのは、アダマンタイト級冒険者、漆黒のモモンだった。普段はリ・エステイーゼ王国の都市、エ・ランテルに拠点を置いている彼は、わざわざ帝国までやってきて自分の話を聞きに来たというのだ。

この日はゼットンを倒したその翌日で、『フォーサイト』の仲間たちがフェメル伯爵の依頼で墳墓に向かうワーカーチームの見送り兼視察のような事をしている中自分は休養を命じられた。そんなに心配かけたのだろうか？そんなわけで自分は一日暇を持って余す事になり、とりあえず『歌う林檎亭』に顔を出したのだが、そこで自分を探しにやってきたモモンさんとその従者ナーベさんと出会い、自分が了承する形で一対一で怪獣の事を教えることになったのだ。

モモンさん曰く、自分の事はなんか噂になっているらしい。「帝国には巨大なバケモノに詳しい嬢ちゃんがいるらしい。そいつはワーカーで、ある酒場でバケモノを怪獣だと言つてそいつがどんな奴かを詳しく言い聞かせてる」……というのがモモンさん達が聞

いた噂だという。なんだそれ。確かに自分は怪獣ビジネス関係なく、『歌う林檎亭』でこの世界に現れた怪獣の事について語ってはいるが、まともに聞いているのは仲間たちだけで、他の客はいつも「またやってるよ」みたいな感じでこちらの話を聞き流している様子だったのだが。結構皆聞いているのか？…少し恥ずかしい。自分の前世の記憶以外参考になるものがないので、結構つたない解説になっているのを自覚している分、余計に。

そんなことを考えていると、モモンさんは咳払いの後、話を前に進め始めた。

「ではアルシエ君に改めて聞こう。私はある日、例の砂漠にて怪獣…サラマンドラだったか？とにかくそいつが地面から出現したのを確認した。…質問を繰り返すが、サラマンドラという怪獣は土とか砂の中を進むとか、そういう能力はないのだな？」

「はい、自分の知るサラマンドラに、地底怪獣の要素はないので…多分、サラマンドラはそこで眠っていたのをたたき起こされたのだと思います」

「そうか…私は、あの砂漠は何か超常の力が働いてできたのではないかと考えている」  
「…と、いこうと？」

「…推測にはなるが、あの砂漠は砂漠が成立した範囲内にいたすべてが…文字通り死んだから出来たのではないだろうか。つまり、あの砂漠の中では草木やそこに住むもの達は言うに及ばず、周辺の空気は死して消え失せ、地面も中まで乾ききって砂漠になった

のだと。あくまで推測だがね」

「な、なるほど……?」

「その推測が、もし正解だったらと仮定する。…その環境下でも、怪獣とは生きていられるものなのかな? 君の意見を聞きたい」

「…わかりました」

…さすがは英雄である。森の火を消しながらだったとはいえウルトラマンの体越しに見ても何一つわからなかった自分に比べ、そんな推論を立てられるとは。荒唐無稽な話にも聞こえるが、確かにそういう訳の分からないことが起きない限りあんな綺麗な砂漠になるとは思えない。ウルトラマンや怪獣、宇宙人の超常的な力を知っている以上、そんな現象を起こせる奴がいると言われれば自分は信じる。英雄ともあろうものが、何の根拠もなしにこんな話をするとは思えないし。

それはさておき、モモンさんの質問に答えないといけない。どう答えるべきか。

「…仮にモモンさんの言う通りの状況下なら、怪獣でも生き残るのは難しいと思います」

「…そうなのか? しかし、現にサラマンドラは…」

「はい、サラマンドラは生きて出現しました。…多分、サラマンドラが再生怪獣なのが、強く関わっているのだと思います」

「…再生怪獣? 何かのカテゴリのようなものかな?」

「そんな感じですよ。…今回のサラマンドラは、弱点の喉さえ無事なら細胞の一片からでも復活できる程の再生能力を持っていると言われています。現に体を両断された程度なら、サラマンドラは復活したという事例もありますし、この能力が、砂漠からの出現に関わっていると自分は考えています」

「…そこまでいくと再生というより、蘇生のような力と言った方がよさそうだな…アルシエ君、君は先ほど再生怪獣と言ったが、ひよつとして他にもそういう怪獣がいるのか？ 出来る限りのことを教えてほしい」

再生怪獣の話に、モモンさんが食いつく。まあ、死んでも死なない化け物のような奴のことが気にならないわけがないか。怪獣が危険だとわかるように、しっかりと教えておかなければ。

「そうですね…サラマンドラのような再生怪獣はギエロン星獣、マグネドン、ライブキングみたいな怪獣が該当します。彼らは皆、バラバラになっても復活するような怪獣なので、サラマンドラと同じようにあの砂漠でも現れることがあり得ると思います」

「…他にも、そういう怪獣はいるのか」

「はい、再生怪獣というか、復活する怪獣なら…シーリザーのような、腐乱死体から復活する怪獣もいますから」

「…何と」

「後は、砂漠でも現れそうな怪獣と言えば…ロボット怪獣ぐらいでしょうか」

「…ロボット?」

…ロボット怪獣の話をしようとした途端、再生怪獣の話に圧倒されていた感じのモモンさんの声に重さが増した気がした。モモンさんの表情を見ることは鎧のせいで叶わないが、目つきは鋭くなったような気がする。いったいどうしたんだろう?…やはり、ロボットの話はこの世界の人には難しいからだろうか。ヘツケラン達に宇宙怪獣や宇宙人の話をした時も、肝心の宇宙についてはちんぷんかんぷんだったようだし。ここは上手い事説明してあげないと。

「はい、ロボットというのは金属でできた、生物じゃないけど生物のように動く人形というか…すみません、自分でもうまく理解できてなくて…」

「…いや、構わない。しかしそのロボットとやらについても教えてくれるのが、君のタレントとやらの効力なのかな?」

「…ええと、そんな感じですよ」

「そうか…」

…やはり、自分でもいまいち理解の及んでいないものに対する説明は難しい。この世界では例えに仕えるものが限られている分、特に。モモンさんは顎に手を当て、考える人のような姿勢になった。やはり、自分の説明の拙さが原因か。タレントの方について



は、納得していただけないと困るのだが。

実は、自分は怪獣の知識について、これをタレントによるものだとしている。つまり、自分は怪獣の情報を授けてもらうタレントを持っている、と表向きには説明しているのだ。実際には前世の記憶だが、流石にこれを馬鹿正直に話す勇氣は自分になかったし、タレントは生まれた時に得る能力とも言われているから前世の記憶もタレントみたいなものだ。：そう言い聞かせているものの、仲間にもそう言い張っているのは心が痛む。生命力や魔力を見破るタレントも皆に伝えたことで仲間内での自分は二つのタレント持ちという事になっているが、それを信じてもらった分すごく心が痛い。何時か皆にも自分の前世の事を伝えられたらいいな、とは思っているものの、難しいのが現状だ。

さて、モモンさんはしばらくの間、何かを思案しているようだったが、やがて「まあいい」と考える構えを解いた。納得してもらえたのだろうか。

「：ロボットの事は一先ず置いておこう。アルシェ君、もつと他の怪獣についても教えてほしい。再生怪獣とか、ロボット怪獣とか」

「わかりました」

—そうして、何体かの怪獣の説明を置いたころ。「そろそろか」と言つて、モモンさんは席を立ちあがった。

「すまないが、この後依頼があるのでここで失礼する。有意義な話が出来て、良かったと

思う」

「いえ、こちらこそ…怪獣の話って、聞こうとしてくれる人が少ないので、自分としてもありがたいです」

「そうか…時に、私の受けた依頼というのはフェメール伯爵の依頼でね、君たちにも依頼として来ていたはずだが…君たちは参加しないのか?」

「…はい、自分の体調が優れなくて…申し訳ない、とは思っているんですけど…」

「いや、金に目がくらまず、仲間を気遣えるというのはいいことだ。依頼を断った君の仲間の判断は正しいよ。君の話も聞けなくなるからな」

「…?今、なんて?」

最後の方、モモンさんがなんて言ったのか上手く聞き取れなかった。しかしモモンさんは「なんでもない」と言い、言葉が続ける。

「…最後に質問がある。君は、『ユグドラシル』という単語に、聞き覚えがあるかな?」

「…ゆぐ、どらしる?」

「ああ…重要な質問だ、嘘偽りなく答えてほしい」

…モモンさんの様子が、少しおかしい。なんか、この質問と同時に、纏っているオラののようなものが物凄く濃くなったように見える。強豪怪獣独特の雰囲気比べればマシだが、飲まれそうで少し怖い。いったいこの質問に、モモンさんは何を求めている

のだろうか？本気だというのは、わかるのだが…

…考えてもしようがないし、質問に答えよう。しかし、ユグドラシル？て、なんだ？神話？世界樹？いやいや、それは前世での話であつてこの世界での話とは関係ない。何か答えになりそうなものが喉元で引っかかっているような感触こそするのだが、皆目見当がつかないし、うーん…

「…すみません、わからないです」

「…そうか。なら、このことは忘れてくれ」

自分の質問に何かを感じたのか、モモンさんのオーラのようなものが霧散した。彼はどこか諦めた様子で、席を離れていく。そして『歌う林檎亭』外に出る直前、自分に語り掛けてきた。

「ではアルシエ君、また会おう。今度、他の怪獣の事についても教えてくれ」  
そう言つて、英雄モモンはこの店を去つていった。

—店を出て、まずは一息つく。とりあえず重要な情報が聞けて良かったと胸をなでおろすのと同時に、従者として付き従う彼女の姿が、モモンの目に入つてきた。

「モモンさん、終わりましたか」

「ああ、今しがたな。待たせたか？ナーベ」

「いえ、そのようなことは決して」

「そうか…では、行こうか」

そういつて、漆黒のモモンとその従者ナーベは、目的地に向かって歩き出した。この調子なら依頼の場所には間に合うと確信して。

それにしても、とモモンは周囲を見渡し考える。やはり、この帝国は暗い場所だと。活気はあるものの、民の目はあまり明るいとは言えない。帝国の軍隊は專業兵士である騎士で構成されていると聞くが、その姿もあまり見かけない。見かけてもまばらで、疲れている上ピリピリしているようにも感じる。つってみれば、すぐ爆発しそうなほどに。実際爆発するものが多いらしく、そのせいで今の帝国の治安はあまりよくないのだろうとモモンは踏んでいた。

そう、帝国が活気に満ちていたのは過去の話。鮮血帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクスによる改革断行は帝国に新たな風を吹き込んだが、その後出現した怪獣の被害により、その風は逆風となってしまった。怪獣は王国や法国にも現れているため、実際は全ての国が等しく弱まっているのだが、帝国は特に被害が大きいと聞く。軍が怪獣に負け続け、その怪獣は謎の巨人―いつの間にかウルトラマンと呼ばれるようになった存在により駆逐される。人々を救うウルトラマンの存在に感謝の声が上がる一方で、怪獣を倒せない帝国に対する民の不満はたまる一方。それでも現在の帝国の活気

を考えてみれば、エルニクス帝は頑張っている方だろう。民からすればそんなこと知ったことではないとか言いそうなのが容易に想像できるあたりが、悲しいところか。

活気はあつても余裕はない国。それが、モモンから見た帝国の姿であつた。

そんなことをモモンが考えていると、彼に従者のナーベが話しかけてくる。

「モモンさん、アルシエ・イーブ・リイル・フルトとかいう輩はいかがでしたか」

「…輩はよせ。彼女は思つた以上に話の出来る少女だつたよ。与太話をしているかのようには聞いたが、実際の彼女は自己評価は低そうだが理知的に見えた。タレントとやらに聞しても、妄想を話してするようにも見えなかつたし真実から大きく外れたことを言うようにも思えない。今のところ彼女の話はある程度信頼できるとみていいだろう」

「そうですか。それはなによりです」

「そうだな…そもそも彼女の話を聞きつけてきてくれたのはナーベ、お前だ。そのことは、お前に感謝せねばな」

「…勿体なきお言葉…ありがとうございます」

モモンの言葉に喜びを隠しきれないナーベ。その様子からは、彼女が単なる従者ではないことが読み取れる。

そう、ナーベは従者などではない。その正体は『プレアデス』というナザリック地下大墳墓における6人の戦闘メイドに属するメイドの一人であり、本名はナーベラル・ガ

ンマ。そして彼女と同じく英雄モモンという姿もまた仮の姿に過ぎない。彼の真の姿は死者の大魔法使い・オーバードロード。名はアインズ・ウール・ゴウン、ナザリック地下大墳墓の頂点に立つ、至高の存在と崇められし者である。

彼らはそもそもこの世界の住人ではない。何らかの理由で拠点であるナザリック地下大墳墓ごとこの世界にやってきた彼らは、ある目的をもって行動を始めた。アインズが英雄モモンとして活動しているのも、その目的を達成するための行動の一環である。

こうして帝国に來たのも基本的には同じ理由だ。違いがあるとすれば、それは理由の内怪獣に関する情報収集の割合が多いという事。少なくともアインズは、怪獣に関する情報が喉から手が出るほど欲しかった。

(それにしても、サラマンドラ：だっけ？そいつの他にも似たような奴がいたってわかったのはデカいな：本格的に対策考えないと)

アインズは一人、心の中で方針を考える。彼にとつて、アルシエがもたらした情報は非常に興味深く、大きい。何といつても自分が切り札と認識している技を受けても何とかなる怪獣が他にもいるというのは、彼に大きな戦慄をもたらすのに十分だった。恐らく話を聞いてビビッてしまったのはアルシエにも気づかれただろうが、彼女がそこにツツコミを入れなくて助かった、とアインズは思っていた。

：そもそも、彼がアルシエに話を聞きに行つたのは、彼の特技がサラマンドラにも効

力を及ぼした疑いがあり、その上でサラマンドラが出現したからである。ある日、アイズとはある理由であの砂漠があった場所で戦闘になり、そこで自分の切り札とも呼べる技を行使したのだ。

『The goal of all life is death／あらゆる生あるものの目指すところは死である』このスキルはアイズが苦労の末手に入れた特殊スキルであり、100時間に一度しか使えないという制限がついている。その分効果は強力で、発動後12秒たてばあらゆる耐性を無視して対象を即死させることが出来るというものだ。実際に彼がこの世界で使用したところ、普段は即死どころか死ぬこともない無機物、空気、地面といった存在まで死んでしまった。あの一帯だけ砂漠になったのはこれが原因である。

にも関わらず、怪獣はアイズがスキルを使ったその夜に出現した。それも地面の中から。これには念のため砂漠を監視していたアイズも驚いた。なんせあの技は地面の下まで砂漠にしており、その分そこにいた生き物も殺していたはずなのだから。結局怪獣は何故かしばらく砂漠にとどまり、やって来たウルトラマンが撃破したが、怪獣の驚異は十分伝わっていた。

だからこそ彼はこの理不尽を受けて今まで遭遇していなかった怪獣への警戒度を大きく引き上げ、同時に情報を収集しだした。近年出沒しだしたらしい怪獣に関する情報

は非常に少なく、調査は難航したものの根気強く調査を進めていき、やっと帝国にいるワーカー、アルシエ・イーブ・リイル・フルトにたどり着き、藁にもすがる思いで接触したのであった。故に彼女がマトモそうで詳しい情報をくれたことに、アインズは心の底から感謝している。：本当は怪獣を探して実験してみたのだが、ナザリック地下大墳墓の総力を挙げても怪獣は見つからないか見つかったてもウルトラマンに倒されてしまうかのどちらかだったこと、また仮に怪獣を見つけてもアインズ自身のスキルが効かなかったことから見返りが少ない上危険かもしれないという可能性が浮かび上がったことから立ち消えとなつた経緯がある。ウルトラマンについても、ほぼ同じ。むしろ遭遇した怪獣をほぼ確実に撃破していることから、危険度はこちらが上ではと考えている。人々を救っているらしいがそれはそれ、だ。

(そもそも、ユグドラシルの中でも強い方の即死受けても復活するなんて反則だろ：あのスキル手に入れるの結構苦労したのに：ていうかそんな奴すら倒せるウルトラマンって一体：これもアルシエちゃんに聞いてみればよかつたかなあ)

：因みに、アインズはサラマンドラという怪獣がウルトラマンを二人相手に取れる怪獣だという事は知らない。弱点を突かなければウルトラマンも苦戦するということも知らないが、知らない故に彼にとつてのウルトラマンの評価は上昇していった。

そしてアルシエの事を思い出したおかげで、アインズの中である考えが再び浮かび上



がってきた。

(しかし、いきなりロボットの話されたときは驚いたな……あの子はタレントって言ったけど、やっぱりユグドラシルと関係あるんじゃないや……いやでも怪獣とかよくわかんないし)

アインズはいろいろ思案するも、答えは出ない。やはり、一度だけの会話では得られたものは少ないと感じていた。

アインズにとって、ロボットというのはそう珍しくはない。彼は元々西暦2138年で生きてきた人間である。紆余曲折あつて現在は骸骨の体になっているもの、それ以前の前にとつてロボットとは身近な単語であつた。

しかし、この世界にはロボットという概念は存在しない。少なくともアインズの観測範囲内でそのようなものが確認されたことは一度もない。だが、その単語をアルシエという少女は何気なしに口にした。故にモモンガは彼女をユグドラシルから来た者と同じ場所からやつてきた同胞ではと考えたのである。彼は怪獣を知らないのです、怪獣の話をするアルシエに未知を感じた故確信には至っていないのだが。とにかくアインズの中でのアルシエの重要度は、彼が想定していた以上に跳ね上がっていた。

(……うん、やつぱりまた話を聞きに行こう。ウルトラマンや怪獣の事はもつと知らないといけないし、彼女自身の事も調べないといけないからな)

かくしてアインズは方針を決定する。アルシエ・イーブ・リイル・フルトとの接触を積極的に行い、情報収集する。現状怪獣の事であてになりそうなのが彼女だけなので、取り扱いは十分慎重に、かつ友好的に行うと。それを決めてしまえば、しばらく思い悩んでいたアインズの頭の中も少しだけすっきりした。

そしてアインズはそこで思考をやめ、帝国に來た別の目的の方に集中しだす。自分たちの目標の達成のため、まず最初の生贄となるワーカー共にの顔を見るため、彼は目的地へと歩き出した。

—余談だが。

後日アインズはモモンとして怪獣の事を聞きに行き、そこでアルシエの口から宇宙だの異次元だの宇宙人だの、これまた怪しい単語が飛び出し、

その単語からまた怪しく思うもとりあえず話を聞き、そこで久しく触れてなかったかつての故郷の要素に触れ、

気がつけばその要素の事に触れるため話を聞きに行くようになり、やがて二人はちよつとした茶飲み友達になるのは、

別の話……？

## 邂逅

## 新たななる巨人・序 前編

夜の星空を、たくさんの青い光が流れていく。地上から見れば、それらは流れ星のようにも見えるかもしれない。しかし、それらは皆星のように流れていくのではなく、生きていくかのように不気味な動きで空を駆けていた。

そう、それらは星などではない。青白く光り、全体に黒い筋が走ったそれらは、ここではないどこかで悪魔のように恐れられた、れつきとした生命体である。そしてそれらは、見るものが見れば――例えば、この世界においてウルトラマンガイアたる少女、アルシェ・イーブ・リイル・フルトのような怪物をよく知るものが見れば、一目で何者かを言い当てる事が出来る程に有名だった。

宇宙球体スフィア。彼らこそ、ネオフロンティア時代を迎えた地球人の前に現れたバケモノである。

彼らはしばらく上空を旋回し、やがて一つの山に目をつける。希少金属のとれる山として有名なその山は、夜間故に現在は誰もいない。これは幸運な事である。ここで働いていた者たちは、彼らと一つにならずに済んだのだから。

スファイア達は山の方向を見てしばらく静止すると、いくつかは離れ、彼方へと去っていく。そして残った者たちは、鉾山目掛けて一斉に接近する。そのまま彼らは鉾山に食らいつき、同化を開始した。

スファイアには周囲の物質を取り込んでスファイア合成獣と呼ばれる怪獣となる能力が存在する。彼らはその能力をもって、鉾山を瞬く間に同化していく。やがて同化が完了すると、鉾山は消え、代わりに土の色をした怪獣が立っていた。怪獣には五つの目があり、胸に光り輝く何かの器官、そして背にはこの世界には存在しない変電所を彷彿とさせる、周囲にリングが巻き付いた突起物―コイルが4本存在していた。

怪獣の名は、サンダーダランピア。彼は生まれると同時に、スファイアの命に従い歩き始めた。スファイアは高度な知性を持ち、目的をはっきりと持つ存在だ。ここにいるサンダーダランピアもスファイアの目的のために生み出された存在であり、そして強大な力を持つ存在でもある。少なくともサンダーダランピアを止められるほどの強き者は、今の場には存在しない―本来ならば、そのはずであった。

サンダーダランピアはしばらく山々の間を歩き続け、不意に足を止める。そして背中突起物に力を籠め、その名の通り電流を生み出し始める。そして周囲を焼き払わんと、その電流を開放する―だがその瞬間、青い隕石が地上に落ちる。スファイアの光とは全く異なる、温かな青い光が、地上に向けられた電撃の前に降り立ち、受け止めたのだ。

そして、その青い光が止むと、そこには青色の巨人の姿があった。

巨人は美しい青に覆われており、胸元には自身の状態が『V2』であることを示す黒と金のライン、そして光り輝く『ライフゲージ』が存在を主張する。

彼もまた、こことはちがうどこかでかつて根源的破滅招来体の襲来に対し、地球が遣わした巨人。彼の名は、ウルトラマンアグル！

「…」

サンダーダランピアと相対するアグルは、静かに右腕を相手の方に向ける。サンダーダランピアはアグルを敵として見ているのか、五つの目で睨みつけ、電気を生み出す。静かなるアグルと、光り輝くサンダーダランピアがまさに激突するかに思われたその時――アグルの姿が、いきなり消滅した。

突然の出来事に、目を剥くサンダータランピア。だが驚くのはまだ早い。次の瞬間、彼はいきなり尻尾から誰かに持ち上げられたのだ。尻尾を引っ張り上げられたことで前方に倒れこみ、突然の出来事に思わず混乱するも、必死に自身の後方を確認するサンダータランピア。果たしてそこには、瞬間移動で回り込みつつ、彼の尻尾をつかみ取ったアグルの姿があった。

アグルはそのまま両腕をフルに使って尻尾を軸にサンダーダランピアの巨体を持ち上げ、そのまま怪獣の体を思いつき振り回し始めた。

「アアアアアアアア……デウアアアア!!」

そして、十分な勢いをつけた所で怪獣を放り投げる。サンダーダランピアはその勢いのまま宙を舞い、地面に激突した後も滑るように地面を壊して進んでいく。そして、山の中腹に激突し、その山を大きく崩して停止した。

サンダーダランピアが上手く起き上がろうとする中、アグルは両腕を下に広げる。突き出した両手の間にヒカリのラインが現れると、アグルはそれを折りたたむように両手を胸元に寄せる。光のラインが球体が変わった時、アグルは思いつきり両腕を前方に突き出す。

「アアアア……デウアアッ!」

アグルの咆哮と共に放たれた渾身の『リキデイター』が、サンダーダランピアを襲う。サンダーダランピアは何とか立ち上がりアグルの方に体を向けるも、その次の瞬間、『リキデイター』が着弾するという結果となった。

だが、アグルの攻撃はこれでは終わらない。両腕を突き出した姿勢のまま、次々と光の球を生み出し、発射する。何としてでも怪獣をここで倒すという意思を乗せた、鬼気迫るといった様子で発射された光球の群れが、次々に着弾していく。当然すべてがサンダーダランピアに当たったわけではなく、光球が地上を吹き飛ばしていく光景も見られた。

やがて土煙が完全に怪獣を覆い隠したところで、アグルはやつと自身の必殺技を停止させた。一瞬、静寂が夜の山間部を支配する―だが、その次の瞬間、土煙を払いのけられる。そこから、必殺技を受けたはずのサンダーランピアが、傷はついているもののダメージがあまり見られない姿で現れた。

サンダーランピアに限らず、スフィア合成獣の中には亜空間バリアと呼ばれる障壁を使うものが存在する。亜空間バリアはウルトラマンの必殺光線を防ぐことが出来るほど優秀で、このサンダーランピアもまた、亜空間バリアをもつてアグルの猛攻をしのいだのだ。サンダーランピアはそのまま、背中突起より電撃を放つ。反応がいいのか、アグルは軽やかにそれを回避するも、焼き払われた地面の様子から、その威力の程がうかがえた。

アグルは地面を一瞥すると、右の拳を左手に打ち付ける。左手から引き出されるように現れた『アグルセイバー』を正面に構え、アグルはその姿が消えたと錯覚させるような速さをもつて、サンダーランピアへ一気に詰め寄った。当然サンダーランピアもこれに反応し、強力な電撃を放つ。だが、アグルは自身の光の剣を振るい、これを完璧に切り払い、凌ぎきる。そしてサンダーランピアが剣の間合いに入るや否や、アグルは詰め寄った勢いのまま、神速の斬撃を浴びせる。その速さにサンダーランピアは反応しきれなかったのか、それとも『リキデーター』を防いだ時点で破壊されていたから

なのか、亜空間バリアは貼られることなく、斬撃を顔面に浴びる結果となった。

悲鳴を上げるサンダータランピア。彼の五つの目は、アグルの手によつて斬りつけられ、完全につぶされてしまった。だがアグルはその悲鳴に応えることはなく、淡々とした動きでサンダータランピアの体を両腕でつかみ取ると、それを背後へと思いつきり投げ飛ばした。反応することもできず、宙を舞うサンダータランピア。目を潰されてしまつては最早為す術もなく、地面に打ちつけられ、もがき苦しむことしかできないでいた。

そして、アグルは怪獣を確認すると、両腕を『ライフゲージ』の近くに構えたのち、大きく広げる。右腕を掲げ、光をかき集めるような仕草と共に、アグルの周りに青白い光が生まれ、やがたてそれが球の形に収束し、両腕に宿る。

「アウワー・オアアアアア……」

光が集まりきつた状態の両腕を腰撓めに構えると、それを全力で前方に撃ち出す。

「アウアツツ!!」

先ほどの『リキデイター』同様、気迫のこもつた『フォトンスクリュー』が、うつぶせのまま動けないサンダータランピアを襲う。サンダータランピアには最早どうすることもできず、さえぎられることなく『フォトンスクリュー』が直撃。そして、サンダータランピアの体が一瞬だけ光り輝き―爆発、完全に碎け散つた。



山道を歩きつつ、皆で怪獣の話をする。

「—以上の目撃情報を纏めると、おそらく今回この付近に現れた怪獣は超合成獣サンダーダランピア。凶悪なスフィア合成獣の一種」

「なるほど、流石はアルシェ…で、そのスフィア合成獣ってのを生みだす元凶が、前言ってた…宇宙？とかいう場所から来たっていう、スフィアってやつなんだっけか？」

「うん。宇宙球体スフィア…この世界ではないどこかで、宇宙に進出した人類を快く思わなくて、地球に住む命を自分たちに統合しようとした、まさに怪物のような存在…」

「…宇宙、とか地球、というのはやはりよくわかりませんが、スケールが大きいというのはなんとなくわかりました」

「そうね…宇宙、って確かこの空の向こう側なんでしょ？地球…人間だけの世界で、よくそんなところまで行けるわね…私も行けるかしら」

「わかんない…けど、自分もいつか、行ってみたいって思ってる」

最も、ウルトラマンの力を使える以上、いつでも行こうとすることはできる。この世界の宇宙はどんな感じなのか、それがちよつと怖くて実行するまでには至っていないのだが。

それにしても、スフィアまで現れるとは。スフィアがいるという事は、その本体であ

る暗黒惑星グランスフィアもいるのだろうか?…勘弁してもらいたい。その特性を考えると、どう考えても自分一人で対処できる相手ではない。やはり、今回サンダーダラニアと戦ったときれる巨人:アグルらしき存在と早急に接触しなくては。

そういうわけでスフィアに関して思案を巡らせつつ山道を歩く。そんな自分と自分のそばを歩くロバーテイクとイミーナに、前を行くヘッケランが声をかけてきた。

「まあ、そういう話も大切だがな…今はこの山を抜けることを考えようぜ? 迷子もそろそろ飽きてきたところだしな」

…ちよつと待て。

「…この道の方がいいって言い出したのは、リーダー、貴方…」

「…とうとうアルシエにまで言われてしまいましたねヘッケラン。最早言い逃れはできませんよ?」

「そうよ! そもそもこの迷子が始まったのは、土地勘も無いのに適当に山道に入ったヘッケランのせいでしょ!?! こんな初見の場所でききなり脇道に入るとか…アンタ何年ワーカーやってるのよ?」

「いや、この迷子の半分は怪物が街道をつぶしやがったせいだから…いえ何でもありません、自分が悪かったです申し訳ありませんでしたのでその拳を下ろしていただけませんかねイミーナさん…?」

「…(ニコツ)」

ブン！（拳が風を切る音）

←

バキョ！（拳がヘツケランの顔をとらえる音）

「グフツ!!」

イミーナの気持ちのいいストレートが、ヘツケランを吹き飛ばす。…ちよつとだけ、すつとした。

…そもそも、自分たちはなぜこんな山道を歩いているのか。事の発端はゼットンに倒した後にさかのぼる。あの戦いの後、自分たち『フォーサイト』はちよつとした旅行に行くことになった。怪獣ビジネスの件でヘツケランと取引をした商人から、自分たちは王国内にあるちよつとした隠れ里みたいなところに招待を受けたのだ。結構特殊な場所らしく、そんな知る人ぞ知る秘境のようなところに行けるといふ事で、自分たちはゼットンの残骸を怪獣ビジネスで売りさばく準備と並行してワクワクしながら旅の支度を整えた。途中アダマンタイト級冒険者、漆黒の英雄モモンが自分を訪ねてくるというサプライズがあつたが、それ以外には特にハプニングはなく、ゼットンを売る準備などやるべきことを完了させて、自分たちは旅立つた。…旅立つた、のだが。

「…しかし、ヘツケランの言い分もわかります。街道が先の怪獣の出現で寸断されてい

なければ、迂回路を取る必要はなかったわけですから」

「だろ!?…いえ私が悪いのは承知しておりますのでそんなに睨まないでください…」

ロバーテイクのぼやきにヘッケランが反応するが、イミーナに睨まれすぐに引つ込んでしまう。正直今回のヘッケランはらしくないやらかしをしたので、しようがないだろう。

今回の旅で、まず直面したのは街道が寸断されていたという問題だった。なんでもサンダーダランピアとアグルの戦闘でこの辺り一帯がいろいろ破壊されてしまい、そのせいで山が崩れ街道がふさがってしまったとのことらしい。かくして自分たちは山々の間を通る迂回路を、荷物を背負いつつ徒歩で歩く事になってしまった。ワーカー仕事で強行軍には慣れているが、きついものはきつい。今回はワーカーの仕事関係ない分、余計に。

そして、急に山登りをする事になった自分たちの旅に新たな問題が立ちふさがる。

「…でも、驚いた。ヘッケランが急に、こつちが近道だつて言いだして…」

「…すまんアルシエ。俺も正直なんでこの道選んだのか…あの時は絶対いける!と思っただがなあ…」

「なんで土地勘のない王国領内でそんな自信満々になれるのよ…今度からは無しにして

よ。」

「はい、反省してます…」

イミーナの言葉に、ヘッケランは力なく項垂れた。

…今回の旅での新たな問題。それはよくわからない山道に入り、今絶賛迷子となつてしまったこと。というのも、迂回路を行こうとした際、あらかじめもらつておいた地図を手にしていたヘッケランが「こつちだ！こつちの方が近い！」と言い出したのでそのまま従つたところ、見事に現在位置がわからなくなつてしまったのだ。らしくない、と言うのはこのことで、いつも慎重かつ丁寧なワーカーの仕事をしているヘッケランの姿からは今回のミスは想像もつかない。自分たちも、迷子になつたと力なく喋るヘッケランに対し啞然としたものである。地図自体は丁寧に書かれている分、特に。迷子になつてから結構な時間山中をさまよつており、そろそろ日も暮れてきた。野営はできるが、正直それは避けたい。

…嘆いていても仕方がない。今はこの状況を打破しないと。それに、自分には切り札がある。それを伝えんと、ヘッケランに声をかける。

「リーダー、大丈夫。いざとなれば自分が変身して皆を抱えて飛ぶから」

「…あく…気持ちには正直めっちゃありがたいが…」

「…ヘッケラン、諦めたら？日も暮れて来たし、アンタじゃないけど山を歩くの正直飽きてきたし」

「…いや待て、たぶんここをまつすぐ行ったら森を抜ける。とりあえず、それ試してからで…！」

「…そういうわけらしいので、アルシエの案は最終手段という事にしましょうか」

なんかもいろいろないろいろいっぱいいなヘッケランに、肩をすくめるロバーテイク。とりあえず、自分の案は保留、と言う事らしい。

そういうわけでそのまま山道を進む。やがて自分たちは、森を抜け平原地帯に足を踏み入れた。まさか本当に抜けるとは。そして抜けた先には、意外な光景が待っていた。

「…みんな、見て。あそこにいるの、人だよ」

「…天の助けだ…！」

自分の指した方向を見て、皆の表情が明るくなる。そこには、複数の人影が歩いていく姿があった。人数は5人、おそらく全員女性。それぞれが武装しており、見た感じ腕が立ちそうだった。

まだ気づかれてはいないようなので、とりあえずどうするか話し合おう。

「…どうしよう。話しかけてみる？」

「そうですね…どのような方々かはわかりませんが、強そうなのはたしかでしょう」

「うーん…ここ王国だし、たぶん冒険者とかじゃない？王国のワーカーってあまり話を聞かないし、傭兵なんかには見えないし」

「…なんにせよ、このままだとまた迷子になるかもしれないから…こっちはやましいことはしてないし、向こうも汚い連中には見えない。ここは素直に道を聞いてみるとしようぜ」

ヘッケランはそう言うと、一人前方の集団の方へと歩いて行った。

「すみませーん」

「…なるほど、事情は理解したわ。旅行者って言ってたけど、この付近の地理には詳しくないの？」

「ええ、普段は帝国にいるものでして…本なら下の街道が使えたのですが、化け物に壊されたとかで…」

「…街道」

街道というワードが出ると、ヘッケランに対応していた女性の顔が曇る。恐らくこの団体のリーダーみたいな人物だと思うのだが、なにか嫌な思い出でもあるのだろうか。

どこか気を落とした様子の女性に、すぐくそつくりな二人の少女が近づくとくフイットした服装をしているが、どことなく忍者っぽい。忍者だろうか？ともかく二人の少女が、女性に声をかけた。

「元氣出して鬼ボス。やれることはやってる」

「そう、気にしてもしょうがない鬼リーダー。むしろよくやった方」

「…そうね。ありがとう、ティナ、ティア」

「…あく重症だなこりゃ…悪いがこつちの事は気にしないでくれ。あんまり詮索されたくないんだよ」

「…ええ、わかりました」

落ち込む女性の隣にいた、大柄な女戦士らしき人物の要請にハツケランが応える。何やら街道の件でよからぬことがあつたらしい。詳しい内容はわからないが、何かミスでもしたみたいいな様子だ。

しばらく静寂がその場を支配する。助け舟を出してきたのは、一番後ろにいた仮面の少女だった。

「…それはそうと、お前たちは何者だ？ さつきから妙な気配を感じるんだが」

「…気配？」

「…私にもうまく説明はできないがな。ラキユース、お前も早く立ち直れ。過ぎたことを悩んでもしょうがない。次どうするべきかを考えろ」

「…そうね。ありがとう。では、ここで自己紹介といきましょう。ハツケランさんもそれでいいかしら」

「ええ、構いませんよ」

「…それと、その敬語は使わなくても結構よ。なんだか窮屈な感じがするし」



「そうですか…なら、お言葉に甘えて」

ヘツケランの言葉に合わせ、後ろにいた自分たちも近づく。なんだか予期していない展開になっている気がするが、自分も向こう側の事は気になっているし、これはこれでもいいのかもしれない。

「じゃあ俺からだな。ヘツケラン・ターマイト。…これも言っちゃまうか。普段は帝国でワーカーをやってる。俺はそのリーダーだな」

「では次は私が。私はロバーデイク・ゴルトロン。神官をやっております」

「じゃあ次は私ね。イミーナ、ハーフェルフよ。よろしく」

「…自分は、アルシエ・イーブ・リイル・フルト。よろしくお願いします」

「…アルシエ？」

自分の名前に、リーダーらしき女性が反応した。どうしたのだろうか。なんか向こうの視線が一気に自分に向いている。そんなに自分に気になるところが…待て。何か、いやな予感がある。

そうこうしているうちに、自分に顔を寄せた女性の口が開いた。

「…聞いたことがあるわ。帝国の酒場には、近年出没するようになった巨大な化け物を怪獣と呼び、その全てについて詳しい情報を見てきたかのように語る、英知にあふれた少女がいる。その名は、アルシエ・イーブ・リイル・フルト…!」

「私も聞いたことがある。その知識はかの大賢獣M1号に匹敵するって」

「違う、ティナ。私は彼女が知識を求めやがて妖怪セミ女に至るって聞いた」

「二人とも何言ってるんだ？俺は確かこいつのもつ知識の量は伝説の宝玉アルゴスに蓄え得られた知識をすでに超えているって聞いたぞ」

「…いや、その話はどうでもいいだろう。だが、探していた奴に会えたのは行幸だな」

仮面の少女がそう言うのと、再び視線が集まってくる。というか、ここまで轟いていたのか自分の名前は。一体誰だそんな訳の分からない噂を流したの。おそらく酔っ払いが適当に作った話だとは思うのだが、モモンさんといい本気にしすぎなのでは。

そんな自分の思いなど知らないといった様子で、リーダーの女性が自分の肩をつかんできた。ああ、ここでもモモンさんを思い出してしまふ。あの時同様肩が痛い。そしてものすごく必死そうな様子で彼女が語りだすという流れも、同じであった。

「アルシエさん、私はラクユース。ラクユース・アルベイン・デイル・アインドラ」

「は、はい、アインドラ、さん…」

「…ラクユースでいいわ。あなたに、いえあなた達に折り入ってお願いがあるの」

そして女性—ラクユースさんは、必死さを隠すことなく、己の目的を告げる。

「私たち『蒼の薔薇』と一緒に—『ティガの地』まで来てほしい」

自分が聞き流すことのできない、言葉とともに。

## 新たななる巨人・序 後編

「…ありがとうな」

「…?」

目の前を行く女戦士―ガガーランさんが、自分に語り掛けてくる。その前方には先頭を行くラキユースさんから『蒼の薔薇』の面々が、近くには『フォーサイト』の皆がいる。夜の平原を歩く面々も、大所帯になったものだ。

そんなことを考えていると、ガガーランさんが先ほどの続きを話してくる。

「ラキユースなんだが、最近いろいろと思いつめてることが多くてな…だが、あいつもあんたらがこうして俺たちについてきてもらったのは悪かったと思ってるし、感謝もしているんだ。そこは、俺からも伝えさせてくれ」

「いえ、自分も、皆さんの行く場所にも興味がわきましたから…礼なら、リーダーたちに言つてください」

「…いや、俺らも一日過ぎせる場所のあてが出来たし、こっちも感謝している。『ティガの地』だっけか?アルシエが興味あるなら俺たちも気になるし、気にすることはないぜ」  
「そうか…ワーカーって聞いた時は不安になったが、あんたらは案外話せるもんだな」

「ま、もとは冒険者だし…正直どうしようもなさそうな同業者もいるにはいるんだがな」  
「…それに、自分から言わせてもらえば冒険者もすごいです。前も王国のアダマンタイ  
ト級冒険者…モモンさんに突然「モモン!」えっえっ」

モモンさんの名前を出すと、突然前方を歩いていた仮面の少女—イビルアイさんが飛び掛かってきた。い、いったい何事だ。王国の冒険者という生物は、自分に詰め寄らないと気が済まない生き物なのか。

そんな自分の考えを知ってか知らずか、そっくりな二人の少女—ティアさんとティナさんが自分の首元に引っ付いてきたイビルアイさんを引っ張る。

「ごめんアルシエ、イビルアイは漆黒の英雄モモンさんに惚れている」

「そのくせ前が見えなくなってしまうってこの間もうっかり付いて行く機会を逃がした。イビルアイはドジっ子」

「う、うるさい!それよりも、お前モモンさまに会ったのか!ど、どんな様子だったんだ!?!」

「えっえっえっ…モモンさんは、突然自分の事を訪ねて王国から来てくれて、怪獣の話聞いてくれた…真剣に聞いてくれたし、英雄らしくてすごい人、でした、よ…?」  
「そ、そうか!やっぱりモモンさまは…!アルシエ、モモンさまがわざわざ訪ねてくるなんてきつとすごいことなんだぞ!良かったなあ!こつちからも頼りにさせてもらおうぞ」

「！」

「は、はあ…」

嬉しそうに背中をたたいてくるイビルアイさんに、思わず苦笑いしてしまう。後ろを見ると、ヘツケラン達もなんだが呆然としていた。それはそうだろう。王国のアダマンタイト級冒険者チーム『蒼の薔薇』のメンバーがこんな様子では、驚きもするというものだ。

そう、彼女達こそ、自分が会いたいと思っていた冒険者たち、『蒼の薔薇』だったのだ。これには正直驚いた。自分はアグルを追う中で彼女らがアグルの現れた近くにて目撃されていると聞いて、なんとなく会ってみたいと思っていたのだが、それが労せず叶ってしまった。迷子になれなかつたら多分会えなかつただろうから、ヘツケランには感謝しなければならぬ。ありがとうヘツケラン。もちろんスフィア合成獣には感謝しない。貴方の存在はノーサンキューである。

そんなことを考えてながら進んでいると、やがて前方に明かりが見えてみた。「…そろそろね。あそこが、『ティガの地』唯一の村らしいわ」

先頭を行くラキユースさんもまた、それを確認できたら嬉しい。自分の気も、引き締まった。

「ようこそおいでくださいました」

—そして、村についた自分たちを待つていたのは、青いローブに身を包んだ初老の男性であった。彼は、この村の村長さんらしい。

「初めまして、我々はアダマンタイト級冒険者の『蒼の薔薇』です。こちらには…『光の巨人』について調べたいことがあります。伝説についての調査をするためここに来ました」

「おお、やはりそうですか。最近はこの『ティガの地』の遺跡を見たいという方が多くて…わかりました、今日はもう遅いので村の者に寢床を手配させましょう。こちらにいらつしやる皆さんは、全員アダマンタイト級冒険者なのですかな？」

「いや、俺たちは違いますよ…俺たち4人は旅行者でして、ちよつと一晩泊めさせてもらえないかなーって…」

「おやそれは珍しい…では、そちらの方々とは別という事に致しましょう。ささ、どうぞ村へ」

ラキユースとヘツケランが村長さんに応対しているが、どうも突然やってきた自分たちも受け入れてくれるあたり、この村は余所者に寛容なのかもしれない。村長さんに導かれ、とりあえず村の中に入っていく。村とは言うが、道はきちんと舗装されているし、夜間なのに明かりはしつかりしている。結構進んだ村なのかも。

しかし、それはそれとして聞き逃せない言葉があったので、それについては聞き出し

ておこう。

「…あの、すみません。『光の巨人』…てなんですか」

「ああ、巨人ですか。この村、と言うよりも『ティガの地』はとても古い時代から受け継がれてきた場所です。我々この村の住人は古き時代の人々の子孫とされていますが…言い伝えによればその古き時代この土地を守ってきた者たちが『光の巨人』なのです。ほら、あちらをご覧ください」

村長さんが、おそらく広場らしき場所を指さす。そこには、10mくらいのヒトガタの像が立っていた。明かりにしつかり照らされたそれは、よく目を凝らしてみると木でできていることがわかる。

「これは遺跡の中にあつた巨人の石像の残骸と…それに加え村に伝わる書物に描かれていた巨人の絵を参考に、作り出したものです。実際にこの巨人がこの地を守っていたのかは我々にもわかりませんが、『光の巨人』とはだいたいこんなものだったのではないかと考えられています」

「へえ…なんだかウルトラマンに似てるのね。アルシエもそう思わない?…アルシエ?」

イミーナが自分に話かけてくるが、自分は驚きのあまり声が出ない。自分の目は、その木製の巨人のレプリカに釘付けとなっていた。

そのフォルムには、見覚えがある。削られた形状の頭部、その額にはクリスタルらしきもの。木製なのでいまいち判別がつかないが、その掘り具合から体の色は実は三色だったのであろうことが伺える。胸元には二筋のラインが刻まれた帯状のものと、特徴的な形のカラータイマーがある。その巨人の名を、自分は知っている。

「…ウルトラマンティガ?」

気がつけば、自分はその名を呟いていた。

「…なるほど、あれはマジのウルトラマンなのか」

自分たちにあてがわれた空き家の中で、対面に座るヘッケランが神妙そうに呟く。隣にいるロバーテイクもイミーナも、真剣な表情だ。

あのティガの像を見た後、自分たちは今晚泊まる場所としてあてがわれた空き家に到着した。空き家とは言うが手入れは行き届いており、村長さん曰く最近増えた遺跡目当ての旅人を泊めるためにすっかり整備しているらしい。『蒼の薔薇』のみんなの分の空き家も別にあつたので、どうもこういう所には本気で力を入れているらしい。変な村だ。すれ違った村の人も、みんな村長さんみたいな青い服着てたし。あの青い服どこかで見たとような気がするのだが、どこで見たのだろうか。

…いけない。今はヘッケランに伝えてあげないと。意識をヘッケラン達に集中する。



「うん。あの巨人の名はウルトラマンティガ。自分の知るティガは超古代の戦士で、古の時代から人々を脅威から守っていた」

「ふむ…その内容ですと、あの村長さんの言っていた話の内容とも合致しますね。この世界にいるウルトラマンは、アルシエのガイアと、まだ見ぬアグル以外にもいた、と言う事なのでしょうか」

「なんだか意外なところで複雑な話になってきたわね…ちなみにアルシエ、その超古代ってどのくらい昔の話なのかしら」

「3000万年前」

「…え」

「3000万年前」

「大事な事なので二度言ったところ、皆唖然としてしまった。まあ、3000万年前なんて想像もつかないだろうし当然かも。自分にも無理だ。」

「…ちなみに、ティガがいた地球での3000万年前について、ティガの存在が判明する前は人類はいないと言われていた」

「そりゃあ…ダメだ、話のスケールがデカすぎてわけがわからん…俺たちの世界でも3000万年前は人なんていねーんじゃねーの…?」

「でもこの『ティガの地』もありますからね…この世界の3000万年前にも人、いたん

でしようかね…」

「生き証人とかゼロでしょ…ていうか、『ティガの地』ってのも何か特別な意味があったりする？」

「どうだろう…自分が知る限り、ウルトラマンティガがいた地球においての『ティガの地』は、ティガを含む三体の巨人の石像と、それを隠す光のピラミッドがあった場所を指していた」

「…似てるなあ」

まじかー…といった様子でのけぞるヘッケラン。他の皆も、驚きを隠せないでいる。かく言う自分も驚いている。まさか超古代の光の巨人についての情報が、こんなところで発掘されるなんて思ってもみなかった。しかも、ラキユースさんも村長さんも『光の巨人』についてどうこう言ってたし、村長さんなんか遺跡に巨人の残骸があるとか言っていた。どう考えても、それはティガと同じ時代を生きた光の巨人の石像だ。つまり、超古代の文明がこの世界にもあるという証拠。改めて、この世界の底知れなさに触れた気がする。

いろいろ思い悩んでいると、復帰に成功したらいいヘッケランが、こんなことを言い出した。

「…それで、どうする？…この村と遺跡について、調べてみるか？」

「調べる、ですか？」

その言葉に、いち早くロバーテイクが反応する。イミーナも自分も、同じ感想を抱いていた。視線がそちらに向いたのを確認してか、ヘッケランが言葉を続ける。

「そうだ。ここまでウルトラマンに関係しそうな話を聞かされたら、怪獣ビジネスやつてる俺たちとしては見過ごせない案件だろ。ワーカーとしても、超古代の遺跡なんて聞かされたら血が騒ぐつてもんだし」

「そうですね…遺跡から他のウルトラマンの事がわかれば、ひよつとしたらアルシエも楽できるかもしれませんね。今も活動中のウルトラマンが他にいれば、の話ですが」

「その可能性は少ないと思うけど…でも私も賛成。探していた『蒼の薔薇』の人たちがなんでここに来たのか気になっていたし、ここに何かがあるのかは調べる必要性がありそう…アルシエは？」

「自分は…」

いつもの『フォーサイト』らしく、自分にも回ってくる。とはいえ、自分の答えはもう決まっていた。

「…自分も、調べてみたい。この世界に、自分以外のウルトラマンがいるなら、その姿を知りたい。この世界のティガの事を、もっと知りたいと思っっている」

「…決まり、だな」

こうして今回の『フォーサイト』の行動方針が決まり、一日が過ぎていく。

—そして、翌日。

「…遺跡の調査に、同行したい?」

「ええ、我々は怪獣の事やウルトラマンの事についていろいろ調べてまして、その筋でこの遺跡にも興味がわいたんですよ。いきなりで申し訳ないのですが「いいですよ」我々にも…つて早っ!」

「そういう事でしたら、構いません。実は遺跡に関しては調査自体は我々村の者たちで進めておりまして、見学みたいな形で開放しております。『蒼の薔薇』の皆さんと同じという形になると思いますが、よろしいですか」

「え、ええ、よろしくお願いします…」

ずいぶん簡単に話が決まった。どうもこの村は余所者に対し開放的な場所らしい。結構珍しい気がする。遺跡も見学させているような口ぶりだったし、まさかとは思うが観光名所にももしかしようというのだろうか?…ますます珍しい。武装はしても結構だというのも、これまた珍しい。

そういうわけで、自分たちは『蒼の薔薇』の人たちと合流し、遺跡の方へと向かう。『蒼の薔薇』の人たちに関しては、驚き半分、自分の顔を見て納得している者半分といった様子だった。…自分の噂や印象を払拭する活動、皆は賛同してくれるだろうか。今回に

限つてはたぶん間違つてはないのだが、それはそれとして。

…それにしても、不思議な村だ。明るくなつたので隅々まで見えるが、村はそれ自体は広いわけではなく、しかししつかり整備は行き届いているように見える。だが活気があるかと言われればそうではなく、妙に生活感を感じられないのはなぜだろう。道行く人々の数はそこまで多くないが、皆青い服を着ている。村長さんに聞いてみれば、なんでもこの村に代々伝わる由緒ある服なのだとか…やはりどこかで見た気がするが、思い出せない…

そんなことを考えていると、自分たちは村の奥にある遺跡らしき場所にたどり着いていた。そこには巨人—ウルトラマンでも入れそうな入口があり、村長さん曰くこの地下に遺跡があるらしい。村長さんに導かれ、自分たちは遺跡の地下へ続く階段を下りて行つた。

そして遺跡の中に入ると、そこは下に遺跡の本体であろう街らしき残骸を一望できる丘のようになっている場所にたどり着いた。ゴ丁寧に丘からは遺跡の外周を取り囲むような道が伸び、落下防止用なのか柵まである。階段といい、これも後付けだと思ふのだが、一体何のためにこんなものを作つたのか…本当に観光地化する予定なのか？ そう考えると今までの光景はその観光地化によるものにも見えてくるが…

…考えてもよくわからないし、とりあえず遺跡の中を見てみる。自分以外の皆も、柵

から乗り出す形で遺跡らしい街の残骸を眺めていた。

「…すごい、これが、『ティガの地』の遺跡…」

「はい、今よりはるかに大昔の時代、我らの祖は『大いなる闇』の襲来に対し、地下にもり街を造つて暮らしたとされています。これらの残骸は、その彼らが暮らしていたとされる街の跡なのです」

「なるほど…なあ村長さん、『大いなる闇』、つてのはなんだ？」

「…さあ、そこまでは。ただ、闇は『光の巨人』でどうにかなるものではなかった、と言われていますし、一方でかつてとある巨人の力で退けられたとも言われております」

「へえ、そんなものが…」

ラキユースさんとヘツケランに対し、村長さんが相対している。『大いなる闇』は自分も物凄く気になるが、どうもわからないらしい。仕方がないので、自分もしっかり街を見つめることにする。

…街そのものはめっちゃめっちゃ広く、たぶん村はこの遺跡の天井部分にあるのだろう。そして街の残骸に交じり、人の残骸らしいものが見える。アレが、『光の巨人』なのだろう。皆はその風景に、それぞれ思うところがあつたよう、息をのんで遺跡を見ている。だが、自分は別な意味で気が気でなかった。

(…似ている。ルルイエに)

この地下に広がる遺跡は、ティガの世界に存在した超古代遺跡ルレイエ、その内部の巨人たちが眠っていた場所に酷似していた。超古代遺跡ルレイエには、光の巨人と超古代文明の残骸が残されていたほかに、封印された闇の巨人達と、超古代の闇そのものが眠っていた。ではここには、何が眠っているのだろう。それを解明しない事には、最悪の状況には対処しきれない。超古代の闇は、ウルトラマン一人でどうこうできるものではないはずだから。

そういうことを考えていたからだろう、自分は声を掛けられるまで、村長さんの接近に気付かなかった。

「…巨人に、興味がおありですか？」

「え…あ、はい」

「なるほど、熱心に見られていましたから、そうなのではと思っていました」

どうやら、村長さんは自分が動かなかったのを巨人を凝視していたからだと思っただしい。まあ、間違いではない。巨人を見ていたのも、興味はあるのも事実だから。

どうも巨人に興味がある自分に気分を良くしたのか、村長さんは言葉を続ける。

「ここにいる巨人像は、みなこの地で戦い散った光の巨人と言われています。ほとんどは砕けておりますが…現在、この下に作った特別な空間で、まだ綺麗な巨人の残骸をかき集め、組み合わせるによりできる新たな巨人像を村の者総出で作っております」

「…それは、なぜ？」

「…我らの村に必要だから、といった理由ですな。完全に近い巨人を、この目で見てみたいのです…：そういえば、『ティガの地』の言い伝えによれば、巨人像にはいずれ光が宿り、蘇ると言われております。我らこの村の者はその復活の時までこの地を守る使命があつたのだ、とも…：もしかしたら、我らの石像に光が宿り、蘇る日があるやもしれません。そうなれば、この世を護る新たなる光の巨人の伝説が、始まることで「それは違う」…ふむ？」

…気がつけば、自分は村長さんの言葉を否定していた。村長さんは驚いているが、構わない。自分はそのまま、村長さんを否定する言葉をつづけた。

「…光の巨人、ウルトラマンになるといふのは、そんなに簡単な事じゃない。光があれば巨人が蘇る、なんてことはあり得ない」

「…それは、どうしてですか」

「ウルトラマンに必要なのは、心。光だけの、心の宿っていない巨人は偽りでしかない。闇に堕ちた心に突き動かされる巨人は、闇でしかない。巨人の復活には、巨人に対する心がある。だから、そんな簡単には、ことは進まない」

「…なるほど、そうですか」

村長さんは少しだけ声の調子を落として答える。願望を真正面から否定する自分の



言葉で気分を悪くしたのかもしれない。自分も、ここまで言う必要はなかったのかもしれない。

だが、自分にとって村長さんの言葉はそれだけ不穏だったのだ。人造的な巨人のレプリカなど、偽りの巨人、闇の巨人の再現そのものではないか。村長さんの言うレプリカはひよつとしたら復活する心配なんてない大したことのない像なのかもしれないが、もし蘇るようなことがあれば、ほかのウルトラマンたちがいた世界でそうだったように、この世界に牙をむくことだつてあり得るはずだ。それは避けなければならぬ。自分が村長さんを否定したのは、無意識的にそういう事を思い出していたからであろう。巨人が光で蘇る、と簡単に言ってくれたのが引つ掛かったというのもあるが。

村長さんはしばらく自分の顔をじつと見つめた後、遺跡を見る自分たちの後ろへと回る。

「…では皆さま。せつかくですので、この残骸となった巨人像を再現した新たな像を、お見せしたいと思えます。こちらについてきてください」

そう自分たちに告げると、彼は後ろにあつた階段で地下に降りていく。ヘッケラン達もそれについていく。…自分も、巨人像がどんなものなのか、この目で見ておかなくてはならない。そう考え、皆に続こうとする。

その時、自分を見つめる瞳と目が合う。ラキューズさんは、こちらをじつと見つめた

まま動こうとしない。距離も近いし、先程の話を聞いていたのだろうか？

ラキユースさんはしばらく自分の事を無言で見つめ―自分の手を取ると、村長さんについて行こうとするヘツケランの背中に語り掛けた。

「ねえ、ヘツケランさん…ちよつと、アルシエさんを、お借りしてもよろしいかしら？」  
―そうして、自分たちは一度遺跡を出ることになった。ラキユースさんの表情は真剣極まりなく、必死さが手に取るように理解できた。その様子にヘツケランも自分も断ることはできず、自分はラキユースさんに連れ出されることになったのだ。

連れ出されたのは、村の外。入り口近くの平原で、人はいない。村が広くないので遺跡からここまで時間はかからなかったが、どうしてここまで連れて来られたんだろう？  
疑問に思っていると、ラキユースさんは自分に語り掛けてきた。

「…ごめんなさい。先ほどのあなたと村長さんの話を聞いていると、いてもたってもいられなくなつて…人払いのために、ここまで連れてきたこと、まずはお詫びするわ」

「い、いえ、別に…でも、いいんですか？」

「？何が？」

「あの、イビルアイさん、そこにいますけど…」

「…え!？」

ラキユースさんが驚いた様子で、自分の指した方向を見る。すると、物陰に隠れてい

たイビルアイさんが、ばつが悪い様子で物陰から出てきた。この人だけ、こっそりついてきたようだが、特に隠れる様子もなかったのですぐわかった。しかし、一体なんですって来たんだらう。ラキユースさんは自分を借りる際、一対一で話したい、なんて言っていた気がするが。

考え事をしている間に、ラキユースさんはイビルアイさんに詰問している。

「…イビルアイ、どうしてついてきたのかしら。私は彼女と、一対一で話したかったのだけど」

「私としてもそれだけならかまわないさ…だが、例の件でお前の事はリグリットからよく見ておけと言われている。今日のお前なんてそのアルシエとかいう奴にもバレる程度の私の尾行に気づかないほどだったらう」

「う…」

「…それに、私も確かめたいことがある」

「?それはどういう…」

ラキユースさんの問いかけに応えることなく、イビルアイさんは自分との距離を詰める。息遣いの感じられそうな、でも相手は仮面なのでわからない位の距離まで詰めた後、彼女は自分の顔を見つめた。

そして、「やはりな」と言って彼女は自分を見つめ続ける。なにやら、得心が言ったよ

うな雰囲気なのだが…

「…あの、自分に、なにか…」

「…今、はつきりした。お前からはラキユースと同じ気配がする。モモンさまからは感じられなかった、あの不思議な気配だ」

「…え」

「そして、その気配を薄くだが感じた場所がある…お前の気配は、あの巨人の残骸にも似ている」

「…な」

その言葉を聞いて、一瞬間の中が、真つ白になる。今なんて言った。自分と、あの遺跡の巨人たちの気配が、同じに見えたのか。あの巨人たちは、光の巨人。それと同じ気配を感じたという事は…彼女は、自分の中のウルトラマンガイアを、感じている。

…さて、ならば、先程の言葉はどういう意味だ？ラキユースさんからも同じ気配？なら、彼女は？

自分が思考の渦に囚われている中、しばらく自分の顔を見つめていたイビルアイさんは、やがて気が済んだのか、「まあいい」と言つて後ろに下がった。

「お前が何者か、なんて言いたくないなら言わなくていい。私が言えた義理ではないし、ラキユースの用が済んでないのに答えにくそうな事を聞くのが間違いだ。悪かったな、

忘れてくれ」

「は、はあ……」

「……ラキユースも、すまなかった。私はもう退散しようか？」

「……いえ、ここにいても、構わないわ……アルシエさん」

「はい……あ、自分の事は、アルシエで構いませんよ」

「……そう。なら、アルシエ。貴方に、見てもらいたいものがあるの」

ラキユースさんはそう言うのと、右の籠手を外す。よく見ると妙に大きい籠手の下には、黒い帯でぐるぐる巻きにされた何かが腕に装着されていた。ラキユースさんはその帯を外し、隠されていたものを白日の下にさらす。

そして、現れた物体は、自分を驚愕させるに十分なシロモノだった。驚きで言葉も出ない自分に対し、ラキユースさんは腕に装着された物体を掲げ、告白する。

「これは、私を光に変えるもの。……私は、ウルトラマンよ」

彼女の言葉と共に、腕に装着された物体――『アグレイター』の結晶体に、青い光が現れたような気がした。

## 新たなる巨人・破 前編

「―私は、ウルトラマンよ」

その告白は、自分の心を驚愕で染め上げる。言葉の主―ラキユースさんの腕に装着された『アグレイター』とあわせ、その言葉は自分に大きな衝撃を与えた。

…改めて、『アグレイター』を観察する。閉じた翼が、『ライフゲージ』を模したであろう結晶体を納めた部分から伸びている。そして青く輝く結晶体からは、アグルの力を感ずる…ような、気がする。なにはともあれ、イビルアイさんの先ほどの言葉と合わせても、こう考えるのが妥当だろう。彼女こそ、ウルトラマンアグルだと。

まさか、こんな形で会えるなんて思ってもみなかった。驚きに満ちたまま、しばらく『アグレイター』を凝視していると、ラキユースさんはそれを手で隠す。顔を自分からそらしたまま、彼女は語り掛けてくる。

「…その様子だと、これがなんなのか、知っているのね」

「…はい。それは、『アグレイター』。ウルトラマンアグルに変身するための、変身アイテム」

「…アグル？ウルトラマンには、名前があるの？」

「はい、帝国に現れる赤いウルトラマンは、ガイア：それと対になる青い巨人、ラキユースさんの変身するウルトラマンは、アグル、と言われています」

「…そう。名前なんて、あつたのね」

ラキユースさんは、そういつて顔を伏せる。表情と声色からは、自嘲するような様子が感じ取れた。どうしたんだろう？ 後ろのイビルアイさんを見て、仮面で表情は読めないがあまりいい雰囲気には見えない：イビルアイさんが驚いていないあたり、彼女はラキユースさんがアグルだということを知っていたのだろうか。ひよつとしたら、今の自分と『フォーサイト』の皆と同様に、彼女の仲間たちはアグルの正体を知っているかもしれない。

そういうことを考えていると、ラキユースさんはやつと顔を上げ、こちらを見つめてきた。その表情は、アダマンタイト冒険者のリーダーと呼ぶには、あまりにも弱弱しいものだった。その表情のまま、彼女は話す。

「あなたに、お願いがある。…この力を、ウルトラマンの力を…消す方法は、ないの？」

「…え？」

その内容は、あまりにも予想から外れたものだった。固まる自分にすぎるように、ラキユースさんは続ける。

「消すのがダメなら、誰かに、渡すとか！ 何か、私の中からウルトラマンを消す方法はな

いの!? ねえー!」

「ちよ、ちよつと…」

「お願い! 私は、この力を「ラクキユース!」…! イビルアイ…?」

「…落ち着け、ラクキユース」

取り乱す彼女を、イビルアイさんがいさめる。イビルアイさんに肩を引つ張られ、なんとかラクキユースさんは落ち着きを取り戻したのか、俯きつつ「…ごめんなさい」と呟いた。

「…私からも詫びを入れさせてくれ。普段は良いリーダーなんだが、この問題ばかりはどうしようもないみたいでな…今のラクキユースには、余裕がない。ここに来たのも、ラクキユースのために力をどうにかする方法を探るためなんだが、それが必要なくらいラクキユースは苦しんでいる。だから、許してやってくれ」

「い、いえ、そんな…」

「…本当にごめんなさい、アルシエ。…無礼を承知で、もう一度聞いわ。この力を、消すとか、他人に渡すとか、そういう方法は、ないのかしら」

「…それは」

思わぬ問いかけに、言い淀んでしまう。まさか、彼女の依頼がそのような内容だったとは。どうも彼女は、相当追い詰められてしまっているようだし、是非はともかく考え



てるべき問題、なのだろう。

…だが、ウルトラマンの力を消し去る方法とは何なのだろうか。ウルトラマンの力は、もし変身者がただの人である場合、自らの力で放棄することが出来るはず。彼女はウルトラマンの力を拒絶しているみたいだし、できないはずはないと思うのだが…この世界のアグルの力は、捨てようと思っても捨てられないとか、そういう力になっているのだろうか。

なら、譲渡するのはどうだろう。かつて藤宮博也は、高山我夢に自らアグルの力を与え、その結果ガイアはV2になったのだ。自分はすでにV2のガイアだが、自分にアグルの力をさらに与えることはできるのだろうか。そう思い、懐のエスプレンダーに、服越しに触れる。…ダメだ。何か明確な兆しを感じたわけではないが、エスプレンダーの中のガイアの光は、アグルの力を加えることを、拒否しているように思える。不可能だと拒絶しているのではなく、嫌だと拒否する意思を、確かに感じる。どうやら、そういう事らしい。

…正直に、伝えるべきだろう。自分を待つラキユースさんに、意識を向ける。

「…ごめんさい。多分、アグルの力はすでにあなたを選んでしまっています。だから、アグルの力をあなたから捨てるといふ事は、今のあなたにはできない、と思う…」

「…そんな…じゃあ、渡す方は？」

「…それも、無理だと思えます。アグルに選ばれるのは、誰でもいいってわけじゃないはず。アグルは、あなただからこそ選んだ…だから「違う!」…え?」

「私だから、なんてことはありえない! 私は、ウルトラマンに、選ばれる資格なんて、ない…!」

ラクユースさんはそういうと、うつむき、座り込んでしまう。その痛々しい姿に、仲間であるイビルアイさんも顔を伏せてしまった。彼女の抱えるものは、それだけ彼女にとって大きいのだろうか。

…知らなくてはならない。ラクユースさんが、何に苦しんでいるのか。何が、彼女を追い詰めてしまったのか。ウルトラマンであるとか、そういうことは最早関係ないだろう。自分の信じるもののため、彼女を知るのだ。

決意を固め、ラクユースさんに近づくと、そと彼女の肩を抱くと、彼女は顔を自分の方に向けてきた。…声もなく、彼女は泣いていた。

「…ラクユースさん。自分になんで泣いているのか、教えてください。ひよつとしたら、それを知れば自分も力になれるかもしれません」

「…いいの? 私は、ウルトラマンの力を、捨てようと…」

「構いません。あなたを苦しめるような力なんて、あなたが持つていてもしょうがないです。ウルトラマンの力を捨てたいなら、いくらでも捨てればいいと思います」

「……！」

「教えてください。あなたの身に、何があったのか」

…ラキュースさんは、一瞬自分の言葉にひどく驚いた多様な顔を見ると、「…ありがとう」と告げた。涙をぬぐうと、立ち上がる。少しだけ、彼女の顔は良い表情になった。

「…本当にありがとう。ウルトラマンの力を捨てるだなんて言った、私の願いを聞いてくれて。…捨てていいだなんて、言ってくれて」

「その程度の事なら、構いません。あなたがウルトラマンを無理にやる必要もないですし」

「…そう。ウルトラマンの力を捨てるだなんて言ったら、殴られることも覚悟したけど

…あなたは、優しいのね」

「……？」

「…わかったわ。私の事を、教えてあげる」

そう言つて、ラキュースさんは再び涙をぬぐう。…今は呼吸を整えている彼女の言葉に、どこことなく違和感を感じるが、よくわからない。なにか、重要な乖離があるような気がするのだが…何だ？

やがて呼吸を整え終わった彼女は、顔を引き締め、自分に語り始めた。

「…怖いのだよ」

「…何が、ですか?」

「ウルトラマンが」

…は?

「私は、ウルトラマンである事が、怖い。ウルトラマンになる事が、怖い。ウルトラマンに変身して、絶大な力を得るあの瞬間が…自分が、まったく違う存在に変わったって実感するその瞬間が、たまたまなく怖い…!!」

「…」

「ウルトラマンに変身するたびに、私が私でなくなるような、そんな底知れない何かを感じてしまう…だから、私は自分からウルトラマンに変身することが、できなかつた。できなかつたから、これまで何度も、皆を危機に…この間の、ヤルダバオトとの戦いの時だつて、私がウルトラマンになれさえすれば、犠牲はなかつたかもしれないのに! ガーランもティアも、死なずに済んだはずなのに!」

「…ラキュース!二人の事は、あの場にいた私にだつて責がある。お前だけの問題じゃない!」

「…ありがとう、イビルアイ。…でも、私が怯えていることは事実。あの感触から、逃げたいっていつも思つて…そんな様だから変身しても、まともに戦えない。この間の、化

け物を食い止めようとした時だつて：周りが見えなくて。だから、あなた達にもきつと迷惑をかけた：だから、私には、ウルトラマンの力なんて、ふさわしくないの」

「…それは、どういう」

…彼女の言葉に、やつと声を入れることが出来た。声を掛けられたラキユースさんは、何故か目を丸くしていた。イビルアイさんも、少し驚いている、ような…

「…驚いた。あなたは、まだ失望しないのね。こんな私を、相手にしているのに」

「…あなたは苦しんでいる。理由が何であれ、失望なんてしません」

「まさか…ウルトラマンが神だつて、救世主だつて…それをよく知っているのは、あなたなのでしょう？」

「…何を、言っているんですか？」

意味が分からない。神？救世主？ウルトラマンが？何を言ってる？確かに神に近いものに見えるかもしれないが、ウルトラマンは、神様になんてなれっこないのに。

だが、ラキユースさんはいたつて本気なようで、自分の反応に驚いた顔をしつつもそのまま続けた。

「ウルトラマンは…私じゃなくて、赤い方のウルトラマン…ガイアは、まさに救世主、四大神の使いか、既存の神とは異なる、新たな神…私だけじゃない、王国ではそういう風に見られているわ」

「…そんな、バカな」

「バカだ、だなんて…ウルトラマンは、英雄の力も何もかも届かない巨大な化け物を、いともたやすく討伐し、人々を救っている、まさに英雄、救世主と呼ぶべき巨人…そういう存在でしょ？」

「…！」

「だからこそ、私はふさわしくないの。ウルトラマンになれるからと言って、私はガイアのように、人々を救えない。それどころか、自分に与えられた力にすら、怯えている…ガイアは、私のように自分に怯えることなく、化け物から人々を守っているというのに」

「それは…」

「もし、ガイアに変身する人がいるのなら…その人は、きっと私よりはるかに賢く強い、救世主と呼ばれるにふさわしい存在。私なんかじゃ、ウルトラマンとして並び立つことは許されないのよ」

そう言つて、ラキユースさんは再び顔を伏せてしまった。イビルアイさんも、あまり良い雰囲気には見えない。ラキユースさんがそれだけ本気でウルトラマンの事をそう思っていることが、彼女らの態度からうかがえる。

…合点がいった。そこが、違いなのだ。彼女たちにとって、ウルトラマンは神の使いとか、とても神聖な存在みたいに見られていたのだ。彼女達だけではない。それはおそ

らく、王国の人、ひよっとしたら帝国やほかの国の人もそうなのだ。ウルトラマンガイアは、怪獣におびえる彼らにとつて本当の救いだったのだ。純粋なこの世界の住人ではない自分や、自分をよく知る『フォーサイト』の皆とは、まるで違う視点。想像もしなかった。ウルトラマンが、そういう風に見られていたなんて。

…それは違うと、言うのは簡単だろう。だが、違うといつたところで、信じてもらえないだろう。少し考えて…その考えを捨てる。今、悩んだつてしようがない。

「—ラキユースさんは、すぐに弱音を吐く人ですか？」

「…え？」

「答えてください」

思つたより、自分の言葉はすらすらと出た。突然の問いかけにラキユースさんは困惑するも、「…そんなわけないじゃない」とぼつが悪そうに答えた。まあ、アダマンタイト級冒険者だからそう答えてくれるだろうとは思っていた。しかしこの流れでこの質問は迂闊だったか？ いや、反省は後。

思つた通りの回答はもらえたので、そのまま続ける。

「…ウルトラマンは、苦しいとかつらいとか、疲れてもうダメだとか、そんなことは言いません」

「…それは「あなたと、同じで」…何を言っているの？」

困惑しているようだが、構わない。自分とウルトラマンについてのとらえ方が異なる相手の会話はどうすればいいのかよくわからない、だが、今は続ける。

「最初に断っておきます。ウルトラマンは神様じゃない、あなたが、今は続ける。」

「それは…でも、私とガイアは、きつと違う「違います！」…アルシエ」

「違いはないんです、ラキユースさん！ガイアも、戦うのは怖い、皆を傷つけそうになるのが怖い、死ぬのが怖い…自分が、受け入れられないんじゃないかって、心のどこかで、怯えているんです」

「…アルシエ、あなたは…」

「怖い思いをしているのは、あなただけじゃないんです。だからちよつとくらい怖いものがあつたつて、ウルトラマン失格になんてなりません。だってそれは、あなたに心があるつて、証なのだから」

「心…」

「怖いなら、乗り越えられるように努力すればいい。それがいつまでも続くことになつたとしても…あなたには、まだ未来があります。だから、ウルトラマンになる資格がないだなんて、言わないでください…そんなことはないつて、自分が、言いますから。許します、から」

「…そう、ありがとう」



ラキユースさんは、俯きつつ、答えてくれた。…これで、良かったのだろうか。彼女は、ウルトラマンになるのが怖いと言っていた。それにどう答えてあげればよかったのか、自分にはわからなかった。口ぶりからするウルトラマンに変身する事への生理的嫌悪のようだが、それに対する正しい答えは、自分には思いつかない。盲点だったのだ。そんな自分の、つたない答えが、届いていればいいのだけれど。

…不意に、自分の手が、懐に伸びた。

「自分は…」

「…まだ、なにかあるの」

「…自分、は…」

あなたと同じ、ウルトラマンだから。ガイアだから…その言葉は、何故か出なかった。どうして。言えばいい。そうすれば、彼女の救いになれるかもしれないのに。自分は、彼女と同じ、ウルトラマンなのに。…本当に？

「…意外な組み合わせだな」

しばらくの沈黙を、破ったのは、意外な声だった。おもわず、うつむきつつあつた顔を上げる。ラキユースさんもイビルアイさんも、驚いた様子で顔を声の主に向けた。

声の主は咳払いすると、毅然とした様子で続ける。

「失礼。村の前で話をされては、なかなか村に入る機会をうかがえなくてね。声を

かけさせてもらった。…やはり、私は空気を読めていなかったのかな？」

そこに立っていたのは、一度見たことのある漆黒の鎧姿。傍らには、美しい従者が立っている。背負われている二本の剣も、いつか見た輝きをそのまま放っていた。

—漆黒の英雄モモンさんと、その従者ナーベさんまでもが、この村に現れたのだった。

「それでは、しばしここでお待ちください」

自分たちを連れてきた村長はそういうと、部屋を出ていく。部屋にはアルシエ、ラキユース、イビルアイを除いた『フォーサイト』と『蒼の薔薇』の面々が残されていた。

この部屋に備え付けられた椅子に座ると、ヘッケランは部屋の天井—所々穴が開いている—を見つめ呟いた。

「…気になる」

「…おいおい、乙女の秘密の話し合いがそんなに気になるってか？詮索するのはマナー違反だぞ？」

「…いや、そういうのじゃないけどな」

ガガーランからの返答に、天井を見たまま返すヘッケラン。直後そつちも気になるけどよ、と心の中でつぶやくのだが。そんな彼の心境を知ってか知らずか、ガガーランは言葉をつなげる。

「…ラキユースについてなんだが、俺からも礼を言わせてくれ。あいつは、とある理由で最近思いつめることが多くてな…その解決のためいろいろなところを巡っているんだが、その中にアルシエってやつに話を聞くつてのがあってな…どうもさつきあの妙な村長と彼女の会話に何か思う所があったらしい。それが火をつけたんだらうな…あいつも悪気はない、許してやってくれないか」

「…それは構わねえよ。俺もアルシエも、あの嬢ちゃんが必死だつてのはよくわかつたし…因みに聞かせてもらうが、相談つてのはウルトラマンか、怪獣関連か？前も、漆黒の英雄モモンが似たような用事でやってきたことがあったんだが」

「ああ、そんなところさ…詳しい内容に関しては、ラキユースの口からじゃないと言えないけどね」

「そうか…そりやそうだ」

そこで会話を切り、ヘッケランはガガーランの方に向けていた視線を再び天井に戻す。どうも、自分たちの仲間である最年少の少女は、ワーカーも怪獣ビジネスも関係ない所で有名らしい。いいことなのか悪いことなのかは判別がつけにくいだが、アルシエはウルトラマンもやっている事を考えると、これ以上苦勞は掛けたくない。何とか負担軽減の策を考えてやらないとな、とヘッケランはひそかに決意した。

そこで我に返る。いやいやそういう事を考えていたんじゃない。もつと現実的な事

考えていたんだった。そう言い聞かせ、意識をこれまでの事に集中する。

ヘッケランが想起するのは、村の事。やはりというか、とどころどころ不自然なように見えるのはなぜだ。服とか村の様式に関しては、3000万年前からの文化なんです、で説明がつくかもしれないが、ここに来るまでに感じた生活感のなさ、余所者への手際の良さ。これらについて、ヘッケランはあまり良い考えが浮かばなかった。

そんなことを考えていると、ヘッケランはこの部屋に妙な違和感を感じ始める。

(…甘い、匂い?)

今まで感じなかった、この匂いは何なのか? 妙な胸騒ぎを感じ、彼は他の面々に声を掛けようとして。

— 幸せは、急に訪れた。

— 異変は、急に訪れた。

「…!?」

自分たちの前に立っていたモモンさんが、突然大きくよろめいた。自分がどう声を掛けようかと迷っていた、その瞬間に。思わず駆け寄る。

「モモンさん…? モモンさん、しっかり!」

「…ああ、そうか」

「!モモンさん、だいじょうぶ…?」

モモンさんが立ち上がったのを見て、安堵する。だが、それも一瞬。彼は、あらぬ方向を向いている。そこには何も無い。なのに、吸い寄せられるように歩いて行った。

「そういえば、今日はギルド全員が集まったんですね。うれしいなあ、皆戻ってきてくれて。これからも俺たちは、ずっと一緒ですね!」

「モモンさん、何を言っているんですか…!すっかりしてください!そこには誰も…!」  
「今日は何をしましょうか!そうだ、実は俺…うぐつ!」

「モモンさん!」

歩いていた彼が、突然バランスを崩し、倒れこむ。とつさに支えるが、やはり巨体だからか、重い。何とか声をかけ続ける。

「モモンさん、大丈夫ですか!」

「…今のは…感情抑制が、私を元に…アルシエ君か、私は、なんとかか…」  
「なんとかかって…そうだ、ナーベさん!」

とつさに、彼の従者の名を呼ぶ。忘れていた。モモンさんには従者のナーベさんがいる。今もそこに…待て。今そこにいたはずの彼女が、何故モモンさんに一番に近づかない?  
い?

嫌な予感を覚えつつ、彼女の方を見る。…彼女もまた、あらぬ方向を見ていた。

「式式炎雷様、アインズ様、そ、そんなに私の事を…！あ。ありがとうございます…！え  
！私が、一番!?そ、そんな…えへへ」

「な、ナーベ、さん…?」

「…！ナーベ！おいナーベ、どうした!!」

うわごとのように何かをぶつぶつ呟くナーベさんに、モモンさんが血相を変えた様子  
で飛びつく。まずい。何かはわからないが、非常にまずいことが起きている。そうい  
え、ラキユースさんとイビルアイさんは？彼女たちがいた方向に、首を向ける。

「も、ももんしやまあ…わたしが、す、す…え、えへへへへ」

「イビルアイ！しっかりして！そこには誰もいない！」

「あ、はひい…ちゅ、ちゅー!?そ、そんな！でも、ももんしやまがいっていうならあ…  
！」

「イビルアイ…！」

そこには、虚空に手を伸ばすイビルアイさんと、それを止めるラキユースさんがいる。  
ラキユースさんは無事なようだが、仮面を外しているイビルアイさんの顔からは、ナー  
ベさん同様正気ではないことがうかがえる。どうか、何故自分とラキユースさんには  
何も無いのか。二人の共通点…これは、そういうことなのか？

混沌とする場、そこに新たな動きがある。

「やはり引つかかったな」

村の方から、青い服の集団が現れる。数は十。服装から見ても、おそらくこの村の人たちだ。彼らは各々鎖のような物をもって、こちらを見ている。いったい、なんで彼らが？自分の中に疑念が渦巻く中、彼らのリーダーらしき中年くらいの村人が、こちらの方を指さした。

「連中をとらえるぞ」

「しかし、何やら様子のおかしな者たちがいるようですが…」

「どうせギジエラの花粉がおかしな作用を起こしたんだろう。アレの見せるものの中身までは知った事ではないからな。始めるぞ」

…ギジエラ！そうか、そういうことか！なら彼らの正体は…！

事実にはたどり着けたが、この状況は非常にまずい。現状、ナーベさんとイビルアイさんは動けないし、彼らはどれほどの腕を持つのかわからない。まずは、モモンさんとラキユースさんに声を…！

だが自分が声をかけるよりも早く、村人の一団から二人がこちらに近づく。彼らが手に持った鎖を持ち上げ―次の瞬間、二人の体が消え去った。

「…たが…」

リーダーらしき男の、間抜けな声が響く。自分たちに近づこうとしていた連中がいた

場所には、大剣を振り抜いた黒い鬼がいた。…モモンさんは、大剣を一団に向ける。跳ね上げられた村人が地面に激突し、動かなくなると同時に、その口が開かれる。

「……ここまでくれば、猿でもわかるな。お前たちが、犯人だな？」

その声は、地獄の底から聞こえたかのような、低い音だった。冷静そうだが怒りのこもった声に、村人たちは一様に短い悲鳴を上げ、一步下がる。リーダーと思われる男は、恐れを隠さず、喚き散らす。

「な、なぜ！お前たちは、ここで撒いたギジエラの花粉で、夢の中にいるはず…!？」

「…ギジエラか。なるほど。その花粉とやらについては、お前に聞くとしよう。他は…逃がす理由も、ないか」

モモンさんはあくまで冷静な声で、剣を構える。村人たちは完全に取り乱しているが、同じく取り乱しているように見える、リーダーらしき村人の喚き散らすような号令が響いた。

「な、何をしている！奴をとらえろ!!」

その声と共に、村人たちはいつせいに鎖をモモンさんに投げつける。鎖は独りで動き、多方向からモモンさんを追い詰める。…だが、相手が悪すぎた。

「…ふん」

「な！消え「遅い」た…？ぎやつ!？」



「はや……はっ！」

モモンさんの剣が、村人たちを蹂躪する。モモンさんは、アダマンタイト級冒険者であり、英雄の領域に立っていると聞く。そんな人物相手に、ただの村人——語弊があるがほとんど同義——が、敵うわけもない。英雄たるモモンさんの繰り出す剣技によつて、瞬く間に村人たちは吹き飛ばされていった。

気がつけば、立っていたのは、リーダーの男ただ一人。

「ひ、ひいいいいいっ!!」

喚き散らし、一目散に逃げだす男。モモンさんはそれを追撃しようとして——横から飛び出した鎖に、先を越された。

「……なるほど。捕獲の依頼に便利そうね、これ」

声の主——ラクユースさんは、そういつて捕獲された男を引っ張り上げた。

「……それで、どうする？」

村から離れた森の木にしばらくつけた男を囲んで、モモンさんがつぶやく。男を囲むのは、自分、ラクユースさん、モモンさんだ。ナーベさんとイビルアイさんは、ここまで何とか連れて来たものの、まだ夢の中だ。

自分とラクユースさんに声をかけたモモンさんは、口に布をかまされ喋れない男の顔をつかみ上げる。やはり、従者をあんな目にあわされて怒り心頭なのだろう。冷静な声

が出せるだけすごいと思う。いや、怒るとクールダウンするタイプなのか？何はともあれ、まずは目の前の男だ。

「この男に、ギジエラとやらについて吐かせて、ナーベ：彼女たちを元に戻す方法を「それは、難しいと思います」：何？」

「彼は、ギジエラの花粉と言っていました。あの花粉に特效薬があるなんて、そうは思えない……」

「……なるほど。君のタレントか？だが、彼女たちはどうする？」

「……それについては、自分にまかせてください。まず、試したいことがあります」

そういつて、自分は喚く男の後頭部に近づく。男は首を振って必死に抵抗するが、そこはラクユースさんに抑えてもらい、自分は後頭部に手を掛けた。

……彼が、自分の知るある親子と同じ存在なら、ここにアレがあるはず。そう信じ、後頭部をまさぐる。果たして、そこにはアレの入り口となるであろう、引っ掛かりのようなものがあった。それを思いっきり引っ張り―そこを起点に、男の後頭部が、観音開きのように開いた。

「な……!?!」「これは……?！」

ラクユースさんとモモンさんが驚いているが、構わず自分は、脳のような箇所の下にある、筒状の物体を見つめる。そしてそれを引き抜くと、喚いていた男は、完全に沈黙

した。

引き抜いた筒を、まじまじと見つめる。赤っぽい液体のようなものが、筒には充填されていた。間違いない、これは――

「ギジエラエキス」

「…ギジエラ？ さっきのギジエラと、関係あるの？」

「はい。…その説明は、後でします。まず彼女たちを助けないと」

「…わかった。私は、何をすればいいかな？」

「モモンさんは、二人を抱えて立っててください。ギジエラには後遺症があるので、一応モモンさんにもかけておきます」

「了解した」

モモンさんはそういうと、踊るイビルアイさんとナーベさんを抱えて立つ。二人を止めてくれた英雄に対し、自分は得意とする魔法を使用した。

「…〈ガイアヒーリング〉」

ウルトラマンガイアの持つ技と、同じ名前の魔法。効果も光も変わらない魔法が、モモンさんを包み込んだ。

「…ありがとうございます。アルシエーさん」

「あ、どうも…自分の事は、呼び捨てで構いませんよ」

「謙遜することはないと思う…あー！なんてもの見せられてたんだ私はー！」

「忘れた方が賢明よ、イビルアイ…モモンさん、あなたの方は大丈夫？」

「ああ、問題ない…いや、むしろ頭の中の違和感が取れた気がするな。アルシエ君には、改めて感謝しなければな」

イビルアイさんとナーベさんは、何とか回復したようだ。モモンさんも、やはりギジェラの花粉の後遺症があつたのか、先程よりも声が明るいように感じる。正直上手いくとは思えなかつたが、ここまで効果があつて本当によかつた。

先ほど使用した魔法、〈ガイアヒーリング〉は自分オリジナルの魔法である。ワーカーをやつていく中で、光の国のウルトラマンが人間体のまま超能力を行使できるように、自分もワーカーの仕事でウルトラマンの力を運用できないか、と考え練習した結果、これが使えるようになった。効果は、ガイアでの使用時同様に鎮静作用。また、かつてツケラ戦で彼を浄化した実績からか、状態異常の回復作用も持っている。ガイアの力を使うので、燃費もいいのが特徴だ。

このことを皆にウルトラマン関連の事を除きつつ話し、話題は村人達のことに移り変わった。口火を切つたのは、モモンさんだ。

「ではアルシエ君…今回君のタレントで分かつた事、襲つてきた連中と連中の使うギジェラの花粉とかいう物質について教えてくれ」

「?タレントって?」

「…実は、自分にはウルトラマンや怪獣についての知識を得ることが出来るタレントが  
ありまして。それを使って、自分は怪獣の事を教えたりしてるんです」

「…なるほど。変わったタレントもあるんだな…」

自分のタレントを知らないラキユースさんとイビルアイさんだが、ひとまずは納得し  
てくれたらしい。…正直、タレントなんて嘘をつくのはやりたくないのだが、今はそん  
なことを言っている場合ではない。

「続けます。まず、村の人達ですが…村長さんは、自分たちは大昔この地に住んでいた  
人々の末裔、みたいなことを言っていました、それは違うと思います」

「それは…確かに、普通の人には見えないけど」

「彼らは、おそらくここに住んでいた古代の人々の生き残りです。光の巨人がいた時代  
から、生き残っていた人々、それが彼らです」

「なんだと…!?!」

「…古代?」

イビルアイさんが驚愕する、と同時に、怪訝そうな声が、モモンさんから聞こえる。そ  
うか、彼らにはまだ話していない。とりあえず自分たちが『テイガの地』で見聞きした  
ことを伝えると、彼らも驚きに包まれたようだった。

「そうか…我々も、『ティガの地』と『光の巨人』に興味がわいてここに来たのだが、それが大昔の話で、しかも生き残りがいる、というのはな…先ほどの男は、どうも生物らしからぬ体の構造だと思ったのだが、そこにも何か秘密があるのか？」

「それは、古代人が行っただと思われサイボーグ手術の成果だと思われます。…サイボーグ、と言うのは自分にもよくわかりませんが、彼らはそうやって不老の体を手に入れて今まで過ごしてきたんです。もつと早く、気がつけばよかつたんですが…」

そういつて、自分は木に縛り付けられた村人、そしてモモンさんの一撃で四散し、森まで吹き飛ばされてきた村人たちの残骸を見る。それらすべてが機械の体をさらしているほか、特徴的な青い服をまとっている。その服を、今の自分はすっかり思い出せる。

—超古代人ヌーク、テラ。彼らは3000万年前からティガの時代まで生き残っていた超古代人の数少ない生き残りの親子で、自身の体をサイボーグ化して生き残りに成功していた。二人は特徴的な青い服を身にまとっており、それがこの村の住人全員が身に着けている服とほぼ同じ意匠の物だった。今まで思い出せなかったが、ヒントはあったというわけだ。

思い出せなかったことに少し落ち込んでいると、頭に固いなにかが置かれる。見上げてみると、そこにはモモンさんの鎧に包まれた手が置かれていた。…撫でられているのか、自分。

「……!」「な……!」

「…過ぎたことを悔やんでもしようがないだろう、アルシエ君。思い出せるだけでも、十分だ。気に病むことはない…どうした、ナーベ。それとイビルアイ」

「…なんでもありません」「い、いえ!羨ましいとか、別に、その…!」

「イビルアイ、あなたね…まあいいわ。アルシエ、話の続きを。今はあなたしか、頼れる人はいないから」

「…わかりました」

…どうも、モモンさんの恋愛事情みたいなものに巻き込まれた気がする。自分に向けられるナーベさんの視線は微かに、イビルアイさんの視線はわかりやすく変化していた。自分はモモンさんに対してそういう感情を持つてはいないのだが…ともかく、促されたし、話を続けよう。

「次に、ギジエラですが…名称は超古代植物ギジエラ。かつてここではないどこかで、人類に…世界に滅亡が近付くと、必ず咲くとされた植物です」

「滅亡…穏やかではないわね」

「特徴はその花粉で、花粉には吸いこんだ相手に快樂の夢を見せる効果があります。花粉には依存性もあつて…ギジエラは夜間、花粉を出さないんですが、その間花粉を吸つたものは皆花粉を求め争いを起こす…そういう植物です」

「…麻薬そのものね。でも、それならなぜ私とあなたには効果がなかったのかしら。あと、モモンさんも立ち直れたようだし…」

「ギジエラの花粉は、ある体質を持つ人には効きません…その、体質がどういうものかまでは、自分にもわかりません。すぐ立ち直れる人がいるというのも、初めて知りました…あと、ギジエラの花粉は脳の老化を防ぐ効果があつて、その効果を取り出したものが、先ほど取り出したギジエラエキスです」

「ギジエラエキス…ギジエラ、か。恐るべき存在だな…」

ギジエラエキスを手に取り、モモンさんが唸る。皆の視線も、そちらに集まっている。…どうやら、ごまかせたらしい。ギジエラの花粉は光の巨人の力を持つものには効かない。すなわち自分とラキュースさんに効かないのは当然なのだが、流石にモモンさんやナーベさんがいる中でそれは言えなかった。しかし、モモンさんがすぐに正気を取り戻したのは本当に謎だ。何か、特殊な体質があるのだろうか。

超古代植物ギジエラ。ティガの世界で滅びが迫ると咲く植物怪獣。超古代文明の滅亡の原因の一つでもあり、信じられない繁殖力で世界を瞬く間に支配し人類を緩やかに滅ぼす怪物だ。…とはいえ、今回はギジエラと戦う必要はないだろう。ギジエラがここに咲いているなら自分たちは朝日が昇るとともに壊滅していただろうし、その場合あちこちにあるはずの小さなギジエラの花も見かけてはいない。ギジエラ本体も目立つか



ら、そういうのが見当たらない以上、この村人たちは花粉だけを使っているとか、そういう事だろう。そうであってほしい……というのは、贅沢か。

説明が終わったところで、話題は自然と村人たちの事についてとなる。自然と、自分たちの視線は、もう動かない村人に向けられる。

「……さて、どうしましょう。手っ取り早いのは、そこにいる村人を起こして、なんとか話を聞きだすことだけ……」

「モモン様、私が思うに、この下等生物は人間、というより今まで私が見てきた存在すべてとまるで異なるものです。はたして、尋問が有効かどうか……」

「ナーベの言う通りだな……下等生物なのかはともかく、こいつは我々の常識が通じる相手ではない。ギジエラエキスを……ダメだな、抜けば完全に沈黙する以上、扱いが難しい」  
「モモンさま……アルシエ、お前のタレントは、なにかこう、こいつらのもう少し詳しい情報とかわからないのか？」

「いえ、自分には、彼らの事はあまりよくわからなくて……ごめんなさい」  
「そうか……」

イビルアイさんの声と共に、場が沈黙に包まれる。こうなれば状況から推理していくほかないだろう。今ヘツケラン達はどうなっているかはわからないが、あまりいい待遇を受けているとは思えない。何とかしなければならぬが、かといつてこのままいつて

もまずいだらう。何か考えないと。何か…

「そういえば、君たちはあの村の奥の遺跡で村長の説明を受けた、と言っていたな…そこから、なにかわからないか」

「いえ、私たちには…あそこには街の残骸と巨人像があつて、そこに昔住んでいた、くらいしか…」

「あと闇がどうか…他には、巨人像を再現した新たなる像を見せる、みたいなことを「待つて」…どうした？」

イビルアイさんの言葉を切る。自然と皆の視線が、自分に集まる。だが、自分は今それどころではない。いろんなことが、頭の中を駆け巡っていた。

思い出せ、村長さん、いやあの村長は、何を言っていた—？

『現在、この下に作った特別な空間で、まだ綺麗な巨人の残骸をかき集め、組み合わせることによりできる新たな巨人像を村の者総出で作っております』

『そういえば、『ティガの地』の言い伝えによれば、巨人像にはいずれ光が宿り、蘇ると言われております』

…!!そういう事か!そういう、事なのか!

「…この人たちの目的が、わかったかもしれない」

「何…!? 本当か?」

「…はい。あの人たちは、おそらく巨人を復活させるつもりなんです」  
「…復活、ですか」

ナーベさんの訝しむ声が聞こえる。皆の視線も、こつちを向いたままだ。続ける。

「これはあくまで最悪の予想ですけど…彼らの狙い、それは、自分たちが作った新しい巨人像に、光を注入し、復活させ、自分たちの尖兵にすること、だと思えます」

「復活…ウルトラマンを、蘇らせる、と言う事？それって…」

「復活させるための光は、人間を交換…生贄に捧げること、作り出されます。自分たちを捕まえようとしたのは、その生贄にするため。そう考えるとしつくりくるんです…！」

「…そんな！じゃあ、皆は！」

ラキユースさんは、自分の言葉にひどく驚いた様子で、顔を青くしている。無理もない。他の人たちも、驚いているようだ。かく言う自分も、あまりいい思いはしていない。

—F計画、というものがある。ネオフロンティア時代に行われたそれは、巨人の残骸から新たな巨人を作り出し、そこにウルトラマンたる者の光を注入し人類最大の防衛兵器・ウルトラマンを作り出すというものだった。もちろん、これを村人たちが再現出来るわけではないかもしれない。だが、彼らの飛ぶ鎖を見る限り、自分が知らない技術を持っていると考えるべきだ。村長さんは巨人の復活を強く望んでいたようだし、ここは

最悪の予想が当たる事を想定しておく。

そして、自分の最悪の予想は、皆にも理解してもらえたらしい。

「…マズいな、君たちの仲間は助けなくてはならないし、そのような可能性がある以上、村の連中の目論見は潰しておくのが無難か…」

「そうですね。モモンサーンは、もちろん最強ですが、下等生物のしもべが増えるのは喜ばしいことではないかと」

「どちらにしろ、私たちを襲っておいて目論見通りにさせる義理はない…：そうでしょう、イビルアイ」

「ああ、落とし前は必ずつけさせる…：お前もそれでいいな、アルシエ」

「うん、皆は、必ず助けます…：」

全員が、一つの目的の元一致団結する。したように思う。そして、どう攻めるか—その話になった時、二人のアダマンタイト冒険者の代表者は、同じ結論を出した。

「夜襲する」

自分たちの行動は、ここに定まった。

## 新たななる巨人・破 後編

ラキユースさんは言った。怖いと。ウルトラマンになる事が、怖いと。

意味が分からなかった。一体ウルトラマンに変身することのどこに、恐れを抱くのかと。

自分は知っている、ウルトラマンに、恐れる要素なんてない。

なぜなら、

ウルトラマンは、

ぼくらの事を救ってくれる、

ヒーローなんだから。

…本当に？

「よこせ！ギジエラを、よこせ！」

「ちようだい！ギジエラの花粉をちようだい!!」

「ああ、頼む！あの夢が見たい、見たいんだ!!!」

—耳障りな声が、聞こえる。格子をたたく音が、ひどくうるさい。この檻の中は最悪

だと、ハツケランは心底理解する。だが、座り込む彼には、この檻を脱出するだけの気がなかった。自分があの騒ぎに参加しそうになるのを抑えるのに精一杯だった。

ふと、彼は下に向いていた視線を、前に向ける。そこには、彼の仲間がいる。檻の前の騒ぎに参加していないだけマシなのだろうが、彼女たちも座り込んだまま動かず、その顔に覇気はない。何気なしに、ハツケランは声をかけた。

「…イミーナ、どうだ」

「…さあ。あなたはどうかの」

「全然、だな…ロバー、そっちはどうだ」

「…すみません、皆さん」

「そうか…」

帰ってくる言葉も、それに応答する自分の声にも力が無い。辺りを見渡すと、自分たちのように項垂れている者、格子をたたき、涎をたらした獣のようにわめく者の二つに分かれていた。項垂れているものの中には、彼らが先ほどまで同行していた『蒼の薔薇』の面々、ガガーランとティア、ティナの姿もある。彼女達にも、やはり覇気がない。自分たち同様、そういうものを根こそぎ奪われているらしい。百戦錬磨のはずの彼女たちまであなのだと思いと、少しだけほっとした。

「…いや、なんでだよ」

安堵するなよ、バカ野郎。心の中で、ヘッケランは自重する。彼もまた、それだけ追い詰められていた。

—どうしてこうなったのか。ヘッケランは想起する。異変が起こったのは、新しい巨人を見せますと言われその準備があるとかで部屋に押し込められた後の事。突然、彼らを幸福が襲った。

本当に素晴らしい夢が見れた。ヘッケランの中にはそれだけが記憶として残っている。どんな夢なのかは覚えていないが、絶頂期というのはまさにこの事だというのが嫌でも理解できた。

夢が覚めたと思ったら、そこは牢獄だった。訳が分からないヘッケランの中に、まず浮かんだのは、夢の続きを見たいという欲望だった。彼は驚愕する。ワーカー歴二年、仲間のことより自分の快楽を最優先することは、こんな状況ではまずなかったのだから。だが、欲望は止められない。仲間の安否、自分の身の安全、そんなものよりあの快楽がほしい。その思いと闘っていると、檻の外から声が聞こえた。

そこには、青い服装に身を包んだ者たちがいた。一目でわかる。アレはこの村の住人だ。彼らは自分たちを一瞥すると、口を開く。：最悪な事に、ヘッケランが周りに人がいると気がついたのはこの時だった。

『お前たちに与えられたものは、ギジエラ』

『ギジエラの花粉はお前たちを夢にいぎなう』

『もしわれわれの言う通りにすれば、ギジエラをやるう』

断つておくと、この場にいたものは全員同じ罠にかかり捕らえられた者たちである。

そして、その中には冒険者やワーカー、傭兵など腕の立つものは存在する。そもそも、ここにはヘッケランの頼れる仲間がいたし、それ以上に強いはずの『蒼の薔薇』のメンバーがいたのだ。誰も武器を持っておらず、その檻があるうと、突破して村人たちを蹴散らす事は容易だった。

…結局、その場にいる誰もが、村人たちに屈する道を選んではまった。ギジエラの花粉は、それだけ彼らにとって誘惑的であり、ギジエラがもたらす毒も、彼らの力を奪うのには十分だった。ヘッケランもまた、最初は立ち向かおうとした。仲間も、『蒼の薔薇』も、同様に立ち上がった。

だが、立ち上がったところで、ある事が頭によぎったのだ。もしこいつらを倒してしまつたら、俺たちはギジエラにありつけないんじゃないか、と。その予感、ギジエラの快楽と毒が蝕むヘッケラン達の足を止めるのに十分であり、やがて彼らは屈してしまふ。あざ笑う村人の目と自分の目が合った瞬間、ヘッケランの心は折れた。

(…アルシエは、無事かな)

ふと、ここにはいない仲間の事を考える。ヘッケランにとって、この場に最年少なが



ら知識の宝物庫であり、そして最も苦しい戦いをこなしてきた少女がいらないという事は、救いだつた。なぜなら、こんなみじめな自分を見られずに済んだから。彼女を連れて行つた『蒼の薔薇』のリーダー、そしてそれについていつたのであろう仮面の少女とともに逃げおおせていることを、ヘッケランは強く願つた。

そんな考えが彼の中をよぎっていると、檻の向こうに人影が現れる。そこでは村人たちが、虫けらでも見るような目でこちらを見ていた。

「よろこべ、ギジエラをやる」

—その瞬間、力のない自分の体が全力で格子の方を向いたのを、ヘッケランは遅れて知覚した。

「…バカが」

思わぬ体の動きに、自嘲する。その声は、格子の前で激しくなつた音と歓声にかき消された。

「ほ、ホントか！ホントなんだな!?!」

「ギジエラ…ギジエラ、ギジエラ！ギジエラギジエラギジエラ！」

「はは、やつと、やつと夢が見れる!!見れるんだ!!」

「おい、おれ、俺に先にくれ!!早く!」

「何言つてる！私が先だ!!」

「いや、俺だ!!」

歓声は罵声に変わり、やがて暴力となった。檻の中の囚人たちが相争い始めたその時、「静かにしろ!」という一喝が響く。それが村人の声だったからか、檻の中はすぐに静まり返った。

「…まったく。これだから現代人どもは。心配せずとも、全員連れ出す。だが、順番というものがある。…手を出せば、ギジエラはないと思え」

村人はそう言うのと、檻を開け、無防備にも装備もなしに中に入る。だが、その場にいる誰もが、檻の外に出ようとも、村人を襲おうともしなかった。

(…飼いならされやがって)

心の中で、呟く。だが、結局自分も同類だと、ヘツケランは考えてしまう。お前も結局、何もしなかっただろ?という嘔きを、ヘツケランは事実として受け止めるしかなかった。

「始める。うるさいから前にいる連中からだ」

先ほど忠告を発した村人の指示に従い、数人の村人達が檻の中の者達を一人一人引つ張り出していく。入口に近い者達から無造作に選ばれ、檻から出た者たちは村人に誘導され、どこかへと連れていかれる。

そして、気がつけばヘツケランの目の前にも、村人の影がある。ヘツケランが顔を向

けると、指示を出していた村人の姿があつた。

「…ふむ。今はこれだけでいいだろう」

村人は外を見つつ、手で指示をする。檻から出ることを許されたのはここまでか、とヘツケランが理解すると同時に、後ろを振り向いた村人と不意に視線が合った。…村人は、嗤っていた。

「…おいおい、そんなに欲しがりな顔をするな。これも仕事なんだよ」

その言葉は、再びヘツケランの思考を奪う。思わず、顔に手を当てる。その姿をみて、村人は腹を抱えて笑い出した。

怒りが、ヘツケランに火をともし。気がつけば、ヘツケランは村人につかみかかっていた。

「てめえっ…!!」

「ヘツケラン！」

イミーナの声が、遠くに聞こえる。だが、もう彼に自分を止めることはできない。そのまま殴り掛かろうとして、彼は村人の余裕そうな表情を見た。意外な光景に、思わずヘツケランの動きが鈍る。

殴られることに危機感を感じてない様子の村人は、固まったヘツケランに語り掛けた。

「いいのか？お前」

「何が……！」

「ギジエラが、なくなるぞ？」

—ギジエラ。その言葉が、再びヘッケランの動きを封じた。それがどうした、そんなもの知るか、と心の中でヘッケランは叫ぶ。だが、その思考の裏で彼は、未来を想像してしまう。すなわち、ギジエラを失った未来を。…結局、彼の動きはそこで止まる。それだけで、村人たちには十分だった。

檻の外にいた村人たちが集まり、ヘッケランを引きはがす。掴みかかられた村人は、ヘッケランを一瞥し、彼に虫けらを見るかのような視線をぶつけると、そのまま檻の外へ出ていった。

—相手にする価値もない。そう判断されたのだという想像は、ヘッケランの心を再び打ち砕くのに十分だった。

「…ちく、しよう」

投げ出された姿勢のまま発せられた呟きも、檻の中に消える。残されたのは『フォーサイト』と『蒼の薔薇』の面々のみ。静寂が檻の中を支配し、それはこの場にいる全員にとって苦痛でしかなかった。

そして、いつ終わるのかわからない苦痛が、彼らを蝕み続ける。ギジエラがほしいと

いう欲望に、負けじとこらえ続けたが、それも限界に近づく。どうにもならないと、全員が思ったその時。

—衝撃が、檻を揺さぶった。

『夜襲する』

遺跡に向かうモモン、ラキユース、イビルアイ、そしてアルシエの作戦はシンプルだった。日が沈むとともに重要拠点であると思われる遺跡内部に突入、囚役が敵をひきつけている間に他の面々が救出に向かう。段取りを決めたのち、彼らは時間を待ち、駆けだした。因みにナーベは突入する面々の中にはいない。彼女はモモンの説得により、もしものために待機するという事になった。もちろん彼女は反対し、モモンについて行くこととしたが、お前にしかできないというモモンの説得により、折れる形で待機を承諾したのだった。

「…そろそろだな。皆、いけるか」

「はい、自分は大丈夫です」

「…は、はい！私も、大丈夫です！」

遺跡が目前にみえた所で、モモンが両脇に抱えた二人の少女に声をかける。アルシエはいつも通りに応え、イビルアイもかつて自分がこうやって抱えられていたことを思い

出し、そこから現実に引き戻される形で慌てて返事をした。彼女たちは足並みをそろえるためというモモンの要請で、彼に抱えられて移動している。その後ろには、ラクキュースが追従している。

(…速い!)

前方を行くモモンに対し、ラクキュースは舌を巻く。彼女もアダマンタイト冒険者としていろいろ持て囃されているが、そんな彼女をしてモモンの身体能力は底が知れないと感じるほどだった。改めて、彼がここにいてよかつたと、ラクキュースは感謝する。そして、前方に広がる遺跡の中に意識を集中した。この夜襲は、必ず成功させねばならない。

—そもそもなぜ今夜行動に移したのか。実は、この夜襲は苦し紛れの策という一面を持つ。仲間は生贄にされる可能性があり、早急に動く必要がある。相手側の脅威になる存在は今の所ギジエラのみで、ギジエラは夜花粉を放出せずその間花粉の影響はなくなる。モモンとラクキュースはここに目をつけ、今夜のうちに行動するほかないと決めたのだ。本当はこちららが村人の襲撃を突破したためそれを知られ準備されるよりもっと早く動くべきなのだが、そこはギジエラの効力を考えると弱まる可能性がある方を狙う方がいいと判断された。

しかし、ラクキュースは村に入り、ある事に気がつく。

(拍子抜けね…)

村を見て、ラキユースは心の中でつぶやく。村には、人の気配が全く存在していなかった。

ラキユースは村に入ったところで必ず戦闘になるのではと考えていた。そこはモモンや他の面々も同じことを考えており、陽動はそこで行われることも計画されていた。だが、村の入り口付近に人影は見当たらず、一行はそのまますなりと村の中に入るこ  
とが出来た。

舐められているのか、とラキユースは考える。彼女が記憶をたどれば、村人たちはギジェラの効力に絶対の自信を抱いていたように感じる。村人がいくらやられようが、ギジェラがあれば勝るとか、そういう風に考えているのではないか？

(…いえ、油断は禁物よ)

そこまで考えた所で、ラキユースは甘い考えを持った自分を叱責する。ひよつとした村人は重要拠点である遺跡にて待ち伏せしているだけなのかもしれないし、自分たちを捕えられるだけの算段をつけたのかもしれない。あるいは人質を取ってくるかもしれない。最悪の事態を想定し、それに対応できるよう、ラキユースは心の準備を整えた。

そして、モモンが抱えていた二人を下ろし、ゆつくりと侵入する。遺跡の入り口付近は広いホールようになっており、そこには、ラキユースの予想通り少くない数の村人たちが待ち構えていた。村人たちの先頭に立っている人物―村長ではない―が、立ち

止まった一行の方へ一歩進んだ。

「やはり来たか。外の連中が帰ってこないと思つていたが……ギジエラに不備でもあつたか。馬鹿どもめ」

「……ああ、彼らならもう始末した。先に言つておく。返すべきものを返してもらえないなら、命までは奪わない」

「ふん！ 貴様ら現代人など、ギジエラで事足りる！……やれ！」

モモンに應對した村人が命じると、後ろから何かを抱えた村人が出てくる。彼が抱えているモノは人の頭ほどのガラス玉で、中に黄色の何かが詰まっていた。それを確認した村人が、自慢げに言い放つ。

「これがギジエラの花粉だ！ 貴様ら現代人に合わせ原種の花粉に細工を施したこいつがある限り、我々の勝利は揺るがん！」

「……なるほど、大した自信だな」

「ほざけ！ 貴様らが外の連中を始末できたというのも、奴らがこれの運用を失敗したからにすぎん！ 夢の中に囚われるがいい！」

そう言い放つ村人の指示で、ギジエラの花粉を抱えた村人が、それを頭上に掲げる。それが振り下ろされ、割られる事で花粉が飛び出す――

「ドラゴン・ライトニング  
雷」



—よりも先に、イビルアイから放たれた雷が、村人を巻き込み直撃する。

「ぎやっ!？」

断末魔の叫びと共に、村人は焼き尽くされた。それと同時に、ギジエラの花粉の入った容器もわれ、花粉ごと完全に焼き払われた。後に残るのは、村人が残した、焼け跡のみ。

「…は?」

さつきまで自信満々だった村人は、状況をなかなか飲み込めないでいた。後ろにいた村人たちも、困惑している。彼らの予想を大きく外れたことは、明らかだった

「…一応、念には念を入れて第5位階の魔法を使ったが…そこまで必要なかったな」

「いえ、容器の固さまでにはわかりませんから…ありがとうございます、イビルアイさん」  
「感謝するのはこつちだ、アルシエ。…怪獣とはいえ熱には弱い、なら焼き払えばいい。お前の教えてくれた弱点を知らなければ、ここまで上手くはいかなかったよ」

そう言いつつ、イビルアイはアルシエから顔を離す。向けた先には、漆黒の英雄の姿がある。

(…よし!モモンさまの役に立てた!やったぞイビルアイ!)

…イビルアイは、通常運転だった。

そんな彼女の事など露知らず、あちこちに視線を合わせていたアルシエは、やがて天

井の一角を見つめ、そこを指さした。

「あそこです！あの方角に、皆さんがいます！」

「……なるほど、本当に皆の場所がわかるのね。頼りになるわね、アルシエ」

「いえ、それほどでも……！」

アルシエはラキユースの褒める言葉に対応しつつ、天井の方を見続ける。彼女の持つ真のタレント、魔力や生命力を見る瞳は、確実に仲間たちの見慣れた力を捉えていた。

それを聞き、ラキユースはアルシエが指した方向を見て、その後頭上を見る。その眼には、決意が宿っていた。

「……アルシエ、あなた〈飛行<sup>フライ</sup>〉は使える？」

「その程度でしたら……」

「なら十分ね。イビルアイ、あなたも準備を」

「……おいおい、いやな予感しかしないぞ！」

イビルアイのその言葉に、ラキユースは笑みを返す。そのまま彼女は、自身の持つ大剣『魔剣キリネイラム』を構え、それを思いつきり頭上に投げつけた。彼女の全力により弾丸のように飛ぶ剣は、古い遺跡の天井に突き刺さり、そこを粉碎する。土煙が晴れると、そこには大穴があいていた。穴からは別な天井と、そこに突き刺さった『魔剣キリネイラム』が見える。ラキユースの目論見通り、天井に穴が開き、別のフロアにつな

がる道が開いたらしい。イビルアイはその一部始終を見て、あきれたような声を上げた。

「…全く、荒っぽい…あの名前の長い技を使わなかっただけ褒めてやればいいのか？」

「さすがにそこまで考え無しではないわ。アルシエ、行きましょう」

「…えーあ、はいー」

ラクユースの声で、あつけにとられていたアルシエも気を取り直し、自身に〈飛行<sup>フライ</sup>〉の魔法をかける。イビルアイもまた〈飛行<sup>フライ</sup>〉の魔法を使用し、ラクユースがその手をつかむ。そこでやっと状況に気がついたのか、村人たちもようやく動き出した。

「や、やれ！ 奴らを捕え「させると思うか？」ぐあつ!？」

だが、飛ぶ彼女たちを捕えようとした瞬間、村人たちは唯一飛ばなかったもの―引き付け役のモモンの一撃で吹き飛ばされる。そこに気付いたアルシエたちから、声が掛けられる。

「モモンさん、お願いします」

「も、モモンさま…がんばって!」

「モモン、後は頼むわ!」

「…ああ、ここは任せて、先に行け」

モモンの返事を聞き、アルシエたちは天井の穴に入り、別のフロアへと侵入を果たし

た。残されたのは、モモンと、気圧されている村人たちのみ。その内、先頭にいた村人が、泡を食って指示する。

「な、何をしている！早く、早くギジエラの次を持ってこい！」

「し、しかし、今のギジエラの備蓄は余裕があるわけでは……！」

「馬鹿！緊急用のあれでいい！早くしろ！」

「は、はい!!」

指示を受けた後方の村人は、その勢いに押されるように、後方の階段へと向かう。

「へ真なる死トゥル・デス」

「え……あ」

だが、それは叶わない。次の瞬間、村人は階段の目前で、わずかなうめきだけを上げて倒れる。ピクリとも動かない姿を見て、ほかの村人は悟る——もう、死んでいると。

そして、気がつけば、彼らの目前にいたはずの大英雄の姿がなかった。

「……サイボーグと言う事は、だ。心臓は機械に置き換えられていることが容易に想像できるため、グラス・ハート「心臓掌握」は効かない可能性がある」

声がある。黙々と何かを語るその声は、大英雄の者と同じ。だが、何かが違うというのは、村人たちにも理解できる。村人たちは恐る恐る、声の主の方向に顔を向けた。

果たしてその方向、背後の階段の付近に、それはいた。

「だが、アルシエ君の言葉通りなら、脳の老化を防止する必要があるくらいには、生物のままの部分があるという事。故に即死そのものは効果があると踏んだが…読み通りだったな」

それは、高貴な衣装に身を包んだ骸骨。絶大なる力を持つ、至高の死の支配者<sup>オーバーロード</sup>。

「さて…ナーベの心を犯した上、俺にあんなに良い夢を見せてくれたんだ…俺も全力で、貴様らに応えてやらんとな…!!」

声に怒りをにじませたアインズ・ウール・ゴウンが、村人たちの前に現れた。

…何か、妙な感覚がする。思わず、後ろを振り返ってしまう。

「…どうしたの、アルシエ」

「…いえ、なんでもないです」

ラクユースさんに声を掛けられるが、自分もうまく答えることが出来ず、誤魔化してしまう。後ろ、というか下ではモモンさんが戦っているはずだし、モモンさんの生命方も感じるのだが…よく、わからない。

ひよつとして、モモンさんの言っていた切り札が関係しているのだろうか？モモンさんは作戦実行時、囃役は一人でいいと言い出した。当然自分と、あとナーベさんとイビルアイさんは反対したのだが、彼は頑なに意思を曲げず、結局押し切られたのだ。その

時、彼は自分にはとっておきの切り札がある、今回はそれを使うと説得してきた。よほど自信があるかのような物言いだったので、確かにすごいものなのだろう。

そんなことを考えていると、ラキユースさんから再び声が掛けられる。

「モモンさんの事が気になるのはわかるけど、彼なら大丈夫よ。なにせ王国を救ったアダマンタイト級冒険者、漆黒の英雄モモン。自分の事なら自分で何とかするでしょうし、ここは彼に任せましょう」

「…わかりました」

「その意気よ、アルシエ。…だから、イビルアイもそわそわするのをやめなさい。それとも何？あなたを救った英雄様は、こんなところでやられる程度の人なのかしら？」

「!!そ、そんなことない！そんなことないぞ！」

「ならいいじゃない。私たちは私たちのできることをやりましょう」

そう言って、ラキユースさんは再び先頭を駆ける。それについていく形でイビルアイさんと自分も続く。どうやら自分に合わせているらしく、この中で一番技量も体力も低いであろう自分でも何とか追従できている。これには感謝するほかないし、同時に非力な自分が、恨めしい。

…やはり、ラキユースさんは頼れる人だと思う。村の外で話をしている時とは違い、今は非常に生き生きとして、眼差しにも力が入っている。イビルアイさんはこれでも本

来の彼女に比べたら固すぎるとのことらしいが、自分からしたら頼もしいことこの上ない。これが、本来のラキユースさんなのだろう。それだけ、彼女をあままで苦しめたウルトラマンの力が、彼女にとってどれだけ大きい問題なのかも、容易に想像できた。

それにしても、今の所このフロアには誰もいない。フロアは遺跡を使っているのではなく、新たに切り出してできた道のようなのだが、人の気配は全く感じない。モモンさんの事をそれだけ無視できないのか、それとも村の規模から人も人がそもそも少なかったのか、あるいはその両方か。なんにせよ、急ぐ自分たちにはありがたいことだ。

そして、駆け抜ける自分たちはこのフロアの突き当りにたどり着く。そこにある扉越しに、見慣れた生命力を感じた。鍵が掛かっているが、まあ問題ないだろう。

「ここです。この中に、皆がいます」

「…わかったわ。他に誰がいるかまではわかる?」

「待つてください…いません」

「よし、イビルアイは外をよろしく…開けるわよ!」

ラキユースさんがそう言い、扉を持っていた大剣で両断する。そして何らかのトラップがないことを確認し、ラキユースさんと二人で部屋の中に突入する。

部屋の中には、大きな檻、というか格子がつけてあり、その中に複数の人影を確認する。『フォーサイト』の仲間たちと、『青の薔薇』のメンバーは、そこに全員そろっている。

た。皆がいたことの喜びで、思わず声が出てしまう。

「やった…皆、大丈夫!」

「…アルシエ、か?」

自分の言葉にワンテンポ遅れて、うつむいて座っていたヘツケランが顔を上げる。どうにも憔悴しているようだが、檻に入れられたからか、それともギジエラの花粉のせいかな。どちらにしろ回復手段はそろっているし、何とかなるだろう。格子に駆け寄ろうとして、後ろからラキユースさんに引つ張られた。

「アルシエ、下がって…はっ!」

ラキユースさんの気合のこもった掛け声とともに振り下ろされた斬撃が、格子にあった扉を両断する。扉を何とかどかして、皆の元に飛びつくように駆け寄った。

「リーダー、イミーナ、ロバーティク!ああ、よかった…皆が、無事で…」

「…ああ、ま、傷一つないのは確かだわな」

「ええ、そうね…」

「…なんにせよ、あなたが無事でよかったです、アルシエ」

三人がそれぞれ、元気がなさそうな様子で反応を示す。やはり、ギジエラの効力があるのだろう。まずは浄化魔法から試す。そう考え、魔法を行使しようとしたところで、ヘツケランから声が上がった。



「それにしても、まさか助けに来てくれるなんてな……一つ聞くが、お前、ギジエラは大丈夫だったのか？」

「? あんなもの、自分には効かない。そんなものがあっても、自分は助けに来れる」

「…ははは! そうか、そうか!」

「…リーダー?」

自分の言葉を聞いて、ヘツケランが笑いだす。どうしたんだろう、様子がおかしい。戸惑っている、「ああ悪い悪い」と、ヘツケランが頭をなでてきた。

「…どうしたの?」

「いや? お前ってすげーな、って思ったただだよ。俺なんかじゃ敵いつこないって、分かったっていうかな」

「リーダー……?」

後ろにいたイミーナからも、ヘツケランに対して戸惑いの声上がる。ロバーティクも、不安そうな表情をしている。…たぶん、ギジエラの花粉のせいだろう。止めないと。「リーダー…あなたは、たぶんギジエラの花粉のせいで少し弱っている。安心して、自分がすぐに治す」

「…へっ、治せるとまで来たか…ところで、お前はとも平気だったみたいだがよ、なんで平気だったんだ?」

「…それは」

それは、ウルトラマンだからだと思う。だが、それはこの場で言うべきか…？彼にはすまないが、ぼかす他ない。

「…ごめん。自分が、自分だからとしか、言えない」

「…そうか。まあでも、それは要するにお前がすごいからなんだってことだろ？やっぱりお前はすごいんだよアルシエ、俺たちが拾ったその日から魔法や知識で頑張ってくれて、新しい商売のやり方を思いついて、そして…俺たちの知らない所で、あんなに頑張りやがって。お前、少しは誇らしくなっていいいんだぜ？」

「…それは、ありがとう」

「…それにくらべりや、俺なんてどうしようもない屑だ」

「…何を言っているの？」

…なんだ？ヘツケランは、何を言おうとしている？止めたいが、ヘツケランの悲しげな顔が、それを妨げる。固まる自分に構わずといった感じで、ヘツケランの言葉はつづく。

「実家の空気に馴染めないで、冒険者になろうとして、金に目がくらんでワーカーになって。仲間には恵まれたが、助けられてばかりで。イミナーのレンジャーとしてのスキル、ロボーの神官としての力、そしてアルシエの魔法、知識、タレント、力…そういう

のに支えられてばかりで、ここまで来てしまった」

「…ヘツケラン、あなた何言ってるの？ 私たちは、あんたがいたから、あんたの立ち上げた『フォーサイト』があつたから今までやってこれたのよ!!今さらさんなことを言うなんて…!」

「…こればかりはあなたには賛成できませんね。ヘツケラン、イミーナの言う通り、あなたが私たちを拾ってくれたからこそ、今私たちはこうして生きて「こうして、檻の中、か？」い…それは」

…

…これは、まずい。とても、まずい。だが自分の思いもむなしく、ヘツケランはまだ続ける。

「そもそも、こんなところに来たのだから、俺が直感で選んだ道が間違つてて…笑えるよな、今までワーカーやって、ああいう場所でやつちやまずいことの区別すらついてなかつたなんてよ」

「それは…それは、今関係ないでしょ!?!もうそれは済んだ話よ!それに、そのおかげでこの事を知れたじゃない!」

「…それは、結果論だろ?俺の、わけのわからん行動がここまで事態を悪化させた。それ

には、変わらねえよ……」

……ああ、もう、無理だ。

「だからな、この一件が終わったたら……俺たちの身の振り方、考え直そうぜ。大丈夫だよ、お前たちはすごい。お前たちならどこに行ってもやれるさ。だから、こんなバカな男、さつさと見限って『バキツツ!!』つ……え？」

…

…

……ああ、やつちやった。

「……ある、しえ？」

ヘツケランが、きよとんとした顔で、こちらを見ている。顔は横を向いていて、ほおは少し赤くなっていた。

……殴っちゃった。今まで、そんなこと、一度も、やったことなかったのに。

「……やめてよ」

声も、気がついたら出ていた。……涙も、気がついたら流していた。もう、止まらない。「やめて、よ……そんなこと、言わないでよ……リーダーが、ダメだなんて……」

心の底から、自分は希っていた。もう、自虐の言葉は、聞きたくなかった。ヘツケランに近寄り、その頬を撫でた。

「リーダー、自分は、今の自分は、リーダーがいたから、生まれたんだ。自分の知識も、魔法も、力も、自分一人では持て余すものばかりだったのに、リーダーが近くにいて、イミーナやロバーテイクと会わせてくれて、皆のために使うことが出来た。自分がすごいのは、すごく見えるのは、リーダーが自分を、拾ってくれたからなんだよ?」

「…それは」

ヘツケランは、ばつが悪そうに顔を背ける。だが、事実は事実だ。自分が今家族を養うことが出来ているのも、魔法や知識やタレントをみんなのために使うことが出来ているのも、ヘツケランが『フォーサイト』を作ってくれたから。自分が今ウルトラマンとして生き残ることが出来ているのも、くじけそうになった時、必ずヘツケランが声をかけてくれたから。彼には返しきれない恩がある。だから、彼を貶める言葉は、彼の口からでもききたくなかった。

「それに、最初に自分を拾ってくれた事だって」

「…あの時、か?」

「うん、あの時、自分は…」

「…?」

「自分、は…」

…あれ、言葉が、でない。どうしたんだろう。言えばいいのに。

あの時、自分はいろいろあつて途方にくれていて…

…途方に、くれていて…

…

…

…いや、違う。

「…あの時、自分は絶望の淵にいた」

そうだ。途方に暮れていた、なんて生易しいものではなかった。

…自分の運命が変わるよう、出来ることはなんだつてしたつもりだった。

タレントがあることがわかり、魔法が何と無く理解できることを知つて、それらを磨くため必死に努力して、帝国魔法学院に入ることが出来た。そしてそこでも師匠の下で努力を積んだ。

両親の事を案じ、本来の流れに沿わないようにするためそれとなく忠告をし続けた。時には両親に、時には使用人に。どんな人物が皇帝になろうとしているのか、鮮血帝のような人物が現れたらどうなるか、そういったことを、それとなく語り続けた。

貴族の娘であることを利用して、帝国のは入れるところはとりあえず入つてみたりした。そこで得た情報をもとに、さらに自分の行動を補強した。

体だつて、鍛えてきた。…成果は、芳しくなかったが。

とにかく、なんだってやってきたのだ。…だが、それもむなしく、家は取り潰された。自分のやってきたことが全て否定されたようで、絶望の淵に沈んでいた自分が、街に出て…そこで、怪獣と出会った。

なぜ宇宙戦闘獣コツヴがいるのか、わけもわからず逃げまどい、だがそれもむなしく追い詰められ、踏みつぶされて殺されそうになって、すべてをあきらめそうになって—それでも、家族の事が思い浮かんだその時、自分は光になった。

…光になった後の、コツヴとの闘いは、よく覚えていない。だが、戦った後、自分はウルトラマンであるという事の重圧に耐えられなかった。ただでさえ人生の総てが否定された気分だったのに、ウルトラマンになって怪獣と戦えだなんて、できるわけがない。そう思って、でも投げ出せなくて、ずっとずっと、街をさまよい続け、どこかで倒れた。

あの日は雨が降っていた。雨が倒れた自分の体温を奪い、意識が遠くなっていく。ああ、今度こそ死ぬのか、と現実をどこか遠い世界のように感じて—

『…おい、あそこに誰か倒れてないか?』

『…ホントね。あれ、女の子?』

『何やら弱っているようですね…急ぎましょう!』

—そんな時響いた三人の声を、今ならすっかり思い出せる。

『おい、しつかりしろ！くそ、こんなところで死ぬなよ！』

若そうな男性―ヘッケラン・ターマイトに抱えられて、自分は確か『歌う林檎邸』に運び込まれたのだった。

その後の事は、これまた臆気だ。多分、ウルトラマンの事はその時話しておらず、でも身の上話はそれなりにしたと思う。話の後、聞き手のヘッケランが、こう言ったのだ。

『…なら、俺たちと一緒に来ないか？』

こうして、自分は、ヘッケランをリーダーとするワーカーチーム『フォーサイト』の一員となったのである。

…すべてを思い出し、彼の事を改めて見つめる。彼がいてくれたから、生きていられたことを、噛み締めた。

「…あの日は、自分にとつて、最悪に最悪が重なった後だった。絶望を抱えて、死ぬばかりだった。でもそんな自分を、リーダーが拾ってくれて、だから今の自分がある。噂になるくらい自分を、リーダーが作ってくれた。リーダーは、すごい。誇ったって、いいと思う」

「…そうか」

ヘッケランは顔をそらしたまま、しかし、心なしか、返事は少し明るくなった気がする。そのまま、続ける。



「だから、リーダー……自分をダメだなんて、言わないで。あなたがいて救われた人がいるって、忘れないで。あなたがすごいって思う人は、あなたがいたからすごくなれたってこと、忘れないで」

「…」

「それでもすごくないって思っちゃうなら……自分が、言つてあげるから。あなたはすごい、あなたは強い。あなたはいろんなことをやってのけたって、あなたのことを、語り継いであげるから！あなたのすごさを、忘れさせないから！あなたが負けないって、信じ続けるから！だから、もう、言わないで……!!」

そこから先は、嗚咽に変わってしまった。もう、自分でも止められない涙——それをぬぐってくれたのは、あの日自分を拾ってくれた、あの手だった。

「…そんなことされたら、たまんないな」

「リーダー……」

「…ああ、お前にそこまで言わせちゃうなんて、リーダー失格だな……よし！」

顔を上げれば、いつもの不敵な笑みが見える。ヘッケランは両の頬を叩き、気合の入った声と共に、立ち上がった。その顔に、先程までの陰気は残っていない。

「さ、こんなところとはとつととおさらばして、先に進まないとなー！イミナ、ロバー、準備はいいか!？」

「…全く、さつきまで一番ダメだった人が良く言うわね。…心配ご無用、私はもう大丈夫よ。」

「ええ、私も、アルシエにそこまで言わせたからには、やれますよ…これで、復活ですね。神の鉄拳はいりませんね？」

「はは…ああ、大丈夫だな！行くぞ！」

…よかった。自分の声は、届いたらしい。立ち上がった皆を見て、心の底から安堵した。

「…いい光景ね」

その時、後ろからラキユースさんの声がする。…忘れていた。慌てて後ろを見ると、そこにはラキユースさんと、立ち上がっていた『蒼の薔薇』の人たちがいた。あの人たちも、どうやらなんとかうまくいったらしい。彼女たちの姿を見ると、ガガーランさんが咳払いし、ラキユースさんに話かけた。

「だったら、俺たちにだって泣き顔見せてくれたっていいんだぜ？」

「冗談…そういうの、私たちには似合わないでしょ？それに、そんなことしなくたって、あなたたちは立てるもの。ね？」

「…さすがは鬼ボス。容赦なさすぎ」

「…同感。でも、それでこそ鬼リーダー」

「…口数も減らないようだし、ね」

やはり、『蒼の薔薇』も良いチームの様だ。それを確認していると、イビルアイさんが部屋の中に入ってきた。

「…あれ、イビルアイ…あなた、寂しくなっちゃった?」

「そんなわけあるか。あまりに人が来ないんでな、少し様子を見に来た…どうやら、もう大丈夫らしいな」

「ええ、後遺症もあるから、アルシエに魔法をかけてもらうつもりだけど。アルシエ、頼めるかしら?」

「あ、はい!わかりました」

ラキユースさんに呼ばれ、『蒼の薔薇』の方に近づく。魔法を準備し、皆にかけることを伝えようとし—

—激しい衝撃が、自分たちを襲った。

「…ルシエ、アルシエ!大丈夫か!?!」

「…これは…」

自分の近くにいるヘッケランの声で正気を取り戻す。どうやら、自分はヘッケランに抱きかかえられているらしい。そのままの体勢で、ヘッケランは語り掛ける。

「悪いな、急に崩れたから、引つ張りよせるので精一杯だった…大丈夫だな、アルシエ」  
「うん、ありがとうリーダー。…どうなってるの?」

ヘツケランに礼を言い、周囲を見るため立ち上がる。周囲、というかこの遺跡が激しく崩れている。幸い皆この部屋にいるようだが、遺跡は自分たちのいた部屋の入り口から、外の風景が見えるまで崩壊していた。いったい、何が。

あつげにとられていると、倒れこんでいたラキユースさんが立ち上がる。彼女が引つ張り込んだのか、抱きかかえられていたイビルアイさんも立ち上がる。他の皆も立ち上がりつつあつたところで、ラキユースさんが口を開いた。

「…これは、何事かしら」

「わからない…外を、見ないと」

「そうね…イビルアイ、皆をお願い」

「俺も手伝う…アルシエ、外は頼むぞ」

「わかった。よろしく、リーダー」

他の人をヘツケラン達に任せ、自分たちは外をのぞく。遺跡は入口にかけて大きく崩壊しており、山だったところが大きく抉れ、外の村の様子までよく見えた。村は何か巨大な存在が通ったかのような、大きな破壊がもたらされていた。

そして、その向こうを見ると、とんでもない存在が、聳え立っていた。

「あれは…!?!」

遺跡の外、平原地帯にそれは立っている。こちらに後姿を見せている巨人は、外が暗いので詳しくはわからないが、全体的に灰色で、赤いラインが走っている。上半身には、金色のラインが存在している。後ろ姿には、ウルトラマン特有の、特徴的な張りのようなものがあつた。…だが、それはウルトラマンではない。

「…テラノイド…!?!」

人造ウルトラマン、テラノイド。そこに立っていた巨人は、まさしくそれだった。それを見て、震えだすものがある。

「…あ、ああ、そんな…!」

ラキユースさんは、先程までの不敵な様子から一転、村の外で自分と話していた時同様、弱弱し気な表情をしていた。…まずい、なんとか、しないと。

決意を固め、後ろの頼れる人物に叫ぶ。

「リーダー! 怪獣が出ました」

「! まじか、こんな時に…!」

「遺跡を破壊したのは、たぶんあいつです! リーダーは、ラキユースさんをお願いします!」

「…わかった! だが、お前は どうする!」

「…自分はいきまます。奴を、放つてはおけない」

その言葉と共に、遺跡の外に身を投げ出そうとする。魔法で飛び、一気に接近しようとしたその時、肩をつかまれ動きを止められた。見てみると、そこにはラキユースさんの弱気な顔があった。ラキユースさんは自分をつかんだまま、一呼吸置く。そして、何かを決意したような顔になって、口を開いた。

「…一つ、いいかしら」

「はい」

「…怖く、ないの?」

…それは、どのような決意の元に出された言葉だったのか。ラキユースさんの真剣な瞳に、吸い込まれそうになる。

彼女が問うていることは、わかる。自分は、怖いといえれば怖い。戦う事、負けるかもしれない事。だけど、彼女が聞きたいことはそれではないはず。ここに来るまで、ずっと心に残っていたあの告白。それを想起し、問いかけに変える。自分にとって、ウルトラマンとは、彼らへの恐怖とは―答えが、見えた気がした。

「…ウルトラマンが」

「…?」

「…ウルトラマンが、怖くないわけ、ないでしょう…?」

「……!!」

ラキユースさんの顔が、これまで見た中で一番の驚きを示す。それを一瞥し、何か言いたげな彼女の手を振り払い、自分は飛び立つ。なんとなく、返事は聞きたくなかった。

「……」

飛びながら、自分の懐にあつたエスプレンダーを……エスプレンダーのようなものを、取り出す。それを眺めてみれば、いつも通りの輝きが見えた。今思えば、これを見た時点で、疑うべきだったのだろう。

——ウルトラマンに変身する事が怖いと言われて、自分は意味が分からなかった。ウルトラマンは、皆を救うヒーローで、理解できない怪物ではないと、真っ先に言いそうになった。でも、よく考えれば、それは違う。それは、自分がテレビの中のウルトラマンを知っていたからでた言葉であり、前提のないラキユースさんから見れば、怖くなくて当然なのだ。自分の知るウルトラマンアグルは変身者を傷つけたりしないだろうが、彼女が変身したウルトラマンアグルがそうであるかなんて、誰にも保証できないのだから。

そう考えて、今更だが自分の使うガイアの光も、自分の知るものではないと気がついた。最初からV2である事、エスプレンダーを持っていた事……思えばヒントはいっぱいあつたのに、今まで何も気がつかなかった。いや、ウルトラマンは安全だと、それを当

然のように使ってきた。告白しよう、今まで自分は、ウルトラマンガイアと、きちんと向き合っていないかったのだ。

「……めんね」

エスプレンダーの……エスプレンダーと呼ぶ以外、名前が思いつかない入れ物の中にある光に、語り掛ける。

「……自分は、今更、あなたが怖いと思っている。あなたが何をするのか、何がしたいのか、わからない、だから怖い……そう思う自分が、とても嫌だ。あなたをきちんと見ていなかった、自分が一番悪いのに」

告白する。入れ物は黙して語らず、光はない。そのまま、続ける。

「私はもう、あなたを今までみたいに見ることはできないかもしれない……でも、それでも、自分には、守りたいものがある。あそこで待つてる、人たちがいる。その人たちに、報いたって思っている」

告白する。自分は少し臆病になって、そんな自分が嫌いになった。それでも、自分には守りたい人がいる。かけがえのない家族、自分に再び命を吹き込んでくれた、仲間たち。そして、自分がこれまで見てきた、この世界——そのために戦う、その意志だけは曲げたくない。

それを確認し、自分はふたたび入れ物に問いかけた。



「…だから、お願いします。こんな自分にも、もう一度…もう一度、自分に力をくれませんか？」

…入れ物、エスプレンダーは黙して語らず。だが、その結晶体の中の光は、再び輝いた。

「…ありがとう」

答えてくれたことに感謝し、前方のテラノイドを見つめる。いつの間にかテラノイドはこちらを向いており、そして自分の方に―皆のいる遺跡の方に、十字を向けていた。

させない！これまでやってきたようにエスプレンダーを構え、自分はあらん限りの力を籠め、その名を叫んだ。

「ガイアアアアアアアアアア!!」

そして、自分は光に包まれる。光は応え、ウルトラマンガイアの形を取った。

## 新たなる巨人・急 前編

「ぐ……ぐお……っ」

瓦礫を押しわけ、アインズは何とか立ち上がる。全身に広がる痛みは、これまで彼が今の彼として生きてきた中で一番の痛みだった。

「どう、なっている……」

痛みをこらえ、周囲を見渡す。周囲は完全に破壊され、人つ子一人いない。上を見上げれば、はるか向こうに夜空が見える。どうやらここを破壊した存在は、それだけでは飽き足らず外に出たらしい。

回復の準備をいつつ、どうしてそうなったのか、混乱する頭を落ち着かせるため、アインズは想起した。

『……か』

アインズはまず既に対峙していた村人たちを一人残らず「処理」した後、その後も迫りくる村人たちを「処理」しつつ、彼らがやってくる方向へと向かっていった。その結果、彼は地下の遺跡、そのまた更に地下の特別な空間にたどり着いていた。そこは高さは何十メートルもありそんな大きな筒状の空間の中に、足場が組まれているような場所

だった。

足場の方に降り立ったアインズが周囲を確認していると、横に巨大な物体が屹立しているのを確認した。

『…なるほど、これが巨人像か』

そこにあつたのは、胸元から上をのぞかせた、かつてサラマンドラと戦っていたウルトラマンに似た石像。これが話に聞いていた復元された巨人像であることは、彼にもすぐ理解できた。つぶさに観察すれば、それが頭から足まで完成されており、これならば復活するかもしれないということが伺える。

アインズが石像を見てみると、突然前方が光り出し、直後苦痛に苦しむような人々の叫びが聞こえた。

『…これは！』

アインズが見てみれば、彼の頭上には檻のようなものが設置されており、そこに人が入れられており、さらにそこから光が走っているのがわかった。彼らは『フォーサイト』や『蒼の薔薇』同様捕えられた者達であり、ギジエラをやるという村人たちの口約束にまんまと乗せられ、そのままうまくここまで誘導されてきたのだ。もちろんアインズがそこまで知る由もないのだが、この光景はこの光こそアルシエが言っていた巨人像復活のためのものでは、と彼に考えさせるには十分だった。

彼が驚愕に包まれていると、正面から青い服を身にまとった男が現れる。アインズは知らないが、彼が村長だった。

『な、何故ここにアンデットが…貴様、何者だ!?!』

『…これは失礼した。我が名は、アインズ・ウール・ゴウン』

『…アインズ?』

驚いた様子で名を聞かれ、アインズがとりあえず返事をするも、その名前を聞いたとたん、村長の様子が変わる。それと同時に、檻の中からの絶叫は止まり、光は消えた。

その直後、村長は先ほどまでの要津はどこへやら、いきなり笑い出した。

『…何がおかしい』

『いや、理解したので! 貴様が我らの文明が最後に予見した、外から来る王であると! 名は、アインズ・ウール・ゴウン! はは、やはり、我らの文明はこの世を支配するにふさわしいのだ!!』

『…何だと? 貴様、何が言いたい…!』

『我らがこうして現代人を贄に光を集めてきたのも、すべてはこの日のため! この装置を使い、集めては蓄えてきたこの光—今こそ、この巨人像にすべて注ぎ込むとき!』

村長はそう叫ぶと、近くにあつたコンソールを操り、何かのスイッチを押す。すると、空間の周囲を囲っていた壁が、輝きと共に光を放ち出す。アインズが何かをするより早

く、周囲の壁にあつた突起から発射された光が、巨人の胸元に注ぎ込まれた。

『！貴様……！！』

『はは、はははははは！！さあ動け！我らが文明最大の防衛兵器！光の巨人よ！』

そして、石像だったはずの巨人に色がつき、ウルトラマンの姿そのものに変貌した。そして巨人―テラノイドが行つた最初の行動は、両腕を振り下ろし、動くもの―アインズと村長を、叩き潰すことだった。

『……え』

『な、にいつ?!』

村長は、あつけにとられ動かない。アインズもそれに気圧されつつもとつさに躲そうとするが、それもむなしく二人は叩き落されたのだった。

「……ああ、そうだった。……巨人の力が、あれほどとはな」

自身に起こつたことを完全に思い出したアインズは、この状況を引き起こした巨人の力に身震いする。嘗てはモモンガという名で活動していたユグドラシルでのステータスをそのままにこの世界にやってきた彼は、この世界では直接戦闘において向かう所敵なしだった。だが、今回は危うく死ぬかもしれないレベルのダメージを、寝起きの一撃で叩き込まれたのだ。恐れを抱かない方が無理な話であり、彼はこれまで以上に、自身の感情抑制に感謝していた。

「…さて、どうするか」

回復を行い、アインズは考える。あの巨人は強い。このまま、一度体勢を立て直すのも手だろう。しかし、このまま逃げてはあの巨人の事は何もわからない。アルシエがいれば聞いたりしたのだが、どうも遺跡が派手に破壊されている今、彼女は無事なのかハッキリしない。一度引くにしても、ある程度は相手の情報を知っていた方がいいだろう、という思いが彼の中で勝っていた。

結局、彼は外に出てみることに決めた。自分の姿を悟らせないよう、フライ〈飛行〉とタイム・ストップ〈時間停止〉を併用して飛翔する。遺跡があつた山の山頂付近に到着し、タイム・ストップ〈時間停止〉を解除した後、彼は周囲を一瞥した。

「あれか…」

そしてその結果、彼は村の外の平原に立つテラノイドを見つける。テラノイドは背後を見せ、何をするでもなくただそこに立っていた。その生物らしさを感じさせない姿は、アインズをしてただただ不気味でしかなかった。

そして、テラノイドは不意に振り返る。振り返つてた巨人の目が、こちらを見ているような感覚が、アインズの背中を走つた。

そして、テラノイドはこちらに、と言うよりは遺跡に向かつて、右腕を縦に、左腕を横に構え交差するという、アインズからしたら謎の構えを取つた。―まずい、という予

感が、彼の中で芽生える。あれは、まずい。何かはわからないが、放っておけばまずいことがおこる。そう考え、何かアクシヨンを取ろうとするも、彼の今の位置からでは巨人に対し何もできないことを悟る。何もできず、ただ待つしかないのか、とアインズが嘆いたその時――

「デユワツ!!」

――光があふれ、掛け声とともに巨人が飛び出した。こちらの巨人なら、アインズも知っている。あの巨人は、かつてアインズの奥の手を受けつつ生き延びた怪獣を倒した者。この世界の人々を護り、巨大な怪獣を倒してきた救世主とうわさされる存在。アルシエから聞いた、その名は――

「ウルトラマンガイア」

アインズがつぶやくと同時に、勢いよく飛び出したガイアが、テラノイドの腰を捕えた。

光線技を撃とうとしていたテラノイドの腰に、何とか飛びつくことに成功する。間に合ったことに、安堵を覚えた。

テラノイドに飛びつき、自分はその勢いのまま相手を押し倒し、地面を転がっていく。途中でテラノイドを離すことで、奴にはさらに勢いをつけさせ、そのまま距離を取るこ

とに成功した。

勢いが死んだところで立ち上がり、テラノイドから目を離さない。テラノイドは回転が止まったのち、一拍おいて、何事もなかったかのように立ち上がった。これまで戦ったどのロボット怪獣よりも、機械的な、命を感じない挙動に、少しだけ戦慄を覚えた。

(…いや、飲まれるな自分)

相手は異質だが、ウルトラマンの力だけを持った怪物、テラノイド。一度も油断できない相手だと、気を引き締める。

…ところで、変身する前の記憶が朧げなのだが、これはどうしたことだろう。確か自分は、ギジエラにやられたのであろうへツケランを励まして、それで…その後の事が、妙に思い出せない。そもそも、へツケランをどうやって立ち直らせたんだっけ？確かあの時は、自分がへツケラン達に初めて会った時の事、ウルトラマンの力を手に入れて途方に暮れていた時の事を思い出して…

(…いけない、集中集中)

変なところに向かいそうになっていた意識を、戦場に引き戻す。いけない、今自分は相手を油断ならない奴としたばかりだろう。思い出せない記憶があつたって今気を取られてどうする。思い出すのは後でいいし、そのあと思い出せなかったのならその記憶はそれまでのことなのだ。気を取り直し、改めて相手を見た。



やはり相手はテラノイド、こちらを見る目には生氣を感じない。だが、こちらを敵として見ているのは確か。攻撃力が高いことは想定できるし、ここは速攻でカタをつけるべきだろう。

そう考え、自分はなんとなく出した構え―右腕を無造作に相手に向ける、最初のアグルの構えで、相手を睨みつけた。そのまま横にスライドすると、テラノイドは体を自分に合わせて向けなおした。…よし。このまま、皆のいない方向に誘導できれば。そう考え、ゆつくりと相手の周囲を囲むように動いた。

そして、自分の動きでテラノイドの向きが変わり、テラノイドの正面から完全に遺跡が消えたことを確認したその時、テラノイドが機械的な動作で、再び十字を組んでこちらを狙った。

「ジユワ」

「！オアアアアアア……！」

テラノイドの正面に組まれた十字から、必殺の『ソルジェント光線』が放たれる。飛来する光線が直撃すれば、こちらもただでは済まないだろう。だから、こちらから迎え撃つ。

光線が放たれた瞬間、右腕を頭に添えて体を反らし、青い光が頭部から出たのを確認すると、そのまま頭をテラノイドに向かって振り下ろす。

「デュオツ!!」

『ソルジェント光線』が直撃する寸前で、自分が繰り出した『フォトンクラッシュャー』が激突する。どうやら相手は一定量の光線を撃ち続けているだけらしく、最初からそれなりに力を込めた自分の技の方が、じりじりと押し合っているのが見て取れる。このまま押し切らんと、自分の技にさらに意識を集中する。

「デュワツ!」

ガイアの咆哮と共に、『フォトンクラッシュャー』に込められた光の量がさらに勢いを増し、テラノイドの光線を一気に押し流す。テラノイドはそれに対し、何らリアクションを取ることなく、力負けし光線を撃った状態のまま、自分の技を弱点たるカラータイマー付近に浴びた。

「グワア……」

わずかなうめき声とともに、テラノイドはなすすべもなく吹き飛ばされる。かなりの距離を飛ばされたテラノイドは、着地後地面を数回転がり、うつぶせに倒れる。テラノイドは、体をよじらせるも、どうやらダメージが大きいのか、すぐには立てないらしい。そのまま動けないテラノイドに対し、細心の注意を払いつつ接近、とどめを刺さんと動こうとしたところで――突然、緑色の光の槍が、自分目掛けて降り注いだ。

「デュオツ……!」

それを何とか回避し、再び距離を取るとともに、自分を攻撃してきた存在を探す。そして、その存在はすぐ近くにいた。

(…スファイア！)

そこにいたのは、この近くに現れたと聞いていた宇宙球体スファイアの群れだった。自分の前方から上を取っているスファイアは、こちらを見ているのか、不気味な音と共に滞空している。驚いた、サンダーダランピアになってアグルに撃破されたと聞いていたが、他にもいたとは。

スファイアはそのまま滞空しているが、果たして目的は何なのか。考える。スファイアと言えば、融合能力、そしてスファイア合成獣だろう。この場にいる存在で、彼らが融合できるものは何か。ここは平原であり、大質量を持つのは、自分と、前方にいる…

(…まずい！)

スファイアの恐ろしいくらみを理解し、それを阻止せんとスファイアに攻撃を仕掛けようとする。だがスファイアの反応は早く、彼らの放った光が、いち早く自分の行動を阻害した。

そして、スファイアは行動を開始する。彼らが降下した先にあるのは、自分の攻撃で動けなくなった、テラノイドだった。

「デュ…」

テラノイドもそれを理解したのか、あおむけになり、接近してきたスファイアに対して『ビームスライサー』に似た光弾を放つ。光弾はスファイアに直撃し、爆発させる―だが、スファイアは一体だけではない。迫りくるスファイアに対し、テラノイドは尚も抵抗を続けようとするが、それもむなしく、スファイアとの接触を許してしまった。

テラノイドはスファイアにまず顔面にとりつかれ、必死にはがそうともがく。もがく様はこれまで見たことないくらいに生氣に満ちたものだったが、スファイアはお構いなしに取り付いていく。全身をスファイアに侵され、次第にテラノイドの抵抗が収まると、スファイアは溶けていくようにテラノイドの全身を包み込んだ。そしてスファイアに包まれていた表面が固まり、ヒトガタのように変貌すると、そこにいたのはもはやテラノイドではなかった。

彼は立ち上がり、自分の事を睨みつける。異形に敗北したその姿は、まさしく超合成獣人ゼルガノイドであった。

「ウアアア…ズアア!!」

そしてゼルガノイドは、方向と共に光に包まれた右腕を突き出す。とつさにその延長線上から退避すると、自分が立っていた場所を、橙色の光弾が通過する。光弾はそのまゝ後ろに飛んでいき、遙か遠方の山らしき場所に着弾、爆発した。

…まぎ。考えられるシナリオの中で最悪の事態だ。まさか、テラノイドが現れたか

らつてこうも安直にゼルガノイド出現につながるとは。おまけに、今回ゼルガノイドの素体となったテラノイドは、エネルギーをあまり使っていないし、そもそもエネルギーをどれだけ保有しているか見当もつかない。先ほどまでのテラノイドはあまり賢そうではなかったが、今度は知能の高いスフィアと融合したゼルガノイドが相手だ。先ほどみたく、すぐ光線を当てられるなんてことは起きないだろう。

相手の危険性を踏まえ、今一度気を引き締める。これ以上の進撃を阻止せんと、自分はゼルガノイドに向かって駆けだした。

「デユワツ！」

駆けだした勢いそのままに、飛び蹴りを叩き込む。光の巨人の全力を込めた一撃は、同じく光の巨人の力をもっていなされる。足を叩き落とされ、自分が着地した隙を逃さず、ゼルガノイドの裏拳が迫る。それを何とか受け止め、腕を押しつけ合う力比べの形となった。

：やはり、信じられないパワーだ。怪力持ちならゼットンをはじめいろんな怪獣を見てきたが、その中でもこいつの力は格別だ。それに、可動域の面でも人型に近いため目を見張るものがある。

腕で相手を抑え込んでいる隙に、相手の足に蹴りを叩き込む。だが、ぶよつとした不思議な感覚が広がり、あまり手ごたえを感じない。これは、全身を覆うスフィアの感触

だろうか。肉弾戦はあまり有効打を取りにくいかもしれない。

相手の体に理解を深めていると、突然相手の腕の力が強くなり、そのまま押し返される。ゼルガノイドは自分の硬直を見逃さず、すかさず懐に潜り込むと、腹部目掛けてストレートを放った。

(ぐう……!!)

鈍い痛みと不快感が、全身に広がっていく。その衝撃で生じた吐き気を何とかこらえていると、ゼルガノイドはさらに自分に接近し、力の入らない腕を取ると、そのまま腹部に蹴りを加えた。そして掴んだ腕を軸に、自分の体を背後へと投げ飛ばした。

「グオツ……」

一瞬の浮遊感の後、背中から着地した。着地の衝撃でうめき声が漏れ、痛みが広がっていく。正面も後ろも痛い、この程度ならなんてことはない。だが、この場でじっとしているのは、まずい。痛みをこらえ何とか起き上がると、それと同時に前転を行い、そのまま距離を取った。

ゼルガノイドの存在を背後に感じながら、考える。一連の攻防で分かったのは、相手は強力なパワーを持ち、防御面でも部位によってはスフィアの防御があるという事。接近戦は、あまり良い選択ではないかもしれない。スプリームヴァージョンの怪力ならば対抗できるだろうが、今あいつはまだまだ元気だ。時間制限があるスプリームは、最後

の手段に取っておきたい。

なら、光線技はどうか。思い出されるのは、かつてウルトラマンダイナのソルジェント光線が直撃した際見せたスファイアの防御。ゼルガノイドはダイナの一度目の光線を、胸元に受けるも、そこにいたスファイアで防御したのだ。だが、続く二度目の光線は顔面から胸元にかけて受け続けて爆発したし、それより前にガッツイーグルのトルネードサウダーでひるんだりしている。ここから考えると、ゼルガノイドの防御能力には場所によつて差が生じる可能性があることがうかがえる。なら、そこを試すべきだろう。まず狙うは、顔面からか。

決意と共に立ち上がり、ゼルガノイドの方に振り向く。ゼルガノイドは自分の背後よりも、すこしズレた場所に立っている。相手を確認するとともに、自分は光線技の準備をしようと狙いを定め―後ろに、とあるものを発見した。

(…しまった！)

それが見えたことに、驚愕するとともにしてやられたことを察する。ゼルガノイドの後方には、遺跡の残骸―皆が近くにいるだろう場所が見えた。これでは、光線は撃てない。

そして自分がその状況下に驚き、少しの間硬直したのを、ゼルガノイドは見逃さなかった。奴はテラノイドの時とは打って変わってパワフルな動きで十字を組み、こちら

に狙いを定める。自分が気がついた時には、すべてが遅かった。

「ダア!!」

そして、ゼルガノイドの腕より『ソルジエント光線』が発射される。なすすべのない自分の体に、光線は吸い込まれるように飛んでいき、着弾、そして爆ぜた。

―すべてが、灼けた気がした。

(…くそっ!!)

怪物―ゼルガノイドの放った光が、ガイアに直撃する。叫びながら吹き飛ばされるガイアを見て、ヘツケランは歯噛みした。

(俺には…アルシエと共に戦う事さえできないのか!)

慟哭する。仲間の傷つく姿は、ヘツケランにとっていつも耐え難いものだ。それが自分には手の出せない状況であればなおさらで、今回は先ほどアルシエと会話した事からにヘツケランの心を追い詰めていた。

彼ら『フォーサイト』と『蒼の薔薇』の一団は現在、なんとか遺跡より脱出し、村の建物の上に登り、ガイアと怪物の戦いを見つめていた。そのことも、ヘツケランにさらなる追い討ちをかけてくる。ヘツケランは、先ほどガイアが怪物越しにこちらを見て、動きを止めたのを目撃している。あれは、おそらく何か飛び道具を使おうとして、それ



が自分たちのいる場所に当たる事可能性があったから止めたのだ。ガイアのすさまじい力がある程度見てきたヘッケランには、自分以上にガイアを知るアルシエならそうすることが、容易に塑像できた。

それらの事実へヘッケランがやりきれなさを感じていると、突然背後から声を掛けられた。

「…ねえ、ターマイトさん。ちよつと、いいかしら」

「なんだーアインドラの嬢ちゃん」

ラクユースからの問いかけに、ヘッケランの答えは若干乱暴なものになった。それに気がついたヘッケランが、心の中で舌打ちをしつつ詫びを入れようとするが、気にしている様子のないラクユースが、先に続けた。

「…聞きたい、ことがあるの」

「…なんだ。アルシエじゃないから、答えられるかは…」

「いえ、大丈夫…あの化け物の事を聞きたいわけではないから」

「…？じゃあ、何だつてんだ？」

状況にすぐわかない物言いにヘッケランは訝しむ。その顔を見つめ、ラクユースは口を開いた。

「…ガイアは、何故戦うの？」

「…は？」

意味が、分からない。何を聞いているんだーハッケランの頭の中に渦巻いた言葉は、ラクユースの顔を見ることで収まった。彼女の顔は深刻そうで、悲しそうで、悔しそうでーいろいろな感情が渦巻いているのを、見て取れたから。

ハッケランはラクユースの顔を見て、しばらく黙考し、そして口を開いた。

「…俺は、ガイアが…人間だってことを知っている。それが誰なのかも、知っている。それをおいそれと話すわけにはいかねえけどな」

「…大丈夫よ」

「…そうか。なら続けるぜ。そいつが、一度大負けしてケガした時があつてな、その時、俺は聞いたんだよ。ーなんで、そこまでして戦うんだって」

ハッケランは思い出す。それは、白い怪物ーシビルジャツジメンターギャラクトロンと呼ばれた怪獣とガイアが戦い、敗れた時の話だ。彼はその時、仲間と共にアルシエを探しており、ガイアが敗れ倒れたその場所にアルシエが倒れていたのを見つけたのだ。そして彼女が目覚めた後、いくつかの問いかけを行い、ついに彼女の口から自分はガイアであると聞きだしたのだ。

その時、ハッケランは一つの事を思った。なぜ、戦うのだと。誰かに頼まれたわけでもなく、誰かがアルシエ個人に感謝してくれるわけでもない。そんな孤独な戦いを、ど

うして続けていたのかと。英雄と呼ばれるべき戦いをして、しかし英雄と呼ばれることはないのに、どうしてと。当時のヘツケランは、あるいはイミーナもロバーティクも、アルシエの戦いに気づいてやれなかったことを悔やんでおり、それを止めようと思つていたので。だが、彼女の返事、そして覚悟を見て――最終的にヘツケラン達は折れ、代わりに彼女を応援するということになったのだった。

それら当時の事を思い出しつつ、ヘツケランはアルシエの言葉を紡いだ。

「悲鳴を上げる人がいるから、だってよ」

「…それは、どういう？」

「アル…ガイアは、こう言つたんだ。自分が戦うのは、英雄とか、そういうのになりたいんじゃないなくて、悲鳴を上げる人がいるからだつて。その人たちのために戦つて、みんなを守りたいから、戦うんだつて――そんなことを、本気で言いやがつたんだぜ？」

「…そう、崇高な方なのね」

ラキユースはその言葉を、噛み締めるように呟く。だが、その言葉はヘツケランには看過できなかつた。

「…そんなんじゃないよ。崇高な理念、みたいなもんをあいつは抱いてない」

「…え？」

「あいつはな、それが当たり前のことだつて、やりたいだけなんだつて言つててな…あ

つは、気弱だけど賢くて、人とは変わった視点を持つてて、頼りがいがあってー優しいんだ。誰かのために戦うって、当たり前前に、普通の事のように思ってるんだ。それが俺たちと違う世界から来たんじゃないかってくらいに、眩しくてーワーカーなんて、似合わない位にな」

「…そう、だから、彼女は戦えるのね。戦うための、強い理由があるから」

「…？」

何かを悟ったような言葉と共に、ラキユースの表情が引き締まる。その決意に満ちた顔にヘツケランは少し戸惑うが、ラキユースは彼に目もくれず、自分の右腕の、目立たないが少し大きめの籠手の表面を外し、中に仕舞っていたものを取り出した。

それを見た時、ヘツケランに電流が走る。彼は、そのアイテムが何なのか、アルシエから聞いていたのだ。そして周囲の者達も、ヘツケランとラキユースの会話を見ていたのか、彼女の方を見て、一様に驚いていた。ある者達はそれが存在することに対し、ある者達はそれを彼女が手に取ったことに対し。

皆が絶句する中、一番先に硬直が解けたヘツケランが、ラキユースに問いかける。

「嬢ちゃん…あんた」

「…ウルトラマンよ…アグルよ」

だが、問いかけが聞こえてないかのようになり、ラキユースは続ける。彼女は出てきたア

アイテム『アグレイター』を手に取ると、それを眺めながら語り掛けた。  
「何故、戦う?…何の、ため、なの…?」

ラキユースはそこまで語り掛けると、『アグレイター』を右手首に装着する。そして腕をだらんと下げ、『アグレイター』の結晶体が点滅し、翼が開いた。彼女はそれを、正面に構える。『アグレイター』が反転し、大きく翼を広げる。

そしてラキユースは、教えてもらった光の名を、あらんばかりの声で叫ぶ。

「アグルウウウウウウウウ!!」

そして、『アグレイター』の翼から青い光が飛び出し、彼女を包み込んでいく。皆が驚愕で動けない中、青い光となったラキユースは飛び出し—そこから、青い光の巨人、ウルトラマンアグルが出現した。

## 新たなる巨人・急 後編

(が、はっ…)

全身が灼け、はじけ飛んだかのような痛みが蝕む。これが、光の巨人の必殺光線の力なのか。全身が熱く、うまく呼吸できない。視界もちかちかして、認識が出来ない。今まで戦ったどんな怪獣のいかなる能力とも違うダメージが、自分をその場に磔にしていた。

そして、無情にも『ライフゲージ』の点滅が始まり、胸が苦しくなる。ゼルガノイドの『ソルジエント光線』が、これほどまでとは。改めて、相手がどういう存在なのかを理解し、その強さに戦慄する。

そしてうまく動かない体が、何者かに持ち上げられる。首をつかまれ、そのせいでますます呼吸が苦しくなる。まだ安定しない視界を何とか正面に合わせると、そこに自分を片手で持ち上げる超合成獣人の姿があつた。

「K i S H A A a a a …」

ゼルガノイドの裂けたような口が開き、中から怪獣らしい叫び声が聞こえた。歓喜の雄たけびと共に、自分の体がさらに持ちあがり、首がますます絞まっていく。なんとか

相手を振りほどこうと腕につかみかかるが、力の差は歴然でまるで動く気配がない。痛みと息苦しきで、しだいに意識が遠のきつつあるのを感じた。

ああ、まずい。まさか、一撃ももらっただけでこれほどまでのダメージを負う事になるとは。この状態では光線技を使って振りほどこうにも技が限定されてしまうし、肉弾戦も分が悪い。万事、休すか。諦めるつもりは毛頭ないが、この状況で打てる手は限りなく少ないという事実が、自分の心を苦しめていった。

そして、全身に力が入らなくなり、相手をつかんでいた腕も力を失い、垂れさがりそうになったその時――

「――ディアアアアアア!!」

――青い光が、地上に落ちる。

後方より、何か大きな存在が、こちら目掛けて飛んできているのを感じる。何とかこちらに顔を向けてみれば、そこには飛び蹴りの構えでこちらに急接近する青い巨人――ウルトラマンアグルの姿があった。

アグルはそのままの勢いでゼルガノイドに接近、ゼルガノイドが反応するよりも早く、その頭部を蹴り飛ばす。ゼルガノイドは当然吹き飛ばされ、その衝撃により自分も投げ出されることになった。

「デュオッ!」

変な声が出てしまったが、これで何とか解放された。頭を振り、なんとか意識をしつかりさせようとした自分の前に、何かの気配を感じる。そこには、自分を見下ろすウルトラマンアグルの姿があった。

(…ああ、本当に、アグルだ)

自分の前に、自分とは違うウルトラマンがいる―その事実には、自分は感動と、安堵を覚える。どうやら、孤独なウルトラマンとして今まで戦ってきたことは、自分にとつて思つた以上に大きかつたらしい。

そして、こうして対面した以上、気になる事は一つ。やはり、変身しているのはラキユースさんなんだろうか。もしそうなら、彼女とコンタクトを取りたい。彼女は自分に正体を明かした際、変身する事への嫌悪と恐怖を感じていたことを自分に告げた。その事実が、余計に彼女と話したいという欲を掻き立てているようだった。

…意識を、アグルに集中する。自分の五感を、ウルトラマンの持つ超自然の力に同調させていく。感覚を研ぎ澄まし、その眼で見据えれば、アグルの中に別な光を感じる。テラノイドには全くなかったその光は、光を見つめる自分の存在を認めたのか、少し揺らいだ気がした。その動きで確信する。この光こそ―ラキユースさんの心だ。

彼女の心に届くように、意思に言葉を浮かべ、それを紡いだ。

(…ラキユースさん。そこにいるのは、ラキユースさん、なんでですね?)



(…ええ、そうよ。そこにいるのはアルシエ、やつぱりあなた、なのね…?)

光となったラキユースさんから、少し戸惑うような声が聞こえた。やはり、ラキユースさんだ。彼女の方も自分の事を認識できたようで、自分に対し手を伸ばしてくれた。自分はそれを、掴もうとして――

(…ラキユースさん、後ろ!!)

――背後にて光を放つ、ゼルガノイドの姿を見た。ゼルガノイドは先ほど外した光弾を、こちらに向けて放とうとしている。自分の声でそれに気がついたのか、アグルもまた後ろを振り返り、それを確認した。

(…!)

ラキユースさんの、何かを決意したかのような声なき声が聞こえる。それと同時に、アグルはその場で両腕を大きく開き、ゼルガノイドと自分の間に立ちふさがった。…動けない自分を、庇おうというのか。

その行動に対し、自分が何か動くよりも早く、ゼルガノイドの光弾がアグルを直撃する。アグルの表面に爆炎が広がり、その姿は煙に包まれてしまった。

(ラキユースさん!!)

思わず声を上げるが、それは届いたのだろうか。自分が何とか立ち上がろうとしつつ、目の前から視線を離せない中、やがて煙が晴れていく。

…そこにいたのは、無傷のアグルだった。『ライフゲージ』も変化はなく、ダメージが少ないように見える。それは光弾の威力がそこまで大きくなかったからか、はたまたアグルに非凡な防御力があるからか。なににせよよかったと、心の中で安堵した。

「…オアツ！」

そしてアグルは、掛け声とともに煙を振り払うように右腕を動かし、そこから光の細剣―『アグルセイバー』を発生させる。それを振るい、光が空を切る独特な音を響かせたのち、アグルはその剣をもってゼルガノイドに切りかかった。

「デウアアツ!!」

「ダアツ！」

アグルとゼルガノイドの咆哮が激突し、両者の距離が一気に縮まる。剣を振りかぶるアグルに対し、ゼルガノイドは待ち受ける形となった。そしてアグルの剣が素晴らしい速さで振るわれ、ゼルガノイドの体を切り裂く…はずだった。

ゼルガノイドはただ、その剣を体で受け止める。すると、剣が直撃した部分がうごめき、剣を完全にはじいてしまった。

（…スファイア！）

その答えにたどり着くのに、時間はかからなかった。ゼルガノイドの纏うスファイアの鎧は、ダイナの必殺光線すら弾くのだ。アレくらい造作ものないのだろう。これは自分

も加勢すべきだ、と立ち上がろうとするが、うまく体が動かない。繰り返すが、自分の受けたダメージは、本当に大きかったのだ。

そして剣を防がれたアグルは、その状況を見て一瞬硬直し―剣を、叩きつけるように何度もゼルガノイドに浴びせ始めた。まるで何かを振り払うかのような彼女の動きに、焦りを感じるが、先程のようにラキユースさんの声が聞こえることは、ない。あの声だけは、もう少し集中しないとできないのか？

そんな事を考える自分を尻目に、アグルの攻撃の速度はさらに上昇する。だが、鉄壁の防御力を誇るゼルガノイドに、あまりダメージは見受けられない。しかし最初は棒立ちで攻撃を受け続けていたゼルガノイドも、飽きたのかはわからないが、何度目かに振るわれたアグルの剣に対し、その腕をつかむことで停止させた。

「オウ……ッ！」

腕を無理やり止められたアグルから、呻き声が聞こえる。だがゼルガノイドはそれを用意に介さずに、アグルをつかむ腕をそのままに、逆の腕でアグルの腹部を殴る。又うめき声のようなものが漏れるアグルに対しさらに腹部への攻撃を加えたのち、さらに顔面へのストレートを加える。同時に腕が離され、その勢いでアグルは後退した。

だが、アグルは何とか踏みとどまり、転倒を防ぐ。そしてバックステップを取り距離を取ると、両腕を広げ、そこに泡のような光の帯を発生させた。……まちがいない、あれ

は『リキデイター』だろう。

(ら、ラキユースさん、待って……！)

しかし、相手はあのゼルガノイドだ。光線技は狙う場所を考えないといけない。それを伝えようと声を発するように念ずるが、アグルには届いてないのか、そのまま『リキデイター』の発射準備が進められる。

そして、アグルは発生した光球を、腕で撃ち出す様に放出する。完璧な『リキデイター』が、ゆっくり近づこうとしていたゼルガノイドに命中する。衝撃でのけぞるゼルガノイドに、続いて発射された第二第三の『リキデイター』が殺到し、次々着弾するとともに、爆発していった。

……やはり、アグルは冷静ではないらしい。いきなり光線技を連射したのもそうだが、あの『リキデイター』の撃ち方は、すべてが命中するわけではなく、数で面を制するよくな、乱れ撃ちだった。つまり有効打になるのは何発も打ったうちの命中した一発二発くらいであり、それもどこに当たっているか分かったものではない。ゼルガノイドは爆発の煙に包まれていったので、なおさらだ。ここから推測される答えは一つ。アグルは、ラキユースさんは戦いを早く終わらせようと、焦っているのだ。

そして次第に煙は晴れていきーそこから、ゼルガノイドが姿を現した。やはり、アレで倒せる相手ではなかったのか。アグルはその姿に驚いたのか、棒立ちになっている。

そしてゼルガノイドはそんなアグルを見据え、見覚えのある十字を組んだ。

(…まずい、ラキユースさん避けて!!)

思わず叫んでしまうが、その叫びもむなしく、ゼルガノイドは必殺の光線を放つ。アグルもそれに気がついたようだが、一步及ばず、その光線をもろに浴びる結果となった。

「ウオアアアアアアア…」

叫び声と共にアグルは吹き飛ばされ、そのまま着地した後数回転がり、地面に倒れこんだ。そのまま立ち上がる気配のないアグルに、ゼルガノイドが迫っていく。

…ああ、何をしているんだ、自分は。いったい今までなんで戦ってきた？守りたいからだろうか？なら、今大事な同胞が命を失おうとしているのに、ここで寝ているのか？

(…そんなわけ、ない…!!)

そんなわけ、あるか！そう自分に言い聞かせ、全身に力をみなぎらせる。痛みと熱さはまだとれないが、そんなものに構っている暇はない。なんとかそれらを抑え込み、四肢に力を籠め、そのまま立ち上がった。

さあ、反撃だ。全身に走る痛みは無視して、自分は全力でゼルガノイドに向かって駆けだした。ゼルガノイドもこちらの足音に気がつき、視線を向ける。それでいい。奴の意識は、目論見通りこつちに向いた。こちらに注意が向いている奴に向かつて、自分はその手より光弾を放つ。

「ダアッ！」

自分が放った『ガイアスラツシユ』は、見事ゼルガノイドの顔面に命中した。そこから火花が散り、ひるむゼルガノイドを、自分は抱き着くように抑え込み、そのまま押し出した。

もちろん相手もそのままでは終わらず、すぐに回復し、抱き着く自分の背に拳を振り下ろす。一回目のそれは何とか耐えたが、二回、三回と繰り返され、とうとう耐え切れずに叩き落されてしまう。地面に這いつくばる自分に、ゼルガノイドの足が迫る。それに対してはなんとか反応が間に合い、地面を転がって回避した。

そして、立ち上がったところでゼルガノイドと再び目が合う。今度はゼルガノイドが先に動き、自分に向かって殴り掛かってくる。力と速さが伴ったその拳を何とか見切り、腕を全身で抑え込むように受け止める。そのままゼルガノイドの腕の関節を極め、相手に縫りつくように動きを抑え込んだ。

（「ラキユースさん！ラキユースさん、大丈夫ですか！」）

その間、倒れ伏すアグルに意識を向け、その中にある光―ラキユースさんに声をかける。先ほどはどうやって声をかけることが出来たのかよくわからないが、関係はない。ゼルガノイドはその怪力で抑え込む自分を振り回して振りほどこうとしているが、何とかこらえつつ、問いかけを続ける。

(…あ、ああ…)

(！ラキユースさん!?)

そして、微かにだがラキユースさんの声が聞こえた。思わず、名前を呼ぶ。だが、彼女の声はかなり弱弱い。やはり、ダメージが大きかったのか？

—その考えが間違っていたと気づくのに、時間はかからなかった。

(…めて、やめて、やめて…)

(ラキユースさん!?!どうしたんですか!?)

(やめて、やめて、やめてやめてやめてやめて)

(…え)

聞こえてきたその声に、思わず力が緩みそうになる。ゼルガノイドはこれを機と見たのか一気に動こうとするが、何とか拳が相手の顔面に間に合い、動きを封じることが成功した。

そのまま、意識をラキユースさんの方に向けなおす。ラキユースさんは壊れた機械のように、同じ言葉を繰り返していた。

(やめてやめてやめてやめてやめてやめて、やめてやめてやめてええええ！)

(ら、ラキユースさん、しっかりして！)

(嫌、嫌嫌嫌！これは、違う、この感触は、違う！これは、私じゃない！)

(…ラキユース、さん…！)

ラキユースさんは、自分の問いかけに反応することなく、何かから逃れようともがいてた。しかし、荒れる彼女の心とは裏腹に、体たるアグルは、ピクリとも動かない。心と体が、一致していないのだろうか？

何はともあれ、これはまずい。必死にゼルガノイドを抑えつつ、ラキユースさんの声を聴くという、余裕のない戦いが続く。

(変わってる、変わってる変わってる！私は、変わっていく！やめて、やめてよお…)

(…しっかりして！ここには、まだ敵が…！)

(もう私の感覚がない、私はここにはいない…誰か、誰か助けて…!!)

(…！)

…ああ、そういう事なのか。彼女の心は、今壊れている。バラバラになって、感情が垂れ流しになっている。ひよつとしたら、今の彼女にはもう何を言っても無駄なのかもしれないのでは、とそんな考えが自分の中によぎる。そんな絶望を肌で感じたからか、不意に自分の力が抜け、押さえ込んでいたゼルガノイドの力で投げ飛ばされてしまった。

(ぐう…！)

「グオツ…！」



そして、ゼルガノイドは容赦なく、自分の背を踏みつけてくる。肺から空気が抜けたような、そんな感覚が自分を襲う。さらにゼルガノイドは、自分を何度も踏みつけ、的確にダメージを与えてきた。

…ダメージを受け続ける自分の頭が、次第にラキユースさんへの呼びかけを諦めるという考えに染まっていく。そもそも、今の彼女にこちらの呼びかけに答えられるほどの余裕があるとは思えない。呼びかけることが意味を持たないというのなら、ここは、彼女の事は後回しにして、先にこいつをどうにかして――

(…それで、いいの?)

自分の出そうとした結論に、他ならぬ自分が反論する。果たして、それでいいのか? あんなに苦しんでいる彼女を見捨てて、それで勝てばいいのか? それが、本当にウルトラマンなのか?

…違う、そうじゃない。自分は、なんのために結局戦おうと決めたのか。その理由は、ただ一つ。大事な人たちを、守りたかったから。大好きな皆に、笑顔でいてほしかったから。その為に、自分はウルトラマンとして戦うことを決めた。そういうウルトラマンであろうと、そうこの光に誓ったのだ。あそこで今苦しんでいる…いや、これまでも苦しんできたであろうラキユースさんを、見捨てることはできない。やっと見つけた唯一の同胞を、見捨てたくなんて、ない。ならば、やる事はただ一つ――

（「ラキユースさんを、助ける！だから」）

—自分に、力を貸して。心の底から、自分の纏う光—ガイアに向かつて、希った。  
そして、奇跡は起こる。

（「!?これは……」）

気がつくのと、自分の周りを、金色の光の粒が包んでいる。と思つたら、今度は村の方から、間欠泉のごとく光の奔流が溢れ出していた。あれは、なんだ？

…待て、ここは、そもそもどういふ場所だった？ここには確か、遺跡があつて。そしてそこには、光の巨人が、石となつて眠つていて—

（「まさか！」）

「!?ダアアツ!?」

その事実に関自分が思い至ると、ゼルガノイドが光に弾き飛ばされるのは、同時だった。そして、周囲を飛んでいた金色の光は、そのまま自分の『ライフゲージ』に吸い込まれていく。光が入ってくるごとに、自分を蝕んでいた痛みが消え、胸の苦しみも和らいでいく。力がみなぎり、傷が癒されていき、そして赤く点滅していた『ライフゲージ』は、青い光を取り戻した。

何故、彼らが力を貸してくれたのか、それはわからない。だが、この奇跡を無駄にするわけにはいかない。そして、ならば何をすればいいのか、その答えはすでに分かつて

いた。

(…ありがとう、ガイア)

この状況を導いてくれたであろう光にそう心の中で告げ、自分は起き上がる。先ほどまでとは打って変わって力に満ち溢れた自分の体を確認し、そのまま倒れ伏すアグルに近づく。アグルの中からは、いまだ苦しむラキユースさんの声がした。

(嫌、いや、いや…)

(…ラキユースさん、今行きます)

苦しむラキユースさんにそう告げると、うつぶせになっていたアグルの体を起こす。今まで必死になっていたからわからなかったが、アグルの『ライフゲージ』も点滅しており、自分も含めあまり時間は残されていなかったことを示していた。危ない所だった。

なら、早く済ましてしまおう。自分は右の掌に意識を集中し、そこにガイアに教わった光の集め方をイメージする。すると、そこから赤と金の光が現れ、次第に溜まっていく。自分はそれを、アグルの『ライフゲージ』にかざす。

—そして、自分の意識は、別なところへ飛ばされた。

「…ラキユースさん、今来ました」

「…アルシエ、なのね？」

そこは、満天の星空が広がる空間だった。足場もなく、果てもないこの場所で、自分とラキユースさんだけが存在している。自分の問いかけに、意外にもラキユースさんは冷静に返してくれた。ラキユースさんはそのまま、自分の手を悲しげに見つめつつ、言葉が続けた。

「……めんなさい。今は落ち着いているけど、取り乱してしまったわ」

「そう……ですか。落ち着いているなら、いいんですけど……」

「……やはり、私は怖いのね」

ラキユースさんは自嘲するかのような口調で、そう告げる。彼女は、この状況を許せないのだろうか。その口調のまま、彼女の言葉は続く。

「あの時、あの巨人の攻撃を受けて、私の体を痛みと熱さが走った。……その感覚は、私がかこれまで味わった何よりも激しいものだった。けどそれ以上に、私が感じたのは、ウルトラマンの痛みだった」

「ウルトラマンの、痛み……」

「ええ……私ではない、別な存在の感覚。それを私は、無理やりつなげられたような形で過ごしてきた……先程は、その感覚が激しかった分、私は、私ではなくなつたことを自覚させられて、混乱してしまつた……」

そう言うと、彼女は目を伏せ、うつむいてしまう。……ようやく、わかつた気がする。要

するに、彼女はウルトラマンを生理的に受け付けられないのだ。ウルトラマンになった時、いつもと微妙にズレのある感覚を、彼女は受け入れられない。それがただ動くだけでもダメなのなら、あのゼルガノイドの一撃クラスならあなるものなのだろう。これは、自分にはまるで分らない感覚だった。

ゆつくりと近づき、怯えているであろうラキユースさんの手を取る。驚くラキユースさんの顔が、少しだけおかしかった。彼女と目と目を合わせると、そのまま語りかけた。

「…大丈夫、ラキユースさんは、人間です」

「アルシエ…」

「そういう風に、自分に怖いものがあつて、苦手なものがあつて、それを恐れることが出来る、悔やむことができる…それって、すごく、人間らしいことなんです。だから、そう考えることが出来る限り、ラキユースさんは何があつても、ラキユースさんという人間であり続けられるんです」

「…ありがとう。でも、私が人間だったとしても、この感覚は拭えない。拭えなくて、戦うことが出来ない私なんて、ウルトラマンらしくない…」

「…いえ、そんなことはないですよ」

「え…?」

自分の言葉に、ラキユースさんは不思議そうな顔を見せた。自分も、その顔を見つつ、

思い出す。ここではないどこかで、ウルトラマンとして戦った者、その中でも、ウルトラマンという存在に苦しんだ者を。

「…自分や、ラキユースさんではない、別な場所のウルトラマン達にも…そのウルトラマンに変身する人たちにも、自分が何者なのか、そう悩み続けた人たちがいました。恐怖や、一時の迷いで戦えなくなつたウルトラマンも、たくさんいます。彼らは最終的には立ち上がりましたけど、そういう面を含んでのウルトラマンなんです」

「…そう、なの？」

「はい。だから、ラキユースさんも、苦しい思いがあつたからって、それで戦いづらいつらって、そんなことであなたがウルトラマンにふさわしくない事なんてない。あなたにはまだこれからがある。転んでも、また立ち上がればいい。泣いても、また笑えばいい。それができれば―あなたは、ウルトラマンです」

「…そんな見方、したことなかつたわ」

ラキユースさんは意外そうな口調で、感慨深そうにそう告げる。そこまで告げた所で、自分が彼女の言葉から出た問いを思い出す。ウルトラマンが、怖いものなのか？…不思議なことに、いつの間にか問いかけを忘れていたその問いに、今はすらりと答えが出てきた。

「…自分も、ウルトラマンになるのは怖いです」

「え？」

「自分がウルトラマンの事を知っているからって、その知識上のウルトラマンと今の自分が同じという保証はどこにもない。だから、自分がどうなるかなんて、想像もつかない。だから、ラキユースさんと同じで、自分も怖いんです。：ラキユースさんが自分の前で告白してくれて、今更怖気ついてしまいました。最初に気がつくべき事だったんですけどね」

「そんな…私の、せいで…？」

そう告げるラキユースさんは、申し訳なさでいっぱいのように、今にも泣きだしそうに見えた。自分は彼女の手を握りしめ、「気にしないでください」と伝える。

「むしろ、ありがたかったです。今まで、自分が見て来なかったことを、見ることが出来ましたから。：それに、あなたと一緒になれて、あなたの気持ちがちよつとだけわかって、嬉しいくらいです」

「アルシエ…あなた…」

「…だから、ラキユースさん」

そう言つて、自分はラキユースさんにぐつと近づく。ラキユースさんはそんな自分の行動に驚いているが、動く気配はない。一番重要なことを伝えたかったから、これはありがたかった。彼女を逃がさないようにして、言葉をつむぐ。

「—あなたはもう、一人じゃない」

「…!!」

「あなたの受けた呪いは、自分にもかけられました。これから自分は、あなたのように悩んで、怯えて、苦しむことになるでしょう。あなたと、同じで」

「それは「だから、一緒にがんばりましょう」…え」

「距離は離れることになっても、自分はあなたと同じです。だから、同じようにウルトラマンと、そして人間として生きて、苦しんで、楽しんで…もしその先が人の道を外すものだったとしても、自分だけは、あなたと一緒にいます。あなたと同じ場所にいます。だから—もう、あなたは、一人じゃない。もう一人で、苦しむことなんてないんです。同じ自分が、一緒ですから」

「…あ」

ラキユースさんは、自分の言葉に、ただ声を漏らした。そして、瞳からは、一筋の涙が流れた。ああ、どうやら少しは、自分の言葉が伝わったらしい。少しだけ、安堵した。

…あなたはウルトラマンとして、自分と変わらないと伝えたかった。そんなに自分の事をすごいと思う必要はないと言いたかった。だがそれ以上に、あなたは一人ではないと伝えたかった。自分も、ウルトラマンとして戦う事を、今まで共有できたことはほとんどない。だから、ウルトラマンになって一人でその力を抱えていた。そしてそれはラ



キュースさんも同じだろうと、勝手に考えていた。彼女は自分のような、前世の記憶がある人ではなく、またそんな人と会った様子でもなかったから。だから、もう一人で苦しむ必要が無いんだってことを、自分は伝えたかったのだ。…自分も、一人でウルトラマンが怖くなったことを、抱えられる自信はなかった。我ながら、どうしてその答えにたどり着けたのか、記憶をたどってもわからないが—この答を得ることが出来たのは、自分と彼女にとつて大きな一歩になった、と思う。

さて、ラキュースさんは声もなく、ただただ自分の前で泣いている。彼女の涙を自分の手で拭い、なるべく笑って、彼女に語り掛けた。

「大丈夫ですよ、自分も、そこそこウルトラマンやって平気ですから。だから、変な変わり方する事なんて案外杞憂だったりするかもしれません」

「…アルシェ」

「それに、村の前での話に戻りますけど、そんなに自分をすごいだなんて思う必要はないです。自分もいっぱいいっぱいだったし、皆がいなかったらここまで来ることはできませんでした。だk「アルシェ！」—うぷ！」

突然、視界が硬めで大きな何かでふさがれた。それがラキュースさんの胸のアーマーだという事に気がつくのに、少しの時間を要した。というか、これ現実同様硬いのか。ちよつと驚いた。

彼女は自分を抱きすくめたまま、絞り出すように口を開いた。

「怖かった、苦しかった…皆がいるのに、わかってもらえる人がいないことが、何よりもつらかった！」

「わぶ…ラキユース、さん」

「私が怖いと思っても、それを理解してくれる人なんて、いなかった！皆心配してくれたけど、私はどこまでも一人ぼっちだった！皆自分の事がわからない顔をして、でもつらそうで、それが嫌で、もう嫌な思いをさせたくなくて、抱え込んで…っ！」

「…わかります。ウルトラマンって、少ないですから」

「うん…だから、あなたが一緒にいてくれるって言うてくれて、うれしかった！私と一緒に、ウルトラマンが怖いつて言うてくれたこと、嬉しく思ってしまった…ごめんなさい、許して、ほしい…！」

「大丈夫ですよ。自分は離れません。心は、ずっと一緒です」

「…あ、ああああああ！うあああああああつ!!」

そうして、彼女は思いっきり泣いた。今までの苦しみを、吐き出すように。力強く抱きしめてくる彼女を、自分は甘んじて受け入れた。

そして、しばらくたった後、彼女は泣き止む。少し顔を赤くして、それから周囲を気にするようになった後、自分に語り掛けた。

「ご、ごめんなさいね。見苦しい所、お見せしてしまつて…」

「大丈夫ですよ。ここには、どうやら自分とラキユースさん以外いませんし」

「そう…そ、そういえば、ここも不思議なところね。外は、今どうなっているのかしら」  
ラキユースさんは気を紛らわせるように、周囲を見渡す。それに合わせるように、自分も周りを改めて確認した。

…やはり、満天の星空が広がるばかりだ。ここは、自分とラキユースさんの力が作つた心の世界みたいな場所かと思つていたが、何かが違う気がする。そんな思いが、自分の中にあつた。

そんなことを考えていると、突然星々が強く輝き―それらが一斉に、自分たちの元に殺到する。

「えっ!？」

「!アルシエ、こつち!」

驚く自分を、ラキユースさんが引つ張り込む。彼女の懷で、周囲に光が集まる事を確認する。光はこちらと一定の距離を取り、強く輝いて自分たちを取り囲んでいた。

そしてその光が強く輝くと、自分の頭の中に声が聞こえた。

「…止めて、ほしい?」

「え、これつて…アルシエ、あなたにも聞こえるの?」

「え、ええ……」

どうやらラキユースさんにも声が聞こえていられしく、戸惑いつつも彼女の問いかけに応えた。周囲の光は、輝きつつも自分に一つの事を伝えてくる。―どうか、止めてほしい、と。

しかし、止めてほしいとはどういうことか？

「…アルシエ、この光が言っている事って、どういう事なのかわかる？」

「…少し、考えてみます」

ラキユースさんも同じことを考えていたみたいで、彼女から質問が出る。自分もとりあえず、考えてみることにする。外がどうなっているのか気になるが、それはそれだ。

さて、まずは語り掛けてきたこの光の正体から考えてみよう。といっても、これについては見当がついている。彼らは、この地の遺跡内部にいた光の巨人の石像、その中に眠っていた光だ。出てきた場所、こことは違うどこかのルレイエの遺跡で起きた奇跡と今回のケースの類似性からそう考えられる。なら、彼らが止めてほしいと思うのは何者か。この場にあるものは―そうか！

「…わかりました」

「…それで、彼らは何を求めているの？」

「彼らは…ゼルガノイドを、操り人形になった自分たちの同胞を止めてほしいんです」

「…同胞…」

ラキユースさんは、あまりよくわかっていない様子で、その言葉を口にする。しかし自分には、それ以外の答えは思いつかなかった。

そもそもゼルガノイドは、先ほど戦っていたテラノイドにスファイアが融合した姿。そして、テラノイドは村長の言葉からも、光の巨人達の一部をかき集められて作られた、いわばフランケンシュタインの怪物なのだ。そう考えれば、彼らはゼルガノイドあるいはテラノイドを止めてもらうことで、もうこれ以上誰かに自分たちの仲間の一部が利用されるのを止めてほしいと考えるのが自然だろう。

そのことをかいつまんでラキユースさんに話すと、彼女も納得したようで、光を見る目が少し変化したように見えた。

「…なるほど、それで、私たちをここに呼んだ…そういう事なのね？」

「ええ、おそらく…自分たちが話をする事が出来たのは、彼らなりの配慮、みたいなものかと…」

「…なら、それに応えなくてはね。アルシエ、協力してくれるかしら」

「…いいんですか？」

ラキユースさんの言葉に、若干驚く自分がいる。彼女は、どう見てもウルトラマンの力を使う事に乗り気には見えない。そんな彼女が、自分よりも先にそういうことを言い

出すとは。

だが彼女はそんな自分を察したのか、苦笑しつつ「私も恩知らずではないもの」と告げた。

「あなたとの語り合いは、私にとって重要な事だった…それをセッティングしてもらったんだもの。これくらいなら、何とかこなして見せる」

「ラキユースさん…」

「…でも、今までまともに向き合ったことのないウルトラマンの力を、こうやって振るうのにはまだ勝手がわからない…だから、お願い、アルシエ。あなたの力を、貸してちょうだい」

「…はい！」

ラキユースさんの不安げな顔から洩れた問いに、力強く答える。その甲斐あってか、彼女は安堵したような、綺麗な笑顔になった。

そしてその瞬間、周囲の光も再び動き出す。彼らは自分の周りを高速で旋回し、いくつもの光の筋となって自分たちを覆う。そしてその筋から、自分とラキユースさん目掛け、光が伸び、貫いた。

「あー」

思わず、自分の口から言葉が漏れた。それと同時に、自分の中から何かが湧き上がっ

てくるのを感じる。

(…これは、記憶)

湧き上がってきたのは、自分の記憶。前世の事、今の世界の事。ウルトラマンに関わる事、今の生活に関わる事。そして大事な人たちの記憶が、泡のように現れては、はじけて消えていく。そんな不思議な感覚が、光と共に自分を貫いていた。

そして、不意に現れたひととき強い光で、自分の心象から引き戻される。自分とラキュースさんの中から現れたその光は、自分たちの変身アイテム『エスプレンダー』と『アグレイター』からあふれ出ていた。それらはまばゆい光を放ちつつ、周囲から伸びる光を取り込み、輝きを増していく。そしていくらかの光を取り込んだところで、爆ぜたような白い光を放った。

その光が止んだ後、自分たちの前に在ったのは、まるで違うアイテムだった。

「え…これは、一体…?」

「な…どうして、これが…?」

ラキュースさんが戸惑いの、自分が驚愕の声を上げる。自分たちの目の前にあるアイテムは、それだけ衝撃的な姿に変貌していた。そして、それらすべてを、自分は知っている。

まず見えるのは、二つある青いアイテム。両端にハンドルがあり、中央には何かをは

める台座のようなものがある。それは、まさしく『ルーブジャイロ』そのものであった。続いて目に入るのは、二つある透明な結晶。後ろには三つの角のようなものが折られたまれているのが見え、一つは橙色、もう一つは青色。橙色の結晶は正面にガイアの絵と『地』の文字、青色の結晶にはアグルの絵と『海』の文字が浮かぶ。まさしくこれは、ガイアとアグルの『ルーブクリスタル』であった。

そして最後に見えたのは、一つだけのアイテム。短剣の柄に円形の発光体が備え付けられたそれは、ウルトラマンオーブの力の発現の証、『オーブリングNEO』だった。

なぜ、これらがここにいいのか。『エスプレンダー』及び『アグレイター』はどこに行つたのか。いろいろ疑問は尽きないが、正面のアイテムを見てみると一つだけわかる事がある。このアイテム達こそ、同胞を止めてほしい光の巨人たちがくれた力。これが、彼らなりの報酬のようなものという事が。

自分はアイテム群を少し見つめ、ラキユースさんの方を見る。ラキユースさんも同じタイミングで自分の方を向き、視線がぶつかる。そして一瞬の間があき―彼女が大きく頷いたのを見て、自分も頷き返した。どうやら、何をすればいいのか、わかったらしい。意を決し、自分とラキユースさんはほぼ同時に、目の前のアイテムに手を伸ばした。

「セレクト！クリスタル！」

まずは『ルーブクリスタル』を取って、後ろの角を開く。自分は二本角、ラキユース



さんは一本角を選択して開き、『ルーブジャイロ』にセットする。

《ウルトラマンガイア!》《ウルトラマンアグル!》

ほぼ同時にジャイロの中心の透明な部分が展開され、そこから声が鳴り響いたのを確認した後、自分たちはこれまた同時にジャイロを天高く掲げ、言霊を紡ぐ。

「纏うは大地! 生命の営み!」

「纏うは大海! 生命の育み!」

そして、ジャイロのハンドルを引っ張る。中央の透明な部分が回り、星々のように輝いていた光が筋のように走る。そしてそこから光が溢れ出すとともに、自分たちは自信が纏う光の名を高らかに叫んだ。

「ガイアアアアアアアアア!!」

「アグルウウウウウウウ!!」

—そして、自分たちは現実に戻る。地面が近づき着地した時、自分はいつも通りの、ウルトラマンガイアだった。

…いや、違う。これまでとは、明らかに違うところがある。

「これは…」

自分の腕を見る。そうして自分の目に映し出されるのは、ウルトラマンガイアの腕だ。ここまではいつも通り。だが、今はそれだけではなく、ガイアの腕と重なるように

して、自分自身の腕が見えていた。

それだけではない。今自分は、ウルトラマンガイアの中ではつきりと人の形をとっている。周りの空間は赤く燃えているようで、そこに自分が浮かんでいるのを知覚できる。今の自分はウルトラマンガイアとして外が見えるのと同時に、ガイアと共にある自分の体を把握できていた。

「…まるで、インナースペース」

この状況を表すのにぴったりの単語が、思わず口から漏れる。そう、今の自分が浮かんでいるのは、新世代ヒーローズでおなじみとなった、ウルトラマンの中の人を表す空間、インナースペースそのものだった。

これは、あのジャイロの効果なのか？そう思つてすこし自分の周りを探ると、果たしてそこには『ルーブジャイロ』及び『ルーブクリスタル』があった。やはり、これが原因なのか？そういうえば、アレはどこに…？

「ダアツ！」

その思考は、突然の咆哮で遮られた。見るとそこには、ゼルガノイドの姿がある。今まで視界に入つてなかったが、ゼルガノイドはこちら目掛けて突進の構えを取っていた。まずい。ここは回避するか、受け止めるか。判断しようとしたその時、再び思考を遮る声があった。

## 《ゼットシウム光線!》

それは、自分の後方から聞こえた、まさしく『オーブリングNEO』の音声だった。見れば、自分の後ろで右手を奥に構える『ゼットシウム光線』の構えを取るアグルがいる。その中には、光ではなくはつきりとした人の形で、同じ構えを取るラキュースさんの姿が見えた。

「アアア…デウアアツ!!」

そして、掛け声とともに右腕が左腕に叩きつけられる形で十字が完成し、そこから『ゼットシウム光線』が発射される。発射された光線は迫りくるゼルガノイドに見事直撃し、独特の花火のようにはじける音、そして肉を引き裂くような音を残し、ゼルガノイドを押し出す。その一撃はゼルガノイドを倒すに至らなかつたが、ダメージは与えたようで、そのままゼルガノイドを押し出した。

ゼルガノイドを吹き飛ばした後、アグルが自分の隣に立つ。その中には、笑顔を見せるラキュースさんの姿があった。

「…危ない所だったわね。これで、少しくらい借りは返せたかしら」

「い、いえ、ありがとうございます」

「そう? なら、よかつた」

そういつて微笑むラキュースさんには、先ほど会話をする前に見られた混乱は見られ

ない。ありがたいことだが、不思議でもある。そんなに簡単に解決することではなかったと思うが。そう思い、問いかけてみることにした。

「…ラキュースさん、その、大丈夫なんですか?」

「…ええ、そうね。さつきこちら側に戻って、この体を確認してわかったの…今、私は、ウルトラマンと私を分けて見ることが出来る」

「…分けて、見る?」

「ええ。ウルトラマンに変身しているけど、変わらない自分がある。変わらない自分がある事を、ウルトラマンである自分と分けて見つけることが出来る。自分がウルトラマンとは違う、人間のままだって実感できる…現金な話だけど、こういう風に変わった分、私は人間だって嫌でもわかるから、今まで見たいに取り乱すことはない。そんなところよ」

「…そうですか。それなら、良かった」

「どうやら、彼女は落ち着きを取り戻しているらしい。それを聞いて、少しだけ安堵した。」

つまり、今の彼女はおそらく自分と同じインナースペースの中に存在しており、そこに自分の元の姿が存在するのをはつきり確認できるのだろう。だから、変わってしまったことが怖かった彼女は、変わっていない自分を確認できることが出来るようになって、

それで恐怖を軽減できるようになった。こんなところなのだろう。これがインナースペースの嬉しい誤算なのか、光の巨人たちがラキユースさんにあげたプレゼントなのかはわからないが、なにせよ彼女にとってこれほどうれしいことはないはずだ。

そこまで考えた所で、何かが動く気配をウルトラマンの感覚、それをインナースペースを通じ普通の感覚に戻して知覚する。こんな効果もあるのか、と思いつつ目をやると、そこには立ち上がるゼルガノイドが。奴はふらつきながらも、十字を組もうとしている。それを見て、思わずラキユースさんに叫んだ。

「ラキユースさん、敵の攻撃が来ます！…『オーブリングNEO』を使うので、ラキユースさんはそれを自分に渡して、後に光線で続けてください」

「もちろん、いいけど…これの使い方は大丈夫？ 私はこれを手に取ったら、使い方が頭の中に入ってきたけど…」

「大丈夫です。もう、頭の中に入ってますから」

「なら大丈夫ね…行くわよ！」

「はい！」

自分が彼女の声にくたえると同時に、自分の元に『オーブリングNEO』が来る。これを使って、あいつを迎え撃つ。…自分もちよつと使ってみたくて、渡してくれなんて言ったのは内緒だ。

とりあえず、リングの円の中心を押す。

《スペリオン光線!》

すると音が鳴るので、自分は右腕を上、左腕を横にする『スペリオン光線』の発射体勢に入る。左腕を閉じた状態から開き、目の前に円が発生したところで、正面に向かって十字を組んだ。

それと並行し、アグルもまた必殺光線の発射体勢に入る。腕を胸の前で組み、それを入れ替えて開き、光を結集したところで右腕を後方に持つていく。そして右腕を縦にして突き出せば、『アグルストリーム』が完成だ。

それに対し、ゼルガノイドも十字を組む。相手の方が早く、先に光線がこちらに向かってくるが、もう遅い。

「オアアアア…デユオッ!」

「デウワーアアアアア…デウアツ!!」

相手の光線に対し、自分たちが放った『スペリオン光線』及び『アグルストリーム』が飛んでいく。光線は激突し、拮抗するが…それも一瞬。二人のウルトラマンの光線がウルトラマンではない怪物の光線に負けるわけもなく、一気に押し返して吹き飛ばした。

…だが、驚くことに相手はまだ生きている。とんでもないタフさだが…ここで、決める! 意を決し、ラキユースさんに声をかけた。

「ラキユースさん！自分たちの気持ちをも、一つに！」

「…わかったわ！」

そういつて、リングを握りしめつつ想起する。想起するのは、自分が戦っている理由。すなわち、自分が守りたい、大切な人たちの事。そのことを真っ先に想起したことに、特に理由はなかった。

すると、自分の頭の中に、何かが流れてきた。それは自分が知っていたり知らなかったりする、人々のイメージだった

「…これ、ラキユースさんの…？」

「…ターマイトさん、それに他にも…これは、アルシエの…大事な、人？」

自分の中には、『蒼の薔薇』の人々の姿がある。それだけではない。ラキユースさんとはまた違った美しさを持つ綺麗な女性、その傍に立つ騎士。ほかに、たくさん…これがラキユースさんの大事な人だと気が付くのに、時間はかからなかった。

そして、それはラキユースさんも同じらしい。自分の思い浮かんだ大事な人を見て、ラキユースさんは感慨深そうに呟く。

「これが答えなの？この人達を守るため？仲間だから…みんなが、好きだから…！」

何か答えを得たらしいラキユースさんは、自分の方に顔を向ける。自分と彼女、目が合って一気が付けば、お互い頷き合っていた。そう、今の自分たちの心の繋がりに、

齟齬はなかった。

それを確認し、リングに光をともし、ジャイロにセットする。セットしたジャイロを掲げ、ハンドルを操作すれば、そこから光と共に声が聞こえた。

《トリプルオリジウム光線!》

その声に合わせて、ガイアとアグル、二人のウルトラマンが動き出す。目の前で円を作り、光を集めたら腕を合わせ、山を作る。山の頂に次第に光が集まると、そこに新たなウルトラマンが現れる。彼の名は、ウルトラマンオーブ・オーブオリジン!

現れたオーブが手で円を作ると、そこに光のサークルが現れる。サークルに火・水・風・土を表す四つの輝きが宿ったのち、自分たちもまた光に合わせて腕を動かす。光が最大限集まった瞬間、自分とラキユースさんは思いつきり叫んだ。

「トリプルオリジウム光線!!!」

そして、ガイアとアグル、加えてオーブを含めた三大ウルトラマンが一斉に十字を組み、光線が発射される。発射された光線はサークルに直撃し、そのサークルからまばゆい光が放たれる。増幅された光線は一直線に、立ち上がったものの限界なのかふらつくゼルガノイドに向かっていき、直撃。かの獣人を光で包みこみ—そして、大爆発。爆発が終わるとそこには、もうゼルガノイドの姿はなかった。

…終わった。とうとう、決着がついた。隣のアグルを見ると、同じことを考えたよう



で、自分の方を向いていた。目と目が合い、なんとなく腕を出す。アグルもまた腕を出し、それを合わせ、打ちつけ合った。

そして、自分たちの周りを、光が囲っている。よく見ると、ゼルガノイドがいた場所からも光が現れ、こちらの光と合流していく。自分たちもまた、次第にウルトラマンの姿がほどけていき、光となる。光と光はやがて交わり、夜空の彼方へ飛んでいく。

夜空に一つ、大きな星が瞬いていた。

## 新たなる巨人・Epilogue

「よし！それじゃ、そろそろ行くか！」

「わかりました」「いつでもいいわよ」「うん、行くこう」

ヘッケランの号令に、すでに準備を終えた自分たちが応える。念のため行われた最後の確認が終わり、自分たちはとうとう、『ティガの地』を出発する運びとなった。

あの戦いが終わり、元に戻った自分たちは無事仲間たちと合流することが出来た。『フォーサイト』の皆とともにいた『蒼の薔薇』のメンバーたちは、ラキユースさんと共に戻ってきた自分を見て自分の正体を察したらしく、自分も隠しても無駄な気がしたので後で自分がガイアであることは話してしまった。因みにその時間いた話では自分はテラノイドが現れた後一言二言ラキユースさんと会話した後すぐに飛んで行って、そこからガイアが現れたとのことで、割と怪しかったらしい。今回の変身直前の記憶がうろ覚えなのはわかっていたが、そんなわかりやすい真似をしていたとは。普段はもつと慎重にやるはずなのに。反省しなくては。

そんなことがあった後、自分たちはとりあえず一休みし、村の中や崩れた遺跡の中から出来る限り荷物を引っ張り出すと、ようやく本来の目的地へと出発できるようになっ

た。戦いは終わったが、旅行は途中なのでこれからもうひと踏ん張りである。

それと、旅行の続きをするにあたって、意外な事実が判明した。

「あらアルシエ、もう準備はいいの?」

「ええ、ラキユースさん。こちらは準備できました」

「そう。私たちも準備万端だから。それじゃ、行きましようか」

「はい!」

待ち合わせ場所にてラキユースさんに声を掛けられ、準備が出来た旨を伝えると、彼女も笑顔で答えてくれた。彼女のそばには『蒼の薔薇』のメンバーが勢ぞろいしており、こちらも準備万端といった様子だ。

そんな彼女を見てみると、ふとある事を思い出す。『フォーサイト』と『蒼の薔薇』に共通した、とある意外な事実を。

「それにしても驚きました。まさか、目的地が一緒だったなんて」

「そうね、私たちも噂だけは知っていて、行くのは初めてなのだけど…あなたたちの目的地がそこなのは、私も驚いたわ。どこで知ったの?」

「えっと、リーダーのコネ、みたいなもので…」

「ふうん…ターマイトさん、顔が利くのね」

ラキユースさんはふむふむと頷きつつ、そんなことを口にする。…怪獣ビジネスは一

応身バレが怖い領域の商売になってしまっているの、こちらの正体は明かせないのだ。ごめんなさいと心の中でつぶやきつつ、彼女が納得した用薄を見せてくれたことに対しひそかに感謝した。

さて、自分たちに共通した意外な事実とは、実は最終的な目的地が同じだったという事。これが判明した時は、この後どうするのかを訪ねてきたラキユースさんも、それに応答した自分たちも驚いたものだ。なんでも、ラキユースさんはここで光の巨人の事を調べたのち、次なる目的地にあの隠れ里らしい所をセットして、いろいろ溜まっていた疲れを取ろうと考えていたらしい。ちなみに、ラキユースさんは目的地を決めた理由を自分の仲間にいるいろいろあつたからその慰労みたいなものだ、なんて言っていたが、後で『蒼の薔薇』のメンバーから、いろいろため込んでいたのはラキユースさんで、そっちの疲れを取る事の方が大きいみたいなのを言われた。その事実を聞いた時、同時にその慰労の必要がないくらいラキユースさんが明るくなったことを感謝されて、少しこそばゆい思いをしたのは、記憶に新しい。

そういうことを含め、ラキユースさんが元気になったのはいいいことだった。そんな彼女を見ると、自然と笑顔になり、それを見た彼女もまた、笑顔を向けてくれた。

「…なあ、ロバー。リーダー俺だよな？ これもう俺がしゃべっちゃいけない奴か？」

「え?! いや、そんなことはないと思いますけど…?」

「好感度の差じゃない？あの二人の間で何かあったようだし…ここはアルシエに任せておきましょう。」

…自分たちを見たヘツケラン達が、後ろで何か言っている。うん、ごめんなさいリリーダー。心配しなくても自分たちのリーダーはあなたただだよ、と心の中で詫びを入れ、戻ろうとす『ガシツ』…なんか腕をつかまれた。

「…あの、ラキユースさん。なんで、自分をつかむんですか？」

「あら？一緒に行くのだから、離れる必要はないでしょう？何か問題があるのかしら」  
「…いえ、ないです」

「なら、いいじゃない。いい、のだけれど…」

ラキユースさんは見事な笑顔でそう言い放つが、なんか、こう…なんだろう？言語化できない、何かの庄のようなものを彼女から感じるのはいのせいでどううか？自分が悩んでいると、彼女も彼女で何か悩んでいた様子だったが、突然「そうよ！」と手をたたいた。…手は離れたが、仲間たちの元に行ける空気ではない、気がする。

「アルシエ、お願いがあるのだけれど…私に対する敬語を、やめてもらえないかしら」  
「え？それは、どうして…」

「あなた、あの時言ったでしょ？自分と私は、同じなんだって、離れても一緒にいてくれるって…そういう相手とは、私出来るだけ対等でありたいのよ。おかしいかしら、この

気持ち」

「いえ…そんなこと、ないと思います…」

「なら、これからは…とりあえず、あそこにいるあなたの大切な仲間みたいに接してね？  
アルシエ」

「わかり…ううん、わか、った」

「よろしい」

ラキユースさんはそう言つて、再び満足そうに笑う。その笑顔は生気に満ち溢れており、思わず引き込まれてしまいそうな、見事な大輪の花で…いやいや。そうじゃない。何か今結構重要なことが決定された気がするのだが、気のせいか？…気のせいだろう、と思いたい。

「…あ、ありのまま起こったことを話す…鬼ボスが会いたかった人物と会話していたと思つたら、いつの間にかティアと同じ道を歩もうとしていた…な…何を言ってるのかわからないと思うが、私も何をされたのかわからなかった…」

「いや落ちて着けティナ。多分そんなじゃねえだろ。多分」

「バカな、ライバルだと…しかも鬼ボスって…なんか純情そうだからいけると思つてたの…！」

「お前も落ち着け…いやその前に、ティアはもう少し節度を持ちな」

なんか後ろでガガーランさんたちが妙な会話している気がするが、聞こえない。聞こえないのなら、聞こえないのだ。

そんな会話を交えつつ、とりあえず出発した。

「うっ……うううっ……！」

皆で目的地に向かい歩き始めしばらくたつた後、後ろの方から誰かがすすり泣くような声が聞こえた。……いや、実は、出発してから時折聞こえている。それに、誰が泣いているのかもわかっている。

ラキユースさんに引つ張られ先頭に行く自分がその方向に首を向けると、そこにはすすり泣くイビルアイさんと、そばでまたかよ……みたいな顔をしつつ話しかけようとしているガガーランさんの姿があった。

「……なあ、イビルアイ。いい加減に泣き止んだらどうだ？ 終わったことをくよくよし たつてしようがねえだろ」

「う、うるさい！ 私はまだ終わってない！」

「いやそういうのじゃねえって……まあ、あのモモン様についていけないかったのは、今回は本当に仕方ねえと思うぜ？ なんか纏っている空気変だったろ」

「そ、そうか……？ い、いや私が悔んでいるのはそこではない……私はこの間お前についていくことが出来たことを教えてもらったのに、そのことをすっかり忘れていた私自身が、

悔しくて、残念で……ああ、モモンさまあ……！」

「……自業自得じゃねえか。猶更質が悪い……」

ガガーランさんは心底呆れた様子で、イビルアイさんは心底残念そうな様子で話している。なんとというか、イビルアイさんが復活するまでまだ時間が掛かりそうだ。

それにしても……モモン？

……

……

……

……誰だっけ？

「……ねえ、アルシエ？どうかしたの？」

「ふえ!? あ、や、なんでも、ないです……」

「……? 何かあったなら、言ってちょうだいね。私とあなたの仲だもの」

「は、はい、わかり「敬語」……わかった。ありがとう、ラキユース」

「……うん! それでよろしい」

気が付くと、ラキユースさんが心配そうな顔でこちらを覗き込んでいた。慌てて返事をしたが、自分はそのなに変だったか? つい敬語が出てしまったが、これはまあぼちぼち直していこう。急には難しい。



そして、モモンさんだ。うん、もう思い出した。さつき何故か思い出せなかったが、どうしたんだろう自分。疲れているのだろうか？ラキユースさんから聞いた目的地の隠れ里は、慰労にはぴったりだし、すぐに行きたいところである。

さて、モモンさんが、ゼルガノイドを倒した後自分たちが一休みしようかといったところで、彼はナーベさんと共にこちらの方にやってきた。なんでも彼はテラノイドの出現に巻き込まれ遺跡に生き埋めにされかけたとかで、その後は何とか脱出し、テラノイド戦及びゼルガノイド戦の一部始終を見終わった後、ナーベさんと合流してこちらを見つけたとのこと。その後彼は、まだほかに用があるとかで、自分たちとの会話もそこそこに、一泊した自分たちと別れて出発してしまったのだ。自分がガイアである事を言ったのは村で一泊した後だし、合流した時にもこちらにウルトラマンの正体について言及がなかったので、バレてないのだろう。仲間外れにして悪かったと考えるべきか、ウルトラマンの正体がバレることは面倒に繋がるからできるだけ自分とラキユースさんの事は知られない方が良く、よってよかったと考えるべきか、よくわからない。まあ、過ぎたことはしようがないし、彼の事はまた会った時に考えるところでしょう。

そんな感じでしたらよく考え事していると、ラキユースさんはまだ自分の方を見ているのに気が付く。いたって真面目そうな彼女は、自分が何か反応するよりも早く口を開いた。

「ねえ、アルシエ」

「はい、ラキユースさ……ううん、ラキユース」

「……ありがとう」

そういうラキユースさ……ラキユースの表情は、笑顔で、だけど少しだけ悲しそうな表情だった。まるで迷惑かけたとか、悔しいとか、そんな様子で。その表情を少し意外に思っている、彼女はそのままの表情で言葉を続けていた。

「今回の戦いは、ハッキリ言っただけであながいなかったら私は死んでいたと思う。私だけじゃない、みんなも……私はウルトラマンと向き合うことが出来ないまま、死んでいたでしょうね」

「……そんな、こと」

「そんなこと、あるわよ。正直に言うと、今もあながいなければ、ウルトラマンになれる自信なんてない。飛び立てない私に、あなたが翼をくれた。だから今、私はこうして生きている。今回の事は、感謝してもしきれない。改めてありがとう、アルシエ」

「……いえ、こちらこそ、礼を言わなくてはならない」

「……え？」

自分の言葉に、きよとんとした顔を見せるラキユース。しかし、実際自分も礼を言わないといけない位の出来事があったのだ。だから、そちらから感謝されるだけ、と言う

のは違うと思う。

そんなことを考えつつ、自分は背後に両手を回す。そこには、何も無い——はずだったのだが、自分がそこにあると念じると、そこにはまだ慣れないハンドルの感触がある。つるりとしたクリスタルの感触がある。それを正面に持つてくれば、自分の目の前には『ループジャイロ』と『ループクリスタル』の姿がある。また懐を少し触ってみると、そこにも『オーブリングNEO』の存在をしっかりと感じる事が出来る。それらは自分の手の上で、あの戦いで得たものは夢ではないと、しっかりと主張していた。

「…今回自分が得たものは、とても大きい」

そう言っ、自分の手元に視線を移す。そこにあるのは『ループジャイロ』、ガイアの『ループクリスタル』、そして緑の結晶と『爆』の文字が輝く別のクリスタル。まさしく『ウルトラマンダイナ』の『ループクリスタル』だった。

そう、自分が戦いの後確認したところ、このクリスタルが追加されていたのだ。なぜここにあるのかはよくわからないが、なんとなくだがテラノイドが関係しているような気がする。テラノイドがダイナと戦った存在だというのもあるが、それ以上に、このクリスタルの入手には彼が消滅して光になった時、自分たちの光と交わった事が深く関わっているような、そんな気がしてならないのだ。

結局、テラノイド、そしてゼルガノイドとして人形にされ続けた光の巨人が何を思っ

て消えたのか、本当のところはわからない。だが、少しでも分かり合えていたなら、そして悔いなく眠ってくれているなら、これほどうれしいことはない、と思う。

さて、今回得たものと言え、新たな変身アイテムは欠かせないだろう。自分たちに変化をもたらしたこれにより、自分たちがどうなるかはわからない。だが、これをくれた古代の巨人たちに恥じないためにも、使いこなす必要があるだろう。なにはともあれ、これらを与えた巨人たちには感謝である。

だが、それ以上に大きなものを、自分は得た。その大きなもの、ラキユースの方を見ると、彼女はきよとした表情のままだった。自分はそんな彼女に対し、思いを込めて口を開く。

「今回の戦いで、自分はかけがえのない同胞を得た」

「…!!」

ラキユースの足が止まる。彼女の表情を見るに、どうやら驚きで止まったらしい。みんなも止まってこちらを見ているが、まあ構わないだろう。そのまま、話を続ける。

「あなたというウルトラマンがいてくれて、本当にうれしかった。自分一人だけで全てを守るなんて、とても難しい…けど、アグルが、ラキユースがいるなら大丈夫。あなたとなら、自分はどんな戦いだって乗り越えられる。だから、ウルトラマンでいてくれてありがとう、ラキユース」

「アルシエ……！」

「…それに、自分も、大事なことに気が付くことが出来た」

そう言つて、視線を手元のルーブリスタルに向ける。そこに輝くガイアの姿は、やはり頼りになる、力強さを感じさせるものだ。それを通じ、自分の中で起こった変化を再び見つめなおす。

ウルトラマンが怖い、という感情を、自分は最初理解できなかつた。ウルトラマンが怖いというその感情を、自分が持つウルトラマンの知識から否定しようとしていた。彼らは、怖くないと。

…そうではない。ウルトラマンは、未知の存在だ。そもそも、自分の持つガイアの光でさえ自分が知る光と同じかなんてわからないのに、それをラキユースに怯えるなど言う方がおかしかつたのだ。

それに気が付いた今、自分もガイアの事が少し怖い。でもその怖さは、ガイアと、この世界のウルトラマンときちんと向き合えたからこそその恐怖なのだ。何故その恐怖にたどり着けたのか、そのあたりの記憶があいまいなままだが、しかしこの感情に間違いはない、と胸を張つて言える。だからこれからは、曇りなき目で見る。自分の光と正面から向き合つていくことを、自分はガイアの光に誓つたのだ。

だから、と心に区切りをつけ、ラキユースの方を見た。

「だから、ありがとう。ラクキュース…これからも、よろしく頼む。もう一人の、ウルトラマン」

そう告げて、自分は精一杯の笑顔で、彼女のために作る。意識した笑顔が、どう届いたかはわからないが―彼女は一瞬驚いたような顔になって、そして満面の笑顔を見せてくれた。

「―ええ！こちらこそよろしく！私の大事な、ウルトラマン！」

その笑顔は、何よりも明るく輝いていて、良き未来の到来を思わせてくれる。自分達の未来は、スフィアの襲来に超古代の存在の判明と、むしろ暗さを増したように見える。だが、今彼女の顔を見ているうちは、未来は明るいものだ、思える気がした。

ありがとう、ラクキュース。そう礼を述べる自分の心は、とつても暖かかった。

「―それにしても、ラクキュースが闇の巨人じゃなくてよかった」

「…闇？」

それから少し経って、しばらく歩いたところで、何気なくつぶやいた言葉に、ラクキュースが反応した。…そういうえば、自分は闇の巨人についてきちんと話したことはあっただろうか？せつかくだし、彼女にも教えてあげよう。

「ラクキュース、闇の巨人と言うのは、文字通り闇に堕ちたウルトラマンの事を指す」

「闇に…堕ちた？」

「そう。元は光の側にいた者たちが、闇の力に魅了され、その誘惑に負けて道を踏み外す……そうして、闇の巨人は生まれる」

「闇の……力？」

「そうして生まれた闇の巨人は、どれも強大で恐ろしい存在。だから、あまりお目にかかりたくない存在でもある。ラキユースが闇に負ける、なんてことがなくて本当によかった」

「そう……闇に……負ける……」

ラキユースは自分が聞き取れないくらい小さな声で何かを呟きつつ、真剣な表情で何か考え込んで込んでいる様子だった。ふむ、ここまで熱心に聞いてもらえるのはやはりうれしい。もしかしたら詳しく聞いてくるかもしれないし、ここは彼女の期待に応える準備をしておこう。

果たして彼女は、自分の肩をガツとつかむと、何故か鬼気迫る様子で、予想通りの事を聞いてきたのだった。

「……ねえアルシエ？闇の巨人の事、もう少し詳しく教えてくださるかしら」

——後日。

月夜の晩、ラキユースが自身の持つ大剣と対峙し、「くっ！私を邪悪に堕とし、闇の巨人としようなどと……そうはさせない！」などとつぶやくようになったこと。

部屋で一人、「ははは、貴様は闇の巨人となり、我が眷属としてその身を捧げる運命なのだ！ 暗黒の根源たる魔劍の誘惑に身を任せるがいい！」「そんなこと！ 私は、この光を燦らせたりはしない！ 我らに授けられし光の器達よ！ 我に星の加護を！」と二人分のセリフを変身アイテムを交えて喋るようになったこと。

これらはまた、別のお話――

「ふいふ……ああ、疲れた……」

自分の部屋に入って早々そんなことを呟くと、アインズはまっすぐに自分のベッドに飛び込んだ。枕に正面から顔をつまみ、一息つく。今はまだ日が出ており、平時ならこんなことをするわけもないのだが、今日のアインズはとにかくこうしたかった。それだけ、今回の事件は彼にとつて大きな出来事だったのだ。

「……そういえば、帝国の偉い人が来るんだっけ」

枕に顔を埋めつつ、予定を思い出す。報告によれば、帝国に送り込んだ自身の部下による皇帝のあぶり出しは成功しており、それにより皇帝直々にこのナザリック地下大墳墓に足を踏み入れる運びとなっていた。アインズはそのことを考えると気が遠くなつたような感覚に襲われたが、すぐに皇帝が来るのは数日後だと思いだす。準備は十分間に合う事を再確認し、アインズはほっと一息ついた。



「…いや、一息ついてる場合じゃないだろ」

思わず気を抜きそうになった自分を、アインズは叱咤する。仰向けになり、天蓋を見つめつつ、今回の出来事を思い返していた。

結論からすれば、ウルトラマンはあまりにも強い。アインズはそう考える。自分を叩き落したテラノイド―巨人の事だと教えてもらった―は、その際アインズに大した注意を払っていたようには見えなかったが、それでも彼の受けたダメージは絶大だった。

それだけならいい。応急処置を終え、外で観戦してみれば、テラノイドはゼルガノイドという化け物になりさらに強力そうな見た目になって、ウルトラマンを吹き飛ばす。その後、新しいウルトラマンが現れ、そのウルトラマンもゼルガノイドにやられたと思ったら突如あちこちから光が噴出した。それに慌てていると、それらがウルトラマン達に注がれるのが見えた。そして、光が止んだ後のウルトラマンは、光線を連発し、そして一際でかい化け物みたいな光線でゼルガノイドを吹き飛ばしたのだった。これが、アインズが見たすべてである。

要するに、アインズは自分を何気なしに叩き落すバケモノみたいな巨人を見た後、その巨人より強いウルトラマンたちがさらに強くなったように見えたのだ。混乱してしまうのがなかった。

ちなみにその一部始終を見た後、アインズは何とかある場所にて合流したナーベと共

に『フオーサイト』と『蒼の薔薇』との最低限の情報交換をした後、そそくさとナザリツクに戻ってきた。正直、ほかの事に思考を割く余裕が、当時の彼にはなかったのだ。故に、彼の記憶には、戦うウルトラマンの姿くらいしか残っていない。巨人が現れてから、アインズは巨人の事しか目に入らなかった。

(…さて、どうするか)

巨人が強いという事実を改めて噛み締め、アインズは考える。

ウルトラマンは、想定を超えて強かった。実際にその眼で目撃したことで、アインズの中でウルトラマンの脅威度は鰻上りだった。これでは、ワールドエネミックラスかそれ以上か。なんにせよ、ナザリツクの総力をもつてしても、現状あのウルトラマン達と敵対するのは賢くない。それくらいの事は、彼にも十分理解できた。

…そういえば、とアインズはある事を思い出す。かつて皆がそろっていた頃のギルド『アインズ・ウール・ゴウン』にて、その前身となったクラン『ナインズ・オウン・ゴール九人の自殺点』にもいた仲間の一人が、巨大生物が出て巨大ヒーローと戦うという話を好んでおり、その話を時々していたのだ。アインズは残念ながら、そんな話があったことは覚えていても、内容までは思い出せなかった。しかし今その話の詳細を思い出せたら、現状とっても役に立てることが出来たのでは、と何と無く考えていた。

(いや、そんなこと考えたってしょうがないだろ)

自身の愚考を一蹴する。相手は未知の怪物で、フィクションの事が役に立つなんて限度がある。そんなことは頭から消し去りつつ、アインズは思考を続ける。

(…いつそ、どこかに籠るか?)

そして、アインズの思考がある答えを導き出す。敵うかどうかもわからない強大な存在がいる中、自分の子供同然であるナザリックの配下達を危険にさらす必要はない。どこか深い場所に潜って、やり過ぎてしまう。自分たちが行動を再開するのは、すべての危険が去ってからだ。慎重な彼は、この考えに至り――

「…ダメだな」

――すぐに、破棄する。

「そんなことをしたって、怪獣もウルトラマンも消える保証はどこにもない」

だから、そんなことをしたって意味がない。それが、アインズが籠るという選択肢を捨てた理由だった。彼がモモンとしてアルシエに聞いた話では、怪獣には地下深くに潜むものがそれなりにいるらしい。なら、今も危険だが潜った所で意味がない。空も海も怪獣はいると聞く以上、何処にも逃げ場がないという事実を、アインズは噛み締めざるを得なかった。

それに、動きが読めない怪獣やウルトラマンが何かの間違いで自分たちの家を荒らす可能性がある以上、迎え撃つ必要性はどんな選択肢をとっても消えたりはしない。なら

ば、籠るといふ選択肢はこれ以上ない悪手であると、アインズは最終的にそう判断した。なら、どうすればいいか。その問いに対し、アインズは、既に答えを用意していた。「戦力、増強だな」

導き出した答えを口にする。どのみち戦力が必要なのは変わらないのはわかる。そして、自分の実力と今回受けたダメージを鑑みるに、現状の戦力では怪物やウルトラマン相手にはまるで足りないのもわかる。ならば答えは一つ、戦力を増やすしかない、アインズは考えたのだ。

そしてその答えを出すのと共に、アインズの瞳はある存在を映し出していた。彼が今、この世界で最も強いと思う存在――

「ウルトラマンが、欲しい」

――ウルトラマンの姿を。

「ウルトラマンは、作れる。今回の事件で一番の収穫はその事だ。何がウルトラマンに必要なのかも、知ることが出来たのは大きかったな」

そう言うアインズの脳裏には、燃料たる光とするための生贄、肉体たる石像の製造に必要ないくつもの巨人像の残骸……ウルトラマンをこしらえるのに必要であると考えられる要素が、浮かび上がっている。これらの要素は、アルシエにレクチャーしてもらった際の情報やこの目で実際に見てきた遺跡の状態などから導き出されたもので、またこ

れらに関して、生贄作りに必要な装置の情報を調べて使えそうなどころは遺跡から持ち出すとか、あの崩れた遺跡を発掘するとか、用意する手段も同時に思考されていた。彼には、ウルトラマンを手にする気が十二分にあった。

そう、ウルトラマンが驚異なら、ウルトラマンをぶつけなければいい。怪獣だって、ウルトラマンなら倒せる。彼はその事実をすでに自分の眼で目撃していた。

それに、最も必要になりそうな要素はすでに彼の手の内にある。アインズはそのことを思い出し、まずそこから行動を起こそうとベッドから降り立った。

「ナーベラルには、苦勞を掛けた。こっそりと、できる限り村人どもを捕まえておけなどゝだが喜べナーベラル。お前の働きの報われるぞ」

自身のために動いてくれたナーベ、否ナーベラル・ガンマにアインズは心の底から感謝する。実際ナーベラルは彼の言いつけをよく守ってくれた。特に怪獣又はウルトラマン出現時はナザリツクに応援を要請することなくまず自分の方に連絡しろ、という命令を聞いていてくれたのは大きい。彼女がその通り動いてくれたお陰で、桁外れの力を持つウルトラマン共の戦いに無用な戦力を投入せずすんだのだから。アインズが遺跡の崩落に巻き込まれた際、ナーベラルは彼の安否を確認した後血相変えて飛び込んできたのだが、それはご愛敬だろうとアインズは考える。

そして、村人たちはそのほとんどがすでにこのナザリツクに捕らえられていた。これ

については、自分たちがあんな手段で害された時点でテラノイドがいなくてもそうするつもりであったし、またアインズが迫りくる村人に己の真の姿をさらしたのはこのためであった。すなわち魔術をフルに使えるようにすることで状態異常などを駆使し村人を捕縛、遠くに行つたと見せかけて隠れさせたナーベラルに回収させる。そうして捕まえた村人をナザリックに転移させる……というのが、彼の立てた計画だった。最低限殺せることを確認するために生贄とした数人の村人と、自分と共に叩き落された村長が失われたのは痛い、それはしようがないとアインズは割り切っている。なにせすでにかなりの数の村人が、彼の手の内にいるのだから。ならばあとは残った奴から彼らがウルトラマンを作つた方法を聞き出せばいい。その為にはなんだつてすると、彼はすでに決心していた。

「守つてみせるぞ、俺たちのナザリックは、すべて……!」

アインズは固い決心と共に、部屋を後にする。ウルトラマンを作り、配下にするために、彼は全力を注がんと動き始めた。

その道がいなくなるものを招くことになるか——当のアインズも、そしてウルトラマンも、今は、誰も知らないのだった。

## 休暇

## 初めての温泉

風呂は命の洗濯だ、とは誰が言い出したことだろうか。自分が最初にその言葉を聞いたのはアニメなのだが、元はことわざだとか。まあそんなことはどうでもいい。今言えるのは、その言葉は真実である、と言う事だ。

「ふい〜…」

日々の疲れが流れていくような感触に、思わず気の抜けたような声が漏れてしまう。しかし、それも仕方ないだろう。こんなにとろける気持ちになれるんだから。流石は温泉、ビバ温泉。すべては温泉が悪い。そんなとりとめのない思考に、満足してしまうのも、温泉のせいに違いないのだ。

—そう、温泉である。自分は今、温泉に入っていた。

「まさか、温泉は入れるなんて思わなかった…」

その事実を、噛み締めるようにつぶやく。ホント、まさかである。

自分が今入っているのは、紛うことなき温泉である。しかも、温泉地で見かける、純和風の石とかいっぱいある、しかもめっちゃ広い露天風呂である。これには自分もたま

げたものだ。隠れ里みたいなところと聞いていたが、ぶっちゃけこれは秘湯である。

今、自分たちは旅行の最終目的地、隠れ里に来ていた。道がふさがっていたり迷子になったり、『ティガの地』なんていかにもな場所に寄り道したり、ゼルガノイドと戦う事になったり。なによりかけがえのない、同胞―ウルトラマンと出会えたり。そんないろいろあつた旅の終点は、なんと温泉地だった。しかも、前世の記憶にも残っている、旅行地の温泉そのもの。最初に見た時は、これは幻覚と言われた方が納得できたほどだった。

しかし、それも今やどうでもいい。もう何年振りになるかもわからない温泉は、それだけ自分の心をとろけさせてくれた。幸せである。

ふと浮かれた気持ちで背後を見ると、看板がある。湯気でよく見えないので、身を乗り出してのぞき込んで見る。なになに、肩こり、美肌に効果あり…

「…日本語?」

その事実には、少しだけ驚く。そう、その看板に書いてあつた文字は、日本語なのだ。下手くそだが。この世界でよく使う文字ではなく、どこに出しても恥ずかしくない…いや下手なので恥ずかしいだろうが、とにかく立派な Japanese である。いやなんで日本語…あとで聞いた話では、この看板はこの温泉を作った神様が作り出したもので、神様本人もいまいち意味を理解していなかったらしいのだが、それでもとにかくこれで



完成するのだ！と息巻いて書いたものとか。わかってないんかい。なるほど、だから下手くそなのかと、その話を聞いた自分は妙な納得をしたものである。

そんなことを知らないこの時点の自分はと言うと、日本語に首を傾げつつ、まあこの隠れ里そのものが大分純和風だし、こういうのもあるか：とそれはそれで変な納得をしていた。再び温泉に肩までつかり、堪能していると、横に誰かの気配がした。

「あら、ここにいたのね」

「イミーナ…はふう」

「とろけちゃって…ほどほどにしておくのよ？」

湯をかき分けてやってきたイミーナはそういうと、自分の隣に座る。「んん…ろてんぶろ？というのもなかなかね」という彼女にも、温泉の魅力が十分伝わっているようだった。

…それにしても、イミーナは美人だ。一糸まとわぬ姿で湯の中に四肢を漂わせる彼女を見ると、そんな感想が頭をよぎる。イミーナはまるやかさこそ持ち合わせていないものの、全体的にほっそりと引き締まった体をしている。その分体のメリハリは主張こそ少なめだがハッキリと存在しているし、体のラインも美しく整っていて、まさにスレンダーな美人、と言ったところだ。彼女を見れば百人が百人、美人だと言うだろう。実際、ヘッケランが追い払ったり彼女自身があしらったりしているが、彼女に愛を語り合おう

的な方面で声をかけるものは多いのだ。

それに比べて…と、そんな思いで自分の体を見下ろす。自分の体は何というか、すとーん…としている。いや、成長過程で出てくるはずの部分は一応存在を主張しているものの、なんとというか全体的にぼやけているように見える。ハッキリ言つて、幼児体型、いや発育不良だ。生まれてこの方ぜい肉はつかないが筋肉も全然つかない上にちんちくりんなものだから、まるで子供みたいな体格である。幼いころから体を鍛えることは欠かさなかつたはずなのだが、ホントどうしてこうなったのか…クーデリカにウレイリカ、お姉ちゃんは大メだったよ。せめて二人は自分みたいな残念ボデーにならないことを祈っています。

「…やっぱり、さっきの…じゃえつとばす?とかの方が楽しいわね。私は中に戻るわ…アルシエ、どうかした?私の体なんかじっくり見て」

「…なんでもない。イミーナは美人、と思っただけ」

「そ、そう?うれしいけど…とにかく、のぼせないようにね?」

そう言つて立ち去っていくイミーナを見送りつつ、視線は彼女の体を追う。立ち上がった彼女の体は、やっぱり美しい曲線を描いている。ああ、羨ましい。そんな視線を送りつつ、彼女が屋内の温泉の方に戻っていくのを見届けた。

そして、自分はまた、一人で満喫する形に戻り…

「アルシエ」

「ひゃっ!？」

突然背後からかけられた声と、抱き着かれたような感覚に驚く。だ、誰だこんな将来に絶望しかないボディを触るのは。というか、この声って…

「…ティア、さん?」

「…すごい、正解」

果たしてそこにいたのは、『蒼の薔薇』の双子…いや、ホントは違うらしいが、とにかく姉妹の一人、ティアさんだった。…いや、ティアさんなのか、正直自信がない。普段のティアさんとティナさんなら、装備の色を教えてもらったのでそこで判別できるが、風呂場ではそんなものないので全く見当がつかない。さっきも正直あてずっぽうだったのだが、確率は半々とはいえよく当たったものである。

そして自分の体に抱き着くような格好になっているのも、ティアさんだ。というか、なんかさっきからティアさんの手が自分の体の上を撫でてくるような、さわさわしてくるような感じであつとくすぐりたい。そして、いつもの装備でも存在がはつきりしているおもちの感覚が、背中越しに伝わってくる。ちくしよ。

「…ふふ。私の体、羨ましい?」

「…え?」

「あなたのような娘、多いから…そういう気配には、敏感なの」

…バレていた？に、忍者すごい…

ティアさんは衝撃的な発言の後、自分から離れると、泳ぐように自分の前に躍り出る。当然、彼女の糸まとわぬ姿が、自分の目に飛び込んできた。やはり、ティアさんもスタイル抜群だ。いつもの装備が体のラインが丸わかりな忍者装束が似合っているだけあり、ふくよかなところはふくよか、締まるところはキュッと締まっているナイスボディだ。あんな格好は自分にはできない。できるのは、よつほど自分の体に自信があるか、よつほど自分の体に無自覚かのどちらかだ。恐ろしい格好を考え付く人物がいるものである。

そしてそんなことを考える自分をよそに、ティアさんは体をくねらせるように自分に近づき、自分の頬に手を添えると、耳元まで顔を寄せ、うっとりしそうな艶のある声で囁いた。

「…私みたいになりたい？」

「え?!それは、その「正直に、言って?」…なり、たいです」

「なら、教えてあげる。私の、すべて」

…随分と魅力的な囁きが、自分の脳を突き抜ける。なれる?自分が?ティアさんみたくに?…これでも自分は、女の端くれである。今は恋とかしている暇はないし意識をし

ている訳ではないが、美しさへのあこがれというものくらいある。だから、ティアさんのささやきは、自分にとってすごく魅力的だった。

「…それは、本当ですか？」

「うん。ちよつとした、マツサージのようなものだけだ」

ティアさんは耳元でそう囁くと、自分から離れ再び正面に座る。自分を見つめる彼女の表情は、思わず引き込まれそうな、満足そうでしかしどこか蠱惑的なものを感じる笑みだった。

その笑みのまま、彼女は自分に語り掛けてくる。

「なら、この話は成立。…あなたに仕掛けるこの技は、誰かに見られるのは好ましくな  
い」

「…なるほど。ティアさん達に伝わる、秘伝の技、みたいなものなのでしょうか」

「…そこまで前向きに受け取られると、少し罪悪感が…」

「…? どうしました？」

「いやなんでもない。ともかく、話も決まったしもう行こうさあ行こう。あそこの奥の方、誰もいなさそうだからそちらにぐびっ」

「…ぐびっ」

…ありのまま、今起こったことを話すと、突然、ティアさんの首が、前世で見たゲ

ムのスティックのように、あらぬ方向へと折れ曲がった。何が言っているのかわからないと思うが、自分も何をされたかわからなかった。

よく見ると、ティアさんの頭を誰かが驚拵みにしている。ティアさんの頭を持つ人物が、思いつきり引つ張つたのだろうか。そしてその人物の顔を見ると、そこにいるのは、ラキユース、つて、え…？

「危ない所だったわねアルシエ。大丈夫？」

「流石鬼ボス。愛しのアルシエの場所をすぐに見つかるとは」

「…ティナ、あなたはこれをごどうにかして頂戴」

「了解」

ラキユースの後ろにいたティナさんが、首がおかしな向きのままなティアさんを引つ張つていく。「ほら立って。私と一緒に『十歳までの男の子は保護者の方と女湯に入ってもいいですよ』という神の言葉が真実かどうか確かめるんですよ」「…それ、ていな、だけ」「喋れるならよし。楽園はすぐそこにある」などと喋りつつ下がっていく二人をよそに、ラキユースは自分の顔を覗き込むように、近づいて…揺れてる。

「ごめんなさいねアルシエ。ティアに何を言われたのかは知らないけど、あの子は下心満載だから、気にしなくていいわ」

「ハイ」

そう言って、立ち上がってやれやれするラクユース。大きく、揺れてる。

「全く、ティアアったら本当に油断ならないのよね…女湯って話を聞いてから、目の色がおかしくなったのはわかっていたけど、まさか全員を出し抜くとは思わなかったわ。あなたに何もなくて、本当によかった…」

「ハイ」

「…?どうしたの、アルシエ?」

「…」

「??隣、座るわよ?」

「ハイ」

自分を見て怪訝そうな表情を見せると、自分の隣に座るラクユース。…うい、た!

「…ん〜!いいものね、外での入浴も…こうやってこんなすごいお風呂に入れるのも、あなたが、戦ってくれたからなのよね。本当、感謝してもしきれない…アルシエ、ありがとうね」

そして、伸びをしたりお湯をたいたいたりした後、自分の腕に抱き着いてくるラクユース。…もう、すべてが、すごいです。

さて、ラクユースである。ハッキリ言う。なんだこれは。こんな女性があり得ていいのか。ラクユースのスタイルは、明らかにティアアさんティナさん以上だ。いや、自分が

今まで見たどんな女性よりも上位に位置する。今自分の体に押し付けられているやわらかなお胸も、そちらをのぞいてみれば自然と目に入る腰の括れも、さらにこちらも自分の手に微かに当たっているお尻も、すべてがすごい。完璧である。大剣を振るう故にしっかりと筋肉が存在を主張しているにもかかわらず、全体的な印象は柔らかで、理想のボディラインをこれでもかと体現している。彼女の体には、まさに生命の輝きが宿っていた。

…イカン。自分に縋りつくようなラキユースから、全力で視線をずらす。「アルシエ…」という少し悲しさを含ませた呟きが聞こえた気がしたが気のせいだ、たぶん。というか、全力で目をそらさないとまずい。女性として圧倒的な戦力差を感じさせる彼女の体からなんとかして意識をそらさないと、自分の心が死んでしまう。な、なんとかせねば…!!

「おーこつちにいたか！イビルアイ、いたぞ！」

「聞こえている、ガガーラン。…その様子だと、ティアはどうかできたのか？」

—救いの主は、すぐ訪れた。

「…あら、ガガーランにイビルアイ。ティアはもうティナに引き渡したわ」

「おお、そいつは結構。あいつがいるとこういう場所には落ち着いては入れないからなあ」



「…お前が狙われるの「なんか言ったか?」…別に? まあ、私もあいつがいない分には助かるよ」

ガガーランさんとイビルアイさんは立ったまま、ラキユースと会話している。ちょうどいい。自分は二人の方に意識を集中する。体に触れるラキユースの柔らかさから、逃げるように。

ガガーランさんだが、すごい、筋肉である。女性とはここまでマツスルになれるのかと、人体の不思議さを感じさせてくれる体つきをしている。…ぶっちゃけてしまうと、これはこれで羨ましい。自分は全然肉がつかないので、筋肉の鎧に包まれているガガーランさんは羨望の対象だ。ワーカー仕事もウルトラマンとしての戦いも、最終的には体力と根性が物を言うので、筋肉はいつでもウエルカムである。

次にイビルアイさん…お面を外した彼女はすごく美人だが、体の方はと言うと、なんというか…残念である。これはこれで需要があるのだろうか、そんな連中自分もイビルアイさんもノーセンキューだ。そしてイビルアイさんのロリ体型を見てみると、自分も落ちてきてきて…いやいや、それはダメだろう、自分。下があるあから大丈夫、なんてもつてのほかである。

そんな感じで二人を見てみると、二人の視線がこちらに向けられた。

「…どうしたアルシエ。俺の体なんか見て」

「…えっと、少し、羨ましいなって」

「！ほほう、そうか…なるほど、聞いたかイビルアイ。わかる奴にはわかるんだよ、俺の良さってやつが」

「そうか？…むしろ、私はなにか失礼なものを感じた気がするが…ま、気のせいかな」

二人はそう言うのと、自分たちから少し離れた場所に並んで座り込む。その様子を見てみると、ラキユースの抱き着く力が少しだけ強くなる。気になってみてみると、少し心配そうなラキユースの顔があつた。

「…アルシエ、あなたは、ガガーランみたいになりたいの？」

「え？…ううん、でもちよつとだけ、あの筋肉がうらやましいなって」

「う、うらやましい…そんな、あなたがガガーランみたいに…わ、私は、どうすれば…」

「…え、えっと、自分は別にガガーランさんみたいになりたいわけじゃなくて…むしろ、自分、ラキユースみたいに…」

「…え？私？」

「う、ううん！何でもない！」

思わず口から出そうになった言葉を切り、慌ててラキユースから視線をずらした。ラキユースはと言うと、どんな表情をしているのかは見えないが、嬉しそうな声色で「…そう」とつぶやくのが聞こえた。…聞こえていたのか、ちくせう。

…そんな風に、自分たちの隠れ里での時間は、楽しく進んでいく。自分たちは、日々の戦いの事を忘れ、すっかりこの温泉地を堪能し、幸福な時を過ごすのだった―

―と、これで今回の事を終われたら良かったのだが、そうは問屋が卸さない、という事らしい。

この極楽は、この後驚きの出会いとかつてない強敵との闘いを控えた自分たちに与えられた、いわば嵐の前の静けさだったのである。

## ウルトラ大捜査線第一号

探し物。それは、ワーカーにしろ冒険者にしろ、切っても切れない関係にあるもの。自分たちもワーカー駆け出しのころは、必ずそういうそういう依頼を受けたものだし、ラクユースだってきつとそうだろう。だから、自分は単なる探し物の依頼でも気にせず受諾するべきだ、と考えている。

ただ、時と場合は考えてほしいものだが。

「…ふう」

「アルシエ、そつちはどう？」

「あ、ラクユース…」

探し物で一息ついた自分の後ろに、同じく探し物をしているラクユースが声をかけてくる。今回は彼女たちも一緒だから、そこは少し新鮮だ。だが、重ねて言うが時と場合を考えてほしい、と思う。

なんせ、自分たちは温泉地を満喫している途中なのだから。

「ダメ、こつちにはなさそう」

「そう…話によれば、アタリはついているとのことだけど、どうしたものかしら」

「イミーナもティアさんもティナさんも、みんな頑張ってる。自分も、もう少し頑張って探してみる」

「…なら、私も頑張らなきゃね」

自分の声掛けに、ラキユースも応えてくれた。その勢いのまま、今度は二人でこの付近を搜索することにする。この辺りの土地勘ははつきり言つてゼロだが、ラキユースとの二人なら、これくらいなんでもないような気がした。だから、温泉地を満喫していたことは、とりあえず忘れよう。

だが、それでも思うのだ。

「どうして、こうなった…」

何気ない呟きに乗せたその思いは、やがて虚空へと消えていった。

—それは、温泉から出て、男二人と合流し、皆と外を観光していた時の事。この時にはティアさんも、首をしきりに気にしつつもいつもの状態に戻っていた。

「…見て、あそこ。綺麗な、紅葉…」

「おお…これが最初に説明された、ふーりゅーってやつか？確かこの景色のために、ここを作った神様が一からこしらえたとか…そんな説明だったよな？」

「ええ、そうでしたね。ここをお造りになった神様とは、私が信仰する神とは違うハズで

すが…おそらく、素晴らしい神なのでしようね」

「そうね…脱衣所にあつたミルクの一气飲み、しかもポーズ指定までつけるなんて変なおすすめ書いてるって思ったけど、確かに気分が良かったわ。この神様、ホントすごいよね」

そんな取り留めの無い話をしつつ、自分たちは純和風な土地を歩いていた。

「それにしても、このゆかた、っていうの、いいわね…何と言うか、雰囲気合っているというか、みやび?とかいうものなのかしら」

「そのみやび、つてのもよくわかんねえけど、まあ、気分がいいのには変わりねえな!」  
「そうだな…私は、よくここにいる全員分のサイズのゆかたとやらがあつたと感心しているよ」

「そんなこと言つて、またガガーランに叱られる…ティア、いい加減に首を触るのやめたらっ!」

「そんなこと言われても…なんかまだ痛いし…」

傍を歩く、ラキユース達も、全員が浴衣に身を包んでここを楽しんでいる。しかし、紅葉らしき木や浴衣まであるとは、ここは本当にすごい所だ。自分も、この神様に会つてみたいものである。

そんなことを考えつつ、のんびりと散歩を楽しむ。そんな時、彼は現れた。

「…ねえ、あそこ見て」

「ん？」

イミーナが指さした方向に、ヘッケランが興味を示す。自分も、自然とそちらへ視線を向けていた。

そこにあるのは、何の変哲のない砂利道：だが、そこで誰かが何かを探し求めている様に動いている。その誰かはこちらから顔を見ることが出来ないが、見えている部分は鎧―それも、パワードスーツのような近未来型っぽいもの―で覆われており、場にそぐわない雰囲気醸し出していた。

なんとなく、皆で近づいてみると、その謎の人物の者らしい声が聞こえた。

「…ない…ない…」

どうやら、この人物は探し物をしているという事であっているらしい。しばらく同じようなことを呟きつつ探し物をしていた謎の人物は、不意に動きを止め、こちらに振り向いてきた。

「…ん？」

起き上がってきたその人物と、自分たちの目が合う。その人物の鎧を見て、自分は驚愕に包まれた。

（…ベムラー!?）

思わず声を上げることがなかったのは、ラッキーだった。その人物の姿は、まさしく自分の記憶にあるベムラーそっくりだった。それも、ウルトラマン本編に出てきた最初の怪獣、宇宙怪獣ベムラーではなく、漫画『ULTRAMAN』に出てきた方のベムラーである。というか、この人は本物なのか？もし本物なら、この人の正体は：

驚愕で動けない自分を尻目に、謎の人物はこちらをじつと見つめる。何か妙な雰囲気  
が漂い始め、ハッケラン達も動きを見せない。しばらく沈黙が続いた後、謎の人物は急に動き出し——自分の方を指さした。

「君！」

「……え？」

自分も皆も驚く中、謎の人物は次の人物を指さす。選ばれたのは、ラキユースだった。  
「それと君！」

「……私？」

そして、謎の人物は手を合わせ、縋り付くような声色で、こちらに語り掛けてきた。  
「すまない、どうか、私わたくしを助けてくれ！」

「探し物を手伝ってほしい、ですか」

「そうだ。見ず知らずの人物に頼まれても迷惑だろうが、私はここの地理に疎い……一人



ではどうしても限界があるし、何とか聞いてもらえないだろうか」

自分の言葉に、鎧の人物、ベムラーさんはそう答える。まさか姿が同じなら名前も同じ、だなんて思ってもみなかったが、事実はそういうことらしい。それはともかくベムラーさんは非常に困った様子でこちらに尋ねてきた。さて、どうしたものか。

「…一応言っておくが、俺たちもここは始めてなんだ。他の連中を頼った方がいいと思  
うぜ」

「むむ、そうか…しかし…」

「まあ、話は聞いておいてあげる。それで、一体何を探しているの？」

「ああ、これだ」

ハツケランとラキユースの問いかけに対し、ベムラーさんは頷くと、そばに置いてあったアタツシケースみたいなものを開く。そこに入っていたのは手のひらに収まるサイズの小瓶が二つと、それがはすつぽりはまりそうなくぼみが三つ。どうやら、その小瓶が、探し物で間違いなさそうだった。

「これは私が追いかけていたある男が持っていた物で、ハツキリ言うところ危険物なんだが、その男は私の目の前である方法を使ってこの辺りに投棄した…私はそれを取り締まる側だから、探していたんだ」

「へえ、こんなのが…で、これは何て言う物なの？」

「…本当は喋りたくないんだが、君の頼みならば仕方がない。これは、グロテスセルと呼ばれる物質だ」

「グロテスセル…!?!」

ベムラーさんが告げた意外な名前に、思わず反応してしまふ。なるほど、確かに危険物だ。よく見れば、瓶の外見こそ違うが、中にある緑色の物体は、まさしくウルトラマンメビウスで出てきたグロテスセルそのものである。

そんな驚きの声を上げた自分に、皆の視線は急激に集まる。ベムラーさんもその反応は意外だったのか、表情こそ見えないが、それでもわかるぐらいには驚いているようだった。

「君は、これを知っているのか?」

「…はい、グロテスセル…かつてグロテス星人が持ち出した、魔神怪獣コダイゴンを操るために使われた物質です。中身が空洞の物体に入り込んで、それを動かすことが出来る…」

「…なるほど、アルシエのタレント知識が辺りを付けたってことは、怪獣関連か…あんたは、あれだ…宇宙人、つてやつで間違いないんだな?」

「…なるほど、タレントとは、異能のような力か。ああ、私は宇宙人で間違いないよ」

ベムラーさんは何でもない事のように、自分が宇宙人であると明かす。しかし、自分

の頭の中はそれどころではない。ベムラーさんの話が本当なら、とんでもない事態になっているという事だ。

グロテスセルとは、コダイゴンを操ったグロテス星人が操る物質で、ある程度空洞の物体にグロテスセルを注入すれば、それだけでコダイゴンが完成してしまう、という代物だ。コダイゴンサイズでは破壊衝動を抑えることが出来なくなる上、コダイゴン自体がウルトラマンの力では早々破壊されないほどの強さを持っている。これは、とんでもないことになっていた。

そして、そのことを思い出すついでに、自分はある事に気が付いた。この小瓶のサイズ、見覚えがある……!

「ベムラーさん、探しているモノは、これと同じサイズですか?」

「ああ、そうだ」

「…確認します。この小瓶で作れる、コダイゴンの数は、何体ですか?」

「…鋭いな、君は。三体だよ。これ一本で、嘗て地球に現れたコダイゴンなら三体は出来上がる」

「…やっぱり!なら、事態はかなりまずい。そのことを嘯み締め、自分はヘツケラン達の方に振り向いた。

「リーダー、ベムラーさんを手伝おう。この小瓶を放っておくと、大変なことになる」

「そうか…因みに、さっきの話はどういうことだ？」

「あの小瓶の中身がばらまかれると、コダイゴンと呼ばれる怪獣が三体出現する。コダイゴンはウルトラマンでも苦戦するほどの怪獣。放っておくのはあまりに危険」

「マジか…この小瓶一つでそんなことが…」

自分の言葉に、ヘッケランは驚愕を隠せていない。小瓶を眺めるヘッケランにも、そしてその後ろで待つ皆にも、事の重大さを理解してもらえたらしい。やがて、ヘッケランは小瓶から視線を上げると、ベムラーさんに真剣な表情で向き合った。

「よし…この小瓶探し、俺たちが手伝うぜ！」

「ほ、本当か！とても助かる！」

「ああ、これをほっとくのはシヤレにならないらしいからな…できる限り協力させてもらおう。お前らもそれでいいな？」

「ええ、いいわよ」「問題ありませんね」

「よし、なら「だったら、私たちも探す」…いいのか？」

小瓶探しに意気込むヘッケランの話に割り込むように、ラキユースが手を挙げた。彼女を見れば、こちらもまた、真剣なまなざしでベムラーさんを見つめていた。その後ろの『蒼の薔薇』の面々を含め、やる気十分、といった様子だった。

「ええ、その小瓶が危ないってことはわかったわ。なら、私たちも放っておけない。ここ

に来て怪物が現れるなんて最悪よ」

「…ま、そりやそうだな」

「…それに、私はやりたいことがある。…誰かを護るために、全力を尽くすってことを」  
ラキユースはそう言うのと、視線を自分の方に向けてきた。自然と、彼女と視線が合う。  
彼女の表情には、やる気に加え、何かに憧れているような、キラキラとしたものがあつた。そして自分と視線が合った彼女は、にこつと、見事な笑みを浮かべてくれた。

「…鬼リーダー、やつぱりもう人のこと言えない」あらティア、首のマッサージの続きする？」なんでもないです」

「…まったく。とにかく、よろしく頼むわ、ベムラーさん」

「…ああ！こちらからも、よろしく頼むよ！」

ラキユースの差し出した手に、ベムラーは嬉しそうに握手を返す。遅れてヘツケランも、ベムラーさんの手を握りしめる。こうして、自分たちは小瓶探しを行う事になったのだった。

「…そして、現在。自分はラキユースと二人で、近辺の搜索に当たっていた。…の、だ  
が

「…ない」

「…ないわね」

やはり、簡単に見つかるはずもない。そもそも小瓶は小瓶、サイズは小さめだしどこに転がるかもわからず、拾われてしまえばどうしようもない。故にそうやすやす見つかるわけもない。そろそろ日も暮れて来たので、早めに決着をつけたいところなのだが、そう上手くはいかないらしい。寧ろ難しくなっていくばかりである。

そんな感じで途方に暮れる自分たちに、男性っぽい声が届く。

「君たち、そちらはどうかな？」

「あ、ベムラーさん…ダメです、見つかりません」

「そうか…小瓶の位置はある程度把握できるからいいものの、ある程度だからな…まあ、ターマイト君達が先に見つけているかもしれないし、君の仲間のイミーナ君と、あとティア君とティナ君だったか？二人の探索能力は高いそうだから、そちらが先かもしれない。なんにせよ、合流するまでは、よろしく頼む」

「…はい、大丈夫です」

「ええ、私もいいわよ」

「そうか…ありがとう」

ベムラーさんはそう言うのと、自分たちに頭を下げた。しかし鎧の汚れ具合からして、彼もこれまで本気で探しているのがうかがえる。これには自分たちも付き合っただけがないといけない…と思う。

先ほどの会話の後、自分たちはこの格好では探し物はできないという事でまず着替えた後、ベムラーさんからある説明を受けた。というのも、彼は小瓶が落下した位置をある程度まで絞り込める装置を持っており、それを頼りに探していたとのことらしい。自分たちは持っていた地図にその範囲を何とか書き込むことに成功し、さらに絞り込むことが出来た。しかしそれだけでは不足があるという事なので、二手に分かれることとなった。

一つは、この温泉地の各地を回り、その小瓶が見つからないか探すチーム。これには、ヘツケラン、ロバーテイク、ガガーランさんにイビルアイさんが参加した。彼らは落し物の類が集まりそうな場所、情報が集まりそうな場所を巡り、そこから小瓶の行方を捜すことになっている。

もう一つは、決められた範囲を探すチーム。こちらには、自分にイミーナ、ラキュースとティアさんティナさん姉妹に加えベムラーさんが参加している。こっちのほうは範囲が決まってもしらみつぶしになることが予想されたため人数は多い。このチーム分けて、自分たちは捜査網を広げていくこととなった。今の所、こちらは見つかっていないが、向こうはどうなのかが気になるところである。

しかし、自分にはそれ以上に気がかりなことがあった。

「そういえば、あなたはその鎧みたいなものを脱がないみたいだけど……宇宙人、というの

はそういう金属みたいな体をしているの？」

「いや、私の種族は君たちと姿は異なるが、これは外皮と言うわけではないよ。…実はこれは、シェイプアップ用の健康器具なんだ」

「…え？健康、器具？」

「ああ。実は私、最近どうも筋肉が付きすぎてしまつてね…兄弟や仲間たちにはまた肉ダルマに磨きがかかりましたね、みたいなことを言われたし、お気に入りの服もサイズがきつくて着れなくなつてしまつてね…これはいけない、とダイエツトすることにしたんだ」

「そ、そう…宇宙人、というのも大変なのね」

「ああ、宇宙人と言つても悩むことは君たちと一緒になんだ。…いや、私の場合は筋肉付きやすい体質が原因なんだけどね。ヒカリがなんとかしてくれないものか…」

何気なくその気がかりのいる方向に意識を向けば、そこにはラキュースと会話するベムラーさんがいる。その会話内容を聞くと、どことなく脱力するというか…気がかりは杞憂なんじゃないか、と思えてしまう。

しかし、ベムラーさんは先ほど、自分の事をグロテスセルを取り締まる側の者だと言つていた。グロテスセルが存在するのはM78ワールドであり、そこでそういうものを取り締まる団体とはおそらくただ一つ。つまり彼の所属は宇宙警備隊である可能性



が高い。それに、彼の鎧も彼の名も、ある宇宙である人物が持っていたもの。ここにいるベムラーさんがその人物本人と言う事はおそらくないと思うが、これが例えば並行世界の同一人物だとすれば…ベムラーさんの、この人の正体は…

「皆…こつち…」

その思考は、突然響いたイミーナの声で遮られた。思考を中断し、顔を上げてみれば、イミーナが何かを握ってこちらに手を振っている。後ろでは、ティアさんとティナさんも、それぞれ何かを抱えているように見えた。

「…イミーナ、どうかした？」

「ええ、ちよつとね…まずは、これを見てほしいの」

「鬼ボス、こつちも」

「待ってね二人とも…これは…」

とりあえず三人でイミーナ達に駆け寄り、彼女たちが持っていたものを確認する。そこにあつたのは、ブタの貯金箱、木彫りの熊、招き猫の像の三種類。なんとというか、すごくガラクタ臭かった。

「…これは？」

「これは少し先のお土産屋さんで売ってた品物なのよ。可愛かったから思い出の品と思つて一人一つづつ…で、そうじゃなくて、これがすごいの！なんて言つても、神様が

宿っているのよ!」

「…神様?」

興奮するイミーナの物言いに、思わず怪訝な声が出てしまう。傍に控える二人の忍者を見ても、なんか嘘を言ってるようには見えないが、神様とはなんだ。しかし自分の声など気にしていない様子のイミーナは、興奮冷めやまぬまま、「ちよつと待ってね」と言う。ブタの貯金箱の腹の部分をくすぐるような、奇怪な指の動作を始めた。

「いったい何を、というより早く、それは訪れる。」

「動いた…!」

「え!?!…二人とも、まさかそれも…」

「うん、皆見てて…えい」

「な、なんと…これらすべてが動くのか…!」

三人が持っていたガラクタが、一斉に動き出したのだ。それも、生物みたいにひどく滑らかに。その奇妙さに、自分もラキユースもベムラーも皆驚き、思わず後ずさりそうになってしまう。

しかし、いち早く硬直の解けたベムラーさんが、ブタの貯金箱を手を取った。

「すまない、これをお借りしてもいいかな」

「ええ、大丈夫よ」

「では失礼して……うむ、中に駆動系のパーツや動力は見られないか……では、中身を」

ベムラーさんはそう言うのと、貯金箱の裏にあつた蓋を外す。すると、緑色の何かが、飛び出していった。そして、貯金箱はそれっきり、動かなくなつた。

……待て待て待て。今のは、アレなのか？ひよつとして、これが正解なのか？イミーナは「……あ、神様逃げちやつた……」なんて可愛い声を出しているが、それどころではない。自分はラクユースに目配せすると、ラクユースさんもそれに頷き、二人同時に忍者姉妹の持つガラクタに手を伸ばした。

……そして、残されたのは、動かぬガラクタ3つだけ。姉妹の持っていたガラクタも、緑色の何かを吐き出し、動かなくなつてしまつた。姉妹は「……動かなくなつた」「……そんな私の猫が……」などとそれぞれいじけているが、自分たちはそれどころではない。状況を把握した自分たちは、三人で顔を合わせ、同時にガラクタ共を指さした。

「……これだ!!」

——そして、事態は動き出す。

「失礼するわ」「お邪魔します」「すみません」

「ああいらつしやい……お、お客さん？」

店主のおじさんへの挨拶もそこそこに、イミーナ達から聞いた土産物屋に入つていく。突然奥に入り込んできた自分たちのただならぬ雰囲気は店主さんは困惑気味のよ

うだが、知った事ではない。とつと奥に入って、グロテスセルを探さなければ。

：周りの商品を見てみると、商品の土産物共はそろいもそろって勝手に動き出している。店先には『神様の宿ったありがたい品売ってます』なんてあったが、何が神様か。やはりここに、グロテスセルがあるとみていいだろう。グロテスセルが漏れ出して、商品が動いていたのだ。

困惑していたイミーナ達も店の中に入ったところで、搜索を開始する。店の中は狭く、グロテスセルが見つかるのは時間の問題と思われた。

「あーあったー！」

間もなく、奥の方でベムラーさんの声が聞こえた。声につられ見てみると、そこには見覚えのある小瓶を掲げるベムラーさんの姿が。その小瓶には、緑色の何かが存在していることが伺える。間違いない、あれこそ探していたグロテスセルだ。ああ良かった。時間はかかったが、見つかったのならこれで一安心である。

ラキュースと二人で近づき、小瓶を大事そうに抱えるベムラーさんに話しかけた。

「見つかったのね、よかった…」

「やりましたね、ベムラーさん」

「ああ、良かったよ。二人ともありがとう。ああ、本当に良かったー」

ツルツ（小瓶が滑り落ちる音）

←

パリン！（小瓶が割れる音）

「—え？」

：

：

：

…うん？

「…は？」「…えっ？」「えっ？」「何？」「どうかした？」「な、何事じゃ？」

：

：

：

…何か、とんでもないことが、起こった気がする。固まった体を、ぎぎぎ、という音が鳴りそうなくらいに無理矢理動かし、恐る恐る音が鳴り響いた場所、すなわちベムラーさんの足元を見てみると、そこには小瓶が見事に割れているのが見えた。そして小瓶の中から出たの緑の物質が、とぐろを巻く蛇のような生物らしさを醸し出しつつ、意思を持つかのように動き、置いてあつた像…この温泉地に伝わる伝説によれば、こここの神様が目出度いものだと言って流行らせたと言われる物体、恵比寿様の像に入り込んで

いった。

そして、目が光る恵比寿様。…まずい!!

「ラキユース！」

「わかった!!」

自分の掛け声に応じ、ラキユースが恵比寿様を持ち上げ、それを抱えて走っていく。「わ、わしの恵比寿様がぐ〜！」とかなんとか店主さんが言っているが、気にしている場合ではない。ラキユースさんを追いかけ、急いで飛び出す。

「…あ、ま、待ってくれ！」

遅れてベムラーさんも飛び出し、その後事態に気が付いたらしいイミーナ達も、そして何故か店主さんまでもが店を飛び出した。

先頭を走るのは、恵比寿様を抱えるラキユース。かなり早いですが、何とか追いつける。とりあえず遠くに走って、これをどうにかしなければ。そう思っていると、目の前のラキユースの懐近くが、光ったような気がした。

「…くっ！これは…！」

戸惑いの声を上げ、速度の落ちたラキユースに何とか追いつく。そのまま彼女と並走しながらその懐をよく見てみると、そこでラキユースが抱えている恵比寿様が、光と共に胎動しているように見えた。

まずい。これは本格的にまずい。嫌な予感が背中を走ったことで、自分は走りながら、恵比寿様をどうするか迷っている様子のラキユースに、思いつきり叫んだ。

「ラキユース!! それ、思いつきり投げて!!」

「! わ、わかった!!」

ラキユースはそれに応じ、恵比寿様を全力で振りかぶり、投げ飛ばす。一流の戦士であるラキユースの戦力で飛んでいく恵比寿様を、近くにあった小高い丘の上に移動して観察する。後ろを走ってきた面々も、自分たちに追いつき、同じように丘の上から恵比寿様を見守る。

恵比寿様はというと、飛んでいく勢いはそのまま、だんだん肥大化していくのが見えた。ふくよかに膨らんでいく恵比寿様は、想像以上に遠くに飛んでいき、温泉地から離れた広い平野部に飛んでいく。いや、これは、恵比寿様本体の力も働いているのか? 自分の考えなど知らない顔の恵比寿様は、やがて空中で体を捻ると、見事な着地を決めた。その姿は、まさしく怪物そのもので、赤く光る瞳が不気味な雰囲気醸し出していた。

コダイゴンジアザー、まさに誕生の瞬間である。

「…最悪だ…!!」

頭を抱えたバムラーさんから発せられた、やってしまった、といった感じの音が、丘の上でむなしく響いた。

## 魔神、夕焼けに吠える 前編

夕焼けの平原を、巨大な恵比寿様が歩いていく。それだけ聞くとシユールな光景が目には浮かぶかもしれないが、事態は深刻だ。ハッキリ言って状況は最悪に近い。それだけ驚異的な存在が、この地に生まれたのだから。

小高い丘から皆でその光景を眺めているが、見た者は皆一様に固まってしまふ。まあ、動く巨大な恵比寿様なんて、反応に困るからしょうがないのかもしれない。またただ一人、この怪獣が出現するきっかけを作ってしまった人物のみ、ぐおお、と頭を抱えて唸っているが、今更何を言ってもしょうがないので、ベムラーさんには早く復活してほしいところである。ともかく自分もその異様な怪獣を視界に収めつつ、かつて恵比寿様であったものの名前を口にした。

「コダイゴンジアザー、か…」

「…コダイゴンジアザー？」

自分の呟きに、隣にいたラキユースが反応する。周りの皆も、怪獣の方から自分の方に注意を移している。思ったより、自分の呟きはよく聞こえたいらしい。情報共有はしておくべきだし、とりあえず自分の知っていることを話すことにした。



「あの怪獣の名前は、魔神怪獣コダイゴンジアザー……コダイゴン同様、空洞の物体にグロテスセルが流し込まれたことにより誕生した怪獣」

「……そういえば、私も聞いたことわたくしがある。かつてウルトラマンメビウスと呼ばれる戦士が地球で戦った怪獣に、そのような名前のものがいたはずだ」

自分の説明に、復活したらしいベムラーさんの補足が入る。やはりこの人は、M78ワールドの出身らしい。それも、ウルトラマンメビウスとそれにつながるウルトラマン達が来訪した、TV本編の世界に近い宇宙のようだ。やはり彼の正体は……いや、今は置いておこう。それよりもまずは、コダイゴンジアザーである。

魔神怪獣コダイゴンジアザー。魔神怪獣コダイゴン同様、グロテスセルが注入されることで完成する怪獣だ。違いがあるとすれば、注入された物体の違いに加え、注入されたグロテスセルの量が挙げられる。嘗てウルトラマンメビウスが戦ったコダイゴンジアザーは、コダイゴンを三つは作れる量のグロテスセルを一つの物体にすべて注入した事により、コダイゴン以上の強度を手に入れたのだ。その結果、ただでさえ強いコダイゴン以上の固さ、それに加え卓越した格闘センスに高速移動能力・飛行能力までも入手し、飛び道具まで持つことになってしまった。そしてコダイゴンジアザーはウルトラマン二体と互角に戦う事の出来る怪獣となってしまい、ウルトラマンメビウスと共に戦ったウルトラマンヒカリアは、撃破するのに多大な労力を支払うハメになったのである。

さて、今回出てきたコダイゴンジアザーだが、その登場の経緯がメビウスと戦った個体のそれに非常に酷似している。瓶が落ちて割れた、という事故の事はともかく、割れた瓶に入っていたのは、コダイゴンが三つ作れると言われていた量のグロテスセル。なら、あのコダイゴンジアザーも、メビウスが戦った個体と同程度の實力を持つ、と考えていいだろう。つまるところ、あの怪獣は相当な強豪怪獣なのである。

だが、登場経緯も實力も同じなら、対処方法も同じという事だ。なら話は早い。要はそこから策を練ればいいだけの話である。

「店主さん、あの恵比寿様について―」

自分はその策のカギを握る人物、店主のおじさんに話を聞こうとして―

「…店主さん?」

―そこで、ようやく店主さんが立ったまま気絶していることに気が付いた。…なんたることだ。そんなに恵比寿様が大事だったのか。残酷な現実には打ちのめされそうになっていると、イミナーナから声を掛けられた。

「アルシエ、なんで店主さんなの?」

「…あのコダイゴンジアザーの元になった像には、グロテスセルが入るだけの隙間があつたと思った。それを聞き出せば、あれの攻略方法も見つかると思って」

「…なるほど!グロテスセルも物体、入り込むための隙間がないと入れない。そしてそ

の隙間は、弱点になる…そこを突ければ、硬い怪獣の装甲を破壊し、グロテスセルを気化させることが出来る。そういうことかな？」

「はい、その通りです。その隙間になりそう…例えば壊れている箇所があるか、みたいなことを、聞いたかったのですが…」

「…まあ、この状態では聞けないか…」

自分とベムラーさんの視線は自然と、立ち往生してしまつた店主さんにそそがれた。店主さんがこの状態では、聞きたいことも聞き出せない。相手が相手だから、弱点があれば知りたかつたのだが、上手いかないものである。

自分が店主さんに聞きたかつたことと、その意図は、先程の会話の通りである。あの恵比寿様にグロテスセルが入り込めたという事は、それだけの隙間があると考えられるから、その有無を聞き出したかつたわけである。結果はこのざまだが。

…嘆いていても仕方がない。どっちにしろ、あの怪獣の進路に温泉地が含まれる以上、やる事は一つだ。覚悟を決め、自分は皆に周知する。

「…イミーナ、店主さんを安全なところに連れて行って。店主さんが目覚めたら、恵比寿様には壊れた所がないか聞いてみて。そこがあいつの弱点になるはずだから」

「わかつたわ。後はヘッケラン達ね…」

「…ティア、ティナ、のろしを上げて、ターマイトさん達に合図を送るかしら。ガガー

ランとイビルアイがいるから、何とか伝わると思うのだけど」

「…！なら、二人はヘツケランに合流したら、ヘツケランの指示に従ってもらえないかしら。たぶんあいつ、ここの人たちの避難誘導をしようから」

「だそうよ。頼めるかしら」

「…大丈夫。この状況だし、仕方ない」

「…私も。できればイミーナさんに「ティア？」…冗談だから、鬼リーダー。だから指をワキワキさせるのはやめて。怖いから」

「はは、元気な事だ…なら私は、店主さんを運ぼうか。これでも力には自信がある。…アルシエ君とラクユース君は、どうするのかな」

大体の行動方針が決まり、ベムラーさんが自分たちに向かって質問を投げかけてくる。自分はその問いかけに対し、まずラクユースの顔を見る。ラクユースもこちらに気が付き、真面目な表情で頷いてくれた。…よし。

「自分とラクユースは、為すべき事を為しに行きます。皆には、後の事を頼みます」

「…そうか。元はと言えば元凶は私だ。口出しするべきではないのだろう。だが、これだけは言わせてほしい」

「はい、なんでしよう」

「武運を、祈っている」

…ひよつとしたら、この鎧の人物は、もう自分たちが何者か、察しがついているのかもしれない。ベムラーさんの表情は相変わらず鎧で読めないが、そう思わせるだけの凄みがあった。やはり、彼なのだろうか。

…本当にそうなら、こんなによろしいことはない。ベムラーさんの言葉を胸に刻むと、ラキユースにもう一度目配せし、そして同時に駆けだした。

それなりに怪獣に接近したところで自分は足を止め、同じく止まったラキユースにある事を伝える。

「ラキユース、今回の敵は強い。あいつはウルトラマンを二人相手取れるだけの膂力、硬度、速度、技巧…すべてを兼ねそろえた、化け物。見た目に騙されず、敵の行動に気を付けて戦ってほしい」

「わかったわ。あなたがそういうのなら、きっと危ない敵なのね…でも、たぶんだけど、大丈夫よ」

「…それは、どういう？」

らしくない気がする楽観論に思わず疑問を呈すると、ラキユースは自分を見つめ、勝負な笑みを浮かべた。

「だって、アルシエがいるから。アルシエという、怪獣退治の専門家…私も含め、みんなを救ってきた勇者と共に戦えるもの。負ける気なんて、まるでしないわ」

—…なるほど。

「…そこまで、期待されても困る」

どうやら、ラキユースの中の自分の評価は、自分の想像以上に上位に位置づけられているらしい。意外と言うか、なんとというか。なにがきっかけでそうなったのかよくわからない。だから、そんなに期待されても、少し困る。

…だが。

「でも、あなたがそこまで期待してくれるのは…悪くない」

「アルシエ…！」

「なら、あなたの期待にも、応えて見せる。…行こう！」

「ええ!!」

戦友の期待を胸に、背後から新たな変身アイテム、『ループジャイロ』を取り出す。ラキユースも同時にそれを取り出すと、自分たちは突如別な空間に飛ばされたような感覚を覚えた。

それを意に介することなく、プロセスを進めていく。

「セレクト！クリスタル！」

ガイアとアグルの『ループクリスタル』が自分たちの手で煌めき、自然と力が入る。それをジャイロに装着すると、高らかにジャイロを掲げた。

《ウルトラマンガイア!》《ウルトラマンアグル!》

「纏うは大地! 生命の営み!」

「纏うは大海! 生命の育み!」

そして、ダメ押しの手ノドル操作で、自分たちは光に包まれた。

「ガイアアアアアアアアアアア!!」

「アグルウウウウウウウウウ!!」

光になった自分たちは、その姿を巨人のそれに変えていき、大空へと飛び立つ。光が消え巨人の姿が確立したところで、二人同時に地面に着地する。

その結果、地面が大きく揺れそこから土砂が噴出する。宙を舞う土砂がパラパラと降り注ぎ、その音と地面の変化に怪獣が振り向いたところで、二人のウルトラマンが同時に構えを取った。

「デュアツ!」

「デュアツ!」

目前に、巨大な恵比寿様がいる。恵比寿様は右手に釣り竿、左手に鯛を持ち、ご機嫌そうな様子だ。やはりコダイゴンジアザー、こう、正面に構えてみても、やはり非現実的な怪獣に思える。怪獣は皆非現実なのだが、それはそれとして、だ。

「…A a ~ N?」

コダイゴンジアザーはこちらを見ると、髭をさすりつつガンつけてくる。その緊張感のない仕草に思わず脱力しそうになるが、油断してはならない。こいつはウルトラマンが戦ってきた怪獣たちの中でも、かなりの実力者だ。慎重になるのに越したことはない。

相手から目を離さないようにしつつ、並び立つアグルの近くに寄る。

「ラキユース、気を付けて。あいつはこの距離でも、油断ならない…!」

「わかったわ。でも、あんまり怖くは—え!」

「なっ!」

それは、ラキユースに話しかけた一瞬の出来事。コダイゴンジアザーは、自分たちが会話したその一瞬の間に、前傾姿勢を取ると、その体勢のままスライドするように高速で移動した。その移動のあまりの速さに、一瞬怪獣の姿を見失ってしまう。一体どこに、と探そうとした瞬間、後方で地面をこするような足音が聞こえた。

その意味を理解し、素早く後ろに振り向く。果たしてそこには、釣り竿を振りかぶり、今にも自分を打ち据えんとするコダイゴンジアザーの姿があった。

「うあっ!」

「!・アルシエ!」



自分がそれに反応するよりも早く、怪獣の振りかぶった釣り竿が自分を打つ。その釣り竿には見た目からは信じられないほどの威力が込められており、その衝撃で自分は吹き飛ばされてしまった。

そして自分より一瞬遅れて反応したアグルに対しても、コダイゴンジアザーは容赦なく襲い掛かる。その鈍重そうな見た目とは裏腹な速さでアグルに接近すると、そのまま釣り竿で打ちつけ始めた。

「く、くの……！」

もちろんアグルもタダでやられるわけではなく、その釣り竿を間一髪躲し、後退して距離を取ろうとする。だがコダイゴンジアザーもそれを許す気はないらしく、さらに距離を詰めそのまま釣り竿を振りかぶった。

そんな一進一退の攻防が繰り返されるが、先に動いたのはアグルだった。アグルは怪獣から距離を取りつつ、右腕を伸ばす。するとそこに光が集まり、それが伸びることで『アグルセイバー』が形成される。

アグルはそれを確認すると、釣り竿で襲い来る怪獣に斬りかかった。

「これで、どうだっ！」

ラキユースの気迫と共に振るわれた光の剣は、まず怪獣の釣り竿へと吸い込まれるように伸びていき、そのまま釣り竿を両断した。

それに怪獣が一瞬硬直したのを、ラキユースは見逃さない。そのまま返す刀で振り抜かれたアグルの剣が、コダイゴンジアザーへと迫っていく。アグルの一撃は確実に怪獣を捉えており、それにより怪獣は両断される：はずだった。

「なっ……!」

ラキユースの驚愕が、はつきりした形で伝わってくる。その視線の先には、コダイゴンジアザーの体に直撃し―そのまま、真つ二つに折れた光の剣があった。コダイゴンジアザーの強固なボディは、アグルの剣に打ち勝ち、そのまま折ってしまったのだ。

そして怪獣は、硬直するアグルに迫っていく。そうはさせない。自分はそこで地面を強く蹴ると、勢いをつけて進撃し、怪獣目掛けて飛び蹴りの姿勢を取った。

「アエアツ!!」

自分の闘志が乗り移ったガイアの雄たけびと共に繰り出されたキックは、コダイゴンジアザーの体に直撃した。その勢いで怪獣は横に少し押し出される。その姿に、ダメージは見当たらない。

「…固い…!」

そして自分かというと、始めてこの怪獣の恐ろしさというのを実感していた。わかっていたとはいえ、こいつの固さははつきり言って異常だ。これまでも固い怪獣というのは何体も存在していたが、その中でもこいつの硬さは最高位に属するといってもいいだ

ろう。おそらく元々の恵比寿様の材質は木材だと思うのだが、それがここまで化けてしまうのである。げに恐ろしきはグロテスセルだ、と認識を改める。

だが、ここで手をこまねいててもしょうがない。気合を入れなすと、自分は怪獣目掛けて突撃した。

「はあっ！」

「…？」

自分の動きに対し、まるで危機感を持っていない様子のコダイゴンジアザーに対し、まずは拳を振りかぶる。全力で振り抜いた拳は、しかし当たる直前になって躲されてしまう。

めげずに何度も拳を振り抜くが、結果は同じ。自分の速度に対し、相手の反応速度の方が完全に上回っていた。

「~~~~~♪」

まるで鼻歌のような陽気な声を上げつつ、余裕な感じで回避し続けるコダイゴンジアザー。このままではまずい。自分はもう一度右の拳を振りかぶり、殴り飛ばそうと構えを取り、そこでコダイゴンジアザーの反応があったのを確認する。

「…そっ！」

その反応で動いた方向に、本命である左の拳を叩き込む。パンチは見事に直撃し、す

こし後ろに下がるコダイゴンジアザー。やはり拳から伝わってくる硬さはとんでもないが、気にせず打ち込む。

しかし追撃のため振り抜かれた拳は、すでに釣り竿を捨てたコダイゴンジアザーの手にすつぽりと収まった。そして、怪獣はそのまま、自分の腕を力任せに捻り上げた。

「くうう…っ！」

その信じられない膂力に、思わず苦悶の声を上げてしまう。流石というべきか、その膂力もまた異質で、これもこれまで戦った怪獣の中で上位に位置する。こちらが力を込めてもまるでびくともしない怪獣の腕を見て、これはまずいと脳が警告を上げた。

「させない！」

だが、今の自分は一人ではない。もう一人のウルトラマンの機敏な動きから繰りだされた空中かかと落としが、怪獣の腕に直撃する。その衝撃に怪獣の腕が離れ、たたらを踏みそうになるが何とかこらえた。

「アルシエ、大丈夫!？」

「うん。それより、今はあいつを」

「ええ！」

隣に駆け寄ってきたラキユースの声に応え、アグルと頷き合うと、先ほどのアグルの蹴りで少しバランスを崩した様子のコダイゴンジアザー目掛けて突っ込み、そのまま二

人並んでキックを叩き込んだ。

さすがにウルトラマン二人分の威力を体の重さや硬さで防ぎきる事はできなかったのか、コダイゴンジアザーはこれまで以上に後方に押し出される。手ごたえはぼつちりだったから、これは少しくらい効いたのだろうか。そのまま追撃を繰り返さんと、再び二人同時に突進し、そのまま蹴りを叩き込もうとする。だが、キックが命中すると思われた次の瞬間、すさまじい音と共に、地面が爆発した。

「なっ……！」

「これは……!? あいつはど……！」

爆発的に広がった土煙が止むと、コダイゴンジアザーの姿はどこにもいなかった。と思ったのもつかの間、後方で何かが落ちたような音が聞こえる。二人同時に後方へ振り返ると、そこには自分たちと距離を取った怪獣の姿があった。どうやら、さっきの爆発は、奴が跳躍した際にできたものらしい。それらしい動きが間宅見られなかったから、ノーモーションでジャンプしたのだろう。

そしてコダイゴンジアザーは、自分たちに向かって、左側に抱えていた鯛の口を向けていた。……まずい！

「SHO—BAI—HANJO—！」 「ラキユース、避けて！」

「えっ? ……きやつ！」

怪獣の鯛から不思議な掛け声が出るのと、自分がラキユースに警告を発したのは、ほぼ同時だった。そこに戸惑ったのか、一瞬動きが止まったアグルに対し、鯛から発射された光の弾―名前は鯛砲―が降り注ぐ。その猛攻はアグルに命中し、そのまま吹き飛ばしてしまった。

そして自分にも、鯛砲は容赦なく降り注いでくる。何とか回避してはいるものの、コダイゴンジアザーはアグルから標的を自分に変え、どんどん鯛砲を撃つてくるため次第に厳しくなってきた。格闘戦を挑もうにも、結構距離を離されてしまったため、ここから相手の攻撃をかくぐつてこちらの一撃をお見舞いするのは少々難しい。

なら、光線技だ。相手の硬さを考慮している暇はない。自分は鯛砲を躲しつつ、ウルトラマンではない自分自身の手を動かし、求めていた『オーブリングNEO』をつかみ取った。

《ゼットシウム光線!》

そして『オーブリングNEO』を操作した際の音と共に、自分も光線発射の構えを取る。ガイアの体もまたそれに合わせて構えを取り、一気に十字を組んで狙いを定めた。

「アアアア…デユアツ!!」

掛け声とともに発射された紅白の光線は、迫りくる鯛砲を弾き飛ばしつつ、コダイゴンジアザー目掛けてまっすぐ飛んでいく。意表を突かれたのか驚きを体で表現する怪

獣に対し、光線が直撃する。火花が散るような音が鳴り響き、一瞬輝いたかと思うと、爆発を起こした。

それと同時に、吹き飛ばされていたアグルが復帰してくる。隣に立つアグルから、声が聞こえた。

「やったわね」

…それ、フラグ。一瞬本気で言いそうになつたが、まあラキユースはそんなこと言われてもわからないだろうし、自分も怪獣を倒した際心の中でやったかくらい言うので、ここは何とかこらえた。

だが、今回はフラグだったらしい。爆発の煙が晴れると、そこには鯛砲こそやんだが自身はまるで平気そうなコダイゴンジァザーの姿があつた。コダイゴンジァザーはこちらを一瞥すると、挑発するような笑みを浮かべた。

…やはり、難敵である。自分はその事実を嘔み締め、再び突撃した。

## 魔神、夕焼けに吠える 後編

時折響く大きな衝撃音に、度々イミーナの顔が暗くなる。嘗てはウルトラマンの事の中で応援したり、時には早く決着をつけろと命令したくなったりもした決着を待つ時間であったが、自分たちにも内緒で一人、自分たちの中で最年少の少女が戦っていたという事実を知った今、イミーナはこの待ち時間を他人事のように思う事は出来なくなっていた。

「…イミーナ君、ウルトラマンの戦いが気になるのはわかる」

「…それは、そうだけど」

「だが、ウルトラマンの戦いに、力のない者が入り込んでも、今度はウルトラマンが傷つくだけだ。ここは、堪えてくれ」

「…わかつているわよ、そんなこと」

隣に座るベムラーの指摘にも、力なく悪態をつくしかない。イミーナにとっては、それだけアルシエを待つという事が苦痛に思えた。

…いや、本当はベムラーの言った通りなのだろう。つまり、自分はウルトラマンの戦いに入り込みたいのだ。そう考えれば、イミーナは自分の思いに少しだけ納得ができ



た。だが、納得ができただけで、心の暗雲が消えることはない。ベムラーの言う通り、ウルトラマンのような巨大な体を持つわけでもない自分はウルトラマン同士の戦いについては無力だし、何よりそれで自分が傷つけば、あの責任感の強いアルシエが悲しむことはイミーナにも理解できる。だからこそ、イミーナはやるせなさで心が一杯だった。

(…ダメダメ、今はこの店主さんが起きるのを待たなきゃ)

イミーナは気持ち切り替えようとして、まず現状の事を考えることにした。

現在、彼女とベムラーは、先程グロテスセルがあつた店の中にいる。そこで運んできた気絶中の店主を寝かせ、覚醒するのを待っているのだ。この店主から巨大化する前の恵比寿様に何か傷のようなものがないかを聞き、それを戦うアルシエたちに伝えるというのが、彼女たちの使命だった。

(…終わっちゃった)

いけないいけない、とイミーナは首を振る。もつと話が広がりそうな事を考えよう。そう思いいろいろ考え込んだイミーナが思いついたことは…やはり、怪獣の事だった。「…ねえ、ベムラー。あなたって、ああいう怪獣の事詳しいの?」

「うん? ああ、とても詳しいよ。これでも一応、専門家などと呼ばれるくらいにはね」「…だったら、あの怪獣の事も教えてくれる? 何か話がないと、正直、私…」

「…そうか。なら、あの怪獣について話そうか」

ベムラーはそう言うのと、店主の方に向いていたのをイミーナの方に向くように、座り直す。そして、ベムラーの解説が始まった。

「そうだな…まず、コダイゴンについて話そう。コダイゴン、正式名称魔神怪獣コダイゴンは、ある場所にあった御神体に、グロテス星人がグロテスセルを注入することで生まれた怪獣だ。その戦闘力はすさまじく、当時地球を守っていたウルトラマンでも大分苦戦したんだ」

「…そんなに強かったの？」

「ああ、ジャック…ウルトラマンジャックはかなりの実力者だったのだが、それでもまともなダメージを与えるのは難しかったらしい。ジャックは、その硬さを自分が地球で戦った怪獣の中でもかなりのモノだと話していたよ」

「そう…でも、それじゃあどうやってウルトラマンは、コダイゴンを倒したの？ やつぱり、壊れた所があったから？」

「いや、当時のコダイゴンに壊れていた箇所があったなんて話は聞いていない。ジャックが戦ったコダイゴンは、それを生み出したグロテス星人が倒されたことで元の御神体に戻ったんだ」

「そう、生み出した存在を倒したから…ん？」

そこで、イミーナの頭の中で何かが閃いた。コダイゴンは、生みの親を倒されたこと

で元に戻ったという。なら、今回の生みの親とは？イミーナはそれを思い出し…持つていた弓を、ベムラーに構えた。

「…待つてくれ。その弓は何のつもりなのか、説明を要求する」

「え、だつてあなた、生みの親を倒したら、コダイゴンも倒せたんでしよう？だつたら、ここであなたを始末したら…」

「…いやいやいや」

さすがにそれは、といったニユアンスのジエスチャーが、ベムラーから発せられる。解説したら殺されそうになった、というのはさすがの彼でも想定外であった。

「気持ちわかるけどね？今回のコダイゴンジアザーは、はつきり言つて事故の類いだから。コントロールしているグロテス星人がいらない以上、そんなことしてもどうしようもないよ」

「そう…これはいけるつて思つたのに」

「うん、即断即決は悪いことだとは言わないが、人にいきなり武器を突きつけるのはやめようか」

ベムラーのその発言に、イミーナは渋々といった感じで、やつと武器を下ろしたのだった。

そんなことを挟みつつ、時間は少しずつ過ぎていく。イミーナ達に何度目かの戦場か

らの音が聞こえた所で、彼女たちの足元からうめき声が上がった。

「うう……こ、ここは……」

「!!目覚めたの!?!」

「ご老人、こちらの事がわかりますか?」

「わ、わしは……恵比寿様が、大きくなって……そ、そうじゃ、儂の恵比寿様が!」

「大丈夫です。状況を説明します」

ベムラーは店主の事を優しく落ち着かせると、これまでの出来事を説明する。店主はその話をうまく呑み込めたわけではなかったが、それでも大変なことが起きているという事はわかったのか、冷静さを取り戻せたようだった。

「なるほど、儂の恵比寿様が、怪獣に……」

「はい。その恵比寿様を元に戻すため、ウルトラマンが今戦っています。恵比寿様を元に戻すためにも、あなたの記憶が必要なのです」

「そうか……そういうえば、儂はあの像を落つことしたことがあつてな」

「!……それは、どういうことですか」

「ああ、ちよいと手を滑らせてな。その時じゃったか、確か右足が少し、欠けたんじゃよ」

「……それだ!」

店主がもたらした有力な情報に、思わずベムラーの声の調子が上がる。必要な情報を

経た後、ベムラーは跳ねるように立ち会がり、そのまま店の外に出ていこうとする。その姿に一瞬遅る形で、イミーナはなんとか既に店を出症としていた彼の後ろ姿を呼び止めた。

「ま、待つて！どこに行くの！」

「決まっている。このことをウルトラマンに伝えに行く。あのコダイゴンジアザーは強敵、あまりぐずぐずしてはられないからね」

「で、でも、危ないんじゃない？」

「…心配しなくても、わたくし私はああいう現場には心得がある。それに、事の発端は私にある以上、こういう危ない橋を渡るのは私の役目だ。だから、私の事は心配いらぬよ。それに…」

「それに？」

イミーナの疑問の声に対し、ベムラーは少し間を置き、息を吐く。そしてイミーナの方を向くと、優しい声色で口を開いた。

「私には、守りたいものがある。それを守り抜くまで、私は死なない」

「…」

「では、店主さんを頼む」

そう言い残し、ベムラーは店の外へと飛び出した。後に残されたのはイミーナと、状

況をうまく呑み込めていない店主のみ。何を言うべきか戸惑っている様子の店主をよそに、イミーナは項垂れ、悲しげな顔で呟く。

「…何よ、守りたい、なんて。アルシエみたいなこと…」

やはり、自分は無力なのか。ウルトラマンの、アルシエの戦いに何もできないのか。そんな思いが、再び彼女の頭をよぎる。その考えを振り払いつつ、彼女は祈り続ける。アルシエが、帰ってこれますように。その願いが通じなくても、それを願う事だけは、今の彼女の心が譲ることができない一線だった。

—戦況は、ますます苦しいものになっていた。

「オアツ!! デュアツ!!」

「〜♪」

コダイゴンジアザーに接近し、ラツシュを仕掛けていく。だが自分が何度も繰り出した攻撃は、こちらをあざ笑っているような調子のコダイゴンジアザーに軽々といなされてしまう。両手で難なく自分の拳をいなしていくコダイゴンジアザーは、逆に自分の腕をはじくと、ガードがなくなった自分の腹部に、その硬く重い拳を叩き込んだ。

「ぐうっ…!」

その鋭い一撃にうめき声が漏れ、吐き気がこみあげてくる。何とかそれを抑えつつ立

ち向かおうとするが、相手はそこにできた隙を逃すほどのんきな怪獣ではなかったらしい。コダイゴンジアザーはさらに自分に接近すると、腹を抑えたことで少しだけ突き出す格好となった自分の顎を、思いつきりアッパーで殴り飛ばしてきた。

「グオツ!!」

殴り飛ばされ、その勢いで空を舞い、あおむけで地面に叩きつけられる。パンチの直撃より一瞬早く飛び上がったおかげで、最大のダメージを顎にもらうことは防いだが、それでも痛いし苦しい。だが、これなら問題なく動けそうだ。

しつこく接近するコダイゴンジアザーを、起き上がりに関わせた脚で蹴り飛ばす。そしてそのまま足の勢いを利用し、後転倒立に近い形で起き上がった。怪獣はキックの勢いで後ずさっており、自分もバックステップをする形で距離を取った。

「SYO—BAI・HANJO—!」

「このお…っ!」

別な方向から、うるさい叫び声とラキュースのいらだった声が聞こえる。怪獣を視界に収めつつ、ちらりと見てみれば、そこにはコダイゴンジアザーの鯛が空を舞っており、アグルの周りを旋回している姿があった。

「SYO—BAI・HANJO—! SYO—BAI・HANJO—!」

「ハの、しつこい!」

しきりに同じことを叫びつつ、アグルの周りを飛び回り突撃する鯛。アグルはそれを何とか躲している様子だったが、ラキユースの疲労は溜まっていく一方だ。

コダイゴンジアザーの鯛は、自力で空を飛ぶことが出来る。その性能をいかに発揮し、鯛はアグルを翻弄していた。あの鯛もまたかなりの硬さを誇るため、そう簡単にはどうこうできないのが悩ましい。

そして気が付くと、視界に納めていたコダイゴンジアザーの本体がこちらに突進してくるのが見えた。何とかそれを脇をすり抜ける形で躲し、すれ違ったコダイゴンジアザーの姿を捉えようとして後ろを振り向く。

だがそこに、コダイゴンジアザーの姿はなかった。

「……消えた!?!」

いったいどこに、という思いが頭を支配し、周りをきよろきよろと探してみるが、奴の姿はどこにもない。恐らく、あの高速移動で消えたのだろう。なら、奴は今どこにいる?!

…落ち着け、自分。今は、あいつの技を思い出すんだ。今戦っているコダイゴンジアザーは、自分がかつて見たウルトラマンメビウスと戦った個体とあまり違いがない。だから、その時の記憶をたどれば、ある程度は予測できるはずだ。奴は、こういう時どこに……!



「…後ろ！」

自分がその記憶を思い出し、後方に振り向いたのと、コダイゴンジアザーが空を飛び自分の背後にぶつかろうとしていたのは、まさに同時だった。だが、相手の方が一瞬早い。何とかガードを行うも、勢いそのままにぶつかってきたコダイゴンジアザーに吹き飛ばされてしまう。

腕の痺れと痛みをこらえつつ、何とか前を見る。だがそこにいるはずの怪獣の姿はない。また後方か？ そう思い振り向こうとするが、それより早く背中に衝撃が走り、自分はなすすべなく吹き飛ばされた。

「…早い…」

どうやら、怪獣は自分の反応速度に合わせて、さらに自身の速度を上げて接近してきたらしい。その速さに称賛でも送ってやりたいところだが、そうも言っていられない。倒れこんだ自分の体を起こそうとするが、脇腹にさらなる衝撃が走り妨害される。再び吹き飛ばされ、自分は数回地面を転がってあおむけに倒れこむ。世界が回り痛みが響いて苦しいが、それでも何とか立ち上がろうとした自分の視界に、茶色の巨体が映りこんだ。

「…がはっ!？」

腹部にかかる衝撃と重さで、体の中身がすべて押し出されたような感覚に陥る。自分の体は、コダイゴンジアザーに踏みつけられていた。怪獣はそのまま、さらに自分の体

の上でストンピングを行う。その度に自分の体から空気という空気が押し出され、さらなる苦痛を与えていった。

そして、胸元から嫌な音が鳴り響き、同時に胸元に苦しみが広がっていく。『ライフゲージ』が点滅しだした。このままではまずい。だが、自分一人ではどうしようもできなさそうな予感がする。相手の強さは、想像以上に凶悪だった。

「……っ……」

「SYO—BAI・HANJO—SYO—BAI「いい加減に……」HAN:……」

「……しろおおおっ……」

だが、向こうの戦場では変化があった。何とか視界をそちらに向けてみれば、かなりの速さで飛んでくる鯛と、それを全力で振りかぶった様子のアグルの姿があった。どうやらアグルは鯛を捕まえる事に成功し、それをキャッチ&リリースしたらしい。

そして結構な勢いをつけて飛投げられた鯛は、一直線に自分の上、つまりコダイゴンジアザー目掛けて飛んできていた。

「SYOBAI HANJO! SYOBAI HANJO! SYOUBAI HANJO!」

「ITAI!」

流石にその速さには対応できなかったのか、鯛は怪獣の腹に直撃し、そのまま自分から引きはがしていく。その隙に地面を転がる形で何とか脱出し、やってきたアグルに助

けてもらいう形で身を起こすことに成功した。

「アルシエ、大丈夫!？」

「うん、ありがとうラクユース。あなたの方は?」

「私は平気よ!それよりあなたの方が……!」

「…大丈夫、自分もまだ戦えるから…それより今は、あいつを」

どうやらラクユースは心配性らしく、自分の方をとてても気にしてくれている。気持ちとはとてもありがたいが、それは戦いの後まとめて受け取るべきものだ。自分は彼女を何とか諫め、そのまま怪獣の方に意識を移した。コダイゴンジアザーは結構な距離を吹き飛ばされたらしく、しばらくひっくり返っていたが、自分が呼吸を少し整えている間に立ち上がる事に成功していた。その体には、可視化できるダメージは見当たらない。

やはり、コダイゴンジアザーは強力だ。その硬さ、速さ、強さ、賢さとどれをとつても一級品。弱点があるのであればそれを突いてさっさと倒してしまいたいが、イミナー達からの連絡がない以上、今それを期待することはできない。ここは、このまま戦っていくしかないのだろう。幸いアグルの『ライフゲージ』はまだ点滅していないし、まだまだいけるはずだ。

現状を把握していると、目の前のコダイゴンジアザーは、準備が完了したのか今にも突撃しそうな体勢を取っていた。アグルもまたそれを見て、自分を庇うような位置に陣

取る。そのまま、激突するかに思われたその時――

「…なっ」

「えっ…?」

「!？」

――自分たちと怪獣の間に、赤い光が着地した。

「なに、あれ…」

「…わからない」

自分とラキユースが困惑し、怪獣も同じような思いなのか動きが見えない中、着地した光は次第に消えていく。光が完全になくなった時、そこにいたのは、銀色の巨人だった。

「…嘘」

…そんな、バカな。あの巨人が、あの人が、こんなところにいるなんて。そしてこうして、自分の前に現れるなんて。…予想はしていたが、やはり、そうだったとは。その巨人の後ろ姿を見て、自分の中では信じられないという思いが溢れていた。彼が現れるという事は、未だに夢のような出来事だと思っていたから。

その巨人は、銀の体に赤いラインというシンプルな見た目をしていた。全身の筋肉が発達しており、その姿には否が応でもたくましさを感じさせるものがある。巨人は、不

意にこちらに振り向く。その顔には、生命感あふれる見慣れた微笑みがあった。

—そう、自分は、彼の名前を知っている。彼の名は—

「ウルトラマンだ…！」

—ウルトラマン！

「ウルトラマン…？ウルトラマン、なの？あの巨人も」

ラキユースの疑問を抱いた声が、どこか遠くに聞こえる。今あの姿に心奪われている自分には、それに頷きを返すくらいしかできなかつた。

ウルトラマン。初めて地球の土を踏んだ、光の国からやってきた我らのヒーロー。その驚異の超能力で数多の怪獣を撃破してきた、怪獣退治の専門家。彼が所属する宇宙警備隊では、名誉ある称号であるウルトラ兄弟の名を背負っている。人々の祈りに応え、奇跡を起こしてきた巨人。それが、ウルトラマンだ。

ウルトラマンはコダイゴンジアザーに向き直ると、そのまま、特徴的なあの前傾姿勢のファイティングポーズを取った。

「へアッ！」

「…！」

その雄たけびにただならぬものを感じたのか、笑ってばかりだったコダイゴンジアザーの表情が厳しいもの変わった。コダイゴンジアザーは、その手に持ち直した鯛を

向け、そこから鯛砲を発射する。

だが、それに対しウルトラマンは躲そうとも防ごうともしない。彼は迫りくる弾丸に對し、腰に手を当て胸を張る事で応えたのだ。その堂々とした立ち姿に向かつて鯛砲は次々に殺到し、その胸元辺りに直撃していった。そして、爆発。

…だが、その煙が晴れると、そこには何ら変わりのないウルトラマンの姿があった。どうやらウルトラマンは、お馴染みの大胸筋で防ぐアレを行ったらしい。怪獸に対する挑発とも威圧ともとれるパフォーマンスじみた行為に、コダイゴンジアザーが初めてたじろぐ姿が見えた。

だが、どうやらそれで下がるコダイゴンジアザーではなかったらしい。コダイゴンジアザーはウルトラマンを睨みつけると、手に持っていた鯛を投げつけた。と同時に、コダイゴンジアザーの姿が掻き消えた。

まずい、あの高速移動だ。それを悟り、必死に目を凝らす。だが、その必要はなかった。なぜならコダイゴンジアザーが現れたのは、ウルトラマンの背後。すなわち、自分たちの目の前だったのだから。

「ウルトラマン、後ろ！」

背後を見ていないウルトラマンに、必死に伝える。コダイゴンジアザーは自分たちに背を向けており、鯛が突撃しているのを見ても、狙いがウルトラマンであることは明ら

かだった。そうはさせまいと、自分も立ち上がる。隣のアグルも立ち上がり、コダイゴンジアザーの動きを阻もうと動くが、相手の方が早いのは明らかだった。コダイゴンジアザーの手が、ウルトラマンに迫る。

だが、ウルトラマンはやはり、格が違った。ウルトラマンは一瞬だけコダイゴンジアザーの方を見るや否や、自身に向かって伸びていた怪獣の腕をつかみ取る。

「ダアアッ！」

そしてウルトラマンは掴んだ腕を取る形で、コダイゴンジアザーを前方に投げ飛ばした。背負い投げに近い投げ方で飛ばされる怪獣。しかも、その軌道上には、飛んできた鯛がいた。鯛は突如飛んできた本体に対応できず、そのまま叩き落され、地面で大きく跳ねたのだった。

ウルトラマンの攻撃はまだ止まらない。空中に投げ出された鯛に対し、ウルトラマンはこれまた見慣れた形の十字を組んだ。そう、あの必殺技の構えである。

「ヘアッ！」

ウルトラマンの組んだ十字から、光の筋が寄り集まったような光線が発射される。ウルトラマンが数多く使用してきた必殺技、『スペシウム光線』だ。『スペシウム光線』は鯛目掛けてまっすぐ飛んでいき、直撃。大爆発し、吹き飛ばしてしまった。

「SYOBAIHANJI——！」

断末魔の叫びにしては情けない声を上げ、鯛はどこかへと飛んでいく。倒れていたコダイゴンジアザーは、それに対し腕を伸ばすも、その短い腕は空しく空を切るばかりだ。コダイゴンジアザーは怒り狂った様子で、立ち上がるや否やウルトラマンを睨みつけた。

だが、それに対しウルトラマンは動じない。それどころか、彼は腕を×の字に交差させると、そのままその場で回転しだした。

「シエアツ！」

その雄たけびと共に、回転するウルトラマンの周りに光の輪が出現する。『キャッチリング』と言われるその輪はウルトラマンの体から射出されると、大きく広がってコダイゴンジアザーを取り囲む。突然の事態にコダイゴンジアザーは困惑しているようだが、もう遅い。『キャッチリング』は一気に収縮し、コダイゴンジアザーの体を縛り上げたのだった。

…すごい。すごすぎる。一連の動きを見て、自分が抱いたのはそんな簡単な感想だった。

「…ああもあつさり捕まえるなんて」

隣にいるラキュースにも、ウルトラマンのすごさは伝わっているようだった。彼女の言う通り、あれだけ自分たちが手こずったコダイゴンジアザーに対し、ウルトラマンは



それをいともたやすく攻略し、あまつさえ縛り上げてしまった。現在彼は『キャッチリング』維持のため高速回転を行っている最中だが、それでも頼れる姿である事には変わりはない。

ウルトラマンのすごさを改めて実感していると、自分の脳に静電気に触れたような痺れが走った。

（―君たち、聞こえるか）

「その声…ベムラーさん！」

「え、なにこれ、何処から声が…？」

自分たちに語り掛けてきたのは、ベムラーさんだった。ベムラーさんはおそらくテレパシーを使っているのだろう、姿は見えない。いや、姿が見えないのは、あの鎧の姿をしていないからかもしれない。恐らく、彼は今…

突然脳裏に人の声がするという事態に戸惑うラクユースに、ベムラーさんは優しく応えてくれた。

（…やはり、君たちだったか。ああ、ラクユース君はこういうのは初めてなのかな？心配しなくていい。これはテレパシーと言って、君たちに直接、私が考えていることを伝えるものだ。便利な連絡手段、という程度に考えてくれ）

「そ、そう…宇宙人、というのはずかいのね…」

（いや、私並みかそれ以上のテレパシー使いはたくさんいるよ。それより、伝えたいことがある。コダイゴンジアザーの弱点が分かった）

「本当ですか!？」

待ちくたびれた情報に対し、思わず声の調子上がる。だが、やっと来た怪獣退治のカギだ、天書運が上がるのもしようがない、はずだ。ベムラーさんもそこに驚くようなことはなく、情報を伝えてくれた。

（ああ、なんでも元々の恵比寿様は、右足が少し欠けていたらしい。今奴は動けないでいるが、そこから何か見えないか？）

「…待って。見えたわ」

ラクユースが指した方向を見ると、確かにコダイゴンジアザーの右足には、小さいが欠けた部分とひびが存在している。あそこなら、光線も効き目があるだろう。これなら勝てるかと確信し、ベムラーに感謝の声を伝える。

「ベムラーさん、ありがとうございます。後は、私たちがやります」

（そうか…なら、私の役目は決まりだな。アルシエ君）

「? 何ですか?」

（君に伝えたいことがある。—イミーナ君の、君への祈りだ）

「…!!」

…今、なんて言った。イミーナの、祈り？ 困惑する自分をよそに、ベムラーさんは（ではいくぞ）と、何かを始めている様子だった。それに何か声を入れる間もなく、自分の脳裏にまた痺れが走った。

（—アルシエ、帰ってきて！）

…そこから聞こえたのは、確かに仲間の声だった。自分の無事を祈る、必死そうな心の叫び。恐らく一方通行なのだろう、自分からは彼女に対して声を出せない。しかしイミーナの心の声が、聞こえたのは確かだった。その現象に声を出せないでいる自分に、再びベムラーさんの声が聞こえた。

（アルシエ君。君は、いい仲間を持っているようだね）

「…は、い」

（ああ、本当にそれはいいことだ。宇宙の何よりも、勝るものだろう。だからこそ、私からもお願いをさせてもらう。君は、この祈りに応えてくれ。この祈りがある事を、忘れないでくれ）

「…はい！」

（ラキユース君も、仲間の事を、そして仲間が思う君自身の事を大切にしてくれ。それが、ウルトラマンとして長生きできるコツのようなものだ。先を生きるものとして、これだけは伝えさせてもらう）

「…わかったわ。忠告ありがとう、ベムラーさん」

(…忠告なんて立派なものでもないよ。先人の義務を果たしただけだ。では、武運を祈っている)

ベムラーさんはそう言い残し、テレパシーを終了する。その場に残ったのは、回転するウルトラマンとそれにより動きを封じられ続けるコダイゴンジアザー、そして自分たちだけだった。

…ああ、自分は、ああいう風に思われていたのか。ベムラーさんが何のために、イミーナの声を聞かせてくれたのかはわからない。だけど、イミーナが自分の無事を祈ってくれるのはわかった。それも、あんなに必死そうに。それだけ自分が皆に心配かけているのを、今やっと体感した。

「…ありがとう、イミーナ」

イミーナへの感謝の思いを、口にする。イミーナは、自分が帰ってくることを祈っている。自分の事を、待っている。彼女のそばに、自分の居場所がある—その事実が、自分の心に力をくれる。皆の元に還りたいと負いう思いを、強くする。だからこそ、自分はずべてを守らなきゃいけない、それも自分自身を含めて。疲れていたはずの自分だが、今になってはそんなことはなかったと思える位に、軽い。彼女の祈りによる活力が、自分の全身にみなぎっていた。

それを感じると同時に、胸元に熱いものを感じる。その熱さの源である光を、自分自身の手でつかみ取る。自分の掌の上には、爆の字が輝くクリスタルがある。

—ああ、そうか。彼も、戦いたいのか。そんな根拠のない考えが、自分の脳裏を走った。

「…ラクユース、聞いて」

「?何かしら」

「今から、奴の足を狙って光線を放つ。同時に撃てば、あの装甲を破壊する事は可能だと思おう」

「わかったわ。それで、攻撃方法は?」

コダイゴンジアザーへの攻撃を示すと、ラクユースから疑問の声が上がる。この場合、自分たちならガイアとアグルの合体技の他、『オーブリングNEO』を挟んでの『トリプルオリジウム光線』といった選択肢もある。だが今回は、そのどちらを取る予定もなかった。

「ラクユースは、リングを使って」

「いいけど…あなたは?」

「…自分は、とっておきを使ってみる。それで、あいつを仕留める」

「…わかったわ。タイミングは、そっちに合わせるわね」

「うん。ー行こう！」

方針が固まり、自分たちは視線を合わせると、まず上空へと飛び立つ。地上ではウルトラマンがまだコダイゴンジャザーを抑えており、その苦労には感謝するほかない。だから、これで終わらせる。

自分は一度呼吸を置き、集中する。そして手に持っていたものー『ウルトラマンダイナ』の『ルーブクリスタル』を、『ルーブジャイロ』にセットした。

《ウルトラマンダイナ！》

声が鳴り響くと同時に、ジャイロを操作し力を開放する。クリスタルからは緑色の光があふれ、それがインナースペース内に広がった。

「ウルトラマンダイナの力よ……」

ウルトラマンダイナに力を借りるための、祝詞のようなものを言葉にするとともに、ガイアとしての体も動かしていく。拳を胸元で合わせ、その後両手を上下に動かし光を集める動作は、いわゆる強化ソルジェント光線と呼ばれるタイプの動きだった。

《スペリオン光線！》

それと同時に、ラキユースの方からもリングの声が聞こえる。アグルが必要な動作を終え、十字を組むのと同時に、自分も目の前で十字を組んだ。

「ソルジェント光線！」

「スペリオン光線！」

そして、発射された光線の名を、二人そろって思いっきり叫ぶ。二つの光線は真つすぐに飛び、途中で合流する。それと同時にウルトラマンは回転をやめ、飛びのく。コダイゴンジァザーは動けるようになったが、この距離なら十分だ。

合流した二つの光線は一つの巨大な光線となり、コダイゴンジァザーの全身を覆いつくした。

「ITAI!!!」

コダイゴンジァザーの叫び声が聞こえるが、関係ない。自分たちは光線に込める力を強め、意識をコダイゴンジァザーの弱点、欠けてひび割れた右足の部分に集中させる。そしてその甲斐あつたのか、光線はコダイゴンジァザーの右足に収束していき、そこで大きな爆発を起こした。

爆発が消えれば、巻き込まれたコダイゴンジァザーの姿は完全に消えていた。目を凝らせば、奴が立っていた所に、小さな恵比寿様が見える。…やった！

「終わった…」

「そのようね…お疲れ様」

「うん、ラキュースもお疲れ…あつ」

その場で勝利を分かち合い、自分たちは劳いあつた。空中でそんなことをしている

と、飛び上がってくる影がある。その銀の体には、疲労の色は見られない。だが、そんなことは関係なく、自分は彼の事を労いたかった。

「…ウルトラマン、お疲れ様。そして、ありがとう」

自分の声に対し、目の前を飛ぶウルトラマンからは目立った反応はない。だが、声は伝わったらしく、ウルトラマンは一度、大きく頷いた。

「…シヨワツチー」

そして、あの掛け声とともに、ウルトラマンは夕焼けが沈む空へと消えていった。後に残るのは、自分たちだけ。ならば、自分たちも作法に乗っ取るべきだろう。自分の視線は自然とアグルのそれと合い、そして大きく頷き合った。

「…デユワツ!!」

「…デウアツ!!」

自分たちもまた飛び立ち、その姿は夕焼けの彼方へ消えていく。巨人たちは皆去り、夕焼け空の下で行われた戦いは、こうして終わりを告げたのであった。



さらばベムラー……？

「おお、わしの恵比寿様！戻ってきてくれたかあ……！」

「はい、怪獣がやられた場所に、落ちていました。釣り竿がなくなつて、後鯛が取り外し可能になつちやいましたけど……」

「いやいや、ここに戻ってきただけで良しとするよ！君たちありがとう！ウルトラマンとやらにも、感謝したいのじゃが……」

「それなら、自分たちが代わりに伝えておきます。ウルトラマンと遭遇する事、多いですから」

「そうかそうか！何から何までありがとうな！お嬢ちゃんたち」

恵比寿様が戻ってきたことに喜びを隠せないでいる店主さんに、ではお大事に、と伝え、自分は店を後にした。

あの話の話をしよう。自分たちはコダイゴンジアザーを撃破した後、無事に元に戻つた恵比寿様の回収に成功し、それを店まで運んだ。流星に戦いで破損したり鯛が吹っ飛んで行つたりしたので恵比寿様にも変化が生じてしまつたが、それでも喜んでもらえたのは、素直にありがたい。

店の外にでると、入口の前でラキユースとイミーナが待っていた。二人は二人で何か話をしているようだったが、自分が近づくとこちらの方を向いた。

「お疲れ、アルシエ。いつも悪いわね、こういう対応任せちゃって」

「ううん、大丈夫。ウルトラマンとして戦ったのは自分、だからウルトラマンに対する思いは、自分の心で受け止めたいから」

申し訳なさそうにしているイミーナに、なんでもない事だと返す。実際いつもやっていることなので、特に気になる事はない。

「アルシエ、あなたのやつてる対応って、あなたたちのリーダーさんの仕事じゃないの？」

「ううん…最初のうちはそうだったけど、自分がやる事にした。怪獣に詳しい自分が出た方が説明しやすいことが多いし、ウルトラマンとして戦った後の事を、覚えておきたかったから」

「ふうん…大変なのね」

「そんなことない。これはやらなきゃいけない事じゃなくて、やりたいと思ってる事だから。だから、気にしなくても大丈夫」

「…なるほど、ね」

自分にこの対応の事を聞いてきたラキユースは、小難しい顔でそう答えた。何か、思

うところがあつたのだろうか。これは自分の勝手に願ひ出た仕事なのだから、気にしないでいいのだが。

先程の店主さんへ恵比寿様を届けた時のような、ウルトラマンと怪獣の戦いに巻き込まれた人に対応するのは実は自分の役目である。この対応は怪獣ビジネスを始めた当初、こういうのはリーダーの仕事だとしてヘッケランが対応する事になっていたのだが、怪獣に詳しい自分がそれについていつて話を聞いたり怪獣の事を話したりしている内に、出来る限りは自分が対応するという事になったのだ。ちなみにウルトラマンに代わりに伝える、というのには実は一種の決まり文句になっている。最初はまさか自分がこんな台詞を使う日が来ると思つたものだが、何回もやっているとどうつてことなくなるものである。

そんなことを話していると、誰かの足音が近づいてきているのを感じた。

「—おお、ここにいたのか」

そこにいたのは、パワードスーツのような鎧を着た人物。ベムラーさんは歩きながら自分たちに手を振りつつ、至つて普通に声をかけてきた。

彼の登場に、一番に反応したのはイミーナだった。

「ベムラー！あなた、何処に行つてたの？」

「いや、すまない。実は少々迷子になってしまつてね。アルシエ君とラキユース君に情

報を伝えたのはいいものの、その後この事をすっかり見失って…少し探してしまつたよ」

「そう…ちよつと待つて？今、アルシエとラクユースに、つて…」

「ああ、そうだ。二人があこのウルトラマンだという事は、ウルトラマンに交信した際わかつたよ」

「…そうなの？」

イミーナは怪訝そうな表情で自分の方に振り向いてくる。自分はそんなイミーナに對し、無言で頷いた。

「…ベムラーさんは、テレパシー…特殊な方法で、ウルトラマンの中にいる自分たちに話しかけてきた」

「そうね、あのテレパシーというのにはちよつとびっくりしたけど、彼の情報がなかつたら勝てなかつた…改めて礼を言うわ。ありがとう、ベムラー」

「いや、どうということはないよ。最後にトドメを刺したのは君たちだ。私はその手助けをしたに過ぎないからね。こちらこそ、あの怪獣を倒してくれてありがとう」

ベムラーさんはいたつて穏やかに、自分たちに対して礼を述べた。その態度には外見には表れない—鎧だからそもそも本来の外見がわからないが—威厳のようなものを感じる。この人物が先程まで地面に向かつて無い無いと慌てていたりグロテスセルを落

として頭を抱えていたりしていたと思うと少し可笑しく思えるが、まあこちらが素なのだろう。

…やはり、彼があの人なのだろうか。彼を見て最初に抱いた一つの疑惑は、コダイゴンジアザーで手を貸してくれたあの人の姿を見て、自分の中で大きく膨れ上がっている。否、もはや確信に近いものを抱いている、と言い切ってもいい。それだけ太く、自分の中では彼とあの人が一本の線でつながっていた。

そして、もし本当にそうなら、自分は彼にある事を頼まなければならない。きつとそうだ。自分はその思いを胸に、ベムラーさんに向かって一歩踏み出した。

「…ベムラーさん」

「うん? どうかしたのか?」

「この—」

—この世界を、守ってほしい。自分は、この世界にとって大事な言葉を伝えようとした。

この世界に迫っている危機は、はつきり言ってあり得ない位に強大なのだ。この間ティガの地でハッキリした分でも、超古代の闇がかつてこの世界を覆っていたようだし、またスフィアの襲撃がこの世界でも発生している事もわかった。それを除いてもこの世界には多種多様な怪獣が来訪しているし、そもそも最初の怪獣がコツヴだったこと

を踏まえると、根源的な破滅をもたらすものがこの世界を狙っている可能性があるのだ。そんな状況に対し、世界を護る側の戦力はウルトラマン二人だけ。客観的に見れば、このままではこの世界を守り切るのは難しいという結論に至るのは当然だ。

だが、彼がいればどうなるか。そして、彼の仲間たちがいればどうなるか。自分よりも長い時を生き、自分よりも強く戦ってきた彼らの庇護があれば、この世界にも平穏が訪れるはずだ。彼らは自分たちよりも多くの命を救ってきた、本当の英雄なのである。

だから、彼らにこの世界を守ってもらおう、という自分の考えは、正しいものなのかなのだ。

「……」

…なのに、声が出ない。次の台詞を口に出ることが出来ない。まるでそこから先を告げるのを、自分の体が拒絶しているかのようだった。

「…アルシエ…?」

口ごもってしまった自分を心配したのか、不安そうな顔のイミーナが自分の方を覗き込んでくる。ラクユースも、怪訝そうな表情でこちらを見つめている。ベムラーさんは黙して語らず、特に変わった様子もなく、ただこちらを見つめているだけだ。

何故。何故、次の言葉が言えないのか。彼らの庇護を受けたいと願い出ることが出来るのは、おそらく自分だけだ。世界の危機はすぐそこまで迫っているかもしれない。

どれだけの危機がこの世界に迫っているのか、わかったものじゃない。だからこそ、この世界とこの世界に住む人々を護るために、彼らの力が必要なのだ。必要だからこそ、今自分が動かなくてはならない。

…そんなことは分かり切っているというのに、自分の体は動こうとしない。自分の行動に、人々の命がかかっているというのに。

(…本当に、それでいいの?)

自分の心にも、明確な迷いが生じる。はたして、彼らの庇護を得ることが正しい選択なのか? 彼らはまさしく宇宙を守る平和の使者たちだが、それでもただ救いの手を差し伸べるだけの存在ではない。自分たち人間が、ギリギリまで頑張つて、ギリギリまで踏ん張つて、それでもどうにもこうにもならない時助けてくれる存在。それが彼らのはずだ。今の自分は、そんな境地に立っているのだろうか? 自分は、ウルトラマンの名に恥じない戦いを、まだ行えるのではないか? 自分というウルトラマンがまだ健在なのに、一体どうして彼らの助けを呼べると――

(―あれ?)

そこで、自分の思考の変化に気が付く。

(…なんで、自分の事が出てきた?)

自分の心が、自分自身の事を考えているという事実には、我ながら驚く。いったいどう

したのだ。今ここで考えるべきなのは、世界の平和だ。人々の安寧だ。自分がどうした  
いかではなく、より多くの命を救うためにどうしたらいいかで考えていたはずだ。それ  
故の彼らに託すという結論だったというのに、どうして。

でも、それを真つ当だと考える自分がいるのも、事実。彼らの庇護を受けるのに、ま  
だ自分が顕在しているというのはおかしいのではないか。自分はまだ戦える、自分はま  
だ、皆を守れるというのに――

――ああ、そっか)

そこまで思考を重ねたことで、ようやく、自分の中にあつた迷いの原因が見えてきた。  
(自分は、自分自身の手で守りたいんだ)

それが、自分が見つけた答え。自分は、自分自身の手で、皆の、そしてこの世界の未  
来を切り開いていきたい。他でもない、自分自身の手でやりたいのだ。ウルトラマンだ  
から戦うのではなく、ウルトラマンとして守りたいから、戦うのだ。

それに自分には、かけがえのない仲間が出来た。自分の後ろで自分のいるべき場所を  
守ってくれる者達、そして自分の隣に並び立って戦ってくれる者。皆は自分が今まで  
戦ってきたからこそできた仲間だ。そんな彼らと共に、自分にしかできないやり方で  
守っていききたい。自分を支える仲間たちに、応えていききたい。たとえそれが最適解では  
なかったとしても、自分なりの答えを出していききたい。それが、自分の中にあつた迷い



の源だった。

：もう、答えは出た。自分は意を決して、再びベムラーさんに一歩踏み出す。まだ何も言わないベムラーさんに、精一杯笑顔を作りつつ、自分のはつきりと口にする。

「…ううん、なんでもないです」

自分の口から、はつきりとすべてを無かったことにする言葉が放たれた。：これでいい。あの結論は必要なかもしれないが、あんなものを自分の口から言えたものではない。自分が自分である限り、言ってはならない。だから、それは自分の中で硬く封印すると心に決めた。

ベムラーさんかというと、自分の言葉に対して何も語らない。いったい何を考えているのか、鎧に包まれた彼の顔からは何も読み取ることはできない。：ひよつとして、自分の言葉を待たされた上なんでもないと言われたのに気分を悪くしたのだろうか。だとしたら、謝らないといけないが。

だが自分のそんな予想に反して、ベムラーさんはゆつくりと自分に近づくと、自分の頭をゆつくりと撫でた。ベムラーさんの手は、鎧越しだというのに、すごい暖かなものを自分に伝えててくれている気がした。

「—心配はいらない」

その言葉は、本当に穏やかで、温かいものだった。

「君の思いは、伝わった」

まるですべてを見透かしているかのような口ぶりで、ベムラーさんは語る。その言葉に思わず顔を上げるが、ベムラーさんは自分と目を合わせ、優しい口調のまま続けた。

「この世界に迫っている危機は、おそらく私の想像以上に巨大なものなのだろう。ひよつとしたら、私が未だかつて経験したことがないほどの…それを見過ごすほど、私は年を取っていないつもりだ」

「ベムラーさん…でも」

「わかっている。君は自分自身の手で守りたい、そう思ったんだろう？」

「…!!」

…この人は、本当にすべてを見透かしているのだろうか。それとも、今の自分みたいな人に関する経験があるのだろうか。どちらにせよ、彼の言葉はまさしく正しい。その事実にも、心が少し揺れ動く。

だがそんな緊張を和らげるような慈しみのようなものを籠め、ベムラーさんは言葉を紡いでいく。

「君が何を知り、何を思っただけに迷いを抱いたのかは、私にはわからない。だが、私は知っている。今の君の瞳は、自分で戦いたいと決意した戦士のそれだ」

「戦士の…」

「ああ、そしてそれは、とても立派な決意だ。その決意を持っているのなら、この世界を託すこともできる。だから、その決意を持ったことは、何よりも正しいことだ」

「ベムラー、さん……」

ベムラーさんの言葉に、胸が軽くなる。自分で守りたいという思いを身勝手なものだと捉えていた自分の心の一面が、小さくなつていく。ベムラーさんが彼だと思つてゐるから……否、ベムラーさんの人格に触れたからこそ、その言葉はとても強い励みになった。そしてベムラーさんは自分から手を離すと、ふわりと浮かび上がった。

「私はこの世界とこの世界に住む人々の事を、決して忘れることはない。この世界の事は、私の仲間たちに必ず伝えよう。そして、今度は仲間たちと共にこの地にやってくることを、ここに誓おう。」

「ベムラーさん……」

「だから、それまでは、君たち二人がこの世界を守つてくれ。君たちなら、守れるはずだ。私は信じている……それでは、また会おう」

ベムラーさんはそう言うと、浮かび上がった状態から天を仰ぎ、そのままかなりの速さで飛び立った。ベムラーさんの姿は、空のかなたに消え、星のようにきらめいた。

後に残つたのは、自分たちだけ。少しの間を置いて、ラキユースが自分に近づいてきた。

「…アルシエ、ベムラーさんは何が言いたかったの?」

「…あの人は、この世界の平和を、自分たちに託してくれた。自分たちの事を、忘れな  
いって言うてくれた。それは、ハッキリ言っただけの奇跡のような出来事」

「…よくわからないけど…アルシエは、どう思ったの?」

「自分は…」

そこで、ベムラーさんの言葉を、そして自分の決意を思い出す。一瞬の間を置き、ラ  
キユースの視線を捉え、はつきり答えた。

「…とつても、嬉しかった。戦いへの思いが見えて、そしてそれを認めてもらえて…今な  
ら、自分の戦いへの思いが、正しいものだって考えることが出来る。だから、これから  
も戦える。皆と、一緒に」

「…そっか。アルシエにとって、ベムラーさんはそんなにすごい人なのね」

「うん!」

「…なら、信じるわ。私はあなたを、信じているから」

ラキユースは笑顔でそう言い、自分の頭を撫でてくれた。気が付けば自分の表情も、  
ほころんでいる気がする。ベムラーさんの事、今度詳しく皆に話してあげよう。

そして、一つ大事なことがあるのを思い出した。自分はラキユースから離れると、  
待っているイミーナの元へ向かう。イミーナの表情に疑問の色が浮かんだのを見て、自

分は大切なことを伝えようと口を開いた。

「イミーナ…ありがとう」

「…え？」

「イミーナの祈り、自分たちにも伝わった。イミーナがあんなに自分の帰りを待っていてくれたなんて知らなかった」

「…!!」

イミーナの顔が驚愕に染まる。やはり、ベムラーさんは断りもなく自分にイミーナの思いを伝えたのだろう。それについては一言言うべきなのかもしれないが、今の自分がありがたさの方が上回っていた。今度会ったときは、先に感謝を伝えようと決心する。

それはそうと、今はイミーナである。驚いた表情で固まるイミーナに、言葉を伝える。「イミーナの思いが、自分に力をくれた。イミーナの思いがあつたから、この戦いは勝った」

「アルシエ…!」

「だから、ありがとう。そして…ただいま」

「…おかえりなさい、アルシエ!」

イミーナはそう言つて、自分の事を抱きしめた。ひよつとしたら、涙が浮かんでいたのかも知れないが、そこは深く考えないことにした。イミーナの頭を、今度は自分が撫

でてみた。

そこで、自分の空いている手の中に、輝きが生じる。イミーナもそれに気が付き、自分から離れた。自分の手の中に温かさと硬い感触が生まれたのを感じ、手を開いてみた。

「…これって…」

「…ループクリスタル」

近寄ってきたラキュースの声にこたえるように、自分はそれを正体を告げた。

そこにあつたのは、二つのループクリスタル。片方は赤く、片方は青い。赤い方には『炎』と書かれ、赤と銀のウルトラマンが描かれている。青い方には『鎧』とあり、そこには青く胸元に銀の星が輝くウルトラマンが存在する。まさしく『ウルトラマンメビウス』、そして『ウルトラマンヒカリ』のループクリスタルであった。

…なぜ、ここにこれがあるのかは、よくわからない。だが、これらの登場は、自分たちの未来を祝福するものからの贈り物のように思えた。自分はそれを懐にしまうと、なんとなく空を見上げる。

「…ありがとう」

そう呟いた自分の声は、夕日の落ちたそれに消えていった。

—これにて、温泉地での長い一日は終わりを告げた。この後、自分たちは一仕事終え

たハツケラン達と合流する事になる。そこでこの戦いの疲れを取ろう！という話になり、この地に滞在する機関が一日増え、そこで目一杯休暇を楽しんだのは、別の話――

空にも宇宙にも見えない、不思議な空間を進むものがある。虹色に煌めくワームホールと言われる空間を、鎧の男はその身一つで飛んでいた。

「……ふう」

一仕事終えたことに、思わず溜息をつく。ベムラーはまだまだ働き盛りだが、少し老けているような仕草が目立つ。ベムラーはかつて自分の命を分け与えたという経験があり、その命を与えた分身ともいえる男にあやかつてその姿を長らく使っていた。自分よりはるかに短い寿命しかないその男はやがて老人になり、ベムラーもまたその老人となった姿を借りることになった。その状態が長く続いた事が、ベムラーが少し老けた感じになっている要因なのでは、と彼自身はそう考えている。

「まさか、こんな大事になるとは……」

今回の事件を振り返り、ベムラーは独り言ちる。今回の事件は、彼がある宇宙で密売買されていたグロテスセルを見つけたことが発端である。たまたまパトロール中に危険物質であるグロテスセルを見つけたため、それを勝手に売買する宇宙人を捕まえたのはよかつたのだが、その際グロテスセルを持っていた宇宙人が、最近発明されたという

時空転移装置を使い、グロテスセルを未知の宇宙に飛ばしてしまったのだ。未知の宇宙とはいえ流石にそんなグロテスセルを放置するわけにはいけないので、ベムラーはそのまま追いかけることになったのだ。

その後の事は、アルシエたちと会った後の通り。自分まであんなミスを犯した辺り、彼の運勢は最悪だったといえよう。

「…まあ、新しい戦士に会えたのはよかったか」

ベムラーはそう言い、あの世界であった二人のウルトラマンを思い出す。彼女達のような将来有望な戦士と出会えることは、彼にとって至上の喜び。その出会いをもって、彼はあの世界を訪れたことは有益だったと断定した。

「…しかし、この鎧には大助かりだったな」

今回の旅を成立させてくれた鎧を見て、ベムラーはそんな感想を抱いた。流石は、宇宙警備隊員、そのトップに位置するウルトラ兄弟の一員であり優秀な科学者でもある男の作品だ。これがなければ今回の出会いがなかったことを考えると、彼には感謝してもしきれない。とりあえず帰ったらなにか奢ろうとベムラーは考えた。

そう、この鎧はシエイプアップ用のトレーニング機器ではない。…いや、ベムラーは最近いつも以上にマッチョになったのも、そのせいで服のサイズが合わなくなったのも、それを受けてもうちよつと痩せようかと思つたのも全部真実なのだが。兄弟や仲間



にも最近筋肉が絶好調ですね！くらい言われたし。

閑話休題。ベムラーの纏う鎧は、実は時空転移の能力を持った特別な鎧である。これはベムラーの弟の自慢の息子であり、宇宙警備隊の別動隊ウルティメイトフォースゼロを率いる若きウルトラマンの纏う鎧、ウルティメイトイージスを人工的に再現したもので、イージスみたいに装着者に力を与える能力はなく、それどころか精密機械の塊のため鎧として扱ってはいけないう事になっているが、イージス並の時空転移能力を再現している。イージスの研究用に作られたワンオフ物ではあるのだが、優秀な鎧であった。

最も、その姿を見た時、ベムラーが最初に抱いた感想は『縁起が悪い』だったのだが。「……うん、このデザインだけはダメだな。不吉すぎる」

ベムラーはそのことを思い出し、それを肯定した。確かに見た目はそこそこかっこよくて好評だったし製作者はこの鎧と同じデザインの鎧がある世界の事を知らないのだが、それはそれだ。装着者に自分が推薦されたのを知った時にはすわ宇宙の終わりか、と思つたし、鎧のコードネームがベムラーなのを聞いた時には思わずわざとやってんのかと製作者を殴りそうになってしまった。

それだけではない。これはベムラーにも予想外だったのだが、本来この鎧の姿を持つ人物の事は結構有名だったのだ。その人物はレベル3マルチバースーいわゆる並行世界の人物だというのに割と詳しい所まで知られているため、ベムラーがこの鎧を着てい

ると必要以上に警戒されてしまうことがあった。それどころか、これはふざけているのか真面目に言っているのかわからないが、鎧姿の自分を見るや否や「お、とうとう光の国が滅亡したのか！チャンス！」【悲報】宇宙滅亡のお知らせ「お星さまになったプラズマスパークに乾杯！」…などと顔なじみに言われる始末。便利な鎧だが、ベムラーにとっては自分のみを狙い撃つトンデモアーマーなのである。自分の兄が鎧姿になると英雄になるのに、この差は何なのだろうか？ベムラーは訝しんだ。

「…そういえば、今回もアルシエ君に驚かれてたなあ…」

ふと、自分が出会ったウルトラマン達の片割れの事を思い出す。ベムラーは初対面の時、目の前にいた二人の少女―アルシエとラキウスが特殊な力を持つていたことを見抜いていた。結果、それはウルトラマンガイアとウルトラマンアグルへの変身という形で証明されたので、これはベムラーの勘が冴えていたということである。

だがそれ以外の事だと、ベムラーが話しかけるよりも、アルシエがかなり驚いていた表情をしていた事が、ベムラーの中で印象に残っていたのだ。ベムラーはあの少女の驚き様について何と無く心当たりがあった。それは、ベムラーが鎧を着て会った際、ベムラーがああ鎧姿であるという事実には驚いた者達の顔だった。

その表情をした連中は、皆ああの鎧の人物が何をしていてその人物のいる世界では何が起こっているのか、そして鎧の人物とは何者なのかを把握している情報通か、その事実

を見ることのできる特殊能力持ちばかりだった。つまり、あの鎧の存在そのものが深刻な事態の表れというのを知っていたからこそ驚くのである。その時の驚愕の表情にアルシエの初対面時の表情が重なるという事は、つまりアルシエも何らかの形であの鎧の人物を知っていた―と、ベムラーは考える。その考えが正しいのかはベムラーにもわからないが、それでもほぼ正解だろうという確信を持っていた。：そう考えると、やっぱりあの鎧は厄ネタだ。こんなものを自分に着せた事への恨みを晴らすため、やっぱり奢りは無しにしよう。ベムラーはひそかに決心を改めた。

ちなみに、ベムラーは並行世界でこの鎧の姿を持つ人物を知っている。というか、その人物が登場する並行世界の事を漫画として知っている。それどころか、彼は自分が「空想特撮シリーズ」に連なるある番組の主人公であること、そして自分の兄弟や仲間、それに加え別世界のウルトラマン達も自分の後輩としてテレビの中で活躍していることを知っていた。

何故なら、彼はある出会いをはたしていたから。テレビの中で戦う自分たちを作り上げた、偉大なる『神様』と出会っていたから。その出会いの影響か、彼は自分たちが登場するコンテンツを把握する事となり、別宇宙の移動が活発になると、そのシリーズを派生作品含めて全部視聴することが出来るようになったのだ。この事は、下手に話すと刺激が強すぎるかな、という彼なりの判断によって、彼が良しと思った人物のみ共有し

てる秘密である。兄弟にもロクに話していない秘密なので、共有している人なんてほとんどいないのだが。

ちなみにベムラーは当然現行シリーズも嗜んでいるが、その楽しみに世界を越える力を持つこの鎧が一役買っているのは言うまでもない。このことについてはもう奢ったので、もうカウントしないとベムラーは決めていた。

そんなことを考えながら飛んでいると、ベムラーの前方にワームホールの終わりが見えてくる。そこを抜けると彼はとある空間に飛び出す。そこには、いくつもの泡が浮かんでいた。

「ここに来るのも、久しぶりだな」

周囲に浮かぶ泡を見つめ、ベムラーは感慨深そうに呟く。周囲の泡をよく見ると、その中には宇宙のようなものが広がっている。いや、宇宙のようなものではない。これは、本物の宇宙なのだ。

マルチバース、という概念がある。多元宇宙論とも呼ばれるそれは、現在自分が存在している宇宙とは別の宇宙が複数存在するというもののだが、それはまさしく宇宙の真実を突いていることはあまり知られていない。ベムラーがいるのは、その複数ある宇宙の狭間。つまり彼の目の前にある泡は、いくつもある宇宙そのものなのだ。

そしてベムラーは、その泡の中からある宇宙を探し始める。ワームホールが先程まで

開いていた宇宙を見つけ出すのは簡単で、事実それはすぐに見つかった。

だがその宇宙を見つけた時、ベムラーはかつてない驚愕に襲われた。

「これは……!!」

彼の目の前には、彼が先程までいた宇宙、すなわちアルシエたちがいた宇宙が広がっている。だが、その宇宙は宇宙が泡になる世界の中で、異色を放つ存在だった。

―黒い。ベムラーが最初に抱いた印象はそれだった。宇宙を表す泡全体が、黒く染まっている。こんな宇宙を彼は今まで見たことがない。だが、泡全体を包む黒をよく見ると、ベムラーの中にある現象の名が浮かんできた。

「……アンバランスゾーン?」

実際にその眼で確認したことはないが、光の国の資料や映像作品で見たことがある現象の名を、ベムラーは口にしていった。

アンバランスゾーンとは、ある宇宙にて観測されたダークマター漂う未知の宇宙空間の事を指す。その中では怪獣頻出期に近いレベルの怪獣出没が観測されるが、まだ謎が多い。そんな異空間に、あの黒色は似ているのだ。もちろん、宇宙全体がアンバランスゾーン化しているなんて現象を、ベムラーはもちろん彼の所属する組織も一度も観測したことはないのだが、それを抜きにしてもこれはかつてない異常事態だとベムラーは認識した。

「……これが、脅威か」

そして、ベムラーはこれを見て納得する。これが、この世界を覆う危機なのだ。実は彼自身、あの世界に降り立つと空気の違いを感じた。その嫌な空気を敏感に察知し、それらを踏まえ彼はアルシエとあのような内容の会話をしたのだ。故に、異常が起きていること自体には彼は納得していた。最もここまで異常事態という事はわからなかったのだが。

だが、この異常を見て、彼は強く決心しなす。——この世界を、忘れてはならない。「……待っていてくれ。アルシエ君、ラキユース君」

この世界で戦う、二人のウルトラマンの事を思い出しつつ、ベムラーは一人誓う。決してこの世界を忘れず、いずれは仲間たちと共に帰ってくる。この世界に重大な危機が迫っていることを仲間たちに伝えることを決意し、彼は超空間から自分の宇宙へと飛び立った。

「……そういえば、アルシエ君とラキユース君はガイアとアグルなのか」

……自分の星への帰り道、ベムラーはふと二人の戦士を思い出す。彼女たちが変身したのは、ベムラーも会った事のあるウルトラマン。地球の光から生まれた二人のウルトラマンの事は、もちろんベムラーもよく知っていた。

だが、かつてある事件やとある長老の誕生日で出会った方のガイアとアグル、そして

つい先ほど共闘したガイアとアグルを比べてみると、ベムラーの中である疑念が生まれる。

「…二人は、本当にガイアとアグルなのか？」

ベムラーの中では、二組のウルトラマンは姿以外がどうしても重ならなかった。内包する光に、違和感を感じたのだ。いや、この違和感はガイアとアグル同士の違いというより、彼が知っているウルトラマンとの違いに思えた。ベムラー自身と、ベムラーの同族ではないウルトラマンはもちろん違う。だが、それ以上の隔たりが、あるように思えて仕方がないのだ。まるで、アルシエとラキユースは、本当はウルトラマンではないよ  
うな――

「いや、彼女たちはウルトラマンだ」

その思考を、ベムラーは切り捨てた。彼女たちが仮に種族的にウルトラマンではなかったとしても、世界を護るという意思を感じ取れる彼女たちの姿勢は、まさしくウルトラマンの名に恥じないものだ。ウルトラマンを多く見てきたベムラーだからこそ、それは断言できる。なら、種族の差などどうでもいい。現に、ベムラーとその仲間たちは、種族的にウルトラマンとは呼べないものもウルトラマンと認めてきたではないか。例えば、悪の遺伝子を持ちながら、その運命を塗り替えた、若きウルトラマンのことを。ならば種族の差なんて関係なく、彼女たちはウルトラマンだ。それを譲るわけにはいかな

いと、ベムラーは固く決心した。

「…彼女たちの事も、話さなくてはな」

そんな二人のウルトラマンの事は、皆で考えるべきだろう。ベムラーはそう心の中で決めると、帰還への足取りを速めたのだった。

—彼ら光の国のウルトラマンが、果たして危機迫る宇宙に降り立ち日が来るのか。そのことは、まだ決まっていない話—



## 明暗

## 黒い仔山羊を撃て！

人は、誰でも夢を見る。

老いも若きも、男も女も。

犬や野良猫も、夢を見るかもしれない。

もちろん、戦士たちも夢を見る。

黄金の眠り、それは、若さの特権だ。

体が揺れる感覚に、心地よさの中に漂っていた意識が浮上していく。

「……んう……」

再びの揺れとともに、意識が繋がる。瞳を開けると、そこには青空が広がっていた。

「……ふぁ……つゝ!!」

寝転がっていた体勢から体を起こし、ラキユースは眠たそうにあくびをした。そのまま伸びをして、気の抜けた顔でなんとなく前を向く。虚ろな瞳には何も映っておらず、まだまだ眠気が勝っていることが伺える。

半分夢の中にいるラクユースは、それでも何とか起きようと頑張ってみる。横になつて瞬く間に夢の世界に舞い戻りたいという欲求に抗いつつ、とりあえず立ち上がろうかと周囲を見渡したところで、彼女はある事に気が付いた。

「……はっ」

彼女の周囲には、見慣れぬ森林が広がっていた。どうやら自分は、見知らぬ土地のど真ん中で眠りについていたらしい。その事実が、ラクユースの意識を否が応でも鋭く研ぎ澄まさせていく。

完全に目が覚めたラクユースは立ち上がり、所持品を確認する。幸いにも彼女が愛する魔剣は置いてあつたし、その他装備も十分そろっている。小物もそろっており、今すぐ依頼を受けても大丈夫だと思えるくらいには物がそろっていた。

また、意識を集中させて背後に手をやれば、そこから『ルーブジャイロ』を引つ張り出すことが出来る。さらに意識を集中すれば、この間アルシエが手に入れた二つを加えた『ルーブクリスタル』と、『オーブリングNEO』もバツチリ出てくる。何処ともわかない場所に投げ捨てられていた割には、装備は万全。その事実が、逆にラクユースの不安を煽っていく。

そんな不安を振り払うように、ラクユースはまず現状把握に努める。いったい自分がなぜこんなところで寝ていたのか。自分は眠りにつくまで何をしていったのか。これら

を思い出すことで、自分の身に何が起こったのかを推測しようとする。

だが彼女の思考を遮るように、大地が再び揺らされた。

「……今のは……」

その揺れ方を感じ、ラキユースはある事に気が付く。これは単なる地震とは違う。彼女が知る限り、この揺れ方に近い現象はたった一つ。巨大なモンスター……否、怪獣の動きによるものだ。

（……どうする？）

揺れ方を推測したところで、ラキユースは思案する。このまま、巨大な揺れを起こす元凶を探しに行くか、それともここで待機し何者かが通りかかるのを期待するか。彼女が一瞬の間を置き、前者を選択した。

とりあえず、前方に向かって歩き出す。割とすぐに森林地帯を抜けると、そこには崖が広がっていた。ここからなら、もしかしたら怪獣の姿を確認できるかもしれない。そう考えて崖に立ち周囲を確認すると、そこにはアダマントイト級冒険者である彼女も息を呑む光景が広がっていた。

「これは……」

彼女の眼下、崖の下に広がる荒野を、巨大な怪物達が歩いている。怪物はここからだ と遠くてよくわからないが、巨大であることはわかる。少なくとも、ラキユースが見た

怪獣のどれよりも大きい予感がした。

それ以上に不気味なのは、怪物の見た目だ。ラクユースの知る怪獣は、差異はあれど獣らしい見た目をしているものが多かった。だが、ここから見える怪物の姿はそのどれとも異なる。全体的に黒く、上半身は触手のようにうねっている。下半身にはこれまたよく見えないが、口のようなものが複数存在しているのが見える。怪獣ともモンスターとも違う見た目に、ラクユースは戦慄を覚えた。

そして、この怪物が複数いるのも問題だ。ここから見える怪物の数は五体。五体それぞれが悠然と大地を闊歩しているが、果たしてこれで全部なのだろうか。それ以上に相手の実力がわからない以上、迂闊に接近するのは賢くない。だが、これを放っておいてよいのか。ラクユースの心に、迷いが生じる。

とりあえず、判断材料が欲しい。その考えの通りに、ラクユースは怪物に釘付けになつていた目を動かし、崖の上から怪物の周囲を確認する。そんな彼女の目に、怪物とは別の動きが映る。

「…あれは、人？」

怪物から逃げるように動いている影がある。かなり小ぶりで見えにくいのが、それが人間で、鎧らしきをつけているというのは確認できた。どこかの軍だろうか？それが怪物と遭遇し、逃げている？彼女の思考をよそに、兵隊らしき人たちは逃げまどっている。

その動きを観察していると、ある動きに気が付く。

「…怪物が人を追っている?」

怪物たちは、非常にゆったりとした動きで、しかし確実に軍隊に向かっている。おそらく、怪物はすぐに軍隊に追いつくだろう。そしてそれらを木の葉を散らす様に蹂躪することは、簡単に理解できた。

…火が、付いた気がした。ラキユースはその火に導かれるがごとく、弾かれるように自分の背後に手を伸ばす。そのまま引つ張り出したジャイロを構え、続いてもう一人の自分の姿が描かれたクリスタルを手を取った。

「セレクト! クリスタル!」

クリスタルを展開し、ジャイロにセットする。あまり回数をこなしたわけではないが、一連の動きはスムーズに行われる。

《ウルトラマンアグル!》

「纏うは大海! 生命の育み!」

ジャイロからの声と共にお決まりのセリフを叫び、ジャイロのハンドルを操作する。ジャイロが発する青色の輝きが、ラキユースの体を包んでいく。

「アグルウウウウウウウウ!!」

そしてその名を呼ぶとともに、ラキユースの体は舞い上がり、巨人の姿へと変わって

いった。

一方崖下の荒野では、そんなことが起こっていると露知らずといった様子の怪物たちが、逃げまどう軍隊へと迫っていた。怪物は足取りは遅いが巨大だ。たちまち人間の集まりでしかない軍隊に追いつき、その巨体で押しつぶそうとする。いや、押しつぶそうとしているかも怪しい。怪物たちを遠目で見れば、ただ歩いているだけのようにか映らない。それだけ、怪物の動きに悪意というものは見られなかった。

だがそんな怪物たちも、突然上空が青く光ったことで足を止める。怪物たちがそれを見上げ——ているのかは、外見からは判別しがたいが——その場にとどまっていると、輝きが巨人の姿に変化する。そのまま巨人、ウルトラマンアグルは、足を大きく広げ相手を巻き込むような蹴り、いわば複数相手のドロップキックのような体制で降下する。慌てたのかどうかは知らないが、怪物たちがそれに対応しようとするが、もう遅い。アグルのキックは、そのまま二体の怪物の胴体に突き刺さり、そのまま大きく突き飛ばした。「デウアツ!!」

そして着地し、怪物たちに向かい構えを見せるウルトラマン。その中にしつかりと生身の体で存在するラキュースは、ふと背後に視線を向け、後方の軍隊の様子を確認しようとする。そこで彼女は、ある事に気が付いた。

「…王国の兵?」

怪獣に立ち向かうアグルの背後では、兵士たちが立ち止まり、こちらを見上げています。ラキユースが改めて兵士を見てみれば、彼らの装備は、自身も所属するリ・エステイ・ゼ王国において一般の兵卒が使用しているモノではないか。十中八九彼らは王国の部隊であり、しかもその数は想像以上に多い。後方まで続いている軍の大きさを見ても、間違いなく方は下らないだろう。

いったいこれはどういうことか。ラキユースの記憶が正しければ、これだけの量の軍を展開するような予定は聞いたことがない。ラキユース、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラは王国の貴族の令嬢であり、また彼女には親愛なる友だと思っっている王女がいる。その様な状況にいる自分が、これほどの軍が動く事態を把握できないはずがない。そのような確かな自信が、ラキユースの中にはあった。

それに、周囲をよく見れば、地形に見覚えがある。ここは確か、呪われた地扱いされているカツツエ平野だったはず。いつも霧に覆われているはずなのだが、今はそんなものどこにも見当たらない。カツツエ平野は王国とバハルス帝国の戦争が行われる日だけ何故か晴れるのだが、それだろうか？

(…まさか)

しかしその考えを、ラキユースは一蹴する。最近の情勢を鑑みれば、王国と帝国の戦争はありえない。そのことをラキユースは知っていた。だからそれ以外だろう、と彼女

は考える。

そして、それ以上このことを考えてもしようがない、と思考を中断した。材料が少なすぎるし、後で兵士を捕まえて聞いてみるなり平野の近いエ・ランテルにでも行つて情報確かめたりすればいい。

今はそれより目の前の怪物だ。気持ちを切り替え、ラキユースは再び怪物に集中する。

「…悪趣味ね」

改めて怪物を見て、ラキユースの口からそんな言葉が漏れた。

怪物の見た目は、明らかに悪辣そのもの。全体的に短めの胴体に、うねうねとうごめく数本の太い触手がこちらをうかがっている。それだけでも不気味なのに、それ以上に気味が悪いのは胴体の口だ。この怪物の胴体には口らしきものが数個生えているのは先ほど確認した通りだが、その口はまるで人間の口をそのまま植え付けたような、言いようのない見た目をしていたので。ご丁寧に全体的に黒く染まった怪物の中で、口の中は歯や歯茎の色がしつかりしているあたりが、ますます不気味さを加速させている。これなら心の弱いものはこの姿を見ただけで死ぬかもしれない。そんな一笑に付されそうなことを、ラキユースは大真面目に考えていた。

そして、ラキユースは一つ気付いたことがあった。



「デカいわね…」

怪物を少し見上げると、その巨大さが理解できる。この怪物は、これまでラキユースが見た怪物の中でもトップクラスに巨大なのだ。ラキユースの中での怪物とは、途方もなく大きいがいぎウルトラマンになってみると同じくらいか若干高い、くらいのサイズが主流だった。しかし目の前の怪物は、明らかにウルトラマンよりも大きい。二倍とまではいかないが、1.5〜6倍くらいはあるだろうか。とにかく初めて見るサイズの怪物が、しかも複数目の前にいるという事実には、ラキユースは再び息を呑んだ。

そしてしばらく動きを止めていた怪物たちが、再び動き出そうとしている。先ほど吹き飛ばされた怪物たちも、すでに立ち上がっていた。そのおぞましい挙動が、周囲の者たちに恐怖を振りまく。

「―あ、あああ！来る！奴らが来る！」

「に、逃げろ！あの巨人からも、逃げろお!!」

兵士たちの悲鳴が、戦場にこだまする。その声が聞こえたアグルが今一度後ろを見れば、そこには再び恐怖にかられ、隊列など忘れたかのように我先に逃げ出す兵士たちの姿があった。

―再び、火が付く。そうだ、彼らを、王国の民を守らなければ。ならば、こんなところで怖気ついてはいられない。

「デウアツ!!」

雄たけびと共にアグルが怪物の1体に突撃し、まずその触手を取り押さえる。何とか逃げ出そうともかく怪物の体を、そのまま横に放り投げた。そのまま転がる怪物を尻目に、ラクユースは次なる怪物に掴みかかる。まずは、逃げる軍隊とこの怪物たちの距離を離すことを優先する。ラクユースの動きに無駄はなく、そのまま流れるように次の怪物の触手をつかんだ。

だが、そこで後方にいたもう一体の怪物の触手が、アグルの体を打ち据えた。その一撃の痛みに、たまらずアグルがうめき声をあげる。

「ウオツ……」

そして力が緩んだアグルの隙を突き、掴みかかられていた方の怪物は体を振り回し、アグルの腕を振り払う。怪物はそのまま、腕が振り払われ若干体勢が崩されたアグルの体を、触手を動かし打ち据えた。たまらずその攻撃で後退してしまうアグルを、待つていたかのような動きで後方の怪物が体当たりで追撃する。アグルは今度は自分が突き飛ばされる形で、地面に投げ出されることとなった。

「くっ……!」

あおむけに飛ばされた状態から、すぐに前転で距離を取り、膝で立つ形で怪物たちを見据える。だがラクユースの目の前には、勢ぞろいした5体の怪物が、今にもこちらに

迫ろうとしていた。

この状況はまずいと、ラキユースの戦士としての勘が忠告する。相手の数は5で、こちらは1。何をどう考えてもこちらの不利は覆る事はない。一度引いて体勢を立て直すべきか。状況を鑑みたラキユースの心が揺れ動く。

「…ダメね」

だが、それはできないと、ラキユースの心は結論付けた。今日の前の怪物を見逃せば、恐らく敗走する王国軍へと襲い掛かる事になる。現在、王国軍は全力で逃げてはいるものの、そこまで距離を稼げてはいない。なら、せめて彼らが逃げるまでの時間を稼がなくてはならない。それが今の自分のやるべきことだ。そう理解し、アグルは再び立ち上がった。

そして、怪物たちとアグルが再び激突しようとしたその時、怪物の後方から突如赤い輝きが立ち上った。

「…あれは！」

ラキユースがその赤い光を見上げれば、光が空中で一つの形に変わっていく。その姿を、ラキユースは知っている。短い間ではあったが、共に戦った友の姿は、彼女に強い印象を残していた。

そして赤い光が人の形となり、アグルの隣に着地する。強い衝撃と共に土砂が舞い上

がり、その姿に怪物たちがたじろぐ。そして土砂が落ちたその場所には、赤い巨人―ウルトラマンガイアが立っていた。

「アルシエ！」

「ラキユース…大丈夫？」

「…ええ、何ともないわ」

頼れる友の登場に、ラキユースの声色も思わず弾む。実際、ラキユースは彼女の登場を歓迎していた。怪獣に詳しく、自分より長く戦ってきた友。彼女がいれば、複数相手でもこのような怪物に後れは取らないという強い確信が、ラキユースの中にあつた。

怪物に相對するアグルの隣で、ガイアもまた怪物たちに相對する。そこでラキユースは、アルシエにある事を聞こうと声をかける。

「…アルシエ、あの怪物が何なのか、わかる？」

「…ごめん。分からない」

「えっ…!？」

「あの怪獣の事を、自分は知らない。あれは、自分も見たことのない怪獣…」

だが、アルシエから帰ってきたのは、ラキユースにとって思わぬ答えであつた。怪獣の事を言い当てる事が出来るタレントを持っており、それを十全に使いこなしていたと感じていたラキユースにとって、彼女が分からないと言う事態は想定外の事であつ

た。

「いや、そんなものなのかもしれないと、ラキユースは認識を新たにする。タレントというのは万能のモノではないし、ラキユース自身、テイガの地でアルシエが対応に困っていた事があつたのを覚えている。ひよつとしたら、自分はアルシエを全てを解決する万能の存在と思つていたのかも知れない。実際の所ラキユースはアルシエを大恩のある勇者だと思つているが、それと同時に一人の人間であることを知つている。ならばあまり期待をかけすぎても彼女の害になるだけだ、ラキユースは自身にそう言い聞かせた。：実際の所、アルシエの怪獣知識はタレントによるものではないが、これは当の本人以外には些細な事であろう。

様々な思いがラキユースの中で渦巻く中で、怪物を見据えるアルシエの中で、ある単語が浮かび上がつていた。

「…『黒い仔山羊』」

「…えっ?」

「…たぶん、あの怪物に関する名前だと思う。よく、わからないけど」

アルシエは自分の思考に疑問を覚えつつ、そう答える。はたして黒い仔山羊とは何なのか、実のところアルシエにもわからない。アルシエはただ怪物を見て自分の中に浮かんできた言葉を口にしただけで、それがどういふ意味を持つのかまでは理解できないで

いた。

そんなことは知らないラキユースは、名前が判明した怪物の事を注視する。怪物はガイアの登場に驚いたのか、まだ動く様子はない。しかし、その不気味さは健在だ。…これのどこが山羊なのかラキユースにはさっぱり理解できなかったが、まあアルシエがそういうのならそう言う事だろう、と納得することにした。

そして意識を戦う事に切り替えたラキユースは、ガイアに語り掛ける。

「アルシエ、あの怪物どもは、向こうにいる王国軍を狙っている。奴らはここで食い止める必要があるわ」

「…!!わかった。なら、今はあいつらを抑えることに集中する…!」

「ええ、よろしく…行くわよ!」

「うん!」

心が通い合った二人のウルトラマンは、息を合わせて怪獣に突貫する。ガイアとアグルは、勢いのままに黒い仔山羊の群れへと躍りかかった。

「オアアアア…!」

ガイアが気合のこもった声と共に、片腕で怪物の胴体を持ち上げる。

「デュワツ!」



技を終え着地するアグル。その隙を狙うかのような動きで、怪物が背後から迫りくる。だがアグルは怪物を一瞥することもなく、突如回転し空高く舞い上がった。その回転力によつて弾かれてしまった怪物は、体をアグルが舞い上がった方向に向ける。すると、アグルはそこでとてつもない速さで怪物へと飛び掛かった。

「アウアアアア!!」

その勢いに対応できるはずもなく、怪物は飛び込んでくるアグルに捕まってしまふ。そのまま怪物はアグルに捕まえられた形で地面を転がり、勢いが死んだところでアグルに投げ飛ばされた。そしてアグルは、何事もなかったように立ち上がる。

「…弱いわね」

怪物たちを一瞥し、ラキユースはそう呟いた。

怪物たちと戦つてたキユースは、怪物たちがあまり強くない事に気が付いた。もちろん怪物の持つ巨大な体は驚異的だし、数も多い。だが、それだけだ。怪物たちはラキユースの想定よりもはるかに軽く、動きも遅い。それにラキユースの目には、怪物たちがそこまで自分たちのような巨大な存在と戦い慣れていないように見えた。故に今のラキユースにとつて、目の前の怪物たちは怪獣程恐ろしい存在ではなくなっていた。

あるいは、ラキユース自身アルシエの登場で士気が上がっているのかもしれない。少なくとも1対5のような状況でもない限り勝てる。ラキユースの中には、そんな確信が



あつた。

その確信を胸に構えたラクユースの目に、何かの光が入ってきた。

「これは……？」

その光の発生源を掴んでみると、そこにはアルシエが温泉地で手に入れたルーブクリスタルの姿があつた。赤と青、アルシエと自分のように並び立つ二つのクリスタルを見て、ラクユースは理解する。

—今こそ、これを使う時！

「いくわよー！」

クリスタルに語り掛けるような声と共に、ラクユースはジャイロを取り出す。まずは青いクリスタルをセットする。ジャイロはそれに応え、描かれていたウルトラマンの名を告げる。

《ウルトラマンヒカリ！》

そしてラクユースはジャイロを掲げ、ハンドルを操作する。その光がラクユースを包み込んだ時、アグルの体にも変化が生じる。

アグルの右腕に、青い光が集結する。絡み合う線のような光が形を作り、ガントレットのようなアイテム『ナイトブレス』へと変化したのだ。無論ラクユースは、それが何なのかを知らない。だがラクユースがそれを見た時、その使い方が頭の中に入ってきた。

た。

それに導かれるように、ラキユースは動き出す。

「ウルトラマンヒカリの力よ!」

その声と同時に、アグルの体は先程蹴り飛ばした方の怪物に向く。アグルは動き出すとする怪物を一瞥すると、ナイトブレスが出現した右腕を天高く掲げる。そこに稲光が生じ、右腕が胸元に運ばれることでそれは光の線に変わる。そしてアグルが光の集った右腕を相手側に向けるように十字を組むことで、一連のプロセスは完成した。

その技の名をラキユースが叫ぶとともに、アグルもまた咆哮する。

「ナイトシューター!」「デウアアアアツ!」

アグルの組んだ十字から、青白い光線が発射され、それが怪物へと一直線に飛んでいく。怪物はそれを躲すことが出来ず、光線をまともに受けることとなった。怪物に怪獣程の耐久力はなく、よって光線を受けた所からの生存は望むべくもない。怪物は光線を受けると一瞬光り、そのまま爆散した。

怪物の爆発を見届けたアグルは、そのままもう一体の怪物を見る。すると、ラキユースの手元でもう一つのクリスタルが光り輝く。

ラキユースはその輝きに、クリスタルの声を聴いた気がした。――僕を使ってほしい、と。

その声に応えるような形で、ラキユースは次なるクリスタルを装填した。

《ウルトラマンメビウス！》

そしてジャイロの放つ輝きと共に、アグルの左腕に新たな輝きが宿る。それだけでは足りない。アグルのナイトブレスが光となって、左腕の輝きに合流する。ひとときわ強くなつた輝きが晴れると、アグルの左腕にはメビウスとヒカリの力の結晶『ナイトメビウスブレス』が宿っていた。

そしてアグルがナイトメビウスブレスを操作することで、光の剣『メビウムナイトブレード』が出現する。その輝きに、ラキユースはアグルセイバー以上の鋭さを感じた。「ウルトラマンメビウスの力よー」

そしてアグルは剣を掲げ、怪物に飛び掛かる。アグルが左腕を大きく振りかぶると、光の剣は大きくしなりながら伸びていく。伸びきつた光の剣を、アグルは思いつき怪物に叩き込んだ。

「ブレードオーバーロード！」

そして怪物はそれを回避することが出来ず、真つ二つにされた。そこにアグルは体を捻りつつ左腕を振り上げることで、剣をさらに動かす。輝く剣筋が8の字を描き、怪物は絶命。大爆発と共に消え去った。

一方、怪物と戦うガイアにも、動きが生じる。

《ウルトラマンダイナ!》

「ウルトラマンダイナの力よ……!」

かつてコダイゴンジャザーとの戦いでそうしたように、アルシエはジャイロとクリスタルの操作を行い、それに応えるかのようにガイアに光が集まっていく。ガイアは両腕を広げ、拳を合わせることで光の集合地点を作ると、両腕を回して光を集めていく。すると光は赤い球体へと変化し、その完成と共にガイアの拳が放たれ、光の球体を押し出した。

「ガルネイトボンバー!」

そしてアルシエの叫びとともに放たれた『ガルネイトボンバー』は、3体いた怪物のうちの一体に直撃する。かつてウルトラマンダイナが強敵との決着のため放った一撃に、怪物が抗うことが出来るわけもなく、一瞬の輝きと共に怪物は爆発した。

それを見た怪物たちが恐れおののくかのよな動きが見せたのをアルシエは見逃さない。アルシエは再び、ジャイロと同じクリスタルを手に取り、次の一撃の用意を始める。

《ウルトラマンダイナ!》

「ウルトラマンダイナの力よ……!」

ジャイロの操作が終わった瞬間、突如ガイアの姿が消失した。その現象に怪物たちは混乱したかのような動きを見せるが、ガイアの姿を捉えることはできない。何故ならガ

イアは奇跡のような瞬間移動で、すでに1体の怪物の背後を取ってただから。

そしてガイアは額に両腕を合わせ、そこに光を発生させる。ガイアがその光を右手に宿し掲げると、光が渦を巻いて集結し、大きな発光体へと変化する。ガイアはそれを押し出すような形で発射した。

「レボリウムウエーブ！」

ガイアの放った光が、渦巻く光線のような形となり、後ろを向いていた怪物に向かっ  
ていく。怪物はそこで用なく異変に気が付いたがもう遅い。怪物は為すすべもなく、そ  
の身に『レボリウムウエーブ』を受ける結果となった。

そして『レボリウムウエーブ』はただの光線ではない。『レボリウムウエーブ』は時空  
エネルギーを集約した超衝撃波であり、その力はブラックホールを呼び起こす。怪物は  
突如発生した超重力の檻に囚われ、跡形もなく消滅することとなった。

残る怪物は、後一体。最早混乱の極みに陥ったのかおろおろするばかりの怪物の前  
に、二人のウルトラマンが立ちはだかる。怪物を見たラキユースの中には、 $\times$ を飾るに  
ふさわしい技が浮かんでいる。ラキユースはそのことを胸に、隣に立つ友に声をかけ  
た。

「アルシエ、あの技で行くわ。私たち二人の気持ちを、一つに」

「…うん！」

アルシエの力強い返事とともに、ラキユースの目の前に『オーブリングNEO』がその姿を現す。ラキユースはそれをつかみ取り、ジャイロにセツトし起動させる。

《トリプルオリジウム光線!》

そして二人のウルトラマンが作り出す頂に光が集結し、光と呼ばれウルトラマンオーブが現れる。オーブのかざした円にさらなる光が集結し、完全なる円を描いた時、3人のウルトラマンは一斉に構えを取り、十字を組んで怪物に狙いをつけた。

「トリプルオリジウム光線つ!!!」

そして放たれた偉大なる光は、強大なる光線となり、怪物に直撃する。怪物はその輝きの中に消え去っていき——大爆発とともに、消え去る事となった。

二人のウルトラマンは光の行く先を見届けると、構えを解く。そして向かい合い、拳を打ちつけ合い、最後に握手する。二人のウルトラマンの互いを褒め称える行為が、この戦いが終わったということ強調する。

こうして、怪物・黒い仔山羊の群れとの戦いは、ウルトラマンの勝利という結果で終結するのであった。

めでたしめでたし。

「……ん……あれ、自分……」

「…おや、おはようございます。よく眠れましたか?」

「…おはよう。自分は、寝てた?」

「ええ、ぐつすりと。最近は忙しかつたですからね。たまには昼寝もいいものだと思いますよ」

「そう…ありがとう」

「いえいえ、それほどでも」

「…そう、わかった」

「…?どうかしましたか?」

「ん、大したことないよ。ただ…」

「ただ?」

「…不思議な、夢を見ていた気がする」

## 暗躍 —ルイン・デモン—

体が揺れる感覚に、心地よさの中に漂っていた意識が浮上していく。

「……うん……」

再びの揺れとともに、意識が繋がる。瞳を開けると、そこには見慣れた仲間の顔が広がっていた。

「……ティナ？ ティア？」

「……ツチ」

半分寝ぼけた頭のまま、ラキユースは目の前にいる仲間の名前を挙げていく。顔を思いつきり近づけていた忍者の姉妹の片割れは、小さく舌打ちするとともに、背後の座席に座りなおす。その隣では、もう片方の姉妹が「あ、起きた。とりあえず目の前にいるのはティナ。だから私は悪くない。それだけは伝えたかった」などと口にしていく。

「何を言ってるの？ これを言い出したのはティアだから。私はこいつにやらされただけ」

「ティナこそ何を言ってるの？ ノリノリでやってたくせに度の口がそんなことを言うのやら」



「……？」

未だ半分眠りの中にいるラクユースには、目の魔で繰り広げられている双子の言い争いが理解できない。いったいどういう事かと眠そうな顔のまま周囲を見渡すラクユースに、横から突然液体の入った瓶が差し出された。

「おはよう。よく寝ていたじゃないか」

「……イビルアイ？」

「それくらいはわかるか。ほら、これでも飲んで目を覚ませ」

イビルアイから渡された瓶を受け取り、ラクユースはそれを呷る。するとラクユースの口の中に、言いようのない苦みと渋みが広がった。その味が、ラクユースの意識を否が応でも明瞭としたものに覚醒させていく。

覚醒しだした頭で、ラクユースは現状を思い出した。現在、ラクユース含む『蒼の薔薇』の面々は、ある依頼を受け馬車で移動している所だ。本来なら、最近復活魔法で復活し戦闘能力の落ち込んだガガーランとティアの修行に専念したいところだったのだが、今回の依頼は依頼主がラクユースの知人でもある王国の王女であり、彼女が依頼をしてくる場合は重大な依が多いため、全員で向かう事になったのである。依頼主である王女が今回の依頼について、かつて王国で行った麻薬撲滅の依頼よりも重大そうな様子で依頼してきたのも、決め手の一つだった。

また、依頼内容が気になったというのものもある。依頼というのは、国境付近のある場所で不思議な現象が起きており、それを調べてほしいというもの。どうも「空が虹色になる」「夕暮れと共に音が鳴る」など様々なことが起きているようだが、その中でラクユースは「大きな影が見える」というものに着目した。もしこの「大きな影」というのが怪獣の仕業なら、自分が出るしかない。ラクユースは友である王女に対し、自分がウルトラマンである事を明かしてはおらず、故にこの依頼を振ってもらえたのは幸運だったと考えていた。

因みに現在馬車の中にはラクユースの他イビルアイにティア、ティナが乗っており、残るガガーランは馬車の外にいる。今回乗ってる馬車の御者が何やらガガーランの好みに入る部類だったらしく、彼女は隣に座ると言って聞かなかつたのだ。

#### 閑話休題。

とりあえず手に取った飲料物を全て飲み込み、目が覚めたラクユースは隣に座るイビルアイに声をかけた。

「おはよう、イビルアイ。私、どれくらい寝てた？」

「さあ？あまり興味ないが、そこまで長い間寝ていたわけではない。：それはそうと、私自身はこちらにもさほど興味はないんだが：目の前をしてみる」

「…？」

ラキュースは言われるがままに、対面を見る。そこには、双子忍者が何やら言い争っている姿がある。

「テイア、往生際が悪い。古来より言い出しつpegが責任を取るとは、イジャンニーヤ秘伝の古文書にも書いてある。諦めた方がいい」

「テイナ」そ諦めた方がいい。私の中の古文書には古の時代より責任を取るのを実行犯と書いてある。元より乗り気だったテイナに文句は言わせない」

「テイア……」

「テイナ……」

二人の会話を聞いていると、二人はどうやら責任の押し付け合いをしているようだった。そんな二人を見ているラキュースの目に、あるものが揺れ動いている姿が映る。

テイナが手にしているモノは、ラキュースもよく知っているモノ。化粧の時に使われる化粧筆だった。何故そんなものがあるのかはさて置き、その筆には何かインクのようなものがしみ込んでいるのが見える。

…ラキュースの中で、テイアたちの会話、テイナが持つ筆とそれに付着したインクの事がつながっていく。すべてがつながり状況を理解したラキュースの顔に浮かんでいたのは――笑顔。ただし純粋な怒りの籠った、恐怖を与える表情だった。

「ねえ、二人とも」

「何…ひっ?!」

二人の怯える声が重なる。ラキユースの顔を見ると同時に、彼女の顔に込められた感情が伝わったらしい。しかしラキユースはそれを意に介することなく、いたって穏やかに務めることを意識しつつ、そのままの表情で短く言い放つ。

「後で、お話ね」

「…いや、これh「返事」ハイツ!!」

「よろしく」

ラキユースは二人の返事に、満面の笑みで答えた。一体二人が何におびえているのやら、とでも言いそうな調子で一連の会話を終えたラキユースは、怯える二人の忍者を気にすることなく、自分の席に深々と座り直した。隣ではイビルアイが楽しそうに含み笑いを漏らしているが、これはあまり関係ないだろう。

とにかく後でどう仕置きしようかなどと考えるラキユースであったが、ふと、ある事が頭の中に浮かびあがる。

(…:そういうえば、私は、何か夢を見ていたような…)

ラキユースの中で、そのことが妙に引つ掛かる。自分は、夢を見ていた気がするのだと。どんな夢なのかは思い出せないが、その夢は不思議な夢だったような気がする。その夢には、印象的な何かが出てきた気がするのだ。何と無くそんなとりとめのない考え

が頭の中に駆け巡り、ラキユースは何とか夢の事を思い出そうとした。

だが、考えても考えても、夢の内容は思い出せなかった。

「…ま、いいか」

やがてラキユースはそう小さく呟き、思考を中断した。夢なんてそもそも不思議なものだし、その内容は大した意味がないものが大半だ。それに夢なんて見ていたことは覚えていても内容が思い出せない事なんてよくある事だし、気にするほどでもないだろう。ラキユースはそう判断し、そのことはもう考えないことにした。

それより今は仕置き的事か依頼の事。現実のやるべきことに集中しようと気持ち切り替えようとして、ふとポケットに何やら硬い感触がある事にラキユースは気が付いた。

「…これは」

それを引っ張り出してみれば、そこにあつたのは二つの結晶体。最新の友人たるアルシエにルーブクリスタルと教えられたそれは、確か温泉地でアルシエが手に入れたと言っていたクリスタルそのものであつた。

『炎』と『鎧』という、見慣れないけど何故か意味は分かる文字が描かれたクリスタル達を見て、ラキユースは遠くにいるアルシエの事を思い出した。温泉地で別れしばらくたったが、彼女は何をしているのだろうか。ワーカーとして働いているのか、それとも

ウルトラマンとして戦っているのか。

アルシエの事を考えると、ラキユースの胸がぼかぼかとする。ラキユースはこの感覚が、嫌いではなかった。

「…また、会えるといいな」

それまでには、このクリスタルの事も使えるようにならないと。そう思い、ラキユースはクリスタルを仕舞いこむ。

何故だか、今ならこのクリスタルもすぐに使いこなせる気がする。そんな考えが、ラキユースの中で確信めいて存在していた。

「…そろそろ、ラキユース達は指定の場所に到着するところでしょうか」

王城にある自室の窓の向こうを見つつ、黄金の姫はそんなことを口にした。ラキユースが生命の美しさを持つなら、彼女の持つ美しさは宝石のそれ。見るものすべてを魅了するような息遣いで、この部屋の主は空を見る。

彼女の名は、ラナー・ティエル・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。リ・エステイーゼ王国の第三王女その人である。彼女は自分の部屋で、風変わりな箱のような物を片手にくつろいでいた。

「ラキユース達が、無事に仕事を終わってくればいいのだけど」

ラナーは窓の外、外界の方を見つつ、今回自分が依頼を行った者達の事を呟く。ラナーにとつて、今回の依頼はかなり重要なポジションを取っている。ならば依頼の動向を案じ、それが言葉に出るといふ事も珍しいことではないだろう。ラナーという少女が、人とはかけ離れた本性を持つていたとしても、だ。

そして依頼の事を気に掛けていたからか、ラナーの脳裏に彼女が気に掛ける貴族の令嬢の顔が浮かびあがった。

「ラキユース…」

ラナーは物憂げに彼女の名を口にする。ここ数日の間、ラナーは珍しくラキユースの事を考えている時間が多めになっていた。

ラナーはラキユースの、ここ数日の間の変化の事を考える。まず前提として、ラナーから見たラキユースとは、幼いころから文武両道明朗快活、今とは違って大事な大事な騎士がいなかった頃の自分もよく気にしてくれていたと、いろいろ眩しい存在だった。知恵がつき周囲との違いを理解し、しかし今と違って大事な兵士がいなかった頃のラナーが、少しだけ羨ましさを覚えたくらいに。

しかし、一年半ほど前から、その輝きが鳴りを潜めていた。理由は、当時聞いてみたもののわからず、彼女の仲間である『蒼の薔薇』に接触しても皆口を噤んでいたためわからなかった。しかし当時日に日に暗くなつていくラキユースを見れば、ラナーでなく

ともラキユースが何か悩みを抱えていて、それがとてつもなく重たい問題になっていることは簡単に予測できるくらい、ラキユースは憔悴していた。

だが、ラナーはこのことについて、ラキユースの変化に気が付いた一年以上前にそこまで深く関わりを持たないことを決めていた。このことがラキユースを慕う仲間たちがまともに話す気がないくらい重い問題であり、そもそも自身では性格上おそろく助けにならないだろうと、すぐ理解したが故に。そして、ラキユースの悩みはかなり長引きそうだと漠然と感じていた。解決に10年強はかかるだろう、というのがラナーの最近の予測だった。

しかし、その予測は唐突に裏切られることになる。

「本当に、元気になったわね」

ラナーは少し前、依頼を行ったときの事を思い出す。そこには、暗く暗く墮ちていったかつてのラキユースの姿はどこにもなく、かつての輝かしき彼女が舞い戻っていた。

いったい何が起こったのか。ラナーが問いかけると、ラキユースははにかみながらこう答えた。何でも、友が出来たのだと。その友に、助けてもらったのだと。その友というのが今のラキユースにとって重要な一例えば、精神的支柱のような存在だという事は、その友、アルシエ・イーブ・リイル・フルトの話をする際のラキユースの嬉しそうな顔を見れば、長年彼女を見てきたラナーでなくとも一発で理解できた。



ここで一つ整理しておく、ラナーはラキユースと友人関係にある、とされている。少なくともラキユースはラナーの事を親友だと思っており、二人の周囲にもそういう認識を持つものが少なくない。ゆえに、今のラナーを見ればこう考える者がいるだろう。ラナーは、ラキユースを新しい友に取られて嫉妬しているのだ、と。

「本当に、残念ね」

—あえて言おう。その考えは、ラナーという少女を理解していない者の考えである。「もう少しそのままだったら、私のお人形になっていたのに」

ラナーは心底残念そうな様子で、ラキユースの変化を評価した。

前述のとおり、ラナーはラキユースが暗くなつた原因を正確に把握しているわけではない。だが、ラナーは知っている。ラキユースが、巷でウルトラマンと呼ばれる存在になる力を得たという事実を。暗くなる前からよく剣に宿る闇の力がどうか言っていたラキユースが、そういう事で大きく揺さぶられるのかと言われればラナーにも自信があるわけではないが、それでもその力を得たことは事実で、しかもラキユースが力を得た時期と暗くなつた時期が重なっている以上、それが要因になつてるだろうとラナーは当たりをつけていた。

願わくば、ラキユースにはまだまだ闇の中にいてほしかった。そうすれば、ラナーが目的を果たす際にうまく役に立つ、操り人形マリオンネットにできるから。ラナーはあまり根回しが上

手な方ではなく、人心にも疎い方だが、それでも心が闇の中に彷徨い、かつ自分を友と慕う者を操ることくらい造作もないことだろう、と考えている。実際の所、彼女の頭脳をもつてすれば、ラキユースを操り人形にすることは容易いことだろう。少なくとも英知の面において、ラナーの立つ領域に達する者は、ほんの一握りなのだから。

「まあ、いいかしら」

とはいえもう終わった事。もしもの事を考えても徒労に終わるだけだし、人形にできなかったとはいえ未だラキユースは無邪気にラナーを友と慕っている。何なら今のラキユースは友情に敏感になっていりし、むしろ使い道は増えたまでである。ならば深く気にすることも無いだろう。前向きに考え、ラナーは思考を中断した。

そして何と無く窓の外を見ているうちに、ラナーはある事に気が付く。

「そういうえば、そろそろ戦争の時期ね」

彼女の言う戦争とは、毎年リ・エステーゼ王国とバハルス帝国の間で、主にカツツエ平野にて行われている戦闘の事を指す。リ・エステーゼ王国はバハルス帝国と目下戦争中であり、帝国側の収穫の時期を狙う攻撃により王国が次第に衰退しているのが現状となっている。ラナーに限らず、この状況を知る有識者達は皆王国が次第に滅びそして敗ける未来を予見しているほどだ。

だが、最近はこの戦闘がお流れになっている。ここ二日程、カツツエ平原での戦闘に

限らず帝国の侵攻は明らかに勢いを欠いているのだ。

理由は簡単、怪獣である。およそ二年程前から突如存在が確認された怪獣たちは、その超常的な力をもって帝国も王国も、そして周辺諸国も荒らしまわった。特に帝国での怪獣出没が顕著であり、それゆえ帝国は周辺諸国に比べ被害が大きくなった。その結果、帝国は弱体化し、戦争の手を緩めざるを得なくなったのである。

しかし、帝国にとって幸いだった事が3つある。まず、帝国には怪獣出現と同時にウルトラマンが現れたこと。帝国に怪獣が出現するたびにウルトラマンもまた現れるため、怪獣はやがて退治される。民は怪獣に対する恐怖と絶望の中でウルトラマンの存在にわずかな希望を見出し、周辺諸国は主に帝国に出現するウルトラマンを警戒せざるを得なくなった。

次に、周辺諸国にも怪獣が出現した事。基本怪獣は人知を超えた存在であり、退治はウルトラマンでもいない限り不可能とみていい。しかしウルトラマンの内よく出現する赤い方は、なぜか帝国領内以外の怪獣出現に対し、初動が遅い傾向にあるのだ。これはウルトラマンは帝国領内のどこかを活動拠点としていることを表すのだと考えられる要素だが、とにかく怪獣の被害が馬鹿にならないため周辺諸国も自分の国の事で一杯になりがちなのである。もちろん、これは王国も例外ではない。

そして最後は、帝国の指導者が優秀だったこと。帝国を治める鮮血帝ジルクニフ・

ルイン・ファアロード・エルニクスは優秀な君主であり、怪獣の脅威にさらされる帝国を何とかもたせている。それどころか様々な政策を繰り出し帝国の底上げを行ったことで、帝国は活気を取り戻しているとか。最も帝国の民から怪獣への恐怖が消えたわけではなく、それどころか怪獣を退治できないという帝国の一面がよくクローズアップされるせいで、鮮血帝の求心力は高くはないのだが。

とにかく、今の帝国には幸運な面もある。だが、根本的には周辺諸侯よりも多く怪獣の被害を受けているのが現状だ。よって、これからも帝国の侵攻は停滞した状態が続く、というのが現在優位に立つ見解である。ラナーもこの情勢の見方に、異論はなかった。

「でも、戦争は起きるわ」

—ラナーは知っている。今年、戦争は起きると。カツツエ平原での帝国と王国の武力衝突が、情勢を無視して発生するのだと。そしてそれが、王国の敗北で終わるといふ所まで、ラナーは了解していた。

確信があるわけではない。ラナー自身、戦闘が起これば王国が負ける可能性が高いとは考えているものの、情勢だけ見れば戦闘は今年もないだろう、と考えてしまう。

だが、それはない。戦闘は起こる。なぜなら、それがラナーの真の主の望みなのだから。

「…本当に、何が望みなのかしら」

真の主の望みを思い返し、ラナーは思考する。果たして彼女の主は、何がお望みなのだろうか。

しかし、ラナーがどれだけ考えても、答えは出ない。ラナーをもつてしても、彼女の今の主の存在は、理解の外にあった。無理矢理推理するならば、アインズ・ウール・ゴウンの存在が浮かび上がる。ラナーが支配した影の魔物シャドゥ・デーモンから、アインズ・ウール・ゴウンが帝国に対し何かの動きを見せているのは把握している。詳細を見ようとするとこちらの動きがバレて面倒になるためそこまで深く見ていないが、ラナーの主が興味を持つとするとこのあたりか、くらいの当たりはつけることが出来た。だが、それまでである。

「まあ、いいわ」

考えるだけ無駄に近い主への洞察を、早々に取りやめる。ラナーは何度も主について考えてみてはいたが、その内何も理解できない事に気が付いたからだ。

わかるのは、ただ一つ。ラナーの主は、根源的な破滅を望んでいるということ。彼女の主は、すべての行動をその一点に収束させている。それだけだ。

故に主の名すら、ラナーは知らない。無理に名づけるなら——根源的破滅招来体、とでもいったところか。ラナーは他人事のように考えていた。

主の事は考えても無駄。それがラナーの出した結論。そんなことを考えるより、未来の事を考えよう。そう思うと、ラナーの中に、ある少年騎士の事が浮かび上がってくる。「ああ、クライム……」

ラナーは心の底から愛おし気に、大事な大事な騎士の名前を口にする。

そして、同時に主への感謝の念が生まれる。ラナーの主は、彼女に素晴らしい力を与えてくれた。この力は、騎士との未来を彩るのにこれ以上のものではない、とラナーは解釈している。そして、主が与える報酬も、ラナーが騎士との未来を歩むのに重要なファクターとなる。主の途方もない力、そして報酬は、ラナーの心を惹きつけてやまないものだった。

だから、ラナーは今の主を敬愛している。今の主は、騎士を手にした自分の事を応援してくれるから。その敬愛の感情からか、ラナーの手は自然と、主が与えてくれたあのものへと伸びていく。ラナーがその与えられたもの——黒く光る、短い杖のようなもの——を手にしたとき、ラナーは自分の部屋の扉の向こうに、同業者の気配を感じた。

「邪魔をするよ」

気配の主は、全体的に白と黒の配色が目立つ、外見は未だ10代半ばにみえる少女であった。これまた正面から真っ二つに白と黒に分かれた美しい髪と、それに隠されたエルフ耳の持ち主——ラナーは彼女から断片的に聞いた、彼女自身の生い立ちの話から、

ハーフェルフではと考えている―は、ノックをすることもなく部屋へと入る。その光景に、誰かが物申すことはない。それどころか、この周辺に人の気配は存在しない。ラナーと気配の主に与えられた、人払いと認識阻害の力は十分な効力を発揮していた。

そのことについても、ラナーは感謝している。自分と主を同じくするこの同業者は、とてつもなく危険な存在なのだ。一応何ら制御できない愚者というわけではないが、それでもこの同業者と自分の騎士は極力合わせたくない、というのがラナーの本音だった。それは自分が怪しまれてしまうから、というよりも同業者が騎士に何かする可能性を極力排除したかったからなのだが。

そんな思考は隅において、ラナーは特に表情を意識することなく、入ってきた同業者に声をかけた。

「あら、お城の探険は終わったのかしら」

「うん、思っていたより楽しかったよ。やはり外はいいね。あんな場所に比べたら、何処も天国な気はするけど」

「そう…スレイン法国最強、漆黑聖典の番外席次というのも大変なのね、『絶死絶命』さ  
ん？」

「まあ、そうね…ご主人様に目立つような動きをするなって言われた手前、普段の監視にはある程度付き合わないといけないから…」

「同業者—スレイン法国の特殊部隊である漆黒聖典の番外席次、通称『絶死絶命』は、「まあ、もう殺せるけどね」と言ってラナーの対面に座った。：毎度のことながら、この法国最強のハーフエルフにハラハラさせられるのはどうにかならないものか、とラナーは一人考える。彼女の発言は基本、危うい。彼女もまた、ラナー同様に主を敬愛しているし愚か者ではないため、そこまで危険な行為には出ないとは考えているが、それでもラナーは気にかかるのだ。それは友情からの心配ではなく、疑念と不振からなるものなのだ。」

そんな今日の夕飯を決めるような調子で白金の竜王すら屠殺しそうな勢いの少女は、ラナーを見て、そしてラナーの手元にある箱に目を向けた。

「…ねえラナー、私のルビクキュー、どうだった？」

「…あらごめんなさい。少し遊んだだけで、置いたままにしていたわ」

「ふーん…ひよつとして、君でも解けなかったとか？」

「…いえ、そういうわけではありませんわ」

何故か自慢げな番外席次をよそに、ラナーはルビクキューとかいうカラフルな箱を手に取り、それを動かし始める。別に、目の前のハーフエルフのドヤ顔がうつとおしいとか、そういうわけではない。

…ルビクキューを触るうちに、ラナーは何故目の前の怪人がこの箱を弄んでいるの



か、何と無くわかってきた。この箱は、どうやらいくつもある色の付いた小さな面を動かす、その小さな面をそろえ大きな一色の面を作るといふのが目的となっていて、いいいきなり箱の色を合わせるのにはなかなか頭を使うし、面を動かす感触も心地よいものがあり、暇つぶしには十分すぎる。これ自体の構造は複雑ではなさそうだし、量産すれば王国に新たな流行を作り出せるかもしれない。そんな面倒をしなくとも、騎士との触れ合いのネタにはもってこいのモノである時点で、ラナーの中の箱への評価は鰻登りとなっていた。

とはいえ、ラナー自身はこのルビクキューに対してそこまで難しさを感じてはいない。数回程面を動かした後、ラナーは一気に面を動かして、適当に面を動かす様子に最初はニヤケ顔が止まらなかった番外席次も、そのよどみない動きに次第に顔が引きつっていく。

そして触りだして数分持たたぬうちに、ラナーの掌にはすべての色がそろったルビクキューが鎮座していた。

「…ふう」

色がそろったことに、満足感を感じる。思わぬ感情の発露もあって、ラナーは内心でも上機嫌だった。

「ルビクキュー、想像以上に楽しめました。ありがとうございます、番外席次さん…どうか、しまし

たか?」

だが、上機嫌なラナーに反して、番外席次の顔は引きつったままだ。色のそろったルビクキューを、元の持ち主たるハーフエルフは無言で手に取って、しっかりと検分する。そして色がきつちりそろっていることを認識したのか、番外席次はルビクキューを置き、口を開く。

「…最悪」

その声は、苛立ちをまるで隠していなかった。番外席次はそのまま、目の前の王女への話を続ける。

「…私は、このルビクキューを気に入っているの。ハッキリ言えば、宝物だって思っている」

「はい…?」

「その宝物を、ぽつと出の女に搔つ攫われて、しかも私より上手く…そういうの、わからないかしら」

「…はあ」

…つまり、目の前のハーフエルフは、自分より上手くルビクキューを触れるラナーに苛立ったのだ。ラナーの頭脳は、その事実をたやすくはじき出す。この番外席次は、ルビクキューを自分よりうまく扱えることが、気に入らないのだと。

訳の分からない理由で苛立ちをぶつけられたことに、次第にラナーも腹が立つてくる。ハーフェルフめ、ルビクキューが自分より上手く扱えないのは、あなた自身の問題でしょうに。そんな逆恨みをなぜ聞かなくてはならないのか。理解すればするほど、うっとおしく思えてくる。

そうなれば、ラナーの口が開くのも早かった。

「番外席次さん、あなたがルビクキューについてセンスがないのはわかりましたが、だからといって他人に当たるのはどうかと思います」

「…何？」

「あなた、私よりも長くこのおもちゃを遊んでいるのでしょう？それなのに私にあんな形で怒るのは、あなたにこれを感じるセンスがないことの証明よ。だって、少し触った私だって、すぐに解けたのだから」

「…ラナー、君、人を怒らせるのが上手い王女なんだね」

口撃を受け、苛立ちが募った番外席次は、立ち上がると懐から赤黒い塊を取り出す。ラナーは毅然とした様子で、座ったまま先ほど取り出した黒き杖を取り出した。

これらこそが、彼女たちが主より賜った最強のアイテム。この世界の国々を、たやすく滅ぼせる程度の力。その姿は、知るものが見れば驚愕に包まれるのが容易に想像できる姿をとっていた。

番外席次の手にあるものは、赤と黒が主体の、面のようなアイテム。二本の角のようなものが目立つそれは、知るものが見ればこう言うだろう。色が違うが、あれは『ネオバトルナイザー』そのものだ。

ラナーの手にあるものは、黒く輝く短い杖。杖は両手で握りやすい形をしており、中央には金色の発行体が鎮座するそれは、知るものが見ればこう言うだろう。あれは『ダークエボルバー』そのものだ。

両者ともに、主から受け取った力の象徴を手に取り、睨み合いを続ける。その、第三者からは一瞬とも永劫ともとれるような睨み合いが続ぎ—

「—やめよう」

—やがて、番外席次が乱暴に腰を下ろすことで終了した。

「…あら、もうお終いなのかしら」

「…まあ、時間の無駄だし。私たちには、やるべきこと、そして何よりも欲しいものあるからね」

番外席次は未だ不機嫌そうな様子で、ラナーに答える。ラナーはしげしげとその様子を眺め、やがて「そうですね」と笑顔で答えた。

そう、彼女たちには、主より指示された、彼女たちのやるべきことがある。すべては、主が目的を為すために。そして、彼女たちが主にもたらされることを約束された、報酬

のために。

「この世界を受け取り、私とクライムだけの至福の時をもたらす糧にするために」

「この世界を見限り、まだ見ぬ強者と至高の敗北、そして強き子供を得るために」

受け取る手はずの報酬を、自分たちの夢を、ラナーと番外席次は、確かめ合うように語り合う。二人の道は、幸運なことに衝突する事はない。その事実こそ、この二人が協力できる大きな理由だった。

「…さて、そろそろお暇するわ。認識阻害も、限度があると思うし」

「そうですか？ 認識阻害は、時間経過ではそうそう破れることはないけれど」

「…試したの？ 勇敢というか、無謀というか」

少し呆れた様子の番外席次に、「可能と不可能を理解するのは当然よ」とこちらも呆れた様子でラナーも応答する。一瞬だけ、再び二人の間に緊張が走るが、それも一瞬。すぐに番外席次は立ち上がり、扉に向かっていく。間違いなく、真正面から出るつもりだろう。それに関しては何の問題もないことは理解していたので、ラナーは何も言う事はなかった。

二人はこの後、別れて任務にあたる。ラナーは王城で諸国の動向を探り、番外席次はあるものを探しに行く。二人は破滅の使徒たる魔人として、己の欲のために世界を脅かす。その行為に、二人は何ら罪悪感を感じていない。二人の行動を、止める者は誰一人

としていない――

「――ん?」「あら?」

――否、一つだけ、存在する。

その唯一の存在、彼女たちの主の啓示が、二人の脳裏に直接届く。その啓示に、二人は怪訝な表情で、顔を合わせる事となった。

## ダークメフェイス対ガイア

巨体が、大地を揺らして歩いている。

この光景はウルトラマンになってから何度も見てきたものだが、それでもどこかその迫力に圧倒される自分がある。やはり、怪獣という生き物は、いつの世も自分たち人間に畏怖を与え続ける存在なのだろう。

とはいえ、この光景はテレビの中の出来事ではなく、現実の出来事だ。悠長に見ている時間の余裕はあまりない。自分は適当な岩場に身を潜め、怪獣を肌で感じることで寝起きの頭が冴えていくのを感じつつ、平原を通過していく怪獣を改めて注視した。

「K r u u …」

唸り声を鳴らしつつ、魚にヒレの代わりの四つ足を生やしたような怪獣が闊歩していた。体を揺らしつつ四足歩行で歩く怪獣の先端には、良く回りそうならせん状の突起物。つまり、ロマンの塊・ドリルが存在していた。

深海怪獣グビラ。それが、この怪獣の名前である。グビラは特に暴れる訳でもなく、のんきに散歩をしているように見受けられる。どことなく楽しそうなその姿に、害意の類いは感じられなかった。

「グビラかあ……」

思わず、怪獣の名前を呟いてしまう。しかし、それも仕方ないだろう。グビラという怪獣は、悪意があつて暴れる類いの怪獣ではない。実際の所、目の前にいるグビラもその行動に悪意を感じることはできない。ただ散歩している様にしか見えないその姿から察するに、このグビラも悪意のないタイプのグビラなのだろう。

こういう場合、自分も鬼畜ヒーローの類いではないのでなだめてどうにかする、とういうかそうしたいのだが、そのなだめる行為というのはやりづらいのだ。ウルトラマンなりたての頃は、頭では怪獣を殺さず終わらせたいと考えていても余裕が全くなく、結局殺してしまうという事が多々あつた。まあその怪獣の弔いというわけではないが、野ざらしにしたくなかつたという考えもあつて提言したのが怪獣ビジネスなのだが。

ともかく、怪獣をなだめて終わらせる、というのは単なる怪獣退治よりもかなり技量を要するのである。だから、自分は今でも条件がそろつて余裕のある時にしか怪獣をなだめて鎮めたりはしない。怪獣によっては鎮めるなんて無理難題な場合もあるし、怪獣を鎮めてもその後どうするかを考えなければ、結局怪獣も守るべき人も皆苦しめるだけで終わるのだから。

とはいえ、今回はなだめて終わらせるのにチャレンジしてもいいケースだろう。グビラはその名の通り海から来ている怪獣だが、今回もその例に倣つてか近場に海がある。



そして、今回のグビラの出現場所は集落からは遠い。よって周囲には人がいないため、自分の戦い方にも幅が出ている。これなら、チャレンジは十分可能だろう。

ちなみに、ヘッケラン達は自分の近くにはいない。今回自分たちはワーカーの仕事で、帝国領内の海岸線近くに来ているのだが、依頼のあった集落に来る途中でグビラの姿を見かけたのだ。そこで自分は皆から離れ、怪獣の方に接近したのである。ヘッケラン達は距離を取った場所で待機し、自分が戦いを終わらせ飛び立ったところで狼煙を上げ、そこで合流する手はずになっている。一応自分がガイアになるとすぐ皆の居場所はわかるのだが、正体がバレた後はこうして手厚い支援を行ってくれる。本当にありがたい。つくづく、自分が本当に仲間に使われているということがわかる。ありがとう、皆。

閑話休題。

グビラはこちらに気づく様子もなく、平地を散歩している。戦うなら今か。自分はグビラを視界に収めつつ、ジャイロを取り出そうとする。

だが、その時、闇色の輝きがグビラに襲い掛かった。

「K A a a!？」

突如飛来した禍々しい光弾が、グビラの体を撃ち抜く。突然の一撃に、グビラはたまらず悲鳴を上げ、横転した。

いったい何が。グビラの転倒で巻き起こった土煙が視界を奪う中、何とか下手人を探そうと目を凝らす。あの闇色の輝き、該当しそうな下手人はいくらかいるが、そのどれもがあまりいい予感がしないため、必死になって周囲を見渡す。

そして、グビラの後方に、下手人らしき存在がいた。その存在を認識したとたん、自分の中で血の気の引くような感覚を覚えることになる。

下手人の正体は、それだけ自分にとって恐るべき存在だった。

「そんな、あれは……！」

未だその姿を信じられない思いが、自分の口から漏れ出す。漏れ出してしまふ。それくらい、この巨人にはいてほしくなかったというのに。

下手人の正体は、巨人だった。全体的に黒く、そこに赤と銀のラインが走る姿。胸元のランプと、銀の顔面に存在する瞳は、闇のように暗い。背骨や肋骨のようなモールドが入ったその姿は、まさしく死神そのもの。

自分の目の前に屹立する、この黒い悪魔の名は――

「――ダーク、メフィスト」

闇の巨人、ダークメフィスト。暗黒破壊神ダークザギによって作り出された、ウルトラマンネクサスと対になる者・ウルティノイドの一人。恐るべき宇宙の悪魔・スペースビーストを使役する能力を持つ怪物が、今自分の目の前に立っていた。恐らく攻撃の後

らしく、残心を取っている。こいつがグビラを攻撃したのは、明らかだった。

いったいなぜいるのか、自分にもわからない。だが、この巨人は明らかな強敵。それもウルトラマンネクサスにとつての適応者デユナミストのように、暗黒適応者と呼ばれる人間が変身した存在だ。

そう、人間だ。こいつの中にいるのは、人間。自分と同じ知恵を持つもの。人間が中にいるだけで、知恵の回り具合は他の怪獣と一線を画すだろう。なにより、自分はウルトラマンとして、巨人の中の人間を、殺すことになるかもしれないのだ。

…人を、殺す。それも、ウルトラマンの力をもってして。その事実が、自分の心にくのしかかってくる。ワーカーとしての自分は、時折同業者や犯罪者相手に戦う事はあるが、それでも殺しはやったことはない。それを、しかもウルトラマンとして犯さねばならないというのは、とても受け入れがたい。ウルトラマンネクサスと適応者デユナミスト達は、割り切っていたのか上手くやっていたが、自分が上手くやれるのか。不安と恐怖が、自分の中で渦巻いていた。

そんな自分を意に介さず、ダークメフィストはグビラに近づく。巨人は腕を振り上げ、グビラを虎視眈々と狙っているように見える。恐らく自慢の爪・メフィストクローをもつてグビラを殺すのだろう。

グビラはそれに対し、ダメージが大きいのか動く気配がない。横転した状態のまま、

グビラはただ鳴き声を発するだけだった。

「K U u u …」

—声が。聞こえる。

「K U u … K U u …」

今にも消え入りそうな、悲しみと悔しさが入り混じった鳴き声が、グビラの口から自分に、確かに伝わった。

「—何をしている、自分」

重圧に押しつぶされそうだった自分を、叱咤する。

そうだ、こんなところで怖気づいている場合ではない。目の前で、一つの命が奪われようとしているのだ。それが怪獣だからといってどうしたというのだ。罪のない命が、殺されようとしている。生きたいと願う命が、助けを求めている。その声に応えるのが、自分のやるべき事。

「後悔は、救ってからすればいい…!」

最終的に、命を救えたのなら、それだけでも意味があるはずなのだから。

もう、やるべきことは見えた。心の中の暗がりを取り払い、自分は光となるための器を取り出した。

「セレクトト！クリスタル！」

闇の巨人と対になる、自分のもう一つの姿。大地の光が宿るクリスタルを、ジャイロの力をもって一気に開放する。

《ウルトラマンガイア!》

「纏うは大地! 生命の営み!」

ジャイロから光が放たれ、自分はそれと一つになっていく。今敢然と闇に立ち向かう光の名を、高らかに叫んだ。

「ガイアアアアアアアアアアア!!」

光と化した自分の体が、この空を飛ぶ。光は今巨人となり、自分という魂を経て、ウルトラマンガイアとなる。

目下では、ダークメフィストが突然現れた閃光に対し、眩しそうに手をかざしているものの、視線ははつきりとこちら側に向けていた。自分もまたその姿を捉えつつ、まだ倒れているグビラの付近、闇の巨人から彼を守るウのような位置に着地した。

「デュアツ!」

「…アアアアアアアア!!」

地鳴りを上げ、土煙を舞い上がらせつつ、ダークメフィストに対して構えを取る。ダークメフィストは、こちらに対し吠えるように顔面を突き出していた。吠えたという事は感情が高まったのだろうが、目が光らなかつたあたり、このダークメフィストはツ

ヴァイではないのだろうか。

…正面から見ると、やはりダークメフィストは異質な存在だというのがわかる。これまで戦ってきた怪獣とは一線を画すような気配を漂わせているし、自分のタレントで確認しても、見たことのない反応を示しているのがわかる。生物の延長線上にある怪獣と、闇の存在というのは全く違うという事か。

やはり、こんな存在を前に誰かを庇って戦える余裕はない。声が聞こえるのかはわからないが、倒れこんだままのグビラに話しかける。

「…逃げて」

「…?」

自分の声に対し、顔を上げたグビラ。どうやら反応はあるらしい。何とか意思が伝わるように、その上でメフィストへの警戒を怠らないように、顔を動かし伝えてみる。

「逃げて…ここから逃げて」

「…?」

しかし、グビラは首を傾げるようなしぐさをするばかり。やはり、怪獣との意思疎通というのは難しいのだろう。そのもどかしさに、少しずつ焦りの感情が生まれてくる。

だが、そこでメフィストに動きが生じた。

「グオオオオオオ…!!」

「……」

痺れを切らしたかのような様子で、メフィストが再び吠える。そしてメフィストが腹の前で腕を組むと、そこに闇色の輝きが集まりだした。

「まずい……」

その動きに、自分の記憶が警鐘を鳴らす。あの技は、確か大技だったはずだ。いきなり大技を使うのはフラグだというのに、使ってくるとは。

…そんなどうでもいいことを言ってる場合ではない。何とかしないと自分もグビラもやられてしまう。彼の命を救うと決めたのに、こんなところでやられるわけにはいかない。

意を決し、自分は最近手に入れた赤いクリスタルを手に取り、ジャイロにセットした。

《ウルトラマンメビウス!》

ジャイロの光と共に、勇気ある若きウルトラマンの名が告げられる。その頼れる力を開放すべく、ジャイロを操作していく。

すると、ガイアの左腕に、∞の字を描く光が折り重なってく。それはやがて一つの形を取っていき、輝きがひととき強くなるとともに、赤いブレスレットに変化する。これこそ、宇宙警備隊が若き勇者メビウスに与えた力『メビウスブレス』だ。

「ウルトラマンメビウスの力よ……」

そして力を借りるための祝詞を告げるとともに、ガイアの体が動き出す。メビウスブレスをこするのように胸元で腕を広げ、両手を天に掲げるような形で近づける。腕を上げると同時に∞の字を描く輝きが集まっていき、そこに確かな力が集まっていく。

「…ハアツ！」

それと同時に、メフィストもまた動く。腹の前で組んだ腕を広げ闇色の輝きを集めると、その腕を一回転させ、さらに高めていく。あの闇の力は油断ならないことは、肌を感じる不気味な気配で察することが出来た。

そして、自分が十字を組むのと、メフィストが腕を組み、それを倒すように動かすことで逆Lの字―逆しまのクアンタムストリームのような形―に構えたのは、ほぼ同時だった。

「メビュームシュート！」

「ハアアアア…ハツ！」

必殺の『メビュームシュート』と、暗黒に染まる『ダークレイ・シュトローム』がほぼ同時に発射される。金と黒、二つの光線は相手目掛けて真つ直ぐに飛んでいき、二人の巨人の中間で激突した。

「くう…っ！」

ウルトラマンと、それに準ずるもの同士の光線のぶつかり合い。すぐ押しきることが



できたテラノイド戦や二人がかりでどうかしたゼルガノイド戦とは違い、同じ生きた人間との衝突は自分の想像以上に重たかった。気を抜くと、すぐに押し返されそうになる。

だが、負けるわけにはいかない。自分は、自分以外の命を背負っているのだから。だが、その命をこの死地に付き合わせるつもりもない。自分は光線に渾身の力を籠めつつ、後ろにいる怪獣に叫んだ。

「…逃げて!!」

「…K u u 「早く!!」…い」

自分の意思がやつと伝わったのか、光線に釘付けになっていたグビラは、跳ねるようになり飛び起きた。そしてこちらを一瞥すると、自慢のドリルを地面に突き刺し、どンドン掘り進めていく。

その動きを妨害されないよう、光線に込める力を今一度強くする。だが、相手の光線もまた強く、激突のポイントは揺れ動いても大きく傾くことはない。相手のポテンシャルの高さに、改めて驚く。

しかし、その甲斐あってグビラの逃げる時間は稼いだ。グビラは穴を作り終え、そこに潜っていく。姿が完全に見えなくなったのを確認すると、少しだけ安心した。

なら、もう光線勝負に付き合ってもやる必要はない。自分は光線に意識を集中させ、そ

れが爆発するように念じる。その念が通じ、光線はぶつかり合っていた場所で爆発を起こした。

「デュオツ……！」

「グオオ……ッ！」

爆発により二つの光線が消失し、その衝撃が自分たちを襲う。思わず吹き飛ばされそうになったが、そこは堪えて何とか体勢を立て直した。そして光線の煙が晴れると、自分の目の前には黒い悪魔の姿があつた。

「オオオオオ……!!」

メフィストは自分に怒りをぶつけるような視線を向け、吠えると同時に右腕を掲げる。すると、メフィストの右腕に装着された、ガントレットのような『アームドメフィスト』から、かぎ爪状の武器が飛び出す。

現れた『メフィストクロウ』を構え、メフィストはこちらを睨みつけてくる。自分もまたいつも通りの構えを取って、メフィストがいつ来てもいいように体勢を整える。

一瞬、静寂がその場を支配する。その硬直を破壊するように、メフィストはいきなり自分目掛けて跳躍した。

「ウアアッ！」

叫び声と共に、振り下ろされたメフィストクロウが自分の元に迫る。当然だが、あんな

なものをもらうわけにはいかない。横にスライドするように移動し、悪魔の爪を回避する。

爪での一撃が交わされたメフィストは、間髪入れずにこちらに向き直り、さらに爪を叩き込まんと自分目掛けて腕を振り回す。流星は闇の巨人、怪獣とはまるで違う速さを持つ攻撃を、体を反らし飛びのくことで躲してく。

：何度かメフィストの爪攻撃を回避していると、少し、不可解な点が見えてきた。

「鋭くない…？」

メフィストの攻撃は、確かに速い。怪獣とは違い人間に近い体型を持つメフィストの一撃は、怪獣の攻撃とはまるで比べ物にならない動きと速さを重ね合わせた、恐るべきものだ。一撃貰えば、結構な痛手となるだろう。

だが、この攻撃が人間が繰り返しているモノだと考えると、少し違うものが見えてくる。メフィストがクローの付いた腕を振り回す様には、武術をたしなむとか訓練を受けたとか、あるいは一部冒険者やワーカーのような戦闘慣れしている人間の持つ独特の鋭さが感じられないのだ。この振り回しようは、まるでど素人。喧嘩慣れしている人間のモノとは思えないくらい、躲しやすい。メフィストの中の人間がそれなりに戦闘慣れしている場合、例えばヘツケランみたいな人が入っていたら、ワーカーとはいえ後衛ではない自分なんか今頃ポッコポコであるというのに。

…とりあえず、今は目の前に集中しよう。メフィストの攻撃は続いているが、無闇矢鱈と腕を振り回す攻撃何て分かりやすいもの、いくらでも躲せる。なら、自然と反撃のチャンスも見えてくるものだ。

「…そー！」

そして、それはすぐ訪れる。メフィストが大きく振りかぶったところに、滑り込むように移動し腕をクロスする。そしてクロスした腕がメフィストの腕に当たるように体を動かす。

「ウウツ!？」

はたして、メフィストの腕は自分の腕に当たり、その動きを大きく阻まれる。メフィストの驚くような声とともに、メフィストクロウが自分の顔面近くで止まったことを確認すると、自分は腕に一期に力を籠め、相手の腕を押し出そうとする。

メフィストは本気で驚いたのか一瞬硬直していたらしく、メフィストの腕は簡単に跳ねのけることが出来た。その勢いで大きく体勢を崩し、無防備となったメフィストの腹部に、一気に踏み込む。

「ダアツ！」

「グウツ…！」

そしてメフィストの腹を思いつきり殴り飛ばすと、メフィストは体を苦の字に曲げ大

大きく後退した。うめき声をあげたメフィストの、こちら側に大きく突き出した顔面に、追撃のキックを浴びせる。

「オアッ!!」

その一撃でメフィストは大きく吹き飛び、地面で数回転がる。だが、その程度では大きなダメージにはならないのか、メフィストはすぐに立ち上がった。流石に闇の巨人、タフさも他の怪獣とは違うのだろう。

だが、蹴りの意味はあつたらしく、メフィストはこちらを向いたものの、少しふらついている様子だった。メフィストはその状態で何とか自分に一撃浴びせようと突進してくるが、そんな状態の攻撃何て簡単に躲せる。難なくその突進をいなし、背中に蹴りを叩き込むと、メフィストはつんのめつたが耐えきり、そのまま反転する。そして懲りることなく再び突進の構えを取った。

しかし、動きが直線的すぎる。再びの突進に対し、今度は自分の体を大きく回転させる。回転の勢いを乗せ鋭さを増した踵蹴りを顔面に叩き込む、いわゆる胴回し回転蹴りといわれる技で、突っ込んできたメフィストを迎撃した。

自分の踵は見事メフィストの顔面を捉え、大きく吹き飛ばすことに成功する。先ほどの攻撃時よりさらに吹き飛ばされ倒れこんだメフィストに、さらに追撃を加えんと飛び込むように駆け寄った。

「…ウオオツ!!」

「!」

だが、メフィストはまたしてもすぐに立ち上がり、その大きな爪をもって自分を振り払う。爪で自分との距離を稼いだメフィストは、その後立ち上がると、腕を広げ大空へと飛び上がった。

「逃がさない…!」

ここで逃げられるのは、後々とてもよろしくない。自分もすぐさま空に飛びあがり、メフィストの後を追った。

メフィストのスピードはそこまで速いわけではなく、自分の全開を出さずともすぐに追いついた。メフィストの方を見上げると、こちらを見つめるメフィストと支援がぶつかり合う。

すると、こちらを見る悪魔の顔が、笑みを浮かべていた。

「…まずい」

これは、誘い込まれたのか? 疑念と警戒が自分の中であふれかえる中、メフィストは自分の目の前で大きな光の球体を作り出す。完成した光球をメフィストが右腕で殴りつけると、それは獲物を狙う猛禽のように、的確に自分の方へと向かってきた。

…あの技には、見覚えがある。嫌な予感が自分を突き動かし、飛来する光から逃げよ

うとする。だが光は自分の目の前に接近すると一瞬停止し、自分に当たることなくいきなり爆ぜた。そしてそこから、小さな光の球が広がり、自分の周囲を取り囲んだ。

「この技は……！」

この光景には、非常に見覚えがある。アレは確か、かつてダークメフィスト・ツヴァイがウルトラマンネクサスに対し使用した、分裂する光弾『バーストクラスター』だ。そしてこの技には、続きがある。それを知る自分は、すぐにその場を移動しようとする。

しかし自分の動きよりも早く、周囲の光弾が動き出す。四方八方から、自分目掛けて光の弾丸が飛び込んできた。それに対し、何とか体を動かし、飛び回りながら躲していく。

やがて、光の弾丸が減っていき、次第に自分目掛けて飛んでくる弾丸も減ってきた。しかし、息する暇もなく、今度はメフィストが突進してきたのを視認した。自分に接近したメフィストは、メフィストクローを構えると自分目掛けて何度も突き出してくる。その技はまさしく、ネクサスを苦しめた連続攻撃『ダークフアランクス』そのものだった。

「ぐうっ……！」

腕が分裂しているように見えるほどの連続突きを、空中で体をスライドさせるように躲していく。だが、自分にはつきり言つて空中での戦いにそれほど心得があるわけでは

ない。地上とは勝手の違う場所での動きを強制され、次第に悪魔の攻撃に反応しづらくなっていく。

そして、動きが一瞬遅れた自分に対し、メフィストの突きが飛び込んでくる。それに對し、自分の腕が割り込んだのは幸いだった。しかしそんなものお構いなしに繰り出された突きは、不安定な場所にいる自分を吹き飛ばすには十分だった。

「デュオツ……！」

地上目掛けて吹き飛ばされ、なすすべなく落ちていく。地面に着地させられた後も大きく後退し、やがて背後にあった山に叩きつけられ、うめき声をあげることになった。よく見れば周囲は森林地帯、かなりの距離を移動させられたらしい。

山に叩きつけられ、全身に痛みが走る。爪を防いだ腕には、強い痺れが生じていた。体に走る感覚に悶えそうになり、それでも何とかこらえていた所に、空中からメフィストが飛び込んでくるのが見えた。メフィストはただ一直線に、爪を構えこちらに飛び込んでくる。恐らく突き出したその爪で、自分を串刺しにするつもりなのだろう。

…甘い。真っ直ぐにしか飛び込んでこないなら、やり様はいくらでもある。痛みに堪える体に鞭打ち、何とか体勢を立て直すと、飛び込んできたメフィストに、渾身の蹴りを叩き込んだ。

「ダアアッ!!」



「!?グワアアツ!!」

咆哮と共に放たれたキツクが、メフィストの胴体を捉える。メフィストはこのキツクに対応することなく、悲鳴と共にそのまま遠くに吹き飛ばされることになった。恐らく、対応しなかったのではなく、できなかつたのだらう。

…改めて、メフィストを見てみる。その姿はやはり異様で、タレントをもつてしても異質な力にあふれていることくらいしかわからない。凡百の怪獣とはわけが違うのは、明らかだ。

その戦闘能力も非凡であり、攻撃の速さはかなりのものを持つ。やはり人間に近い体つきなだけあって、格闘に込められた速さやリーチは、怪獣のそれとは一線を画すものだ。特殊能力に関してはさらに顕著で、手数も威力も性質もすべてが未知の領域に存在する。

闇の巨人、恐るべし。それが、自分の抱いた感想だった。  
「…でも、今ならやれる」

しかし、このダークメフィストに関しては、さほど脅威を感じていない自分がいた。それこそ、ギャラクトロンやゼットンのような、とびきりの強豪怪獣とは比べ物にならない。それが、結論だった。

確かに、ダークメフィストは速さがある。しかし、動きが全体的に単調で直線的なの

だ。人間が入っているのは明らかだというのに、それ相応の格闘戦が出来ていない。格闘が得意な、例えばラクユースのような前衛職をやっている人物なら、もつともつといい動きをする。その場合ならフェイントや格闘術などが盛り込まれ、ほとんど独学と経験の積み重なりでしかない自分の挙動なんてすぐに取り押さえられるのは目に見えている。

にもかかわらずそれが現実のものとなっておらず、実際は自分が反応できている。そこから導かれる結論は、ただ一つ。

「……いつは、戦い慣れていない」

つまり、経験不足。それが、自分がメフィストの中にいる人間に下した評価だった。

…好機だ。そんな考えが、自分の中で膨れ上がる。もちろん、相手に対する警戒を怠るつもりは毛頭ない。しかし、相手がまだ経験が足りていない、ひよっこウルティノイドの状態だというなら、ここで抑えてしまうべきだ。今は素人でも、これが経験を積みさらなる強さを身に着けるようになれば、メフィストの性能も相まって手が付けられなくなる。もとよりメフィストのスペック自体は目を見張るものがあるし、ここは早急に相手を撃破し、人間に戻して捕まえることが最優先だ。自分の中で、戦いの指針が見えてきた。

「…セレクト！ クリスタル！」

気が付けば、自分はあるクリスタルを手を取っていた。赤い巨人が描かれた、一番思入れのあるクリスタル。この戦いに決着をつけるのなら、それは自分自身の力がふさわしい。そんな思いが、自分の中にはあったのかもしれない。自分はつかみ取ったクリスタルを、ジャイロに装填する。

《ウルトラマンガイア！》

クリスタルに描かれた巨人の名が、ジャイロから発せられる。ジャイロの中に輝くクリスタルに込められた力を、今一度開放する。

すると、ジャイロから解放された光はすぐに集まり、ジャイロの真上で一つの形をとる。その形は、まさしくループクリスタルそのもの。しかし、そこにある姿は、これもまた自分自身の姿だった。

新たに生まれた、『絶』の文字が描かれたクリスタル。もう一つの自分が描かれたクリスタルを、空いたジャイロの中心へとセットする。

《ウルトラマンガイア・スプリーム・ヴァージョン！》

先ほどとはまた違う、巨人の名前。ジャイロからその名が告げられたと同時に、自分もまた新たな祝詞を唱えた。

「―纏うは、超絶―」

## まとうは超絶

スプリーム・ヴァージョン。

アグルの力を得て、V2となったウルトラマンガイアが持つ、最強の切り札。その力はまさに絶大なもので、いくつもの怪獣にとどめを刺してきた。まさに最強の名にふさわしい存在である。

告白すると、自分はウルトラマンガイアになった時、すでにV2の姿であり、アグルの力を得た覚えが無いのにアグルの力を使うことが出来た。今になって思うと、ラキウスもまたV2であるあたり、自分の知るガイアと自分の変身するガイアはまるで訳が違うのだろう。そのあたりは自分でもよくわからない点が多いので今は置いておく。

話を戻すと、自分は最初からV2の力を存分に振るうことが出来たのだ。しかし、ただ一つ、当時の自分には出来なかつた事がある。

それが、スプリーム・ヴァージョンへの変身。超絶の力をまとう事である。

何故自分にスプリームの力が使えないのか、悩まなかつたわけではない。むしろ大いに悩んだが、やがて使えなくても戦うのだ、と心を奮い立たせ、結局使えないまま二年

の時を戦い抜いた。

転機が訪れたのは、ギャラクトロンと戦った時。あの日自分は一度敗れ、仲間に出た自分の正体を知られてしまった。

怖かった。自分がとてつもない力をもっていて、それで恐れられることが。だが、仲間たちは自分を受け入れ、援護すると誓ってくれた。その時、自分はあふれ出る嬉しさと共に、何かが自分の中で変わるのを感じた。

結果としてそれは大当たりだった。自分はついにスプリーム・ヴァージョンへの変身を遂げ、ギャラクトロンを撃破したのである。

それは、仲間たちとの絆が、より確かなものになって自分に力をくれたからか。なにせよ、このことは自分にとつての大きな転換点、いわば生まれ変わりの時だったのだ。大きな転換点を迎えた自分だが、その次の転換点はすぐ訪れた。もう一人の巨人、ウルトラマンアグルとの邂逅。青い海の巨人の力を得た、ラキユース・アルベイン・デイル・アインドラとの出会い。そして自分はラキユースと共に超古代の光に触れ、力をもらったのである。

その時得たクリスタルは、ラキユースがいなければ手に入るものではなかったはずだ。つまりこれは、ラキユースと絆を紡いだ証明なのだろう。スプリーム・ヴァージョンがヘツケラン、イミーナ、ロバーテイクとの絆の証なら、ループジャイロにループク

リスタル、そしてオーブリングNEOはラキユースと超古代の光との絆の証。今や、どちらもかけがえのない存在となった。

そして今、二つの絆の証が、一つの形で結実しようとしていた。相手は闇の化身、決して負けられない存在。今こそ、三度目の生まれ変わりの時だ。

この戦い、必ず勝つ。だから、力を貸して、みんな。

《ウルトラマンガイア・スプリーム・ヴァージョン！》

先ほど発動したガイアのクリスタルとはまた違う、巨人の名前。手に持つジャイロから、本来鳴り得ない名が告げられたと同時に、自分もまた新たな祝詞を唱える。

「纏うは超絶ー！」

必ず勝つ。勝って、皆の元に帰る。強い思いを載せて、言葉を紡いでいく。

「金色こんじきの星ほしー！」

ループジャイロを握る手に、自然と力が入ってくる。自分はその力を緩めることなく、一気にジャイロを操作した。

瞬間、ジャイロから金色の光があふれ、自分の体を包んでいく。自分の存在が、今一度光に置き換わり、すでに纏っているはずの巨人の姿を溶かして、一つの光に戻っていく。

その光が一つの点に集まり、星のように輝く。そして、光は爆発的に拡がり、もう一度大地の巨人の姿となる。だが、巨人はもう先ほどまでの巨人ではない。巨人は海と大地、二つの光を束ねた至高の存在へと生まれ変わったのだ。超絶の巨人が光の中から再誕し、大空の彼方へと飛び立つ。

そして、巨人は光をその身に宿し、世界に存在を示し、大地に着地する。衝撃で土砂が舞い上がり、その質量を的確に表していた。

ウルトラマンガイア・スプリーム・ヴァージョン。自分の築き上げてきた絆の結実した姿が、新たな絆を得て、今降臨したのだった。

「デュオッー」

雄たけびを上げ、右腕を前に突き出し左腕を上げるといふ、特徴的な構えを取る。その先にいるのは、先程キックで吹き飛ばしたはずのダークメフィスト。やはり闇の巨人、タフさも十分高いのだろう。

だが、勝つのは自分だ。この姿は、自分一人だけの力ではない。皆の力をもらってできたこの姿が、負けるはずがない。その強い意志を籠め、構えを強調するようにして威圧した。

「オアッ!!」

「……!」

メフィストは、何も語らない。静かに、こちらの様子をうかがっているようだった。だが、その動きが若干後ずさりするように見えたのを、自分は見逃さなかった。奴も、この姿に何かを感じたのだろう。

二人の巨人が相対し、再び一瞬の静寂が場を支配する。にらみ合いを終えたのは、意外にもメフィストの方からだった。

「ウアアアッ!!」

何かを振り払うような叫び声をあげ、メフィストが走る。メフィストは自分に駆け寄りつつ、差し出す様に伸ばした右腕から光弾を発射してきた。光弾は自分に当たる事はなかったが、代わりに周囲を抉り、土煙で視界を悪化させてくる。そしてメフィストが最後にはなった一発が、自分の目の前に着弾した。着弾した箇所では爆発が起こり、土砂が舞い上がる。そのせいで、自分の視界からメフィストは姿を消した。

だが、慌てる必要はない。自分には、これまでの戦いを支えてきた自分だけの力がある。意識を集中し、周囲を自分の持つもう一つの目で見ると、生命力を見るという特殊なタレントは、特徴的だった相手の力の在処をすぐに割り出した。

∴正面!

「ウオオッ!!」

「デュアッ!!」



正面に舞い上がった土煙をかき分け、メフィストが目の前に躍り出る。そしてメフィストは自分に対し、助走をつけてからのハイキックを浴びせてきた。

だが、それは見えている。迫りくるメフィストのキックを後ろに下がって躲しつつ、ガイアはメフィストの足を捕まえることに成功した。そこでメフィストが何かをするよりも早く、自分はメフィストの足を一気に持ち上げる形で空中に放り投げた。メフィストは空中で一回転し、地面に叩きつけられる。

メフィストはその一撃に一瞬屈しそうになっていたが、自分が駆け寄るよりも早く起き上がり、後方転回を決めて距離を取った。どうやら懲りてはいないようで、メフィストクローを構えずぐにでもこちらに飛び込んで来ようとしている。

なら、こちらもそれに合わせてみよう。自分は構えを取って、メフィストを待ち構える。メフィストはすぐにしびれを切らし、自分に向かって突撃を行った。

自分もそれに合わせ、メフィストへと疾走する。自分とメフィストはお互い正面からぶつかり、お互いの胸部を掴む。そのまま力比べになるが、勝者は自分だった。

「デュアアアッ!!」

雄たけびと共に、メフィストの胸と鳩尾を掴むと、そのまま後方へと投げ飛ばす。メフィストの体が宙を舞い、地面に叩きつけられることになる。

だが、これでは終わらない。今度こそ、倒れこんだメフィストが起き上がり逃げる前

に捕まえる。座り込んだメフィストの体を上から掴み、無理やり立ち上がらせるように持ち上げる。

「デエアアアツ!!」

そして、立ち上がった勢いのまま、メフィストをもう一度、全力で後方に投げ飛ばした。メフィストは空を舞い、再度、地面に叩きつけられることとなった。

メフィストは少しは堪えたのか、何とか起き上がりとした体勢のまま苦しそうに手を伸ばすが、うまく立ち上がれないようだった。多少なりとも、ダメージを与えられたのだろう。なら、やるべきことは一つ。

「畳みかける…!!」

自分は再度メフィストに接近し、その体を掴み上げもう一度立ち上がらせる。何とか逃げ出そうともがき続けるメフィストを力で押さえつけ、自分はその場でぐるぐると回転を始めた。

「デユオツ!…デユオオオオ…!!」

何度も何度もその場で回転し、次第に勢いを強くしていく。その回転にメフィストも巻き込まれ、はた目から見れば仲良く見えるくらいの距離間でぐるぐると回り続ける。

そして勢いが一定の速度を超えた時、メフィストの足が地面を離れた。そのままメフィストは遠心力ですつ飛んでいきそうになるが、何とか抑えてさらに回転の勢いを増

していく。何時しかメフィストの体は完全に地面から離れ、腹ばいになって空中を回りだしていた。

「オアアアアッ…!!」

すぐにも飛んでいきそうなメフィストの体を、相手の腕一本を強く握りしめ抑え込む。メフィストが地面に着地し、そのまま勢いを利用したカウンターで今度は自分を回転ブランコ状態にする…なんていう自体が起きないよう、勢いに細心の注意を払って回転する。

そして勢いが十分なほどついたところで、自分は腕にさらに力を込めた。

「デエヤアアアアッ!!」

そして、腕力と回転の勢いの両方がこもった、渾身のスウィングが、メフィストの体を大きく吹き飛ばした。メフィストは腹ばいになって空を飛び、山を越えてなぎ倒す。かなりの距離を滑り、メフィストは停止した。

このダメージは、先程の投げとはわけが違う。確固たる自信が、自分の中に存在していた。

「グオオツ…!」

だが、メフィストはふらつきつつも、そこまで時間を置くことなく立ち上がった。やはり、並の怪獣と並列に考えるのは、間違っているのだ。いかに自分が対応できる技を

繰り出すばかりでも、体はしっかり闇の巨人なのだから。

そしてメフィストは接近戦は不利と見たのか、空に舞い上がる。今度は追いかけることなくそれを見上げていると、メフィストの目の前で、大きな光の球が現れるのが見えた。先ほど同様、バーストクラスターでこちらを責め立てるつもりなのだろう。

「…その技は、もう見た」

一度見た技なら、ある程度攻略の手順が見えてくるのは当然の事。流星に同じ技を連発されて、攻略されないと思われるのは心外だ。

自分はメフィストの目の前の光が大きく輝くのを見ると、両手を頭上で錐状になるように合わせ、その場で回転しながら空中へと飛び上がった。遠目から見ると全体的に円錐状に近くなり、加えてきりもみ回転を行いだした自分は、そのまま相手へと飛び込んでいった。

メフィストはというと、それにお構いなしといった様子で、そのまま大きくなった光の球を殴り飛ばした。光の球は空中で大きくはじけ、自分の周囲に小さな光弾を生む。このままなら、また自分の元に光弾が殺到することになるのだろう。

だが、自分はどうも、それをいちいち躲すつもりはなかった。そのまま光の雨の中を、ドリルのように回転しながら突っ込む。当然、光弾は自分に飛び込み、直撃して爆発した。

「ぐうっ…!!」

痛みにもうめき声が出るが、何とか我慢する。回転を続け、そのままメフィストに向かつていく。光弾は容赦なく自分に降り注ぎ、直撃して爆発していった。

だが、その攻撃は、自分に痛みは与えどそこまでダメージを与えることはなかった。自分のやったことは簡単。自分に回転を加え、その勢いで着弾した光弾をはじき返すというもの。もちろん、こんなことをしても自分に来るダメージを完全にカットできるわけではなく、そもそもそれ目的ならバリアを使った方が早い。だがバリアの場合、非常に目立つのでメフィストに逃げられてしまう可能性がある。躲しきったところで、先程みたいに別方向からの突撃を許すだけだ。なら、気持ちだけでもダメージを減らし、その上で一気に接近できる方法を取ればいい。それに合致する技こそ、この『ガイア突撃戦法』なのである。

そして目論見通り、自分はダメージを受けつつもメフィストに接近することが出来た。光の雨をすり抜けることは想定していなかったのか、若干メフィストが慌てているようにも見える。だがもう遅い。自分は回転速度はそのままに、メフィストの土手っ腹に風穴を開けるくらい勢いで飛び込んだ。

「グアアアアアッ!!」

メフィストはたまらず吹き飛び、眼下に広がる海の方へと吹き飛ばされていく。メフィストはかなりの勢いをつけ、最初に相対した海岸線近くの平原地帯へと墜落した。

メフィストは、地面に着弾することとなった。地面が爆発したように吹き飛び、土煙がメフィストの姿を隠した場所の近くへ、自分もまたゆっくりと降下する。土煙の中、メフィストの状態が見えないかと、何とか目を凝らしてみる。

そこで、自分のライフゲージが赤色に輝き、点滅を始める。それと同時に胸が苦しくなり、限界が近いことを悟る。その苦しみを抑えつつ、なんとかこれで終わってくれと、祈りを込めて目を凝らした。

「…ウオオオオオツ!!」

やはりというか、闇の巨人はかなりタフなようで、メフィストはそこまで時間をかけることなく、土煙をかき分け姿を現した。流石にダメージは大きかったらしく、腹部を抑え肩で息をしているが、それでもしつかり立ち上がった。そして、自分を見つけると、威嚇するように吠えたのだった。

「グオオオオオオ…!!」

そしてメフィストは、今一度腕を振り上げ、全身に気合を込めるかのような動作を見せる。そしてそのまま、腹部のあたりで腕を組み、そこに闇の色をした輝きを生み出していった。

「…『ダークレイ・シュトローム』…!」

その動きは、この戦いの序盤ですで見えた動き。ダークメフィストの必殺技、『ダーク

レイ・シュトローム』の発射のための構えそのものだ。

おそらく、肉弾戦では不利であるとみて、なら今度は再びの大技に賭ける、と思つての行動なのだろう。その考えは、自分にも身に覚えがあるからよくわかる。最近もコダイゴンジアザー戦で効果的なのかわからないまま大技のゼットシウム光線を使ったのだ。肉弾戦が不利だととりあえず光線技、それも大技に頼ろうと考えてしまふのは——たとえ肉弾戦が不利な場合が多いのだとしても——悪い癖なのかもしれない。まずは敵の体力を効果的に消耗できる肉弾戦、これが基本。戦いの基本は格闘だ。

それはさておき、相手の光線は今にも飛んで来ようとしている。メフィストは腕を組んだまま、何かをこらえるように震えつつその場を動かないが、最初の時以上のエネルギーをためているのか。しかし、飛び込んだところでいきなり撃たれるのがオチだ。光線自体もかなりの速さを誇っているから、飛び回るわけにもいかない。先程肉弾戦がどうこう言っておいてなんだが、ここは光線技で突破するほかないだろう。

なら、どう攻めるか。そこに思考がたどり着いたその時——

「……うん？」

——胸元に、赤い炎のような輝きが生まれる。輝きを手に取り、かざしてみれば、輝きが消えるとともに『炎』の文字が描かれた赤いルーブクリスタルが現れる。

「メビウス……」

ウルトラマンメビウスのクリスタルが、輝きと共に自分の存在を主張していた。

これは、メビウスのクリスタルが、自分に何かを伝えようとしているのか。ではそれは何だろう。メビウスのクリスタルに描かれている文字は、『炎』。炎という文字にまつわる、メビウスにとつて、大切なもの――

「ファイアーシンボル」

答えは、すぐに出た。メビウスの炎、それはファイアーシンボル。メビウスが決して忘れることがなかった、大切な仲間たちとの絆の証。ファイヤーシンボルは絆の証として、時にメビウスに新たな姿を与えたのだ。

「仲間、か…」

仲間、という単語に、少し心が反応する。自分は、これまでの戦いで仲間たちに支えられ、結果勝利をつかむことが出来た。その絆の集大成が、このスプリーム・ヴァージョン。『フォーサイト』というウルトラマンとしての戦いが始まったところからの友。ラキウスという最新の戦友。自分にとってどちらも大切な存在である者達との絆が、この姿となって結実したのだ。

なら、その思いを、持って行こう。皆がくれた思いが作ったこの姿で、闇の巨人に、大いなる闇にも、勝つ！

「行こう、皆」



届くのかはわからない、しかし自分にとって大切な一言と共に、メビウスのクリスタルを握る力を強くする。

そして、大切な人々の顔を、思い浮かべていく。

「父さん、母さん、クーデリカ、ウレイリカ、リーダー、イミーナ、ロバーテイク、ラキューヌ……」

眩きと同じくして、皆との思い出が、自分の中に浮かんでくる。その思いは自分の中で熱い流れになって、握りしめたメビウスのクリスタルに集まっていく。

準備は、できた。自分はクリスタルを相手に向けてかざし、宣言する。

「見せてあげる、闇の巨人」

この力をもって、勝利する。皆の力が、お前に勝てるのだと、信じるが故に。

「私たちの――フアイアーシンボルの証を！」

そして、その宣言と共に、クリスタルに今一度赤い輝きが宿る。光が消えると、そこには中心に『燃』の文字が浮かび、その文字の通り真っ赤に燃え上がるような色と炎の紋章を宿した巨人が描かれたクリスタルがその存在を主張していた。

自分は迷うことなく、そのクリスタルをジャイロに装填する。

《ウルトラマンメビウス・バーニングブレイブ！》

新たに生まれ変わった巨人の名がジャイロから飛び出し、その名と共にあふれた赤い

光が、自分の周囲に確かな熱を生み出す。

それと同時にガイアの左腕に再び『メビウスブレス』が出現し、胴体にも一瞬だが金の炎の紋章―メビウスが自分の体に刻んだ、ファイアーシンボルが浮かび上がった。

「ウルトラマンメビウスの力よ……！」

力を借りるための祝詞を告げると共に腕を交差させ、メビウスブレスに装着された球体を回す様にして腕を広げる。まるで翼を広げた不死鳥のような構えとともに、自分の体に浮かび上がったファイアーシンボルが再び輝き、それが浮き出ることにより全てを焼き尽くす炎が生まれる。炎を確認した後、広げた腕をゆつくりと脇腹の当たりに戻していくことで、炎はさらに大きくなり、大きな球体と化した。

それとほぼ同時に、メフィストもまた光線の構えを動かし、腕を一回転させ発射寸前まで持つていく。瞬間、自分とメフィストの視線がぶつかり合う。そして理解する。この光線の撃ち合いこそが、この戦いの勝負どころなのだ。

自分とメフィストの咆哮は、重なり合うようにして飛び出した。

「メビュームバースト！」

「ハアアア……ハッ！」

メフィストが逆Lの字の構えから光線を発射するのとはほぼ同時に、自分もまた目の前の炎の球体を思いっきり押し出した。自分の放った『メビュームバースト』は真つ直ぐ

飛んでいき、メフィストを焼き尽くさんとする。そしてメフィストが自分目掛けて放った『ダークレイ・シフトルーム』と『メビュームバースト』はそれぞれ相手を捉え、自分たちの中間地点で激突した。

一瞬、最初の光線の撃ち合いのように、光の拮抗が生じる。だが、それも一瞬だった。  
「!?!」

メフィストの驚くような声が響くとともに、拮抗していたはずの光線の撃ち合いが『メビュームバースト』のされる形で破られていく。メフィストは光線に込める力を強めているようだが、依然『メビュームバースト』の方が強い。炎の球と悪魔との距離は、だんだんと狭まっていた。

…当然だ。自分が、どれだけの思いをその技に込めたと思っっているのか。その技に、皆の思いがどれだけ作用したと思っっているのか。その技は、皆との絆の証。破られるなんて、あり得ない…!

「…とどめ!」

チャンスは今。状況を理解し、さらに動く。思いついたのは、皆が受け入れてくれて初めて仕えたあの技。皆の思いが自分に力をくれたこの戦いの決着には、あの技を使うこと以外考えられなかった。

「デュアツ!!オアアアアアア…!!」

咆哮とともに全身に力を籠め、右腕を頭上に掲げたのち、腕を大きく振りかぶり、体の前で両手を合わせる。特徴的な構えが自分にさらなる力を与え、その一撃をさらに高めていく。

そして合掌の形から右手を下にずらし、準備を終える。狙いは、正面の悪魔。迫りくる闇に意思を示す様に、自分はその力を開放した。

「フォトン……ストリィィィィィム!!」「デュオツ!!」

そして、ガイア最大最高の一撃、『フォトンストリーム』が、悪魔目掛けて放たれた。光線はまず炎の球に達し、その奔流に炎を加え、さらに勢いを増す。

炎の球に注意を奪われていたのか、メフィストはそこでやつと異変に気が付いたらしく、光線を中断しようとする。だが、すべてが遅かった。

炎をまとった光線が、悪魔の闇色の光を飲み込んでいき、一気に迫る。その勢いはさまざま、先程押していた『メビウムバースト』の勢いとは比べ物にならない。メフィストはなすすべもなく、その光を全身に浴びた。そして、光線はメフィストの体に吸い込まれていき、光線を自分が止めることで、やがて消えていった。

一瞬、メフィストの体が大きく光を放つが、何も起こらない。もしや、効かなかったのか？そんな不安が、自分の中に走る。

だが、それも杞憂だったらしい。

「…グオオオオオオツ!!」

メフィストは遅れて、断末魔の叫び声をあげた。そして再びメフィストの体が輝き―大爆発。メフィストは光の膨張に巻き込まれ、輝きの中に消えていく。

そして光が止むと、メフィストはもうどこにもいなかった。

―勝った。その事実を理解し、力が抜ける。だが、まだ締めが残っている。もう休みそうになる自分を叱咤し、自分は大きく広がる空に向かって両手を伸ばした。

「…デユワツ!!」

そして、残り少ないエネルギーをふり絞り、自分は大空に向かって飛んでいく。

『一難去つたら空を飛べ』。この言葉は、やはり名言である。この名言に従い、ウルトラマンギアは空の彼方へと去っていくのだった。

―今回の戦いは、何とか勝つことが出来た。

闇の巨人は、総じて強大な力を持つ。今回此処までスムーズにダークメフィストを倒すことが出来たのは、まさに幸運だっただろう。今回のメフィストはおそらく弱い方だったが、その弱い内に決着をつけることが出来たのは本当によかったと思う。

だが、これで終わりではない。今回現れたダークメフィストはウルティノイド、一般の怪獣のような自然の存在ではなく、何者かの手で作り出された存在だ。つまり、メフィストの裏には黒幕がいる。黒幕が何者なのか、予想はできても確定はできないだろ

う。だが、黒幕がメフィストなんて目じやない位強いのは明らかだ。最近判明した闇と  
いい、この世界で自分が戦うべき相手は本当に底が知れない。

—だが、それがどうした。今の自分には、あまり恐れはない。今回の戦いで、皆がく  
れた力が闇の巨人にも負けないことがはつきりわかった。

自分は一人じゃない。

自分には、絆を紡いだ仲間がいる。

仲間がいる限り、自分にはとてつもない力が生まれてくる。

そのことが分かった今、自分は確かな希望を抱いていた。希望はある。勝ち目はあ  
る。だから、恐れる必要はない。仲間がいれば、自分には確かな未来があるのだから。

だからこそ、今は帰ろう。皆との約束を—必ず帰るといふ約束を、果たすために。

「…すいん」

ウルトラマンガイアが、空の彼方へと飛んでいく。戦いを終えたその姿を、番外席次  
は地上から眺めていた。ガイアに感動したような口ぶりで見送る彼女の表情は、ガイア  
に対する惜しみない感嘆の念を表していた。

「…うん、素晴らしい戦いだっただけ。強いのは好きだよ」

うっとりとした表情で、ガイアに称賛の言葉を贈る。普段は何事にも無関心である番

外席次だが、ウルトラマンという存在に対しては、強い関心を持つこととなった。

巨人同士の戦いを間近で見て、番外席次が感じたものは、ウルトラマンという存在の力強さだった。ウルトラマンは姿がよく似た巨人―ウルトラマンとは対になる存在だと、番外席次は聞いている―に対し、一步も引くことなく戦い抜いた。そして未知の強大なる力をもって、相手の巨人を圧倒し、そして撃破したのだ。

その強さに、番外席次はどうしても惹かれてしまう。あの巨人なら、さらなる強さを得た自分を倒せるのではないか。そしてその子供を産むことが出来れば、その子はきつと―

「…まあ、無理なのが残念だけどね」

しかしそこで、番外席次は肩をすくめ、思考を中断する。こればかりはどうしようもないといえる、大きな問題が彼女の望みを絶ち切っていることを、番外席次は知っていた。

「女なんだっけ…」

そう、番外席次は、ガイアの正体を知っている。ラナーが闇の力を得ることで、傍にいたラキュースがウルトラマンの力を得ていたことを把握したように。ウルトラマンだというのに、ガイアの正体は女性。それどころかアグルも女性と、番外席次にとつては詐欺にも等しい事実、彼女は悩んでいた。

ちなみに、ラナーと番外席次が二人のウルトラマンの正体を把握しているのに仕掛けることがないのは、彼女たちの真の主がそれを望んでいないから。ラナーはそのことについて疑念を持たずにはいられなかったが、番外席次はというと、そのことに関しては異論を持たなかった。

それは番外席次にとって、真の主が救いの主だった故。ずっと閉じ込められて、ずっと夢をかなえることが出来ないまま終わるのではと心のどこかで感じていた番外席次に、真の主は力と共に救いの手を差し伸べてくれたのだ。だからこうして空の下を歩くたびに、番外席次の心は真の主への感謝でいっぱいになる。なればこそ、番外席次が真の主の命に疑念を抱くことはなかった。

さて、番外席次がしばらく認めたくない事実に悲しみを覚えていると、何かを引きずるような音とともに、何者かが近づく。番外席次はその何者かを察知すると、そちらに一瞥もせず、語り掛けた。

「…終わった？ラナー」

「ええ、終わりました。もうここにいる必要はないわ」

来訪者——ラナーはそう言うのと、引きずっていたものを前方に放り投げる。それを一目見て、番外席次の表情がわずかに曇った。

そこにあつたのは、干からびたヒトガタの何か。ミイラのようなになった、人間の死体



だった。すいぶんどころか何もかも失われたようなその体からは、生前の特徴が一切感じられない。性別すらわからない死体を見て、番外席次はラナーに問いかけた。

「…なにこれ」

「何って…私たちの前任者よ？ たぶん負けたあとだからと思うけど、都合よく前後不覚みたいな様子でうずくまってたから…後ろからちよつと、ね？」

「あ、そう」

だが、楽しそうなラナーからその正体を聞き、番外席次は興味の対象から死体のことを削除した。負け犬の事なんて、彼女にとつては一番どうでもいいことだったから。

「あ、そうって…一応、私と同じ力を持つ人なのよ？ まあ、もう死んだのだけれど…」

「だから何？ 弱い奴には興味ないし。…というか、死んだって言うけど、とどめを刺したのは君じゃないの」

「そうとも言うわね」

番外席次のぶつきらばうな指摘に対し、ラナーは笑顔で受け答えした。

そう、この死体こそラナーと同じ力を持つに至った暗黒適応者、すなわちダークメフィストだったものの成れの果てである。この死体の生前の姿はラナーたちの前任者、つまり二人と同じく闇の力の尖兵だった。だが、今は物言わぬミイラになり果て、何者であったかを伺い知ることはできない。そもそも番外席次もラナーも、このミイラに

いて大した興味を持ち合わせてはいなかったが。

「で、ご主人様の命令は果たさせたの？それが気になるんだけど」

「ええ、この通り。私の力はさらに増しました」

そういつてラナーは、自身の持つ『ダークエボルバー』を掲げる。それに宿る闇の輝きは、番外席次が以前見た時よりもさらに勢いを増している。これなら命令は果たさせたのだろう。確信を得て、番外席次はひとまず安堵した。

今回二人の受けた任務は二つある。一つは、前任者を追いかけ、始末をつけること。ラナーたちが聞いた話では、前任者は力を得たものの暴走し、命令を受け付けることなく獣のようになってしまったらしい。その後、後任である二人の魔人が出来上がったため抹殺命令が下る事になったのだ、と番外席次は認識していた。

そしてもう一つは、前任者の総てをラナーが奪い、糧とすること。つまりラナーの強化である。ラナーの力と前任者の力は酷似しており、ゆえにラナーも簡単に前任者の力を奪うことが出来た。こうして力を奪われ出来上がったのが、件のミイラというわけである。

ラナーはこの二つに関し、後者が本命だと感じていた。すなわち前任者なぞ主にとって本来どうでもよい存在で、でもせっかくだから再利用しようというのが、主の考えであると。もちろん本本当の考えはラナーにもわからないが、前任者は失敗作である事、実

際戦闘能力もウルトラマンに負けるくらいには大したことがない事を踏まえれば、これこそが正解だとラナーは確信していた。

そんなラナーの考えなんて露知らず、といった様子の番外席次は、気だるげに話を続けていく。彼女の興味は、別の所にあつた。

「…それで、どれだけ強くなつたの？ウルトラマンにも…私にも、勝てそう？」

「さあ…といたいところですが、私は喧嘩が不得手だし、先程の前任者程度に動けるかどうか…そういう事ですので、私に期待してても無駄、と言わせてもらうわね」

「…そう、つまらない」

しかしラナーの返答は、番外席次の望まないものだった。同じ主のしもべなら、主に手を加えてもらつて子を作ることが出来るかも、と思つていたこともあり、番外席次の落胆は大きかつた。

…落胆してもしょうがない。全てに決着がつけば、強者を漁る最高の旅を始めることが出来る。ならばいましばらくの辛抱だ。そう自分に言い聞かせ、番外席次は復活する「…ま、命令を遂げたならいいか。帰ろう」

「そうね。ここにはあまりに何も無いものね」

「私は好きだけどね…後、これからも組み合わせは同じ、つてことでいいの？」

「ええ、あなたが前に出て、私が後ろにつく。適材適所、よろしく頼むわね」

「構わないよ。もしかしたら、思わぬところで強者に出会えるかもしれないしね」

二人はそう言つて、主にたまわつた力により、忽然と姿を消したのだつた。

そうして、二人の魔人もまた、目的を果たしその場を去る。力をさらに付けた闇が消え、周囲は静寂に満たされる。戦いは終わり、この地に一時の安寧がもたらされた。

—光と闇は、差はあれど互いを認識しあい、相手に対し思考を巡らせていく。二つの走狗が激突する時は、近くに来ているのかもしれない—